

ダンジョンにすごい研究者が現れた

緑黄色野菜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンジョンにすごい才能を持った研究者が現れたら

原作ブレイク甚だしいので、多分そんなに長く続きません

目次

アイズと出会い	1
アイズと依頼	10
ストーキング・レファイヤ	19
一方、ロキ・ファミリア	30
確変の始まり	40
教導	50
アルテミスの苦難	58
最終調整	68
依頼	78
御前試合	88
『宝剣』	97
デミ・ゴッド	108
ヘスティアちゃんの日	118
ヴェルフの憂鬱	129
オツタルの力	138
ヘスティアさん家の新人くん	149
遠征・宝剣編	158
ローガさん	170
ベルの新武器	182
バッド・サポーター	192
終わりの始まり	202
終わりを始める	211
在りし日	222
救援と救助	232

アルテミスの矢	247
誰が物語	258
エピソード	271
ガチャ	281
大戦争遊戯・上	292
大戦争遊戯・下	304
異端児	315

アイズと出会い

その日、アイズ・ヴァレンシユタインは当てもなくオラリオの中をふらふらとしていた。

じつとしていることは、まあ得意な方なのだろう。そう彼女は、自分を評していた。しかし同時に、苦痛なことでもあった。文字通りに、何もしない——それは、自分が何にも向かっていないことの証明に思えた。

こうして、街の中をただ散歩しているだけでも、じりじりとした焦燥感が背中をうつつすらと焼いてくる。

アイズ・ヴァレンシユタイン。L.V. 5の第一級冒険者。レベルアップの世界最速記録保持者でもある。他者が彼女を表するならば、異様な早さで強くなっていると言うだろう。それはアイズ自身も認めるところだった。自分は、望みうる限り最高の速度で強くなっている。ただ、それは彼女が望む場所には全く足りないというだけで。

今日も、望めるならば自己鍛錬をしたかったが。遠征の数日後であることから、それは却下されてしまった。愛剣のデスペレートはもちろん、予備の剣、果ては鍛錬用の剣までも没収された。ついでに、気晴らしに散策でもしてこいとホームまで追い出されて。

自然にため息が漏れ出て、次いで彼女ははつとし、周囲を見回した。アイズに注目をしている人間は、いくらがいる。が、それはおそらく、第一級冒険者を物珍しく見ているだけだろう。嘆息自体が目撃されたわけではなさそうだ。

(よかった……)

それ自体は、見られたからといって特にどうというものでもない。ただ、見せていいものでもない。ロキ・ファミリアの看板を背負っているのだから。

ファミリアの中核メンバーというのは大変だと思う。幹部というものもまた。彼女に限った話ではないが、ファミリアの幹部というのは簡単には務まらない。本当の意味での中核メンバー——つまりフィンやリヴェリアなどの年長者——と比べれば、足下にも及ばない自覚

はあった。

(私にできることと言ったら……)

そう、つまりは、つまらないことだった。内部に対しても外部に対しても、隙を見せない。その程度のことだ。

(難しいな)

目的地などなくふらつきながら、そんなことを思う。

自分より古参のメンバー曰く、昔のフィンなどはいけ好かないただのチビだったらしいが。今の彼からは、全く想像がつかない。普段の彼は、常にどこか超然としていて、支配者然としている。組織人として強いというのは、そういうところを指すのかもしれない。自分にはとてもではない。真似すらできないことだった。

あるいは単に、それがレベル差なのかも……

考えて、アイズはかぶりを振った。それを考えてしまうことは、控えめに言っても、とてつもなく陰鬱だから。

自分の成長は芳しくない。他者になんと言われようと、彼女はそれだけは強弁し続けた。

それは、遠征の度に思い知らされることだった。経験値エクセリアの伸びが悪い。Lv. 5になってから、それは顕著だった。無茶な冒険こそは控えている。しかし、挑戦まで捨てたつもりはない。それなのに、得られるステータスは少なくなっていた。今では地を這うようだった。

強くならなければ。今よりさらに。誰よりも高く。

思いに、しかし体はついてきてくれない。心の中を、焦りという澱みが足下から絡みついてくるのを止められない。

(やめよう……)

ふっと息を吐く——今度はため息ではない——。歩幅を大きくして、街の中をふらついた。

オラリオに来てから十年近く。もはやここが故郷と言えるほどに、長く過ごした土地だが。彼女の行動範囲というのは、驚くほど狭かった。ロキ・ファミアのホームに、買い物をするための繁華街、武器類を調達、整備するための施設、そしてダンジョンに潜るためのバベル——後者二つは、ほとんどイコールだが。その他の場所には、特に

用事もなければほとんど足を運ばなかった。

なので、足が向くままに歩けば、自然と見知った場所になる。

近くの屋台でじゃが丸くんを買い、歩きながら食べる。急いだ訳でもないが、そもそもさほど大きなものでもないのので、すぐ食べ終わった。

包み紙をくしゃりと握り、あたりを見る。道中に設置されているくずかごを見つけて、そこに入れて、またなんとなくの散歩を再開した。

繰り返し、アイズが見知ったと言えるほどの道は少ない。商業地を抜けてしまえば、次にたどり着くのはバベルだった。

(どうしよう)

摩天楼を見上げながら、考える。五十階建ての超巨大建造物は、足下から見上げると、その頂上がわからないくらい高い。もつとも、その下に続くダンジョンの方が、遙かに長大ではあるのだが。

バベル入り口前広場で、特にすることもなく立ち尽くす。

そのままいくらかの時間がたったところで、はたと気がついた。人の波が、アイズを避けて出入りしている。邪魔ではあるが、あえて注意するほどでもない。そんな風ではあった。

アイズは短く決断をして、バベルの中に入っていった。特に意味はない。ただ、ここまで来て戻るよりは、中の方がまだ何かしら真新しいものを見つけられるからかもしれない。その程度の考えからだ。

時刻は昼下がりといった頃。今の時間は、冒険者の行き来が一番少ない時間帯の一つだった。日帰りで潜るのも、遠征するにしても、大体は朝早くからダンジョンに入る。そして、帰ってくるのは大抵夕方だ。今の時間にいるのは、不慮の事故で戻らざるを得なかった者と、あとはアイズと同じく暇を持て余した冒険者だ。

ふらふらと歩いて、人が少ない場所にたどり着く。今は、そう。クエストボードの真正面というところだった。

彼女と同じように、幾人かがボードを眺めている。依頼を精査する、というよりは、単なる冷やかしに見えた。まあその点に関しては、自分も似たようなものなのだから何を言うのも不資格だろうが。

「おや、アイズ氏」

他の冒険者に溶け込むように眺めていると、ふと声をかけられる。振り返ると、ギルドの男性職員が立っていた。顔は知っているが、名前は知らない。その程度の関係でしかないということだが。アイズは体ごと振り向いて、小さく頭を下げた。

「こんにちは」

「依頼を受けに来た……という訳でもなさそうですね」

言った彼の視線は、腰に向いていた。

ただでさえ私服な上、今日は武器も持っていない。まあ、そう判断するのは当然だろう。

「クエストの確認ですか。まあ、クエストは基本水物ですからな」

職員はなんだか納得顔で、うんうんと頷いた。そして、アイズから視線を外して、ボードの方へ向く。

つられて、という訳でもないが、彼女も同じようにした。

冒険者依頼^{クエスト}。その中でもボードに貼られるものは、基本的に重要性の低いものだ。重要であるならば、大抵はファミリアを介して直接依頼される。後は、遠征の行きがけにクエストを出してもらうなどというのもあるが。少なくともロキ・ファミリアがクエストを受ける場合は大抵そういうものだ。

ボードに貼られるクエストは、極めて即効性を求められるか、じゃなければ無期限で塩漬けになっているかのどちらかだ。後は、何のつもりだかわからないような依頼も何件かあるが。こんなものが張られているのは、受ける意図も不明だが、それでも依頼を却下するほどではないとギルドが判断したからだろう。

と、アイズはボードの片隅にある依頼をなんとなくに見た。依頼はそこそこ昔からあるのか、紙が上からべたべたと張っては剥がされた痕跡がある。ただ、日焼けするほど昔ではない、というのはわかったが。

「気になるクエストでも？」

「いえ……ええと」

なんと答えていいかわからず、口ごもる。

依頼の内容が気になったと言うよりは、その中身があまりにも奇妙

だったからだ。

実際、それは変な依頼だった。『急募。魔法使い求む。基本的に魔力を流すのみ。たまに魔法を使ってもらうだけの簡単なお仕事です。ダンジョンに潜ることはありません。昼食あり』と、要約すればそんなところか。後は待遇面やらが、手短にぽつぽつと書いてある。冒険者に依頼を出すならば極めて珍しい、時給制だとも書いてあった。用紙の最後には、アルテミス・ファミリアと依頼主の押印がされている。「この依頼ですか。なんとも奇妙なものですね」

アイズの視線を追って、職員はつぶやいた。

「難しい依頼だと言いか言いようがありませんな。いえ、内容がではないですが。ダンジョンに潜らない依頼をこの場に出すというのは、実際かなり珍しい。それも貴重な魔法使いとあつては、受ける者もまずいないでしょうな」
「そう……ですね」

困ったように眉をひそめる職員に、アイズも一応という風に頷いて見せた。

実際、魔法使いを要求するというのは、かなり難度が高かった。

魔法は、付与魔法や速攻魔法といった短文詠唱魔法であっても、場合によってはレベル差を覆してくれる力がある。長文詠唱の魔法であれば、それこそレベルを2、3上回ってくれさえする切り札だ。加えて、先天的な魔法使いというのは、ほぼエルフに限られる。なので、要求される人材は自然とLv. 2以上になるわけだが。

時給は、上級冒険者を雇うにはややささやかだと言うより他なかった。加えて拘束時間もわからないのでは、困窮していても二の足を踏むのは分かる気がした。

「正直なところ、我々としてもクエストとして依頼するよりは、単にバイトを雇う形にした方がまだ人が集まってくると思うのですけどね。依頼主が信用がおけることと、特に問題のある内容という訳でもないのです、こちらで掲載させていただいてはいるのですが。これほど長く置かれていると、むしろ断った方が相手のためになったのかも、と思わなくもありません。なにしろそうすれば、いつか魔法使いが来るだ

ろうと思うこともなかったでしょうからな」

アイズをよそに、その職員はつらつらと語った。途中、暇なのかな、と思わなくもなかったが。まあ、今は一番人の少ない時間帯だ。案外本当に暇なのかもしれない。自分のように。

彼女は改めて、依頼を見てみた。その条件は、はつきり言ってよくはない。まあよくないというだけで、悪いわけでもない。

細かい条件を目で追っていくと、以外と内容がしつかりしていることが分かった。休憩あり、途中で辞めるのも自由。違約金などはなし。少なくとも契約の上では、かなりの裁量が労働者側にあるように見えた。

「あの……」

「ですから、今度の会議にでも一度協議をして——と、しやべりすぎましたな。申し訳ありません」

「それはかまいませんけど」

言って、アイズはそのクエストを指さした。

「これ、受けます」

「はっ」

「ですから、このクエスト、私が受けます」

言うのと、職員はしばらく呆然としていたが。やがてびくりとしながら、小さく肩をすくめた。

「いえ、ああ、その……。本当に、お受けになるのです？ いえ、悪いと言うことではありません。ただ、L.V. 5の方が受ける依頼とはとても言えませんから」

「そうですね」

言葉には、特に反論するところもなく肯定する。

実際、上級冒険者が受けるような条件ではない。ましてや第一級冒険者となれば、まあ、考慮するにも馬鹿馬鹿しい内容ではあるだろう。

だが、アイズは微笑んで答えた。実際には、それは無理な作り笑いではあったため、苦笑にしか見えなかったかもしれないが。

「遠征も終わって、暇なので」

「……そうですか。では、そのように手配いたします」

今度は間を置かず、職員はすぐに答えた。

彼はクエスト用紙を剥がすと、そのまま受付カウンターに向かった。そこで用紙を一枚渡され、名前を一筆入れる。それだけで受注は終わった。

「これでクエストは受理されました。いつ頃向かわれますか？」

「今すぐ行きます」

「それではこちらの用紙をお持ちください。二枚目はホームの地図となっております。翌日にはファミリアにも通達があるでしょうが、これで今から訪ねても受付は可能でしょう」

「ありがとうございます」

小さく礼をして、アイズはその場を去って行った。

外に出て、彼女はとりあえず空を見上げた。バベルの中に入つてどれほど経った訳でもないから、太陽の位置は変わらない。それを眺めて、大体の時間を計った。今はおよそ三時手前といったところか。

(行っても大丈夫……かな?)

特に迷惑だと思われる時間ではないように思う。

まあ、行つてだめならだめでホームに帰ればいいだけだ。どうせ何もすることがないのだから、行くだけ行つといても損はない。依頼がただの散歩になるだけだ。

大抵の中小ファミリアはそうなのだが、ホームはバベルから遠い。理由は単純で、バベルに近いほど地価が高いからだ。アルテミス・ファミリアも例に漏れず、バベルからは大分遠いようだった。

ほとんど通つたことのない大通りを抜けて、途中から分岐路に入る。ゆつくり歩いたせいもあるだろうが、この頃には体感で四時近くに感じた。

たどり着いたアルテミス・ファミリアは、言つてしまえば普通の小規模ファミリアのホームだった。普通の一軒家を、多少無理して増築したような、そんな形状。特殊な点と言えば、増築された部分が宿舎ではなく、石造りの頑丈な倉庫じみている点だろうか。あとは、小さいながら庭があるあたり、多少は裕福なファミリアなのかもしれない。なんにしろ、どこか目を引くようなところがあるわけでもない。

一応用心のために、周囲を一通り観察して。ドアベルを鳴らす。

「はい」

聞こえてきたのは、どこか静謐な声音だった。声だけからも、どこか品の良さがうかがえる。

ドアが開く。と同時に、青髪の女性が顔を出した。

「アイズ・ヴァレンシユタイン？」

顔を出した女性は、一瞬、呆然としたようにこちらを見上げてきた。出てきた女性からは神威を感じる。間違いなく女神だ。

「はい」

問われた訳ではないだろうが、とりあえず返事をする。

彼女はしばらくきよとんとしていたが、やがてはつとすると、おほんと咳払いをひとつ咳払いをした。

「すまないね、ちよつと動揺をしてしまった。それで、私のファミリアに何か用かな？」

「あの、依頼を受けてきました……」

言いながら、ギルドで渡された書類を渡す。

最初女神は、やや怪訝そうだったが。書類に目を通して、小さく頷いた。

「うん、確認したよ。しかし君ほどの冒険者が、よくこんな仕事を受けたねえ」

「暇だったので……」

ぼんやりと、そんなことを言うのは今日何日目だろうかと考える。まあ、何日目であろうと、暇であることは変わらない。本当にそうなのだから仕方ない。

アルテミスはにこりと微笑んで——自分の引きつったものとは違う、本物の微笑だ——言った。

「あなたほどの者が来てくれるとはありがたいよ。おーい、トッドー」
言いながら、彼女はぱたぱたと奥へ走って行った。

そこで、何らかのやりとりをしているらしい。それは足下の小石を蹴りながら待つ。もっとも、時間はどれほども待たされはしなかったが。

主神に連れられてやってきたのは男だった。身長は平均くらいだろうか。普通の服の上に、なぜだか白衣などを着ている。衣服は一応整っていたが、所々何の汚れだけが目についた。不摂生の結果ではなく、どうしても落ちない汚れだけが残った。そんな印象だ。目つきははつきりと鋭い。が、それは無愛想だというより、目の下の隈からただの疲労のように思えた。やや猫背で、短い髪が荒れている。

彼は、手を濡れたタオルで拭いているところだった。一通り手を拭くと、タオルはそこらへ投げ捨てる。アルテミスが「もう！」と頬を膨らませながら、それを回収していた。彼は、それに「わりい」と小さく答えていた。

改めてアイズに向き返り、そして手を差し出してくる。

「アルテミス・ファミアリアの団長、トッド・ノートです。このたびは依頼を受けていただきありがとうございます」

「いえ……あの……アイズ・ヴァレンシユタインです」

こう格式張って言われると、どう答えていいか分からず、しどろもどろになりながら。それでも手だけは握り返した。

「それじゃ仕事の説明と……いや、それよりも実際にやってもらった方が早いかな。中にどうぞ」

「あ、はい」

案内されるがままに、アイズは入室して。

この出合いが、後に歴史を大きく変えるとは、まだ誰も思っていなかった。

アイズと依頼

部屋の中に案内されて、アイズは中に踏み入った。

中は、外見から想像できるそのままのものだった。玄関があつて、中を申し訳程度に彩る花瓶やら壁立ての絵画やらがあつて。あとはまあ、これは当たり前前に二人分の生活の気配がある。というか、二人分しかない。主神一人に眷属一人の極小規模ファミリアなのだろうか、と思う。

ほかに幾人か、ダンジョンにこもっている可能性もないわけではないが。調度品を見るに、それとて多くはないように思えた。

「小規模ファミリアは珍しいかい？」

話しかけられて、アイズはびくりと肩をふるわせた。

見ると、自分より幾分か身長の高い、このファミリアの主神——アルテミスが、口元に手を当てて小さく笑っている。

どう答えていいのか分からず——つまりは失礼のないように——彼女はあわあわと手を振った。

「いえ……そんな……」

「まあ無理もないよ」

アルテミスは特に気分を害した様子もなく、ついでに何やら一人で納得して、うんうんと小さく頷いていた。

「ロキのところと言えば、あのお城だろう？　すごいよねえ。私もあんなところに行ったら、多分見て回りたくなると思うんだ。やはり未知というのは興味を引かれる。それこそが私たち神の原動力だしね」
微笑むアルテミスからは、強い気品を感じた。ロキにはないものだ。

アイズの主神であるロキは、よく言えば気さくで、悪く言えば俗世に染まりきっている。そのため、付き合いに緊張を要求されることはない。まあ、セクハラ癖があるので、たまに別の意味で緊張を強要されることはあるが。

(下界に降りてまだ短いの……かな……?)

気品に満ちた微笑み崩さぬアルテミスを見ながら、そんなことを思

う。

アイズは、神としての威厳ある神というのに、あまり会ったことがない。下界に降りて失ったと言うよりは、元々そんな気質などなかったのだろう、とはリヴェリアの弁だが。だいたいみんな、遊び足りない、幼い子供のような様子だった。

そういった意味では、アルテミスは非常に稀だと言えた。神らしい神というのは、久しく見ていない。一番近いゴブニユも、彼の神は神らしいというより、頑固な職人気質なのだし。

などとしていると、かつかつと少々荒立たしい足音がする。どうも、一度行くところまで行って、折り返してきたらしい。

「お話中のところ悪いが」

男——トツドと言ったか。それが、壁に肩を持たれかけさせながら、拳の裏側で二度、壁をたたいていた。

「先に仕事をしてもらえないかね。話す時間は後でいくらでもある」
「もう、トツドはせっかちなだね」

ぷつと、アルテミスがみずみずしい頬を膨らませた。このときばかりは神らしい（そして神らしくない）威厳というものもない。

甘えられる相手を見て、選ぶ。その点に関しては、アイズも分かった。彼女とて、家族とそれ以外の相手では、表にできる性質というのが違う。

トツドは疲れたように肩を回して、そして続けた。

「せっかちにもなりますよ。長年待つてようやくと来た魔法使いだ。正直なところ、研究ももう佳境です。はよ進めたいんですよ」

（研究……）

アイズは、気になった単語を胸中で繰り返した。

いったい何の研究だろうか。魔法関連で研究するようなことと言つて、ぱつと出てくるのは魔剣だが。魔剣はもう作成条件から発動条件から、すべてが明らかにになっている。あるいは万能者ベルセウスのような、もっと新しいものだろうか。

「つと」

トツドは、はつと気がついたように顔色を変えた。どこか困ったよ

うな、苛立ったような様子だが。

「アイズさんに聞きたいんだが……」

「アイズでいい」

「じゃあアイズで。一応聞きたいんだが、依頼要項ちゃんと読んできたよな？ 魔法の使用は大丈夫？ できればどういうタイプの魔法かも知りたいんだが。速攻魔法とか付与魔法とかそんなん」

「えっと……」

矢継ぎ早に問いかけられて、一瞬言葉に詰まった。

魔法。それについては、秘密でもなんでもない。アイズ・ヴァレンシユタインの魔法が付与魔法だというのは有名な話だし、他ファミリアの団員がいるなかで使ったのも、一度や二度ではない。特に秘密にするような事でもなかった。さすがにその運用やら子細まで明かすと、ロキ・ファミリアを裏切ることになってしまうが。

「えっと……魔法は付与魔法で、使っても大丈夫。たぶん」

「なんでたぶんがつくんだ。まあいいや、どうせしばらくは精神力の方だけ使ってもらうことになるし。じゃ、こっち来て」

言って、案内された場所は、外から見て、ちょうど石造りの建物あたりだった。

そこは、おそらくファミリア本拠だった場所とは、世界そのものが違っていた。

部屋自体が、石造りの倉庫のおよそ半分を占めているのだろう。かなり大きいはずだったが、物が所狭しと並んでいるせいで、やたら小さく見える。無数の計器が横一列に並んでいる。別の端には何やら金属や、ダンジョンの素材がきれいに並べられていた。中央のテーブルには、フラスコを中心とした器具が、縁ぎりぎりまでいっぱい、所々積み重なるようにしておかれている。唯一理解できるのが、正面にある鍛冶のための炉だったが、それにしただって、他のものと比べると、およそ統一性がないように思えた。

(研究)

言葉を反芻する。

なるほど、と思う。確かに、何をすると決めるではなく、なんでも

すると考えるならば、こういつた部屋が必要なだろう。そう思わせる煩雑さに、統一性のなさだった。

部屋そのものには所狭しと荷物が並んでいるが、整理整頓はされている。掃除もされているのだろう、床には埃も見当たらなかった。そのため、部屋に入るのに躊躇や、覚悟が必要とはされなかった。ただ、多少好奇心がうずいたというだけだ。

「アイズに当面やつてもらおうのは、精神力を流してもらおうことだ」

先んじて部屋に入っていたトツドが、説明を始める。

言って、計器やらが並んでいる方に指を向ける。途中、邪魔だったのか、プラスチックやらを軽く手で寄せながら。

「そこに反応制御装置があるだろう？ ああ、言っても分からないよな。その右側にあるやや突き出た棒がそれだ。まずそれを手に持つて」

目で追って、言われたものを探す。

それは、まあ、確かに棒だった。腰の高さあたりにあって、両手で握れる程度の長さ。言われなければ、棒形のスイッチか何かだと思っていただろう。

アイズは言われたとおりに、それを握った。位置的に、ちょうど両手剣を構えるような感じになる。

「トツド」

と、そこでひょこつと神様が顔を出した。部屋の入り口あたりで、頭だけをのぞかせている。どうやら、部屋には入りたくないようだった。

「なにやってるんだい？」

「研究」

「もう、いつもそればかり」

ふう、と実際に音がしたわけではないが。表現するならば、そんな音も立てそうな表情で、アルテミスが膨れる。それでも、その場を離れる気はないようで、同じ体勢のまま部屋の中を眺めていた。

「魔法を使うような感じで、精神力を反応制御装置に集中して」
「うん」

アイズは目を細めた。そして、手のひらに熱を集中させるような感覚で、精神力を移動させる。そう、ちょうど、魔法を使うときのように。

瞬間、無数に並んでいた計器がぐんと動いた。一瞬びくりとして集中を解除しそうになるが、それはなんとか耐えた。計器が気になつて、力を強めたり弱めたりしてみる。どうやら精神力の量によって値が変ずる計器は決まっているようだった。それが何を意味しているかまでは分からないが。

「どうだい？」

と、再度アルテミス。

トッドは紙面と計器の間でしきりに視線を往復させ、さらに何かを書き込みながらも答える。

「ええ、実に興味深いですよ。俺の時とは数値が大分変わっているけど、予測の範疇でもある。これならそれほど時間がかからない。できればサンプルがもう一つほしいところですが……」

「よく分からないけど、とにかく研究が進んだのかい？」

「そうですね。うち一つは完成しそうです」

言葉に、アルテミスはばあつと花咲くような笑みを浮かべた。

「じゃあトッドもしばらくは時間が空くね。私と一緒にゆっくりしよう」

「いいえ、できれば長文詠唱も使える魔法使いを探して、そちらのデータもすぐほしいところです。なに、成果が一つあれば、呼び込むのはさほど難しくないでしょう。とつと次に取りかかります」

「もう！ 本当にもう！」

ふくれっ面になったアルテミスが、たしたしと柱を叩く。その姿が微笑ましく、アイズはくすりと笑った。が、すぐに顔を正す。

「す、すみません」

その言葉が言い訳になっていたかは分からないが、とりあえずは謝っておいた。

アルテミスは、怒った様子はなかった。それどころか、顔を赤らめて頬を押さえている。

「す、すまない。お客様の前ではしたくない真似をしてみました」

「お客様じゃなくてバイトなんですけどね」

言う彼は、未だ紙面に集中していたが。

アイズは計器を上下させるのにも飽きて（そもそもさほど興味深い事でもない）、精神力を一定に保っていた。

「よし。もう手を離して大丈夫」

言われたとおりに手を離す。

彼はそのまま、テーブルの隅で紙の束を広げ、なにやら書き込みをしているようだったが。

そのまま、一分、二分……。正確に数えていたわけではないが、おそらく十分ほど経過したあたりだろうか。さすがに手持ち無沙汰になって、アイズは口を開いた。

「あの、私は何をすれば……」

「ああ」

と、彼は今更気がついたかのように、口を開いた。

「とりあえず今はこれだけ。後は好きにしていっていい。隣は倉庫になってて、武器類なんかも並んでる。それを引っ張り出して鍛錬でもしてくれ。神様とくっっちゃべってても当然かまわない。ただ時間の間だけは呼んだら来られる場所にしてほしい。しばらくは同じ事の繰り返しだから。——ああ、当たり前だが、ここに居る間は何をしても給料が出る。だからその点は不安に思わなくてもいい」

それだけ言って、彼は作業に戻った。言うべきことはすべて言ったというような風だった。

またしばらく沈黙していたが、トッドが顔を上げる様子はなかった。仕方なしにアイズは諦めて、アルテミスと一緒にリビングへと戻っていった。そのまま、女神としばらく雑談をしたが、それはきりがいいところで終わらせる。

石で作られた頑丈な建物へと戻る。途中、トッドの作業室だか研究室だかをのぞいてみた。さすがにもう紙とにらめっこはしていないかったが、相変わらず何をしているのかは分からなかった。

奥の倉庫に入ってみる。こちらは二部屋に分割されているようで、

研究室の半分ほどのサイズだった。奥には扉があり、そこらは閉まっている。手前が武器庫になっているようで、無数の武器が並んでいた。それは数という意味でも、種類という意味でもそうだった。

「……すごい」

つぶやかれるに任せて、アイズは唇を震わせた。

実際、見事なものではあった。武器の一つ一つを確かめてみると、それらはすべて整備が行き届いている。どれも実用に耐えうるものに思えた。中には刃引きされ、訓練用に調整されているものもあったが、そこらも何一つとして置物にされている様子はない。

さすがにロキ・ファミリアのそれと比べれば、規模にして数十分の一程度ではあるが。小さなファミリアでこれは、なかなか凄いことだと思えた。剣一つだって、切れ味を維持し、束のかみ合わせを保ち、鞘は刃に触れぬよう鞘口に気を使う必要がある。デスペレート一つで悲鳴を上げているアイズからしてみれば、考えられないほどだった。

武器の中から、普段使っているデスペレートに一番重心が近かったサーベルを選んで、庭に出る。一つ一つ型を確かめながら、慎重に振っていった。さすがに遠征上がりであるため、普段ほどなめらかにとはいかなかったが。

結局その日、再度呼ばれる事はなかった。日が沈み始めた頃に、その日のクエストは終わりとなった。

帰り際、ちょうど玄関でアルテミスに見送られるところで、やっと研究室から出てきたトッドに呼び止められた。

「これ、持って行ってくれ。それで、できれば可能な限り常に身につけておいて」

言って、彼が手を伸ばしてくる。手のひらを受け皿のようにして構えると、その上に落とされたのはネックレスだった。鈍色で、飾り気のないそれ。おしやれでつけるには、そういった事に疎いアイズから見ても、落第と言える程度のもの。

「？」

彼女はそれを受け取って、首をかしげた。

まだ多少話した程度の関係であるが、ある程度トッドという人間が

どういった者かは分かったつもりではある。つまるところ、彼はアイズという個人に対しては全く興味を持っていない。まさか贈り物という訳でもないだろうが。

「それは……まあ、実感してみた方が早いかな。多分二、三日は調子を崩すと思う。その間は来なくていい。復調したらステイタスの更新をしてみて、魔力値が上がったか教えてくれ——ああ、どれくらい上がったかは言わなくていい。ファミリアの秘中だろうしな」

言うだけ言っつて、彼はさっさと立ち去っていった。疑念を挟む合間もない。

「ごめんね。彼、無愛想で」

代わりに、アルテミスが苦笑して謝罪する。

思うところがない訳ではなかったが。しかし、湧き出てきた疑念は、吐き出さずにはいられないというほどのものでもない。まあいいかと考えて、彼女はネックレスを首からかけ、ホームへと帰っていった。

アイズは、小さな庭で剣を振っていた。ここ一週間ほどで、すでに手になじむほど振った剣を、いったん止めて、刃に目を走らせる。

刃の鈍いきらめきに、彼女は小さくかぶりを振って、再度訓練を開始した。

彼女は結局、クエストを継続した。依頼の内容に満足していた、というのものもあるが。それ以上に、いい影響があったからだ。

渡されたネックレスをかけて次の日、彼女は予言通りに体調を崩した。というの、少し語弊があるか。正確には、筋肉痛のような症状が体に表れた。動けないほどではないが、あえて動くにも億劫だ……その程度の事だ。二日目にそれも収まる。これもまた、予言通りの事だった。

そして、言われたとおりステイタス更新を申し出た。そしたら、なんと、魔力のステイタスが百近くも上がっていたのだ。これには口キもぎよっとしていた。

ただ持っているだけで、魔力を鍛えてくれるネックレス。そしてこ

れは、研究成果前……つまり、序の口。クエストを続けないという選択肢は、この時点で、アイズの頭からは吹き飛んでいた。

復帰してから数日は、まあまあ平和なものだった。庭で訓練をして、そこそこ神アルテミスとおしゃべりして、たまに何かの計測に付き合う。クエスト報酬の金品こそおまけみたいなものだったが、ほぼ普段通りの生活をして報酬まであるのだから、文句もなかった。

それに、

「アイズ、トッドがご飯だって」

「！　すぐ行く」

ここで出されるご飯は、なぜだかとてもおいしいのだ。それこそ、オラリオのどこと比べても一番。

今の生活に満足している。訓練はでき、魔力がSまで上がり、食事は美味の一言。

おもわずスキップなどしながら、彼女は呼ばれるままに向かっていった。

ストーキング・レフイーヤ

レフイーヤ・ウイリデイスの朝は早い。

起きて手早く身だしなみを整えると、トレーニングウェアに着替え、中庭へと出て行く。

ロキ・フアマリアはオラリオ最大手の一つだけあって、どれだけ朝早く起きても先客がいる。が、それらは彼女にとってひたすらどうでもいいので気にしない。とにかく早朝のトレーニングだ。朝食前だけあって、誰も激しい運動まではしようとしませんが、起床してすぐ体を起こす訓練は誰しもがしている。ダンジョンの中であれば、そういった準備もなかなか難しいからなおさら。とにかく起きがけでも体をピークに持つて行く訓練は必須だ。

レフイーヤが中庭に出て真っ先にすることは、あたりを見回すことだ。アイズがすでに早朝のランニングを始めていたら、そのまま鍛錬に混ざる。いなければ、壁際の邪魔にならない位置でアイズが来るのを待つ。

控えめに言つてストーカーだが、それを指摘する者はいない。

その日は多少早かったようで、まだアイズはいなかった。しばらく待つこと数分、同じくトレーニングウェアのアイズがやって来た。

「アイズさん！」

「レフイーヤ。今日も一緒に走る？」

「はい。」

レフイーヤは花が咲かんばかりの笑顔で、何度も首肯した。

偶然を装っているが、いつも待ち構えている。その姿に微妙な視線を向けてくる団員もいるのだが、レフイーヤが気にしたことはない。直接聞いてくる事もないのだから、気にする必要もない、と彼女は思っている。

タイミングが合えば、二人して一緒にランニングを始める。前をアイズが走るのは常だった。

二人はLv. 5とLv. 3。ついでに言えば、前衛型と後衛型という大きな差が二つもある。これだけの違いがあると、レフイーヤがア

イズの訓練について行くのは、物理的に無理だった。それでも彼女は満たされている。何度か周回遅れにされながらも、同じ訓練をしているというだけで嬉しいものだった。

ランニングが終わると、柔軟体操になる。これは二人一組でやった方が効率がいいため、イズとレフィーヤは一緒になつて行っている。

イズに触れたり密着したり、時には触れられたりして柔軟を行う。レフィーヤや天昇の時間である。これもやはり一部団員が言葉にしづらそうにしているが、やはり口に出さないのと同じ。気にしないことにしている。

早朝の鍛錬が終われば、食事の時間だ。

ロキ・ファミアアの食堂は広い。といつても、団員が一斉に食べられるほど、食堂は広くも、調理当番の供給能力が高いわけでもない。ある程度時間をずらすことになる。

その日、朝食に同席したのは、ティオネとティオナのヒリュテ姉妹だった。

ヒリュテ姉妹は大抵一緒にいる。これは意識してそうしていると言うよりは、ただ単にそれだけ気が合うという事だろう。

二人の様子は、朝の軽い鍛錬とは思えないほどボロボロだった。着ているトレーニングウェアは所々ほつれているし、肌が褐色なので分かりづらいが、顔には打撲の跡も見て取れた。鍛錬が激化してちよつとした争いにでもなったのだろう。アマゾネスにはよくあることなので、誰も気にしない——とまではいかない。たまに行き過ぎる事があるので、団長であるフィンなどは気をもんでいるらしい。たまにリヴェリアに説教されているところも見る。

食事を一番早く終えたのはイズだった。食べるのが速いと言うより、最近は軽めの食事を好むから、自然と早く終わるのだろう。

「ごちそうさま」

「イズは今日もバイトー？」

「うん」

食後の礼をしたイズに、ティオナが問いかける。

レフィーヤは言葉に、食器をならすほど動揺したが。それに気づいたのは、テイオナだけだった。彼女はレフィーヤを見て、不思議そうにしている。

アイズはとつととお盆を持つと、返却口へと向かっていった。心なしか、その足取りが軽いように思える。

その姿に、レフィーヤはぎりぎり歯ぎしりをした。その姿に――さすがにテイオネも気がついた。姉妹二人してやや引きながら、忌々しそうにしている少女を見ている。見られているだけならば害はない。が、さすがに口に出されれば、それらは顕在化する。

「ちよつと……どうしたのよ一体」

「アイズもだけど、この頃レフィーヤもちよつとおかしいよね。アイズはいい変化だと思うけど……」

「だって！ 明らかに変じゃないですか！」

口調は強かったが、声は大きくしなかった。その程度の自制心はまだ残っていた。

自分でも思っていた以上の語彙の強さだったため、思わず下唇を噛む。それが自制につながったかと言えば、やはり、そんなことはないと言わざるをえなかったが。

「最近のアイズさんは、ホームでほとんど鍛錬しないですよ！ 朝食を終えるとすぐクエストだって言つて、どこかに行つちやいますし！ しかも！ この前なんて、何日か体調まで崩してたんですよ！」

「体調崩すことくらい誰にでもあるでしょ」

「原因がはつきりしてるとはいいですか！ あのよく分からない、ダメな首飾りです！ なんですかあれ！ 絶対呪詛カースでも付与された一品に違いありません！」

「そうかなあ。まあ錆びて斑模様になったんじゃないかってネックレスをつけるセンスはよく分からなくはあったけど」

レフィーヤは手を強く握りしめそうになって、はつとして力を抜く。手にはまだ、スプーンが握られている。後衛職とはいえ、さすがにLv. 3の力で握れば、二度と使い物にならなくなるくらい変形してしまう。

「しかも、あれは絶対贈り物ですよ！ クエストの内容だとか言ってますけど、おかしいじゃないですか！ なんでクエストで装飾品をつけるんです!? 絶対クエストにかこつけてアイズさんをたらし込もうとしていますよ！」

「ええー……それはないと思うなあ」

「百歩譲つてあの子をものにするための言い訳クエストだったとして、それである贈り物はないでしょ」

やたらにボルテージを上げるレフィーヤに置き去りにされながら、二人は顔を見合わせた。

まあ、そう思うのは分からなくもない。それは彼女も認めた。あの首飾りは、悪い意味で骨董品感全開だった。物置の中で長年放置されたらこんな風になるかも、という代表例のようなものだ。それでも、贈り物は贈り物である。もうつけていない事から、レフィーヤは華麗に目を背けた。

「でもそんなに気になるならさー」

ティオナが頬杖をついて、片手のフォークでは切り分けたソーセージをつつきながら言った。

「アイズの後を追ってみればいいんじゃない？ 別にクエストを受けることも、受注先も隠してる訳じゃないんだからさ。訪ねてみるくらいなんてことないでしょ」

「それですー！」

ぱつと、レフィーヤは顔を上げた。目はららんと光っている。というか、どこか正気もなくしているようだった。

ぎよつとして、ティオナは顔を引きつらせていた。

レフィーヤは手早く朝食を征服し、口をぱんぱんに膨らませた。さほど咀嚼もせず、一気に飲み込む。大量の固形物に、喉が多少悲鳴を上げたが、それは飲み物で無理矢理流し込んでごまかした。

「では行ってきますー！」

「あちやー……まずいこと言っちゃったかな」

「あんだ、何かあったら責任とりなさいよ」

背後で姉妹のぼやきが聞こえたが、そのときにはもう、レフィーヤ

は半ば聞き流していた。それは二人のそれだけではなく、周囲の音ほとんどすべてをだ。

部屋に戻り、急いで着替える。多少髪の毛が荒れた気がするが、気にしている余裕はない。

急いで部屋を出ようとして、ふと足を止めた。部屋の隅に立てかけてある、杖も持ち出す。これは予備の練習用であり、ダンジョンに潜るときのそれほど威力は期待できないが。それでも、いざという時には心強い。

部屋を出て、急いでホーム入り口へと向かう。途中、何人かにあつたが、彼女の形相からか、道を空けてくれた。

入り口へとついて、レフイーヤは物陰に隠れた。人はほとんどいない。早朝である上、今は食事時でもある。そんな時間にファミリアの入り口をふらふらしている人間は少ない。

彼女が監視を始めて、数十分が経過した。おのおのやるべき事を終えたからか、その場所にも人が増え始めている。彼女に焦りが生まれ始めた。

(もしかして、もう行っちゃったんでしようか……?)

物陰から顔半分だけを出して、背筋に寒気が生まれる。

アイズの容姿は目立つ。なので、見逃すことはない。だから、少なくとも彼女がこの場で待機してから、まだホームを出たという事はなはずだが。それでも、監視を始める前に出て行ってしまったのなら、話は変わってくる。

その可能性は考えなかったわけではない。だが、アイズがよほど急いでいるのでもなければ、そうそう遅れはしないと思っていたのだが。

(どうしましょう……)

このタイミングで間に合わないならば、どのみちいつから綱を張つていても抜けられてしまうだろう。

疑念に、自信が揺らぐ。追いつけないのならば、別の手を考えるしかない。

(あまりいい手とは言えないけど、ファミリアを頼るとか?)

それはつまり、自分の都合でファミリアを巻き込むという事だが。さすがにそこまでしてくれるかは定かではない。したとして、あまりいい目で見てもくれもしないだろう。最悪、今まで築いた信用を崩すことにもなる。

いい加減監視も諦めようか、そう思ったところで。やっとアイズを見つけた。

(やたっ！)

アイズは私服だった。といっても、特に飾り気があるわけではない。どちらかと言えば動きやすい、運動着の延長上のような格好をしている。特に周囲を気にするでもなく、散歩と同じような気軽さで、ホームを出ていった。

レフイーヤは慣れないながらも、可能な限り気配を消して、その後を追っていった。

アイズの足は、おそらく目的地まで最短距離を進むものだったのだろう。大通りは使用せず、入り組んだ裏道ばかりをたどっている。おかげで、何度か見失いそうになった。それでもなんとか後をつける。

目的地は、ロキ・ファミリアのホームからほど遠い場所だった。実際、オラリオの片隅と言っている。

建物は、よくあると言えばよくあるし、特徴的と言えば特徴的なものだった。ホームに隣接したどでかい堅固な倉庫というのは、実際、このあたりではなかなか見ることができないものではある。

アイズがその、どこだかのファミリアのホームに入って、数分ほどはじつと観察していた。間を置いたのは、そこはただの寄り道で、すぐ出てくるのではないかという疑念があつたからだ。時間がいくらか経過し、疑念もほどける。つまりは、そこが目的地で間違いないらしかつた。

もうその必要もないのだが、彼女は足音を消しながら、ホーム入り口——というかただの玄関だ——へと寄る。そして、すぐ身を隠せるように体を斜めにしながら、ノックをした。

「はーん」

聞こえたのは、女性の声だった。

とりあえず、男だったら問答無用で殴り倒してやろう。そんな風に思って掲げていた杖は下げる。

扉を開けて出てきたのは、神だった。それはさすがに予想外で、レフィーヤはぎよつとした。持っていた杖を、なんとなく背後に回して、隠すようにする。

女神はそんな様子を気にした様子もなく（あるいは気づいていたが無視してくれたか）、問いかけてきた。

「どなただい？　うちになにか用事でも？」

「あの……えつと……」

ここで、レフィーヤは言葉に詰まった。

今まで感情の勢いでやってきたが、さすがにたどり着いてからどうこうと考えていなかった。なんと言えばいいのか、ひたすら悩むが。あまり冴えた答えは出てきそうになかった。

結局出てきた言葉は、あまりにもまんまな事だった。

「こちらにアイズさんが来ていると思うのですが……」

「ああ。ということは、ロキ・ファミリアの子かな？　おーい、アイズー。君のファミリアの子が来てるよ」

「レフィーヤ……？」

言われて、すぐひよこりと顔を出したアイズだったが。不思議そうに首をかしげていた。

「どうしたの？」

「いえ、そのですね……最近アイズさんの様子が変わったので、ちよつと……」

「……………？　そう」

よく分からない様子ではあったが、一応納得はしたのだろうか。あるいは、さほど興味を引かれる内容でもなかったか。

「まあとりあえずいらっしやい。中にどうぞ」

「あ、はい。お邪魔します」

すっかり意気を殺がれ、レフィーヤは小さくなりながら中に入った。

家の中も、まあどうという事はなかった。ただ、小さなファミリア

とはこういうものなのだろうな、という予想ままの作りである。

道すがら（といつてもほんの十数歩分だが）アイズに問いかける。

「アイズさんはここで何をしてるんですか？」

「魔法の実験、だと思う……たぶん」

「たぶん？」

「正直、やってる事がほとんど理解できなくて……」

アイズは困ったように言いよんだ。

それに補足をしたのが、数歩前を歩いていた女神だった。

「まあクエストと言つても、アイズがここにいる時はほとんど庭で鍛錬してるよ。後はたまに私とお茶をしてくれてる。正直な話、さほど忙しいクエストではないからね」

「はあ……」

元々、めちやくちやな感情論で来たとはいえ。さすがに想定外すぎて、何を言うこともできなくなる。今更だが、アポなしで突撃してきたのだ。それが、まさか普通に歓迎されるとも思っていなかった。

と、奥からやけにのそりとした気配がやってくる。

「アルテミス様、何かありましたか？」

やってきたのは、白衣の男だった。どこがどうという特徴もない。ただまあ、どこか疲れている風には見える男。

（男！）

思い、レフィーヤはきつと身構えた。これがアイズの悪い虫とも限らない。

男は、警戒心全開のレフィーヤをじつと観察した。そして、ぼそりと言。

「杖……」

その言葉にどんな意味があったのかは知らないが。彼女はぎゅつと杖を胸元に抱き寄せて構え続けた。

「もしかして魔法使い？ 純正後衛の」

「うん。レフィーヤはすごい魔法使いだよ」

答えたのは、心なし胸を張ったアイズだった。アイズに「すごい魔法使い」だと言われて、レフィーヤはややにやけながら、警戒心を解

く。と、はつとしてかぶりを振り、再び緊張をした。評価されたのは嬉しいが、何も解決はしていない。

男はきびすを返して奥に消えた。かと思ったら、すぐに戻ってきた。手には一枚の紙が握られている。紙面が見えるように、ぼつと突き出してくる。

「冒険者依頼」

「へ？」

意味が分からず、思わずとぼけた声が出てくる。

男は何も気にした様子はなく、言葉を続けた。

「是非受けていただきたい。条件がいいとはいえないが、まあ自由な時間は多い。その間は好きにしていいていいから、総合的に見れば悪くはないはずだ。できれば受けてほしい」

「えっと、あの……？」

なんだか、思っていた男性像——つまり、ロキ・ファミリアによくいるような——とは、大分性質が違う。とりわけ、男性からはたまに透けて見える欲望というものが、まるで見えなかった。

困ってアイズを見ると、彼女も苦笑しながら、答えた。

「レフィーヤの思ったままでいいと思う……よ。でも、個人的には受けてあげてほしいと思う。ここ……多分これから、凄いことになると思う」

彼女の言葉は、いつも通り抑揚の少ない落ち着いたものだったが。しかし、言葉の端から見え隠れする熱気が、どこか感じられた気がした。

レフィーヤは息を深く吸って、意思を固めた。逡巡はしなかった。しても意味がないように思えた。だから、必要なのは決断だけだった。アイズと一緒に働けるという、ただそれだけの決断。

「やりますー」

「じゃあここにサインを」

紙とペンを差し出される。半ば書き殴るようにして、複数の用紙に自分の名前を書き込んだ。クエストの発注用、受領用、ギルド提出用の三枚だ。これで、自分はクエストを受理したことになる。

「じゃあこっちに」

言葉少なに、奥へと案内された。

奥の部屋は、控えめに言っても寒々としていた。石造りの廊下に、小さな明かりだけがともっている。壁が分厚いため、採光だけでは不十分なだろう。放っておけば、そこら中カビだらけになりそうな、そんなところだった。

案内されたのは、研究室とやらだった。

そういつた場所に造詣が深い訳ではないレフイーヤだったが、まあそう言われれば、あえて否定できるものでもない。そんな部屋ではありそうだった。ただ、魔法使いのそれとは大分違って見えた。特定の何を研究するというのではなく、本当になんでも研究するための部屋。そんな印象を受ける。

レフイーヤはよく分からない計測器の前に立たされて、言われるがままに精神力を流した。やり方はアイズに教えてもらったのと、思ったよりかなり単調な作業だったため、順調に進んだ。なお、この結果には男（トツドという名前らしい。自己紹介はされず、アイズに教えてもらった）も小躍りして喜んでいた。

やったのは本当にそれだけで、後は隣の倉庫から武器を引っ張り出してきたアイズと一緒に、庭に出た。そこで、それぞれの鍛錬を始める。

「はー……」

ため息というよりは、ただの吐息が漏れたといった風に、レフイーヤ。その様子に、アイズが首をかしげた。

「どうしたの？」

「いえ、クエストってもっといいか……いえ、大変なものを想像していたので。こんなにゆるいクエストもあるんだなって」

途中、いかがわしいと言いつうになつたが。それはなんとか自制した。

さすがに頭の中がピンク色みたいに思われるのはいやだったし、なによりトツドは付き合いが極めて事務的な男だ。およそそういうところとは結びつかない。まあ、処女神の眷属など、そうでもなければ

やっつけられないのかもしれない。

「そう……だね。自由時間も多いいし、私は気に入ってるよ」

風切り音をも切るような素早い斬閃が、残像だけを残して走る。ファミリアの中でもとりわけ手数と、魔法を絡めた最大瞬間速度に特化したアイズの剣は、それこそ同じレベルの人間ですら見切れないほどだ。

「それに……予感があるんだ」

「予感、ですか？」

「うん。ここにいれば、多分いい影響があるって予感……」

それが何か、とまでは聞けなかった。

できれば聞いてみたい欲求はあった。だが、それをレフイーヤは、努めて押さえつけた。踏み入っていいことではないのではなからうか、と思ったのもある。しかし、それ以上に、彼女の希望に水を差すような真似はしたくなかった。

それから。

まあ、いろいろあったと言えはいろいろあった。何事もなかったと言えは、まあそれもそれまでだったように思う。

大きなもので言えば、アイズと同じように古びた見た目のネットワークを、数日持っているように言われた。さすがにつける気にはならず、ポケットに入れっぱなしだったが。それで三日ほどだるさがあったが、その後ステイタス更新を試みれば魔力が70近くも上がって、いてしばらく唾然とした後、思い切りガッツポーズをとっていた。

小さなもので言えば、契約内容にある昼食が、何をつかっているんだと言いたくなるレベルでやたらうまかったり。相変わらずトッドは会話を楽しむという事とは無縁だったり。まあそんな事があって。

気づけば、レフイーヤも、特に用事がない限り通り詰めるようになっていた。

一方、ロキ・ファミリア

ロキ・ファミリアのとある一室。執務室というほど大層ではないが、休憩室というほど気軽でもない、そんな場所。あえて言うなら、そう、比較的開かれた小会議室と言ったところだろうか。

そんな部屋に、主神であるロキとフィン、アイズが詰め寄っていた。小会議室の中は、汚れていると指摘するほどでもなかったが、しかしあちこちの壁に黒い跡がついていた。簡単な掃除自体は行き届いているように思える。つまりは、それだけ使い込まれているという事なのだろう。実際、休憩室や遊戯室が満員の時は、ここが使われると聞いている。

ようは、それなりに居心地がいい空間だという事だ。

座っているのは、フィンとアイズだけだ。ロキは、壁際に寄りかかっている。いかにもたまたま居合わせました、という風に見せるためだ。実際、そうでないかと問われれば、まあ否定はできない。時間がなければこの場にはいかなかっただろうし。

「それでだ、アイズ」

「うん」

フィンの言葉に、アイズが短く答えた。ロキは邪魔にならないように黙っている。

「君のクエスト、とかバイトについてなのだけどね」

「その……まずかった……？」

「まさか」

おずおずと聞いてくるアイズに、しかしフィンは大げさに肩をすくめて答えた。

「団員の小さなクエストにまで、いちいち口を挟むほどロキ・ファミリアは暇じゃないよ。ただまあ、確認したいことはある。相手がクエストの内容以上の事をさせてるんじゃないか、という点まで含めてね。守秘義務に抵触しない程度でいいから、こちらの疑問に答えてほしい」

「分かった」

それほどたいそうな審問ではないと思ったのだろう——実際、それを狙ってこの小会議室で行っているというのもある。この場所であれば、それこそ扉の前でちよつと聞き耳を立てただけで中の話が聞こえてくる。

「それでまずは、アルテミス・ファミリアでいったいどんなクエストをこなしているんだい？」

「精神力を流すだけ」

アイズの言葉は、恐ろしく短かった。

沈黙。それが数分ほど支配したただらうか。フィンが小首をかしげる。アイズはそれを真似たかのように、鏡映しに同じようにした。

「いや、他には？」

「ない。本当にそれだけ。今のところ、要項にあつた魔法を使つてもらうって言うのも行つてない」

「まさか、それを四六時中行つてるわけでもないだらう？」

「うん。空いた時間はお茶したり、庭で鍛錬したりしてる」

「……僕の記憶が確かなら、遠征後の強制休憩期間からクエストを受けてるはずだが。まさかその間、鍛錬を行っていた、なんて事はないだらうね」

「……………」

アイズの肩が、びくりと震えた。ついでに、目も泳いでいる。そわそわと、落ち着きがなくなっていた。

「アイズたん……無茶したらあかんっていつも言つとるのに……」

「この点に関しては別途呼び出しがある。ガレスとリヴェリアも呼ぼう」

「!?」

この世の終わりみたいな顔をして、いくらか言葉を探していたが。元々口下手な少女である。うまい言い訳など見つかるはずもなく、しゅんと肩を落としていた。

「それはそれとして、他に何か特筆すべきところはあるかい？ 何か特徴とか」

「特徴……」

まだしよんぼりした様子ではあったが、それでも顔だけは上げて（上目遣いで実にあざとい。思わず許したくなってしまふ。ロキの裁量でそれはできないのだが）、何かを思い出すようにしている。

「あ……」

「何かあったかい？」

「ご飯がおいしい」

と、いままで引きつっていた表情を、とろりと溶けさせて。何かを思い出しながら、締まりのない顔になる。

言葉に、フィンは額を押さえて頭痛を耐えるようにしながら言った。

「ご飯がおいしいって……それはなんて言うか……あえて言うべきことでもないだろう？」

「そんなことはない」

やたら凜々しい顔になって、アイズはきっぱりと言った。

「とても、すごくおいしい。今までの人生の中で、一番おいしいご飯が出てくる。命をかけてもいい」

「いや、命までかけられても……」

本気で困惑して、フィン。

とりあえずこれで、アイズへの審問は終わった。部屋から出て行きがてら、その背中に「過剰鍛錬の件は忘れたわけじゃないからね」と言われると、あからさまに肩を落としてはいたが。

アイズと入れ替わって入ってきたのはレフィーヤだった。彼女はなんだか申し訳なさそうに、眉をひそめて言っている。

「あの、今のアイズさんとの会話、全部聞こえてしまっていたんですが」

「それは別にええねん。聞こえてあかんかったらもつとちゃんとしたところで話すわ」

ロキがぱたぱた手を振って、気軽にそう言う。

団員の緊張を解す。こういった役割は、大抵ロキの役割だった。気さくであるというのは、ともすれば舐められる要因にもなるが、こういったときは得がたい性分にもなる。

レフイーヤは座ることを促され、いくらか思い感った様子だったが、結局素直に腰を据えた。

「それで、君から見てアルテミス・ファミリアのクエストはどうだい？」

「多分、アイズさんと同じ事しか言えません。なんとかかって装置に精神力を流して……本当にたったそれだけです。後は自由時間だとか言って、アルテミス様とおしゃべりしていても、庭で鍛錬をしても何も言われません。そんな時間までお給料が出るといのは、若干変な気分にはなりますが……」

「まあその点に関しては気にする必要もないだろう。バイトっていうのは大半が拘束時間で金銭が発生する。素直に受け取っておくとい

い」

「それは……まあ、はい」
若干納得しづらそうではあったが、なんとか飲み込みはしたらしい。

「それで」

言って、フィンテーブルの上で、手を組み直した。

一瞬、レフイーヤに緊張が走ったのを、ロキは見て取った。なるべく平静を装ってはいるようだったが、しかし肩が張ったのを、ロキは見逃さなかった。

「アイズに聞いても分からないと思ったから聞かなかつたが。レフイーヤから見て、アルテミス・ファミリアの団長、トッド・ノートという人間はどういうタイプだい？」

聞かれた言葉は、予想外ではあつたらしい。緊張に上がっていた肩がすっと落ちて、引きつっていた顔もどこか呆けたものになる。

「どう……ですか。私は研究者という人種がよく分からないので、どうとは言えませんが。例えるなら、そうですね、真面目なドワーフとというのが一番近いのかもしれませんが。それも、他のことに目もくれず、ひたすら鍛冶だけをしているような」

「ふむ」

と、何かを考えているようなポーズでうめくフィンだったが。それ

は本当にただのポーズだろうと、ロキは分かっていた。

アルテミス・ファミリア団長、トッド・ノート。ただの想像でしかないが、まあ少なくとも俗人ではないだろうとは最初から思っていた。アイズだけならばともかく、潔癖症の気があるレフィーヤが普通に付き合えるのだ。次いで、さらに潔癖症でもあるアルテミスの眷属である。それこそ解脱したような超然とした人物でも全くおかしくない。というか、むしろそういった人物像こそが浮かんでくる。

「それで、何か気になる事はあるかい？」

「あ、そうそう！ アイズさんも言ってたんですけどね！」

何やら、やたら興奮した面持ちで、レフィーヤが語り出す。手をパタパタと振り、まるで世間話でもするような様子だ。というか、単に興奮しているだけなのだろうが。

「本当に、なぜかご飯がやたらおいしいんですよ！ どうもトッドさんが作ってるようなんですけど、これがまた意味不明なほどおいしくて！」

「そ、そうかい」

レフィーヤの勢いに、完全に押されるようにして。それでもなんとかこらえて、フィンは答えた。

「一度皆さんにも食べてもらいたいんですけど、なにしろ偏屈な人ですからね。料理一本でも余裕で食べてける腕があるのに、それも嫌がってるんです。やっぱり、どこか変な人なんじゃないかなーと思ってます」

「うん、まあ、なんとなく人物像は見えてきた気がするよ」

言つて、フィンはぱん、と手を叩いた。それで話は終わりだという風に。

「時間をとらせて悪かったね。まあクエストに関しては問題なしだ。アイズにもそう伝えておいてくれ。ああ、後から呼び出しがあるから、それは忘れないようにとも」

「その、アイズさんも悪気はなかったんですから、あまり怒らないでくださいいね？」

「悪気があるうがなかりうがオーバーワークはオーバーワークだよ。」

その要求には応えられないな」

言うのと、ぱたぱたと、ややせわしない様子でレフイーヤが退室する。それを見送って、しばらく。フィンは扉にまで寄っていった。そして、少しだけそこを開くと、周囲を確かめる。周りにはだれもいなかったのだろう。そもそも便利な場所にあるとは言いがたい小会議室だ、用がなければ、無人である事も珍しくない。

周りに人がいなければ、ちよつとした密談をするくらいなら不可能ではない。フィンは戻って座った。先ほど座っていた、小会議室の一番奥ではない。ロキの正面の椅子にだ。

ロキもそれにならって、フィンの対面に座った。腕を組み、いくらか悩む仕草をしながら。ついで、がばつと両手を挙げて、それを一気にテールブルへたたきつけた。

「結局ご飯がおいしいって事しか分かってへんやんけ！」

「まあまあ」

ロキの突っ込みに、フィンはなだめるように両手でジェスチャーをする。

「今回はクエストにかこつけて、彼女らに無茶な要求をしていないかどうかだけの確認だよ。それが無いって分かっただけでもよしとしようじゃないか」

「そうなんやけどなあ。なんで二人してご飯自慢ばつかすんのや」

未だ納得いかないのか、ロキはぶつぶつと続けた。

ぶーたれた顔で肘をつき、元から細い目をさらに細め、すねたようにあさつての方向を見ながら。

「うちも食つてみたくなるやん」

「結局そこなんだ」

フィンは全身を脱力したようにする。が、姿勢はすぐに正された。予想の範疇ではあったのかもしれない。

「無茶がないことさえ分かれば、あの二人についてはいいさ。問題は、あのネックレスだよ」

「あれなー。ほんまなんなんあれ。意味分からんって」

二人が同時に考えたのは、あの小汚いネックレスについてだった。

いや、この際ネックレスがどういったセンスなのかは関係がない。問題は、それが持つ効能だ。

「持っただけで、所持者の魔力を爆発的に上げてくれる。控えめに言っても規格外な道具としか言い様がないね」

「言つとくけど、うちらにとつても予想外やで。経験値エクセルリアつちゅうのはそんな安いものやないんや。あれに要求されるのは魂の研鑽。ちよこつと鍛えてほんと上がるんやったら、いまごろ冒険者は第一級冒険者だらけや」

「それについては、まあ、一応仮説はあるよ」

「仮説？」

片目だけを少し開いて、フィンを見る。

彼も、自信満々といった様子ではなかったが、しかし全くの無根拠という風でもなさそうではあった。ぴつと、指を立てる。

「そもそも魔力ってどう鍛えると思う？」

「どうって……使えないんちゃう？」

「その通り。魔力は魔法を使うことでしか鍛えられないんだ。魔法を使わずに訓練しているのは見てると思うんだけどね、あれは魔力の出力じゃなくて、魔力の制御能力を鍛えている。まあ、副次的に魔力も鍛えられてるんだけど、それはあくまで副作用でしかない。現状、魔力そのものを効率的に鍛える方法はないんだ」

「ほほう……。まあ確かに力を鍛えるなら筋トレとかよう見るけど、確かに魔力増幅訓練なんて見ないなあ」

「剣を振って筋肉を鍛える、みたいなものだからね。で、肝心のネックレスだけど、僕はあれを、魔力そのものに圧力をかけて強制的に鍛えさせる道具なんじゃないかって睨んでる。その効果はどれだけ鍛えられているかによるといふ感じで。だから後衛で魔法専門職のレフィーヤの方が、アイズより上がり幅が小さかった」

「ほう……。目ん玉ひんむくような話やな。それが正しいと、魔法を使えないやつが一番魔力上昇幅が大きいことになるな。意味があるかはさておき」

「そうだね。あくまで予想だけど、その点に関しては、トッド・ノート

がすでに自分で試してるんじゃないかな。意味があるかはさておき」二人して、意味があるかはさておきと言うが。まあこれは、きつぱり意味がないとは思っていた。そもそも魔力ステータスが上がって、魔法まで使えるようになったならば、わざわざ魔法使いを雇う意味からしてない。

しかし、本当にそんなものがあり得るのだろうか。本当に、降つてわいたように、都合よく。

エクセリア
(経験値はそんな安いもんやない)

ロキは、自分ではいた言葉を再び噛みしめた。

経験を積むのは、生中な事ではない。それはつまり、神の力によって、自分という器を自分以上に拡張するという事だ。有り体に言ってしまうえば、自分という存在を超えて大きくするという事だ。わかりやすく、超人になる、という言い方もできる。

そう、才能ではなく存在だ。種族的、そして生物的境界を乗り越えて、大きくなると言う事だ。安いはずがないし、代償が小さいはずもない。だからこそその冒険であり試練だ。己に与えられた命題を乗り越えてこそ、その器は力に応えて拡張する。それがエクセリアでありレベルアップ。

もしそんなことをたやすく行うならば。それこそ、神の力だ。神の与えた力だ。

「こうなると、一度リヴェリアにも試してほしいものだね」

「せやな。まあLv. 6の、それも極まった魔法使いに試したところで、効果がどれほどあるかは疑問やけど」

「多少でも上がれば儲けもの、という考えでいいじゃないか。実際、力の伸び悩みに関して、リヴェリアはアイズよりも重症だ」

まあLv. 6にもなつて、ぽんぽんステータスが上がるようなら、その方が問題だが。それこそ神の宴で槍玉に挙げられかねない。

「主神の方はどうなんだい？　こう、愉快犯的に力を与えたりとか、そういった方面で」

「ありえへん、と思う」

まずありえない事ではあったが。しかし、眷属かわいさに、全く否

定できる事でもない。かもしれない。そんな風に思う。

「アルテミスは超力タブツのいい子ちゃんや。良くも悪くも臍はせん。過去に一度、眷属が全滅した時やってそんな真似せんかったんやから筋金入りや。ただ、まあ……」

「その事がトラウマになって、今の眷属をかわいがりすぎてる可能性は否定できない、というところか」

「せやな。それでもうちは可能性が低いと思っとる」

実際、どうだろうか。思う。

過去に幾人もの神が、我が子の死を受け入れられず、あるいは認められず、神の力を召喚した。そして、天界へと強制送還されていった。いままでそうでなかったからと言って、これからもそうでないとは言い切れない。それは、他ならぬロキ自身にも言えたことだった。目の前で我が子が嬲られれば、己の力を振るわないほど自制できるか。自信を持ってないとは言えない。

と、ふとそこで、ロキは気がついた。

「ないな」

「何がだい？」

ロキはただでさえ細い視線をさらに細めて、フィンを見た。

「フィン 의견がない、言うたんや。今まで確認と予想のみで、自分自身の意見を一言も言っへん。なんかあるんやろ？」

彼女は、悪戯っぽく笑みを見せて、目の前のパルウムを見た。

彼は相変わらずの微笑を崩しもせず、静かな笑みはいつそ、けして揺れず倒れずの大樹にも思える。

「これを言うとな、変な先入観が入ってしまうから言いたくなかったんだけどね」

「ええやんええやん。もう話も行き詰まってるし、言ってしまいや」

「アルテミス・ファミアはおそらく白だよ。違反は全く行ってない。そして、アイズとレフィーヤも通わせ続けた方がいい。できれば彼女ら伝いに関係を強めたいくらいだ。あくまで僕の勘がそう言ってるだけだけどね」

「それは本当にただの勘なんか？」

ロキは面白がって、笑みを浮かべた。

フィンは一瞬、きよとんとしたが。彼は降参したように、両手を挙げた。

「うずくんだよ、指がね。それもこれは、おそらくいい意味でのうずきだ」

呼応するように、彼もまた、笑みを浮かべる。

ロキはけたけたとひとしきり笑った後、言葉が続けた。

「せやったらそれにかかけようか。ここはうちのファミリアやけど、团长はフィンや」

「いいのかい？ そんなに簡単に言っちゃってしまつて」

「ええねんええねん。それが下界でのうちの在り方や」

それだけ言つて、ロキは席を立った。

決断が正しいと知つたのは、それからいくらかも経過しないので事だつた。

確変の始まり

立ち向かってくるモンスターをなで切りにする。わざわざ近づく必要はない。理由は不明だが、モンスターというのは冒険者——というより人間——に、自ら襲いかかってくる。なので、いると分かれば、ただ突っ立っているだけでも無数にやってくるわけだが。

アイズは剣を振り回しながら、とりあえず目につくモンスターをたたき切っていた。

現在はダンジョンの中層、19階層な訳だが。そこをLv. 3が二人とLv. 5が一人。たった三人のパーティーであれば、適正階層と言えなくもない。まあ、大分楽ではあるのは否定できないが、とはひっそり思っていた。

目につくモンスターを一通りたたき切って、アイズは振り向いた。そこには、少女と男性の二人がいた。

「大丈夫?」

「はい、大丈夫です」

「こっちも」

問いかけるが、聞くまでもない事ではあった。

二人——トッドとレフイーヤ——は、アイズが倒したモンスターから魔石を取り出している所だった。

モンスターの死骸は、基本的に放置はできない。というよりも、魔石はだが。魔石が金になるという点を差し引いても、モンスターが魔石を食べて、その味を覚えることがある。詳しい理屈までは知らないが、モンスターが魔石を食べると力が強まる。それに味を占めて、同族食いを繰り返し、強化種となる事もあった。当然これは適正階層の概念を破壊するものであり、怪物進呈パス・パレードと同じく危険行為だと言われている。

冒険者を多く倒した強化種はネームドモンスターとして登録され、ギルドで討伐依頼が出される事もある。が、これはまあ、今は関係ないか。

とにかくダンジョンアタックだ。

一応三人のパーティーという事になっているが、二人はアイズの殲滅力について行けないため、ほとんどサポーターのようになってい。今も、魔石をえぐり出しては回収しているし。

二人の作業を眺めながらも、周囲に気を配ってモンスター襲撃を確かめる。この程度の階層で遅れをとることはなくなったが、しかし油断もできない。それがダンジョンという場所だ。

(なんか……変な感じ)

それは、魔石回収を眺めていることでも、トツドの依頼で中層まで来たことでもない。三人という半端な人数でダンジョンに潜っている事についてだった。

ロキ・フアミリアは最大手フアミリアだ。一緒にダンジョンを潜ろうと思ったら、それこそいくらでも人数を集められる。そこをわずか三人でというのは、そういうえばなかなかない経験だった。

ダンジョンは広いという、明快な問題もある。つまりは、下に行けば行くほど、役割を担う必要がある人間が増えていくのだ。もしマップなし、何も考えずに潜っていけば、簡単に迷ってしまう。これもまた、ダンジョンの危険の一つだ。

幼少期からダンジョンに潜っているアイズには、その手の危険はすでにないが。

ふとアイズは、自分の手元を見た。

何があるわけでもない、普通の剣。一つ違うのは、愛剣ではないという点か。デスペレートはまだ整備に出したままなので、代わりの剣を持っている。お値段数千万ヴァリス。強度にこそ不安が残るが、切れ味に関してはデスペレートに勝るとも劣らない。

(これじゃ……ない……)

ほそりと、思う。

トツドの依頼は奇妙なものだった。

「自分の作った武器で、戦ってみろ」

それだけだ。

武器は、結局の所ただの武器だ。使い手に依存し、そして使い手上の力は出せない。例外として魔剣というものがあるが、あれは武器

と言うよりも、どちらかと言えば道具だろう。ほぼ使い捨てという特性から見ても、分類としてはそちらだ。

トツドの研究室には、幾度となく出入りしている。それですべて分かるまで傲慢にはなれないが、しかし分かることはあった。あそこの素材には、特別なものはない。どれも上層から中層あたり、つまりさほど特別な素材は存在しない。もとより弱小ファミリアなのだから、下層や深層の素材は入手することすら困難ではあるだろう。

武器の中には、特殊武装スベリオルズと呼ばれる特殊な力を持つものもあるが。それとて、使い手の能力を逸脱するものではない。それは同時に、使い手の性能から脱出できない、という意味でもあるだろう。

(だから、今更飛び抜けた性能を持った武器なんていうのもないはず……だけど)

思う。

武器は武器。それ以上でもそれ以下でもない。

確かにアイズには、トツドという人間の創造力に対して期待はある。あるが、それが既成概念を超えるものかということ、どうだろうとも思う。

(もしそんなものがあれば……)

使い手をさらなる高みに上げてくれる武器があるならば。

考えかけて、アイズはかぶりを振った。その考えは、さすがに、今の鍛冶師に対して失礼だろうと思ったからだ。

「——だから魔法を使うならば、ただ一点だけに集中すればいいだけじゃない。精神力の循環こそが次のレベルに上げてくれる、そのはずだ」

「なるほど。じゃあ——」

トツドとレフィーヤは、雑談をしながら魔石の回収を行っている。これは、そこそこ珍しいことだと言えた。

レフィーヤはどちらかと言えば、人見知りするタイプだ。その上(なぜだか)男性にはあたりがきついことがままある。トツドに対しても、最初はそうだった。今ではアイズよりも、トツドとうまく話すようになっている。

「実際、あの人はすごいんですよ。単に魔法理論に関してだけ言えば、それこそ数世代先を行っていると言っても過言ではありません。学ぶべきところが多いです」

とは、レフイーヤの弁だが。なんにしろ、暇さえあれば討論をしている二人である。

「終わったぞ」

「こっちもです」

二人とも、魔石回収を終えて、アイズに報告してくる。彼女はこくと頷いて、歩き出した。

目指す先はわかりやすかった。素材を求めているわけでもないため、道中はかなりスムーズである。

たどり着いたのは、19階層の食料庫入り口^{バントリ}だった。モンスターの食事場だけあって、山のような数がひしめき合っている。中には、前にいるモンスターを踏み潰して中に入ろうとまでしている者もいた。その姿を、遙か上、高台から眺める。

「何度見ても壮観な眺めですよねえ。いくら低レベルモンスターばかりだと言っても、寒気がします」

崖から落ちないよう、ひっそりと体を乗り出しているレフイーヤが、下をのぞいて両肩をさすっていた。

「じゃ、始めるか」

彼は荷物を落とさないための紐を解くと、一番大きな鞆を下ろした。

「ほいこれ」

気軽な調子で、武器を投げ渡してくる。アイズには片手剣、レフイーヤには杖だ。彼自身は、片手斧に短槍の二刀流だった。これは、武器の種類がかぶらないための措置だとは先に聞いていたが。彼は武器の類いであれば、なんでも扱えるらしい。

「しかし、本当に食料庫前で戦うんですか？ それも使い慣れない武器で」

「俺はいつも中でモンスターがいなくなるまで戦ってるが」

「控えめに言って頭おかしいです」

やりとりは、本当にどうでもよさそうなので、聞き流して。

アイズは手に取った剣を二度、三度と振ってみた。とりあえず違和感を感じない。重心やら形状やらもアイズに詭えているのか、予備の剣よりも扱いやすいくらいだ。どころか、心なしか、動きまでよくなっているような気までする。

「じゃあ——」

「あ、ちよつと待った」

行ってくる。そう言おうとして、待ったをかけたのはトツドだった。

彼はおほんと咳払いを一つして、宣言する。

「これより、最終実践試験を開始する」

「……………」

言われて、意味が分からずアイズが首をかしげると。彼は苦笑した。

「まあ、あまり意味なんてない。ただ、これが本当の意味で始まりだつて言っただけだ」

そう言われても、やはりよく意味は分からなかったが。まあつまりは、もう攻め込んでいいのだろう。

アイズは崖の縁に足をかけて、体を思い切り傾け。モンスターの列に向かって跳ね飛び。

そして、ぎよつとした。

はつきり言つて、速度が異常だった。視界が一瞬すべて意味をなさない引きずられたような色彩になり、そしてすぐに戻る。着地際に何体か切り飛ばそうと思っていたが、予想外の早さに、ただ中心に着地しただけだった。

動揺したのはモンスターも同じだっただろう。急にあらわれた冒険者に、一瞬——それこそ進行の動きすらも——止まる。

復帰はアイズの方が早かった。弧を描くように、剣を振る。魔物は簡単に、上下に分割された。その結果自体には、驚くところは何もなかったが。しかし、体が恐ろしく強く、そして早い。いや、それどころか反応速度まで上がっている。

(どういふこと……!?)

動揺しながらも、アイズは剣を滑らせながら走った。これらも、異様なほど強く、早い。今までの自分では無理だった反応速度を簡単に見せる。今までの自分では不可能だった理想の動きに、簡単に追いつく。いや、追い越し、置き去りにしてすらいる。

まるで。そう、これはまるで――

(レベルアップした時みたい……いや、それ以上!)

体が――いや、何もかもが早い。それこそ反応より早く、体が動く。いくら適正レベル以下の相手であつたとしても、これほどスムーズに行く物なのだろうか。疑念は、しかし高揚に押しつぶされた。自分は強い。今までの何よりも、いつよりも。私は今、ワンランク上のステージにいる!

敵を同じ速度で殲滅しながら、周囲を確認する。それほどの余裕を与えてくれていた。

見れば、トッド・ノートも似たような状態で、モンスターをちぎっては投じている。さすがに殲滅速度という面においてアイズには及ばないが、それでもLv. 3とは思えないほどの強さを発揮していた。

「アイズさん! トッドさん!」

上空、崖の上から、声がかけられる。二人同時に、地を跳ねた。その動きにも、モンスターは全くついて来れず、見失った二人を探している。

二人して崖の中腹あたりに位置したところで、レフイーヤの絶叫が響き渡った。

「ヒュゼレイド・ファラーリカ!」

紅蓮の矢が、まるで審判を下すように、無数に地上へと降り注ぐ。

この魔法も、今までは考えられない出力だった。まず矢の数からして、倍に近い。その上、一発一発の威力も上がっている。瀑布は地上のモンスターすべてを焼き尽くし、それだけでは止まらず、食料庫の入り口を吹き飛ばした。入り口は綺麗にクレーターを作り、次の瞬間崩落を始め、その通路を半ばまで封じてしまった。

魔法の後には――

もうモンスターは一体たりとて残っていないかった。食料庫にこもっていたであろうモンスターも、崩落の影響で出てくるのに苦難しているらしく、現れる気配はない。

崖を跳ねて上り、レフィーヤの位置まで戻る。いくらか遅れて、トツドも上ってきた。

レフィーヤは、へたり込んでいた。大口を開けて、まるで目の前の光景が信じられないというった風に。

やがて、戻ってきた二人に気がつき。いくらかアイズとトツドの間で視線を往復させて、そしてうめきを漏らした。

「どっ、どっどどどっ」

「どぎやあ?」

「なわけないでしょう! これは一体どういう事ですか!?!」

トツドのからかいに、レフィーヤは愕然と顎を落としてかみついた。

「おかしいでしょうこの杖! 精神力の活用を補助して、恐ろしくスムーズに動くし! その上、増幅までしてくれています! いえ、普通の杖でも増幅はしてくれますけど! これもう増幅ってレベルじゃないですよ! 威力が倍近いじゃないですか!」

「そうかそうか。つまり、とてもいい物だと思ってくれてるわけか」

勢いのまま吐き出すレフィーヤに、しかしトツドは当然とばかりに答えた。いや、顔は珍しく笑っている。

少女はなおも言いつのろうとするが、うまく言葉を選べないらしい。詰まっているうちに、アイズは割り込んだ。

「私も教えてほしい。この剣はなんていうか、おかしかった。まるで、その……」

「ランクアップしたみたい?」

「……うん」

それ以外言い様もなく、頷く。そこで初めて、彼は哄笑をした。

「ははは! つまり大成功だつて事だ! 複数使用時の干渉も、試験段階と同じく確認されなかった!」

「この武器は……いえ、これは何なんですか？」

レフイーヤが恐る恐ると言った様子で、聞く。彼は笑みを崩さないまま、続けた。

「この武器の機能は単純だよ。精神力を体内循環させ、ステイタスに上乗せするようにする。そして、攻撃の瞬間は循環中の精神力を少量利用して、攻撃力に加算する。言ってしまうえばそれだけのものだが、それを洗練させればこれだけの事ができるんだよ。つまり、ワンランク上相当の力に！」

「そ……」

言われて、アイズは言葉に詰まった。何を言うべきかが分からない。緊張と、そして高揚に、喉が渇く。なんとかつばを飲み込んで、言えたのはつまらない事だけだった。

「その程度で、ここまでの結果になるの？」

「ならないな。だが、それを可能にしたのが俺の研究成果だよ。分かるか？ 俺の武器は、すべての冒険者をワンランク上げるんだ！」

彼は手に持っていた両武器を地面に突き刺して、両手を広げた。

「魔法使いであれば、その影響は顕著だろう。今まで集中していなければいけなかった詠唱、精神力集中、戦闘行動、それらすべてに恩恵がある。分かるか？ 誰でもリヴェリア・リヨス・アールヴのような移動砲台になる時代が、もうすぐそこまで来てるんだ！」

「そ、そこまで都合がいいものでもないはずですよ！」

それは、反論というよりは、現実を認めがたいという風ではあった。レフイーヤは声を荒らげて、反論だか、それとも自問だかを発する。「すべての冒険者がランクアップをするはずがありません！ この恩恵を受けられるのは、魔力ステイタスがある人だけ……」

言って、そこで彼女ははっとしたのだろう。アイズにも思い当たる所はあった。

「そう。だからこそその、魔力を強制的に鍛えるあの合金だ。魔法も使えず無意味だと思いかもしれないがな。ようは呼び水にさえなればいいんだ。後は、この武器を使っていくうちに、魔力は成長する。魔力が成長すれば、それに比例して身体能力にも上乗せされる。言った

だろう？ 冒険者すべてに革命が起きるんだ」

それで、と彼は続けた。

「実際の魔法使いに聞いてみたい。その合金——まだ名前は決まっていないが——で作られた武器は、有用か？ 今まで使ったどんな武器よりも優れてると思うか？」

問われて、アイズは手に持った剣を見た。

見た目は本当に、ただの剣だ。多少銀光が強めかもしれない、その程度のものである。しかし、これがひとたび戦闘姿勢に入れば、体内の精神力を調整、効率化、倍加し、圧倒的な性能を付与してくれることは、もう疑いない。今までの武器とは一線を画す武器。今までの武器を置き去りにする武器。

圧倒的な性能の、超兵器。飛び抜けたとしか言い様がない性能。かといって、武器に使われるような類いのものでもない。言うなれば、今まで使ってなかった力を、効率的に呼び覚まし運用する類いの武器なのだ。

つまりは——革命だ。

「思うー！」

「こちらの方が上ですー！」

絶叫は、同時だった。

にっと、男は笑った。

「よろしい。その二つの武器は、バイトのおまけとして、あんたらにくれてやる。せいぜい有効活用してくれ」

クエストは終わった。もうここに用はないとばかりに、彼は荷物を纏め始めた。といっても、ここに来てばらしたのは武器類だけであり、そのうち二つもアイズとレフイーヤの手にあるので、さほど時間はかからなかったが。

「ああ」

と、荷物を担いだ男は思い出したかのように振り返った。

「いつものクエストはまだ続けてくれ。まだまだ終わりじゃないからな」

「もしかして……これより上が……あるの……？」

アイズは震える声で問いかけた。レフィーヤに至っては、もう言葉もない様子だった。

トッドは力強く頷いて、どこか——遠いどこかに視線を向ける。「当然だ。こんなのは序の口だよ。当然無理には言わないがな。だが、ついてくるなら、一等面白い景色を見せてやる。誰も見たことのない、それこそオツタルだってまだ見ていない、世界の頂だ」
言われて。

アイズは、自分の口元がゆがんでいる事に気がついた。それが歓喜によるものだと分かったのは、口が落ち着いてしばらくの事だった。

ダンジョンアタック依頼からしばらく。オラリオに激震が走った。今までただのLv. 3以上の意味がなかったトッド・ノートという名。それが、オラリオの天才として通るようになった。

同時に知られる、新合金神域金属^{アダマント}。その応用で作られた、精神力を強制的に成長させる魔増合金^{トラム}に、精神力を成長させる効果こそないものの、それを超効率的に運用させ、場合によってはレベルすら一つ分上昇してくれ、とりわけ攻撃力に関しては既存のどの武器よりも上な魔導力合金^{エビセス}の誕生。それを利用したパワープラス精神力で攻撃可能にする魔力撃武器^{ストライク}の誕生。さらに言えば、魔導力合金^{エビセス}の武器を魔法使いが使えば、レベル一つ分どころではない威力の向上を見せてくれる。

神も、冒険者も、誰も彼もがわいた。そして同時に、冒険者という存在が大きく進むようになっていくのも感じた。

トッド・ノート。今やオラリオでその名を知らない者はいない。オラリオはまさに、彼を中心に回ろうとしていた。

教導

世界が変わる瞬間。それは誰しもが知ること自体はあるだろう。

例えば、教科書だ。あんなものは、世界の移り変わりの展覧会だ。どこもかしこも、その日を境に世界が変わったという証を刻んでいる。逆に多すぎて、実感が湧かないという欠点も持っているが。もう一つは、もつと単純に物語がある。英雄譚のような、現実を脚色したり、中には全くの創作の中にも、その手のテイストが盛り込まれているものもある。まあこちらも、改変の瞬間は主題としては扱われない。その上、嘘や脚色が多くて分かりづらいというものもある。だから。

本当の意味で、世界改変の瞬間に立ち会えるというのは、極めて幸運な事なのだろう。そうヴェルフ・クロッツは思った。

トッド・ノート。今やオラリオの中でも知らぬ者のいない天才の名だ。その男が、炉の前で一人、立っている。

無数の人目——全員が鍛冶師だ——の前にさらされながら、しかし彼は至極自然体だった。まるで緊張というものが見られない。ただし、注意深く周囲を見回してはいる。その視線は、こうも言っているように見えた。まさか見逃すことなんてあるまいな。

「では、第……ええともう何度でもいいや。とにかく技術講習を始める」

ヘファイストス・ファミアの一番大きな工房で。男の言葉は、ひどくぎつくばらんだった。

彼を囲む者の中には、彼より経験豊富な鍛冶師は山のようにいた。彼より年上の者も、当然レベルが上の者も。それでも、彼の態度は変わらなかつた。これは礼儀知らずと言うより、単にそういったことに気を遣うのが、いい加減面倒くさくなつたのではないか。そう思わせる仕草だった。

そして、彼の態度に文句をつける者もない。この理由はわかりやすかつた。この中の誰一人として、トッド・ノートを格下の鍛冶師とは思っていない、という事だ。

「先に言っておくと、俺が教えるのは神域金属アダマントという合金ただ一つだ。これの調合によって、魔増トラウムにも魔導力エビセスにもなりうる。君らが実利を求めらるなら、先だって覚えなければいけないのは魔増トラウムだろう。しかし、上のランクを指すなら、魔導力エビセスを獲得しなけりゃならん。まあ、こんなこと今更言うべき事でもない気がするが」

神域金属アダマント。それはこの世で最新の特殊武装の事だった。魔力に強く反応し、魔力だけに限らずすべてを爆発的にレベルアップしてくれる。実際、使ってみたアイズ・ヴァレンシュタインの言葉によれば、ランクアップ相当の力を得ることができるとか。

とりわけ魔導力エビセス合金の武器——通称魔力撃武器ストライクは、革命的ではあった。

無論、魔増トラウムが革命的ではない、という訳ではない。こちらだけにしただって、魔法使いからして見れば圧倒的すぎる性能だ。魔増トラウムで上げた魔力ステータスを、魔導力エビセスで超人的に強化する。この組み合わせが凶悪だった。すべての冒険者の力を底上げするというのが、これらのえげつない所だ。

いや、冒険者に止まらない。エルフという、神の恩恵にかかわらず魔法を扱える種族が存在するのだ。であれば、神の恩恵がないただの人間であつても、魔力を呼び覚ます事が可能なのだろう。将来的に見れば、全人類が恩恵を受けられる、と言える。

それが何年後——いや、何十年後の未来になるかは分からないが。少なくとも、遠い未来の話ではあるまい。

「あー、もっかい先に言っておこう。何度も聞かれたし、何度言うのも疲れるしな。なぜ独占すればいい技術を、わざわざこうして講習会まで開いて公開してるかについて。早い話、とりあえず魔増トラウムについてはとっとと俺の手から離れてほしいんだ。量産して行き渡るまで俺が作り続けるというのは、いかにも馬鹿馬鹿しいだろう？」

その意見には、まあ理解はできた。魔導力エビセスがなければ、それでも十分だっただろう。なにせ数少ない魔法使いにさえ行き渡ればよかつたのだから。それだって、一度使い終われば別の人間に譲渡してもいい。

だが。

ヴェルフには分かる気がした。そんなものは、所詮ただの通過点だったのだ。だから、わざと魔導力^{エビセス}完成後にこの情報を公開した。「そんなものは所詮ただのおまけ、おもちゃですよ」と宣言するようになる。

「二つ目に、これだけの技術を一人で秘匿し続けるのは危険だ。俺は弱小ファミリア所属だからな。さすがに神にまで迷惑がかかりそうな事はしたくない。どうせ技術は漏れるんだ。なら高く買ってくれるうちに、売つとこうと思つた」

これもまあ、理解できる話だつた。仮に人が彼を放置していたとしても、神までがそれを見逃すはずがない。最悪戦争遊戯があちこちで起こり、トッド争奪戦などが始まらないとも限らない。そうなれば、本当にオラリオの秩序崩壊の時だ。

「そして最後。実はこれこそが本題なんだが」

いままでどこかぼんやりしていた表情を、彼は笑みに変えた。けつしている意味の笑みではない。どこか人を小馬鹿にしたような、侮つたような。

細まった目が、全員を一通り眺めた後、彼は続けた。

「お前たちに本当の意味での魔導力^{エビセス}は作れない。はつきり言おう、実力が違う。こうしてすべてを教えてやってるのは、できるものならやってみろという俺からの挑戦状だと思つてもらつていい」

言葉に、ヴェルフはかつと頭に血を上らせた。周りを確認するまでもなく、皆も似たような状況だつた。

だが、それで文句を言う者も一人もいなかった。少なくとも現時点において、自分が格下だと認めなければならぬ。それを認められないようでは、そもそも出発点に立つことすらできないのだから。

が、同時に使命に燃えない者もない。つまり、このいけ好かない若造を打ち負かしてやろう、と。

トッドはもう一度周囲を見回して、彼らの反骨心と気力を確認し。満足そうに頷いた。

「よろしい。では始めようか」

言つて、彼は炉の脇に置かれていた素材に、手を伸ばした。

ヴェルフは鍛冶場の隅に備え付けられている長椅子に座り、ぐつたりと項垂れていた。全身から汗が噴き出ている。これは鍛冶場の熱だけではなく、今の今まで、幾度となく神域金属アダマントに挑戦したからだ。そしてその疲れは、同じ回数だけ失敗したという事でもある。

「よう、疲れているみたいじゃないか」

近づいてきて言ったのは、ドワーフの男だった。

「お、おう。失敗続きでな」

多少言葉に詰まりながら、返す。つつかえたのは、単に疲れからだけではなかった。そのドワーフが、誰だか分からなかったからだ。

この合同講習会は、会場こそヘアイストス・ファミリアのものを使っているが、参加者はファミリアを選んでいない。同じく大手であるゴブニュ・ファミリアの団員もいれば、名も聞いたことのないファミリアの鍛冶師もいる。

特殊武装の枠を超えた、神域金属アダマント製の武器。それこそ、魔剣すら過去の遺物にしかねない超常的な兵器。それが生まれて、ファミリア内で（端から見れば）特別待遇を受けていたヴェルフに対するあたりは小さくなかった。

ヘアイストス・ファミリア自体も大きなファミリアで、団員のすべてを把握などはできない。ファミリアから一步引く態度をとっていたヴェルフならなおさら。その上他ファミリアの団員までいるとなつては、名前が分からないのも仕方のない事だった。

「はっはっは。お主もそうか」

言つて、飲み物を渡される。

ドワーフからの差し入れと言うことで、一瞬酒類を警戒したが。さすがに鍛冶場の、それも仕事中にあつて酒は飲まないのだろう。酒精が感じられないのを確認して、一気にそれを飲み干した。

「いけ好かん小僧だったな」

「え？ ええ」

一瞬、誰のことか悩んだが。考えるまでもなくトツドの事だと悟つ

て、頷いた。

実際、ヴェルフにとっても好きになれそうな相手ではなかった。実体はともかく、なんというか、やけに挑戦的だったからだ。

「だが、腕は超一流じゃった」

「そう……っすね。今の俺らじゃ足下にも及ばない」

それもまた、認めざるを得ない事ではあった。

彼が神域金属アダマントにつかった素材は、ごく一般的な金属に、上層、中層でもありふれたドロップ品のみ。それにあの機能を持たせたと言うのだから、冗談のようだと言うより他ない。その上、鍛冶の腕も超一流。というか、その精密さは、いつそ偏執的とでも表現すべき物だった。

「聞いたか？ あの若造、鍛冶の発展アビリティもないらしい」

「まさか！」

ヴェルフは、思わず絶叫した。口の端から水がこぼれるのも気にせず。

「あれで上級鍛冶師ハイ・スミスじゃないなんて、そんなことがありえるのか!？」

「うむ、わしもそう思った。あやつのステイタスについては、神々の前で近々発表されるらしい。今回それを教えるのは、その先払いだと言っておった」

上級鍛冶師。それは高度な武器を作る上での大前提だ。これがなければ、特殊な効果を付与した武器というのを（ごく少数の例外を除いて）作れない。

もしかしたら、彼がその例外なのかも、と思ったが。鍛冶師の中には効果が微弱ではあっても、なんとか神域金属アダマントの生成に成功している者が、少数ながら存在する。

つまりこれは、本当にただ単に、神の恩恵も何もない、ただ技術によつてのみ生み出されたという事だ。

「この世にあるどんな特殊武装より性能は上——一応分類としては特殊武装になっておるがの。精神力を利用して、身体能力を飛躍的に高める。とりわけ攻撃力には大きな恩恵があるらしい。攻撃には精神力を使ってしまうらしいがの。さらに、魔法使いが魔法を使うとき

は、とんでもない性能向上を見せるらしい。全く、恐ろしいもんじゃ」「本当に、にわかには信じられない話だよ」

「こうなると、浮き彫りになってしまふな……」

ドワーフが、口調を沈めて言った。手元のコップを確認したようにも見えるが、実際はうつむいたのだろう。

ヴェルフも同じようにしたい心地で、コップを握りしめた。

「俺らの研鑽不足……そして努力不足だな」

「うむ。ハイ・スミスなどと持てはやされて、我らは努力を怠っていた。これは認めないわけにはいかん」

ドワーフは頭を上げて、おおきくかぶりを振った。

「むしろは先人の遺産の上に立っておる。こればかりは、あの小僧も変わらんだろう。しかし、どこか挑戦に二の足を踏んで、発展を忘れておった」

「それは……俺もだ」

「下層の強力なドロップ品を使えば強力な武装が作れる。考えてみれば当たり前の話だが、いい加減、その当たり前に浸かりすぎていた。甘えていたと言ってもいい」

彼が思うのは、自分のスキルだった。

魔剣血統。端的に言ってしまうえば、魔法使いでもないのに魔法をぶっ放せる武器を作る事ができるスキルだ。魔剣は消耗品。世間の扱いとしては、武器と言うより道具だ。ヴェルフはそれが嫌で、魔剣を作るまいと自分を戒めていた。

今にして思えば、それこそがただの甘えだったのではないか？ 壊れぬ魔剣など、研鑽なしに作れるはずがない。なのに、作らない。これではいつまで経っても状況は変わらないだろう。

もつとも、それで魔剣を作ろうと思えるほど、踏ん切りがつくものでもなかったが。

「最新型武器を作るのには、アビリティすら必要ない……必要なのは、ただ鍛冶の腕だけ……か……」

「うむ。まずは自分の腕を見直すところから始めなければならん」

ヴェルフの言葉は、ただの独り言だったが。ドワーフはそれに答え

て、つぶやきを返してきた。

「あーっ！へこたれてらんねえ！」

コップを投げ捨てて、彼は両手で自分の頬を張った。それだけで、逃げた気力まで回復するものでもなかったが、とりあえず炉に向かう意気くらは出てきた。

「新金属を作るとかより、まずは自分の腕の見直しだ！ トツドと同じステージに立たなきゃ、始まるものも始まらねえ！」

「うむ、その意気じゃ！ 若いモンはそうでなければいかん。……なとど、人のことばかりを言ってもいられんがのう」

気合いを入れ直すと、休んでいたドワーフも同じように奮い立たせたようだった。

「まずは背伸びはしねえ。神域金属アダマントの出来損ないもできてやしねえんだからな。一から自分の能力をたたき直す」

「上層、中層の木っ端素材とはいえ、無限でもないからのう。これからそれらの素材が高騰していくのは目に見えておる。使用に制限がかかるのもそう遠くない話じゃろうな。中層まで潜れる冒険者は儲かるじゃろうのう」

それはつまり、鍛冶師がどれだけふがないかという事の証明でもある。なにせどれだけ作ろうとも、トツドの領域の足下すら踏めないという事なのだから。

「このまんまじゃ終われねえー！」

無理矢理自分を叱咤するように、彼は立ち上がって絶叫した。周囲で炉に向かっていた鍛冶師たちがぎよつとするが、そんなものを気にできるほど、余裕はなかった。

「うむ、若者はそうでなくてはの。さて、わしも若手の事ばかり気にしているらる余裕もなし。早速もどって始めるかの」

言って、ドワーフの男はヴェルフの分のコップまで回収して、もどっていった。

ヴェルフも炉にもどっていった。この講習にあたって、自分の作業室のものではない、特別に割り当てられた炉。手元にある神域金属アダマント専用の素材には手をつけなかった。これを使うには、まだ早い。圧倒的

に実力が足りない。その思いは、彼に突き刺さるような茨となった。だが、それだけで終わらせる気もない。

板金鋏に金属塊を持ち、炉に放り込む。圧倒的な熱気が全身を煽った。それでも今までよりなんとか耐えられそうなのは、一応給水を済ませたからか。名も知らぬドワーフに、内心で感謝を告げる。

(やっつてやるぞ！)

気合いを入れて、熱の赤だけが支配するその空間をにらみ据える。

(たとえばそれが壊れない魔剣につながらなかったとしても、必ず一歩前に進めるはずだ！)

それだけはつきりと信じて——というより、確信して——、彼は熱と炎が支配する空間に、また集中した。

アルテミスの苦難

神の宴。

文字通りに、神のための宴だ。主催がどこかは時によってまちまちだ。神会と違って、定期的な開催があるわけでもない。

元来宴と遊び好きの神たちだ。(比較的)厳かな神会と違って、神の宴は本当にただの宴会である。参加者もまちまちで、臨席しない者も多い。同時に、特に意味もなくはせ参じる者も、同じくらい多い。

そういった会場なので、参加を強制される者というのは極めて少ない。せいぜいが主催者くらいだろう。後は、

(私……みたいにな、かな)

基本的にはただの立食会にあつて、しかしアルテミスは、居心地悪さを感じながら、カナッペをつついていた。

今回の神の宴は、アルテミスのために開かれたと言っても過言ではない。誰も彼もが、彼女の眷属に興味津々だった。最新の面白いおもちやを見つけた、と言つてもいい。それは、彼女も含めてだが。

誰も彼もが、アルテミスに話す機会を伺っている。しかし、ある者は互いに牽制し合い、ある者は露骨に機会を狙うが邪魔され、近づけずにいる。結果、彼女は会場のやや隅の方で、ぽつんと一人で立っている羽目になっていた。

(何を考えているかは……分からないんでもないんだよな)

結局の所、それが問題の焦点だとも言えた。

トッド・ノート。希代の天才と言われているが、彼の出した成果は、それだけではとても収まらないものだった。

つまり、皆はこう思っているのだ。多かれ少なかれ。彼に神の力を与えたのではないか——不正をしたのではないか。

当然、アルテミスはそんなことはしていない。神に誓つて(というのも馬鹿馬鹿しいか)。あるいはまあ、ギルドあたりに誓つてもいい。断じて言う。彼は神などの力を借りず、ただ自分の才覚と努力のみであそこまで上り詰めたのだ。

(それを誰も疑う)

結局の所、苛立ちの原因とはそれだった。だからこそ、壁の華というのは少々棘がある状態で収まっている。

(いつそヘステイアがいればなあ……)

カナツペを口にくわえ、ついでに唇で上下にもてあそびながら、そんなことを思う。

あの神友であれば、きっと自分の言葉を信じてくれるだろう。それも、心の底から。彼女は単純であり腹芸のできない神格であるが、それだけに信用ができる。

「やあ、アルテミス」

と、急に声をかけられた。本当に予想外のタイミングであったため、思わず口の中の物を詰まらせそうになる。

胸元を叩き、なんとか喉から押し込んで。声の方向を見ると、そこには一柱の神がいた。

「ヘルメス」

「久しぶりだね。美しき処女神」

うさんくさいと言えいいのか、とにかくそんな作り笑いで挨拶をしてくる。

ヘルメスという神を一言で言い表すのは難しい。放浪癖があり、割とファミリアを空けている。ただの放逐であるならばいいのだが、そこで何をしているんだか、ろくでもない企みを企てていることも少なくないとか。そして、良くも悪くも空気を読まない。

今回に関しては……まあ、アルテミスにとっては、いい意味で空気を読まなかったといった所か。まあ、わざわざ口の中に食べ物が入っている状態で声をかけてくる点に関してはどうかと思うが。

アルテミスははしたなくならないよう、皿をテーブルに置いて、ヘルメスに向き直った。

「やあ、何だい？」

「宴を彩る華を眺めているのも悪くないと思ったのだけれどね。さすがに心地を崩したまま飾っておくのも悪いと思って話しかけさせてもらったのさ」

とりあえず、アルテミスは小さく頷いた。不機嫌な姿勢は崩さな

い。ここで安堵でも見せてやるのは、なんとなく癪な気がした。

一人が話しかけると、後は雪崩を崩すようだった。我先にと神が群がってくる。

「おいおい、子に神の力を分け与えたってマジか!？」

「それともどつかから精霊でも引つ張ってきて力を与えさせたとか?」

「いいや、むしろ子が作ったのはブラフで、実はアルテミスが作ったってのを俺は推すね!」

「実のところどうなんだよ! 白状しろよおらおら!」

「ああ、もう……!」

矢継ぎ早に押しかけられ、激発しそうになった数瞬前だった。ぼつとヘルメスが両手を挙げて、高らかに宣言したのは。

「皆の疑問ももつともだと思っ! だから、私はこれに対する明確な答えを持ってきてもらうことにした! 諸君! それで解決はどうだろうか!」

「いいとも!」

わつと、神が盛り上がった。事情が分からず目を白黒させているアルテミスを置き去りにして。

ヘルメスは答えに、鷹揚に頷くと指をはじいた。同時に、会場の大きな門が開く。

そこにいたのは、ヘルメス・ファミリアのアスファイだった。といっても、彼女はややあきれたような面持ちで、脇に控えている。中心にいたのは……

「トッド?」

自分の眷属である、トッド・ノートだった。いつもの白衣は脱いでいる。神の宴に出ても恥ずかしくないよう、多少着飾ってはいるようだが。そもそもが出不精で、格好という面においては意味では一般的な冒険者らしく、こだわりがない。そのため、普段とさほど違いがあるわけでもないが。

アルテミスはヘルメスへと向き返り、彼をきつと睨んだ。

「ヘルメス、どういう事だ!」

「そんなに怒らないでくれよ。解決するにはこれが一番簡単で早いんだ。彼の了解も取ってある。君に話を通さなかったのは……多分、何をするにしても、怒っただろう?」

「当然だ! 私の問題にトツドを巻き込むなんて……!」

怒鳴りつける。できるならば、今にも胸ぐらをつかみ上げて、地面に叩き付けたいくらいだった。状況がこうまでなっては、さすがにもうどうにもならない。

アルテミスは不安げに、トツドを見た。彼は心配するなど視線だけで告げてくる。こうなったらもう、それを信用するしかない。

ヘルメスは人の波をかき分けて人間二人のところまで行くと、そこでまた、大げさなほどの手振りをする。

「彼にはこれから、ステイタスシーフ解錠薬でステイタスを開帳してもらおう! 皆も分かっている通り、ステイタスだけはごまかせない! これで、アルテミスが不正を行ったかどうか、白日の下にさらされるだろう! しかし、一つ! 皆には約束してほしい! アルテミス・ファミリアとその眷属を、ここまで侮蔑したのだ! その結果に対しては、絶対に従うこと! それをおのおの自分の名に誓ってほしい!」

扇動とも言えるような、ヘルメスの語りと手振り。こういったことになれているのだろう。鮮やかな手口と言わざるを得なかった。当事者の感情を度外視すれば、の話だが。

トツドが服を脱ぎ、上半身裸になって背を向けた。その周囲に、神たちがこぞって集まる。

解錠薬が垂らされ、ステイタスがうつすらと浮き出てきた。そして、ステイタスを確認し……それを見てみた神々が、うなり声を上げる。

「ステイタスは高水準……いつランクアップをしてもおかしくないが、しかし上級ハイステミス鍛冶師ですらないだど!」

「魔力があるのはいいとして、魔法もなし。特筆する発展アビリティもなしだつて?」

「おいおい、ステイタス面じゃガチでただのLv. 3じゃねえか。いや、そこらのLv. 3の方がまだマシなスキル持つてるまでである!」

大きなざわめきは、やがて小さくなっていった。どの神も、ステイタスを隅から隅まで確認したのだろう。しかし、これといった特徴はない。本当に、レアアビリティすら獲得できていないのだ。トッド・ノートという人間は。

「諸君！　これで分かったろう！　アルテミスは不正を行っていない！　それでも異議がある者はこの場で申し立てたまえ！　それができないならば、永遠に口をつぐみたまえ！」

言葉とともに、喧噪はどんどん小さくなっていき、最後に全くなくなった。

ヘルメスにはやりと笑い（この笑みだけはなぜだか、本物に見えた。なぜならひどくいやらしい笑みだったから）、トッドに向いた。

「君からも一言、あれば言うがいい。ここまでさせられたんだ、もの申す資格くらいある」

「ええ」

言って、トッドは服を羽織り直した。ステイタスは未だ背中に現れたままだが、そんなことも気にならない様子だ。まあ、元々そういう点に関しては無頓着な人間ではあるのだが。

「二つだけ。俺とアルテミス様を——例えば戦争遊戯などで——切り離して、俺がおとなしく言うことを聞くとは思わないことだ。俺はアルテミス様の眷属、これは絶対に変わらない」

その言葉は、一部の神に寒気を感じさせるものだったのだろう。実際、そうして無理矢理眷属として迎え入れる事を考えていた神がいなかと言えば、全くの嘘だ。そういうことを平気するのが神なのだから。

不遜とも言えるその言葉だが、反論の声は上がらなかった。反感を全く持たないという事もなかっただろうが。さすがに今回の件はやり過ぎだと感じる神は多かつたのだろう。

トッドは、今度はアスフィに連れられるようにして退場していった。一瞬、アスフィが恨みがましい視線を主神であるヘルメスに向けているように見えたが、これはただの気のせいでもあるまい。たしかに、こんな厄介ごとを押しつけられれば、恨み言の一つも言いたくない。

るだろう。

「というわけで、疑いは晴れたよ、アルテミス」

いっそさわやかとも言える笑みで、ヘルメスが戻ってくる。

アルテミスは、そつと彼に近づくと、太ももを思い切りつねり上げた。

「いだだだだっ！ ひどいよアルテミス……」

「ここまでされれば、私だって怒る」

「仕方ないじゃないか。過保護な君に話を通したら、それこそ何も終わらないよ」

ヘルメスがそのまま、顔を近づけてくる。反射的な嫌悪感から、顔を背こうとするが。しかし、その目にどこか真摯なものを感じて、かろうじてこらえる。

彼の顔は正面を通り過ぎて、耳元にまでよってきた。

「君はあとどれくらい持つんだい？」

問いかけに、アルテミスは大きく目を見開いた。次いで、目を剣呑に細める。

「何を知っているの？」

「これでも外でそれなりに活動しているんだ。知っていることは多い。言っておくけど、これは冗談やおふぎけの類いではない。本気で聞いているんだ」

「……………」

一瞬、言うべきか迷ったが。

ヘルメスは信用できる神ではない。しかし、嘘もつかない。そしてつかせない。結局の所、正直に話すしかないのだ。

「多分、もって一年だと思う。それまでに……」

「分かってる。それまでにこちらも整えておく」

彼は顔を引いた。そこに今までの色はなく、元の軽薄な笑みに戻っていた。

「味方だともだで思ってくれなくていい。でも、これだけは忘れないでくれ。僕は下界を愛してる。そのためになら、なんだってする」

「…………その点に関してだけは、信用しておくよ」

「ありがとう」

それつきり、ヘルメスは離れていった。

それ以降、神の宴は平常運転へと戻っていった。といっても、主な議題はやはり神域金属^{アダマンチ}についてだ。神の力に頼らず、神にも届く力を持ったそれ。取り沙汰にならないはずがない。

「はあい」

「ヘファイストス」

次に話しかけてきたのは、鍛冶の神だった。普段とは違い、ワインレッドのドレスに着飾っている。

「あなたの子供、凄いわね」

「そうだろうか？」

裏表なく、着飾りもしないヘファイストスの言葉に、アルテミスは満足げに頷いた。

二人して壁際に立ち、背中を預ける。しばらく他愛のない雑談をしていたが、急にヘファイストスは眉をひそめて、小さく頭を下げた。「ごめんなさい、できれば私が助け船を出せばよかったですけど。私とあなたの関係を考えると、どうしても共謀されてる可能性を考えられちゃうと思って」

「あなたに、さすがにそこまで気苦労を背負わせることはできないさ。こうして話しに来てくれただけで満足だよ」

「そう言ってもらえると助かるわ。そういう意味では、ヘルメスはいタイミングで話を出してくれたわ。彼は誰の敵でもないけど、誰の味方でもない」

「私としてはたまったもんじゃないけどね。あとでトッドともよく話し合わなきゃ」

「ほどほどにしておきなさいよ」

くすくすと、ヘファイストス。しかしすぐ、顔を真面目に作り直した。

「でも、屈辱を感じたのは本当よ」

「屈辱？ あなたほどの神が？」

「ええ」

言いながら、彼女は上を向いた。見たところで、シャンデリアくらいしかないはずだが。ただまあ、それよりもっと遠くを見ている事くらいは分かる。

「正直に言っつて、彼と同じものを作れと言われたら、同等かそれ以上の品質の武器を作る自信はあるわ。ただ、同じだけの奇抜な発想をした道具を作れと言われた場合、ヒエログリフ神聖文字を使ったところで、同等以上のものを作る自信はない。彼の発想は、本当に神の領域にまで踏み込んでる」

だから、と彼女は視線を下げながら続けた。今度は床に、さらに下の、いと深きに目を落とすように。

「今のところ、新合金で魔力ステイタスを上げられなかった者はいない。ステイタスなしの人間は、トラウム魔増の数が足りないからこれから試すところだけど、多分そつちも成功するでしょうね。魔力値を獲得したからか、魔法を発現する者も今までの五倍にまで増えてる。これだけでも革命だわ。なにしろ魔力を獲得したら、一割近くの確率で魔法まで覚えられるんだから」

目線は水平にもどして、おどけるように肩をすくめる。しかし、それが無理をした仕草だというのは、アルテミスから見ても分かった。

「うちの子の新金属錬成についても芳しくない。単純に難易度が高すぎてね。魔力攻撃くらいはうまく機能するけど、精神力を循環させて身体能力を上げるって方は、最高峰の上位鍛冶師でもトッド製のものと比べて半分の性能もない。それでも破格なんでしょうけどね」

「それは、ええと……なんて言ったらいいか」

「素直に慰めてくれていいのよ。鍛冶の神が、鍛冶という分野において負けを認めたって事なんだから」

どこか含みを持たせて微笑む彼女に、しかしやはり言葉は出てこなかった。何を言っつても、そう、プライドを傷つけるだけだとは分かっていた。

それに気づいてかどうかは分からないが。彼女は手近なテーブルからワインを手にとると、それを一口し、口の中を潤して続けた。

「実を言っつとね、それが悔しかったっていうのもあるの。あなたを助

けなかったのは。鍛冶の神が、まさか人の子が作ったそれに対して、私ではできませんなんて言うのは、いかにも、その、あれじゃない?」「まあ、それは分かるよ。私も子供に狩猟の腕で負けたらへこむしね」「大体前提が間違ってるのよね。いくら狩猟と貞潔の神が力を与えたところで、人類の歴史を変えてしまうような発明をぽんと出せるわけがないんだもの」

くすくす、と彼女はワインを持っていない方の手で、品良く口元を隠して笑った。

「ここにゴブニユがないじゃない?」

「そういえば、いないね。あまりこういった場所にくるタイプの神でもないけど」

「彼ね、下界の人間に鍛冶で負けたままでもなるものかって言って、一から腕を磨き直してるのよ。同時に、神聖文字に頼らない新式の武装発明にも勤しんでる。私も本当はそうしたい心地はあったけど、あなたが来るって聞いたからね」

「成果はあったかい?」

「あつたとも言えるし、なかったとも言えるわ。それが決まるのは、帰ってからね」

ふつと彼女は吐息をはくと、まだ大分残っていたワインを一気に飲み込んだ。空になったグラスを、テーブルに置く。

「しばらく……といっても、数日程度でしょうけど。私とゴブニユ連名で、我が名に誓って、トッドの発明は神の力を利用した物ではないって発表されるわ。それで、とりあえずこの手の馬鹿騒ぎは収まるでしょ」

「ほんと、この手のだけはね」

「まあ、あなたの所に依頼は殺到するでしょうけど……というかもうしてるでしょうけど、それは仕方ないわ。有名税つてもものよ」

「私としては、もっとトッドとの時間を大切にしたいんだけどなあ。残り少ない時間を……」

「……? 何か言った?」

「いいや、独り言」

最後のつぶやきは、幸いヘアアイストスには聞こえていなかったよ
うだが。

とりあえず、ここから先は普通に神の宴を楽しめる。それに集中し
ようと考えた。

と、

(あ、トッドはもうここに来てるんだった)

今更それに気がついて、呆然とした。彼に話せることが、愚にもつ
かない事しか残っていないという事実が気がついて。

最終調整

神域金属アダマントは一応の完成を見た。という会見は、結局の所他人から見た評価でしかないのだろう。少なくともトッドは、それを完成とは見ていないらしかつた。彼は今までにも増して、研究に精を入れている。

といってもまあ、それは神域金属アダマントの発表からいくらか時間がたった後の話だ。

トッドは、新合金発明からしばらく、魔力撃武器ストライクの製造依頼にかかりきりになっていた。まあ、これは仕方がないことだと思う。なにせ、完全な性能を発揮できる魔力撃武器は、未だ彼しか作れないのだから。他の鍛冶師も頑張つてはいる物の、その品質はどうしてもデッドコピーにしかない。

こうならないために技術公開したのに。と、彼は憤慨していたが。まあそれは、時間が解決すると思つて諦めるしかない（ついでに言うのと、ロキ・ファミリアが上位冒険者の分を無理言つて用意してもらつたので、何かを言うのも怖かつた）。この魔力機能効率、増幅金属は、将来的にあらゆる面で活用されると目されている。それこそ現状の武器利用から、魔力灯の性能延長まで様々にだ。

そして、彼の忙しさもいくらか収まつて（無理矢理打ち切つたとも言う）、一昔前よりはいくらか時間ができた。

アイズとレフイーヤのクエスト、もといアルバイトも、相変わらず続けられていた。しかし、今度は今までは趣は大分変わっていた。

「第七十二次測定開始。魔法詠唱後、待機状態に入つて」「はい」

トッドとレフイーヤの声が聞こえる。壁一面に並んでいた計測器は、いくらか形状を変えていた。何がどう変わったかは、相変わらずアイズには分からない。ただ、目に見えて計測器の数が増えたことだけは分かつた。

本来ならば、研究室の声など庭で修行しているアイズまでは聞こえてこないのだが。少し前に、便利性をという事で、石造りの壁を一部

壊して、扉にしていた。ここが開け放たれると、内側で何をしているかが傍目にも分かる。と同時に、呼ばれればすぐに向かえるようになっていた。

「金属の感応値、よし。転換作用も悪くない値だ。バランスサー正常値内。精神力の対応値にも十分余裕を持って耐えてる。集積ユニット、プラスマイナスゼロ。よし、これも完璧だ。オールクリア」
「そうですか」

感慨深げなトッドに対して、レフイーヤは軽い調子だった。まあ、彼女も何をしているのか理解できていないというのは、前にも聞いた。成功と言われて、何が凄いのかも分からないだろう。

「アイズー」
「うん」

呼ばれて、レフイーヤと入れ替わるようにして、研究室に入っている。そして、手に持っている剣もどきを手渡した。

なぜ剣もどきなのかというと、その形状は明らかに変だったからだ。まず、刃に相当する場所がない。どちらかと言えば、木刀なんかに近いだろうか。刃がないのでどちらがどうというのも変な話だが、峰の部分には妙な重りが並んでいる。これを動かして、重心を調整するのだが。ちなみに刃の部分そのものも柄に収容できて、長さを数センチほどだが調整できるようにしている。今は、アイズがもつとも扱いやすいと思える長さでバランスに調整しているが。

道具のバランスというのはレフイーヤも同じようなもので、これもまた奇っ怪な形状をしている。最初は杖の片方に重しだか何だかをつけていたが、今では両端についている。さすがに持ち手に不具合があるため、可動式の重りというのは、それにはついていなかったが。その分、彼女が扱うの一番いいバランスをとるのは、大分手間取っている様子ではあった。

中に入っていくと、トッドはがちゃがちゃと何かをいじっていた。傍目には、奇妙なバランスで成り立っている掃除用具を、なんとか引っ張り出しているようにも見える。

「剣のバランスはそれでちょうどいい?」

「うん。デスペレートよりもなじむ感じは……ある、かな?」

いまだ掃除用具もどきをがたがた鳴らしながら、聞いてくる。

答えると、彼は未だに道具と格闘しながら、しかし満足はしたのだろう、頷いた。

途中、苛立ったのか、装備の下部に蹴り一発を入れて。やっと戸が開いた。戸はかなり分厚い金属でできており、ちよつとやそつとじゃ壊れない構造にはなっているが。さすがに上位冒険者の力で叩けば、無事には済まないだろうに。それでもいいのか、と思うが、まあ本人がいいならいいのだろう。

「そこに剣を入れて」

「うん」

言われたとおりに、差し込む。

中は暗くて見えなかったが、形状は合わせてあったのだろう。思いのほかがちりとはまり込み、最後に押し込むと、かちりと音までする。

「あー、エアリアル相乗最終試験開始。というわけで、魔法使ってみて」

「分かった。目覚めよ」テンベスト

言う。と、体中に巻き付くように、空気の渦が発生する。

この鍛錬具も神域金属アダマントでできているらしく、魔法を簡単に倍加してしまう。そのため、かなり慎重な運用が必要だった。もし本気で放てば、この研究所はおろか、ホームごと綺麗さっぱり吹き飛ばしかねない。といっても、新金属の効果で、精密操作は奇妙なほどうまくいく。実際、低出力にも、威力の集中にも、普通に魔法を使うより遙かに少ない集中力で事足りる。

「出力、第二領域通過。もつと力を上げられるか? 周囲に影響出さずに」

「やってみる」

とは言ったが、実のところ、それには自信があった。魔導力マジセスを使い始めてからと言うものの、魔法の扱いがとても調子がいい。シャープに

なったと言ふべきか。とにかく、今は何を要求されたところで失敗しないだろうという自信があった。

高度な事を要求されれば、それ相応の集中が——正確に言えば、集中をするためのルーティーンが——いる。しかし、今の彼女には、それも必要なかった。

さすがに機械そのものに流し込む訳にはいかなかったため、手元で渦を作る。これもまた、普段からは考えられないほど精緻なものだ。「どう?」

「反応値三倍……五倍! 最高だ!」

その言葉が、アイズの問いに対するものかまでは分からなかったが。なんにしろトツドは、興奮した面持ちで、また何かを弄っている。

彼の機械いじりに数分続いて、はっと気がついて、アイズに問いかけた。

「剣を振るうとき、何か特別な事はしてるか? 何というか、無理に握り直したりとか」

「ううん。普段剣を使うときと同じにしてる」

「じゃあ圧力値なんかも同じ設定でいいな。ありがとう、もういいよ」
言つて、彼は無数に並ぶスイッチの内、一つを押した。

アイズは魔法を停止し、剣を引き抜く。差し込むときは多少抵抗を覚えたが、抜くときはそんなこともなく、するりと抜けた。

「じゃあ、鍛錬に戻るね」

「おう。用があつたらまた呼ぶ」

彼はアイズの顔を見もせず、そのままがちやがちやと何かを続けていた。相変わらず、何をしているかは分からない。

庭に戻ると、レフィーヤは体を動かしながら杖を振っていた。最近
は並行詠唱に凝っているらしく、同時に詠唱もこなしている。魔導力
製の杖を持つてから、確かな感触を得たんだとか。たしかに、それで
あれば、魔法の実行自体が簡単になっている。

「レフィーヤ。精が出るね」

「あ、アイズさん。もう終わったんですか?」

「うん」

アイズがやってきたのに気がついてか、いったん訓練を停止して、彼女を見る。

さほど長い間ではなかったが、訓練の密度は高かったのだろう、うっすら汗を流していた。

いったん手を止めた彼女が、すすす、とアイズに近づいてくる。内緒話なのだろうか、顔を大分近づけてきた。

「トッドさん、何をやってるか分かりますか？」

「ううん……全然」

「ですよええ」

レフィーヤはうーんと難しそうに眉をひそめる。顔が近いため、額をつたって、眉に汗が飲み込まれるのまで見えた。

「あの人はこれ以上があると確信して、研究を続けてるみたいなんですけど……実際、これ以上ってあるんでしょうか」

「どうだろう……」

問いかけに、アイズは悩んだ。といっても、それで何が分かるわけでもないのだが。

今の時点ですら、ほぼ全冒険者のランクアップ相当の能力向上だ。これを超える何かというのは、もう想像も難しい。発想のレベルからして違うと言ってしまうえばそれまでだが、にしたって常識はずれすぎた。

とはいえやはり、トッドのする事だ。成果は出してくるのだろう。「でも……」

と、ふと思いついて、アイズは言った。

「フィンが、まだアルテミス・ファミリアとの関係は維持した方がいいって言った。なら多分、まだ何かがあると思う」

「そうなんですか？」

初耳だとばかりにレフィーヤ。寄せていた顔を戻して、驚きに眉を上げている。

「うん。それに……」

アイズは研究室の方を見た。

ドアは開けっぱなしのため、トッドが何をしているかはよく見え

る。ただし、やはり何をしているかまではさっぱりだが。

「私も思うんだ」

トツドが、二人に見られている事に気がついて、小さく手を振った。それに手を振り返えして、顔はレフイーヤに戻す。彼もそれだけで研究に戻っただろうという事は、まあ確認するほどの事でもない。いつものことだから。

「ここまで来たら、もつと遠い景色、見てみたいと思うんだ……」

あるいは、おとぎ話のそれにも匹敵するような。過去の憧憬をも超えるような。

彼女は知らずのうちに、手に持っている練習用の模造刀に力を込めた。

アルテミスはこのところ、ずっと不機嫌だった。

今や唯一となってしまう彼女の眷属は、連日せわしなく研究を続けている。まるで遅れていた分を取り戻すように。

神域金属アダマントなる新合金が発明され、オラリオは沸きに沸った。そして、誰もがトツドの作った魔力撃武器ストライクを求めた。

気持ちは分かる。と、多分の不機嫌さに、少々の誇らしさを混ぜてアルテミスは思った。

新金属は正しく革命だ。これで、冒険者の死傷率も大幅に下がった。魔法を扱える者まで増えているらしい。加えて、この合金は既存のほとんどの武器より強靱であり、それこそ不壊属性デュランダルにも匹敵する強度と破壊不可能性能を持つらしい。ほぼ壊れる事はなく、ただ難点を言えば、整備に手間がかかるという点か。もつとも、壊れないのだから、武器についた油や汚れを落とすだけで、大抵はなんとかなってしまふのだが。

魔導力エジセスを完全な形で作れるのは、現状のオラリオではトツドただ一人。それはつまり、完璧なものを求めようと思えば、トツドに作ってもらえないわけだ。まさか、鍛冶の神があくせくそれらを作るわけもなし。

現状、神域金属アダマントは武器にしか使われていないが。これが普遍化すれ

ば、防具にも転用されるだろう。そうすれば、もつと冒険者の危険は減る。その上、武器がなくても戦えるようになるだろう。魔導力製の^{エビセス}手甲を装備しただけで、蹴りやらにまで魔力撃の恩恵がある事は、すでに確認されている。まあこれこそ今の状態では夢物語であり、いつた何十年先になるやらという話でしかないが。

だが、それが何か、アルテミス^アの慰めになるわけでもない。

(私は我慢強い)

強く、強く念じる。そう、私は我慢強い。我慢強かった。

(でも、そろそろ限界だよ)

頬杖をつきながら、もう片方の手は、貧乏揺すりの代わりに、テールをかつかつと指で叩いていた。

研究と、度重なる特殊武装の枠を超えた魔力撃武器の製造依頼。それによって、ここしばらく、トッドとろくに話もできていない。本当はもつと話したりぎゅってしたり、その他諸々してきたいのに。

(時間……)

そろそろ怒っても、文句の一つもないはずだ。

そうだ、無理を言っただけで旅行に行くのもいい。彼は難色を示すかもしれないが、最終的には言うことを聞いてくれるはずだ。それは知っている。もう何年も付き合っているのだ。どの程度のがままと、本気かを分かってもらえるなら、必ず折れてくれるだろう。

そう、時間が無い。あらゆる意味で、時間が限られている……

その時。

だあん！ と大きな音を立てて、扉が開かれた。いきなりの衝撃と騒音に、思わずテーブルからずり落ちそうになる。

ぎよつとして、何事かと思いつつ音の方を見る。そちらはホームの奥まった方の扉であり、つまり研究室がある方だった。

現れたのは、トッドだった。ぼさぼさの頭に、白衣も汚れ、何をしたのか、ところどころ焼けて穴が開いている。が、何より特徴的だったのはその顔だった。彼には珍しく——本当に珍しく、満面の笑みを浮かべている。

どうしたの？——問おうとして、とつさに言葉を止めた。そう、自

分は怒っているのだ。まずはそれを知らしめなければならぬ。

「トツド、いきなり何だい？ だいたい君は私をずっと放置してだね

――」

「やった！ やったぞアルテミス様！」

「わぷっ！」

言葉は遮られた。全く予期せぬ、トツドの抱きつきという形で。

トツドは哄笑を続けている。アルテミスを強く抱いて、持ち上げると、そのままぐるぐると回り始めた。

「はわわ……」

アルテミスは、言葉を忘れた。何か、なんだか言おうとしていたが、それらがすべて吹き飛んだ。トツドが彼女を抱き上げているため、顔と顔が密着する。頬がこすれ合って、またそれを自覚してしまったものだから、顔中真っ赤になってしまう。

続いて、彼はアルテミスの腰に手を回すと、踊るように回転した。椅子やテーブルを蹴倒すが、そんなことも気にしない。ほとんど狂乱した様子でめちやくちやなダンスを踊り、その上頬にキスの嵐までしてくる。

「はわーっ！」

アルテミスはついに爆発寸前になって、体からぐったりと力を抜いた。
トツドは主神の様子すら気づかないといった風に、叫び続けている。

「完成だ！ ついに完成しだぞ！ 長年の研究が実った！ 完璧な武器だ！ 誕生した！」

もはや言葉かも怪しい単語の羅列を、一気にはじき出す。

振り回されすぎて目を回す中、アルテミスは手を離されて、壁に手をついた。なんとかそのままへたり込む無様だけは阻止したが。

「ど、どうしたんですか？」

「何か、あったの？」

気づくと、今まで庭で訓練をしていた二人が、ぽかんとその様子を見ていた。

ただでさえ狭いホームだ。その上、ドアは開け放たれていた。あれだけ騒げば、気づかないはずもない。

(もしかして、キ、キスされてた所まで見られてたかも……)

先ほどとまでは別の意味で紅潮して、アルテミスはうめいた。

それがつまらない言い訳だとは分かっていたが、しかし言わないわけにも行かなかった。

「これは、違うんだよ。とにかくその……違うんだ」

ぶんぶんと、長い髪を振り乱しながらもかぶりを振って。その効果のほどまでは、信じる気にはなれなかったが。

「ああ、聞いてくれよ二人とも！ ついに完成したんだ！」

彼は激情のままに言ったが、当然、二人にはさっぱりだっただろう。訳が分からないといった様子で、顔を見合わせている。あるいは、初めて見る彼の上機嫌な様子に、思考の処理が追いつかないのかもしれない。

「すみません、全然分らないです」

「一から……お願いします」

「それがな——ああいや、言葉で言うより実際に使ってもらった方が早いか。ちよつと待ってくれよ。庭で待機していてくれ」

言うが早い、彼は小走りに研究室へと向かっていった。

ぽつんと三人残されて、それぞれ視線を交わしていたが。やがてのろろと、庭へと出て行った。そうしなければ、どうせ終わらないだろうしという達観もあったろうが。

三人に少し遅れる形で、トッドはやってきた。手に持っているのは、一本の剣だ。サイズや形状的に、アイズが使うためのものなのだろう。多少凝った形状はしているが、さりとして華美というほどでもない。そんな剣。

「使ってみてくれ」

言って、彼は剣をアイズに押しつけた。

彼女は未だ何だか分からない様子だったが、とりあえず剣を抜いた。剣は片手持ちの片刃直剣だった。持ち手の部分だけは、両手でも保持できるように長く作られている。銀色に見えるが、刃の部分は、

やや透き通った緑がかっている。峰の部分に、よく分からない幾何学模様と、翼をかたどったようなレリーフがある以外は、本当にただの剣に見えたが。

「え？」

と、言葉を発したのは、アイズだったが。

端から見ると、何がおかしいのか分からない。周囲の人間は不思議そうにしているだけだった。いや、トツドだけは、してやったりという顔で見ているが。

「これ……うそ……」

「どうだ、これが俺の目指した場所だよ」

言われ、最初アイズの目は呆然としていたが、やがて爛々と輝きを燃やし始めた。

「こんなことって……あるの……？」

「なかった。だから、俺が作った。どうよ？　これが俺の想定した、新世代の武器だ」

「アイズさん、どうしたんですか？」

レフィーヤの言葉は、彼女に届いていないようだった。ただ、彼女は目を見開いたまま、剣を二度ほど振ってみる。そして、おそらくは何かを確信した。

「クエストだ」

彼は未だ呆然としたままのアイズに、そう言った。

「これから一ヶ月、ここでその習熟に徹してもらう。お披露目はその後、大々的に、そりやもう派手に行く。そっちの手続きは任せろ。そのためならロキ・ファミアだつて黙らせるさ」

彼女の表情は変わっていた。驚愕から、満面の笑みに。

「分かった。私はこれを、必ず使いこなす……！」

「よろしい」

トツドはぱちんと指をはじいた。

「魔導力^{エビセス}なんてせこいもんじゃない。こいつで本当に、歴史を変えてやるぞ」

依頼

バベルの上層より地上を見下ろして、フレイヤは機嫌良く紅茶を飲んでいた。

機嫌良く、というが、そもそもここ最近、機嫌の悪い神など、ほとんどいない。理由は単純明快で、神域金属アダマントという新合金が誕生したからだ。これにより、冒険者全体がレベルを一つあげて、ダンジョン探求がより一層面白くなった。

今自分がいるこの場所が、世界の中心であるという実感がある。

もとよりオラリオは、世界の中心ではあった。有数の魔石輸出都市であったし、その事実を無視できる者もない。世界の中心であるという事実を奪おうと、攻め入ってくる国、もとい神などもいるのだが。オラリオの冒険者は文字通りレベルが二つも三つも違い、現状それらはただのイベント扱いにされている。

が、今回のそれは、今までの物とはレベルが違う。

天才の出現。それによる、人間の生活すらも変えかねない発明。それを渦中で見られるというのだから、面白くないはずがない。

退屈は神の敵だ。では逆は？ 当然神の好物である。それは、どれだけ気取ったところで、フレイヤも変わらない。少なくともその程度の事は、彼女として自認しなければならなかった。

(できれば……)

ぼつりと思う。

下界は忙しない。今も、トッド・ノートという天才に追いつこうと、鍛冶師が汗水垂らして技術を伸ばしている。その他の人間も、少しでも質のいい魔導力エリセスの武器を手に入れようと、駆けずり回っている。そもそも鍛冶師ですら、良質な神域金属アダマントのインゴットを得る機会が少ないのだから、その難易度は推して知るべし。

楽しいお祭りではある。が、まだ最盛期というには足りない。黎明期も序盤がいいところだ。大きく盛り上がるのは、あと五年か六年か、多分それくらいの日日が足りないだろう。

(もつと大きな騒ぎになってほしい所ね)

いかにも神らしい、俗っぽい願いではある。これもまた自認した。結局の所、神は所詮神でしかないという事なのだろう。スタンスが多少違うだけで。

(あの子も、もう一つくらい騒ぎを起こしてくれないかしら)

あの子、とはトッドの事だが。

もとより、今現在オラリオの中で大騒ぎを起こせる自力を持っている者とは限られている。まずはじめにトッド・ノートという個人。次に、彼の研究に協力していたという事で、強いつながりを持つアイズ・ヴァレンシユタインとレフィーヤ・ウイリデイス。および彼女らを擁するロキ・ファミリアだろうか。

(注目が一点に集まってしまふことの難点よね、これって)

いつの間にか空になっていたカップの縁をなでながら、思う。

一度大きな騒ぎが起これば、それらはしばらく持続する。しかし、視点が定まってしまうと言う欠点もあった。他に騒ぎがあっても、元の大きなそれに押しつぶされて、小火で終わってしまう。こうなってしまうと、大炎を望むのならば、もう一度トッドになんとかしてもらえない。

これで魂が好みだったら、彼に試練を与えるなり、もっと端的に引き抜きに走るなりしたのだろうが。あいにくと魂そのものは、好ましくはあるが、引き込むほどではない。どちらかと言えば、放置して眺めていた方がいい音を奏でる、とでも表現すればいいか。

いつそつついて反応を見ようかとも思うのだが、主神であるアルテミスを思うと、それも憚られる。彼女は生真面目で、融通が利かない。はつきり言ってしまうえば、弄ったらかわいそうなタイプだ。一度ファミリアの全滅を経験し、その後やっとできた唯一の眷属だ。それは有名な話であり、秘密でもなんでもない。ただ、誰もがわざわざ人前で取り沙汰にしないだけで。さすがにそれに手を出すほど、畜生にはなれなかった。フレイヤは自分本位である。その自覚はある。が、哀れを感じないほど非道でもないとは思っている。

(いつそ向こうから何か持ってきてくれないかしら)

そうすれば、介入する恰好の言い訳になるのだが。

(まあ、さすがにそんなに都合よくはないわよね)

紅茶は飲み終えたが、おかわりをする気にもなれない。ソーサーごとテーブルの隅に寄せて、再び下界をのぞき見た。

此度の話が一番盛り上がるまで、あと何年だろうか。夢想する。オラリオ鍛冶師の腕前が習熟し、神域金属アダマントのインゴットを輸出できるまでになれば、世界はどんな風に変わるだろうか。下界の生活は、そして冒険者の在り方は。まるで想像がつかない。

と、ドアがノックされた。

フレイヤははつとした。どうやら、それなりに長い時間、空想に気をとられていたらしい。

「どうぞ」

「失礼します」

優雅さは維持したまま、一言を告げる。入ってきたのは、オツタルだった。

フレイヤはきよとんとしながら、彼を見た。オツタルは意味もなく、フレイヤの休息を邪魔しない。

「どうしたの？ 私ったら、何か忘れていた用事でもあったかしら？」
「いえ」

彼は短く答えた。

態度にはわずかほども表れないが、しかし多少逡巡しているのが分かる。

「客人です。アポなしですが、相手が相手だったので一言報告しようかと」

「客人？ 神かしら……思い当たる相手もいないのだけど」

「いえ。トッド・ノートです」

「それは……」

とても面白そうだ。

言葉には出さなかったが、態度には表れていただろう。実際、隠すほどの事でもない。にやけそうになる顔を、なんとか優雅に見えなくもない程度に整えて、告げる。

「今、彼はどこに？」

「外で待っています」

「では、ここに案内して。すぐに」
「はっ」

言つて、どれほどもしない時間。

トッド・ノートがオツタルに案内されて、やってきた。彼は、一応正装なのだろう、小綺麗な恰好で直立している。

オツタルはフレイヤの脇に控えていた。彼もまた同じように直立している。

「いらつしゃい、ようこそ私の城へ」

「急な訪問に対応していただき、感謝しています」

言うが、本当に感謝しているという風には見えない。まあ、社交辞令だろう。それはどうでもいい。本当に、どうでもいい。

はやる気持ちを抑えながら、フレイヤはあくまで典雅に告げた。

「オツタルはいない方がいいかしら？ 内緒話でも、事と次第によっては対応しますけど」

「フレイヤ様、それは……」

言うのと、オツタルが難色を示した。

彼はフレイヤの護衛でもある。急な訪問者と二人にするのは、まあ確かに警護の面から見ればよろしくないだろう。

「いいの。あなただって、別に私を害しようとしてきた訳でもないでしょう」

「ええ」

トッドは、至極どうでも良さそうに答えた。その言葉に嘘はない、とフレイヤは見抜いた。あらゆる意味で。つまり、彼がフレイヤに仇なす気がないのはもとより、フレイヤの安全など最初からどうでもいいのだろう。

フレイヤは内心だけで、満足げに頷いた。きつぱりと不遜な態度であるが、大いに結構。これくらいの気質でなければ、世界を変えることなど不可能だ。

「ですが、実のところオツタル殿には一緒に聞いていただきたい。その方が話が早いので」

「あら、そう？」

なるほど、と納得する。つまり、用事があるのはフレイヤというよりも、オツタルになのだろう。

確かに彼に話を通すならば、フレイヤに持って行くのが一番早い。同時に、フレイヤに話を通さないならば、何をどう彼に言ったところで応じないだろう。そういう意味では、今の状況は彼にとっても都合がよいのだろう。

「では話をしましょう。座ったら？」

言つて、テーブルにある対面の椅子を指さす。はやる気持ちを、自分で焦らすかのように。

「いえ、話はすぐ済みますので、時間はとらせません」

彼は固辞した。

せっかちな気質だな、と思った。が、その性合こそが、彼を超人と言わしめるほど高めた理由の一つなのだろう。暢気では一生かかってもたどり着けない高みに。

(美しい……魂の色)

ともすれば短気とも言える彼を正面に捉えながら、フレイヤは魂の色に見入った。

単純に華美な訳ではない。彩る何かがあるわけでもない。それどころか、どこか無骨で硬質さすらうかがえる色合いだ。しかし、彼のそれは他者からでは見えないものだった。オンリーワンとでも表現すればいいのか。他人からは見えないそれだ。

「単刀直入に言います。そちらのオツタル殿を貸していただきたい」

「正確には、どんな事かしら」

「模擬戦をしていただきたい。皆が見ている前で、一対一の」

言われて、フレイヤは一瞬啞然とした。言われた意味が分からなかった。言葉を飲み込むのに、少々の時間を要求され、それでやっと次の言葉を吐く。

「模擬戦？ オツタルと？ いったい誰が？」

「アイズ・ヴァレンシユタインです」

再び呆然とさせられたが。今度の沈黙は、先ほどより短かった。

「アイズ・ヴァレンシュタイン……ロキの所のLv. 5よね？ 言うてはなんだけど、勝負になるの？」

それは、おそらくこの話を聞いた誰もが思い浮かべた疑問ではあるだろう。

レベル一つの差はまず間違いなく覆らない。それほどレベルの差というのは大きなものだ。ましてや、アイズはLv. 5で、オツタルはLv. 7。逆転は不可能なレベル差と言っている。というか、これを覆したら、歴史的な快挙だろう。

オツタルとて、無敵ではない。ロキ・ファミリアと単独での対決となれば、さすがに勝ち目もないだろうが。内容が模擬戦、それも一対一となれば、オツタルの勝勢は揺らがない。揺らがない、はずだ。

「内密な話ですが、先方はこの話を了承済みです。あとはそちらの返答次第となります」

「忘れていた訳ではないと思うけど……オツタルも魔導力製の武器を持っていてるわ。それも、そこの不出来なものではなく、あなた自身が製造した最高品質のものを。そのおかげで、彼はLv. 8相当の能力を持っている。その上で言っているのね？」

「当然です。本気で戦っていたらだいたい。その上で、不甲斐ないと判断したなら、たたきのめしてもらって結構です。彼女と、そして自分は、それだけの準備をしてきました」

「——ふふっ」

思わず笑みが漏れた。一度決壊したそれは、もう止めることができな。微笑みは、やがて哄笑と言えるまで大きくなった。

「あはははは！ 本当にあなたは面白いわ！ つまりあなたはまだ、私たちを楽しませてくれるって言うのね！」

「神が楽しめるかどうかは分かりませんが。自分は知らしめるつもりですよ。魔導力エビセスですら、本来の研究成果に比べればなんてことはない。高レベルな技術の保持者と自分の本来の研究成果、合わさった場合、勝負になるのはオツタル殿くらいだという自負はあります」

言葉からは、自信がたぎっている。いや、これは自信だろうか。むしろ、もう信仰の域に達しているのではないかと思える。

圧倒的な自負。そしておそらくは、それに見合う成果がある。

「オツタル、あなたはどうか？ あの小さな女の子と戦える？」

「フレイヤ様が望むのであれば、是非ありません」

彼の態度は変わらない。が、その中に少しだけ、嘘が混ざっているのが分かった。

神の力は、下界の子の嘘が分かる。が、その内訳まで見抜けるわけではない。それでも、フレイヤは、彼の言葉の嘘が手に取るようには分かった。

プライドだ。彼の『猛者』たるプライド。いくらよい武器を得て、背伸びをしようが、自分に勝るはずがない。

彼が最強と謳われるに至るまで、生半な道などなかった。それをもっとも間近で見してきたのは、ほかならぬフレイヤだ。約束された勝利などない。泥にまみれぬ道などない。彼はそうして、一つ一つ積み上げてきたのだ。

劍姫。大層な名だ。それに見合った力があるのも認める。ただし、オツタルに及ぶほどのものでもない。それが分からぬロキでもないはずだ。つまり、この無益とも思える対戦において、少なくとも何か得るものがあると踏んでいるのだろう。通常であれば、なぶり殺しにしなければならないであろう戦いに。

「クエストの報酬は？」

その問いは、つまりトツドの依頼を了承したという事だった。

彼は深く、強く頷いた。とても満足げにしながら、言う。

「アイズに作った武器と同質のものを特別にこしらえて渡します。ああ、当然オツタル殿専用調整して」

「それで、私は了解できるのかしら？」

クスクスと笑いながら、面白がるようにフレイヤが言う。彼女は彼を試していた。彼の自信が、一体どれほどのものか。

果たして彼は、気にもしなかった。体の中にみなぎったものを隠しもせず、続ける。

「それが気に入らなければ、うちのファミリアの何でも好きなものをもつていつてかまいません」

言つて、彼はふと思ひ至つたように付け加えた。

「当然、俺自身というのはナシで。それがありだと、報酬がどうか関係なしに指名されかねませんので」

「それは当然ね」

フレイヤは、再び微笑みながら答えた。実のところ、理性と欲求が許すのであれば、それも悪くないとは思つていた。あえて得たいとまでは思わないが、だからといって、自分の足下にいて悪い人材でもない。いや、保護できると考えれば、それもかなり悪くない案ではあつた。

まあ、さすがに恨みが魅了を上回りそうなのでやらないが。

「いいでしょう」

フレイヤは頷いた。確認程度の意味しかない行いだが、まあ、それを互いに理解するという意味くらいはある。

「いつやるの?」

「ちようど一週間後、南の郊外で」

「という訳よ。オツタル、空けておきなさい」

「はっ」

小さく笑つて、そこで初めてフレイヤは恰好を崩した。テーブルに肘をついて、前のめりになる。

「面白い景色を見せてくれるんでしようね?」

「は?」

彼は何を言われたのか分からないといった風に、声を上げる。それが問いだったのかどうかを確認する前に、彼女は続けた。

「その新兵器とやらよ——まあ、使い手の方でもいいけど——。私たちを、さぞや楽しませてくれる光景が見られるんでしよう?」

「ああ」

やつと得心がいったという風に、彼が漏らす。そして、顔を皮肉げに歪めた——これは笑つたのだろうか? いかにも笑い慣れていない人間があえてそうしようとしたら、こうなるのではないかという見本のような表情だが。

「大いに期待してもらつて結構。なにせロキ・ファミア内のL.V.

6では足りない判断したからこそ、こちらに話を通したわけですからね」

「そう。大いに楽しみにしているわ」

会談はそれだけで終わった。本当に短いものだった。彼はオツタルに見送られ、ホームの外まで連れだされる。

そのまま残っていれば、再びオツタルが来ることはない。それが分かっていたので、フレイヤは部屋から出た。ちょうど、トツドの見送りを済ませた彼の背中が見える。

「オツタル」

「何でしょうか」

答える彼の言葉はやはり硬質で、無骨で、そして懸念のかけらも感じさせないものだった。

「分かっているとと思うけど、一週間後までに仕上げておきなさい。それまで、私の護衛の任も解きます」

「了解しました。ですが……」

つい漏れたといった風の、オツタルのつぶやき。それに、フレイヤは首をかしげた。彼が口答え(というほどでもないが)をするのは、本当に珍しいことだ。

しばらく待っても言葉を続ける様子はない。そのまま無視してもよかったが、彼女はあえて聞いてみた。

「どうかしたの?」

「そこまでするほどでしょうか。いえ、挑まれた限りは当然勝ちますが」

どこか言いづらそうに、彼は言った。

フレイヤはそうね、と同意した。それに、わざわざ意外そうな顔を作るほど、オツタルは露骨な男ではなかったが。それでも疑問に思わないはずはなかっただろう。だから、自分から答えてやることにする。

「そうね、実のところ、私だってアイズ・ヴァレンシュタインにはそこまで期待してゐるわけではないわ。実際、ロキ・ファミリアから直接頼まれたのなら、断ってたでしょうね。私たちに得が何もないのだから」

ら」

笑みが自然と漏れる。指先で頬の輪郭をなぞって、フレイヤは続けた。

「でも、トッド・ノートが持つてきたなら、話は変わるわ。彼はわざわざ世界が変わる瞬間の特等席を用意してくれたのよ？ お呼ばれされなきゃ面白くない。でしょう？」

言葉に、納得いったかまでは分からない。ただ、彼はいつものように頷いただけだ。

「では、不甲斐なければ」

「ええ。遠慮なく叩きのめしなさい」

それだけ残して、フレイヤは部屋に戻っていった。

先ほどまでとは別の意味で、紅茶をおかわりする気にはなれなかった。

また世界が変わる。今度は最前線で見ることができると。それが、楽しくておかしくて仕方がない。今まで感じていた倦怠感など、一瞬にして吹き飛んだ。今回の話は、それだけ魅力がある話だった。

「あと一週間」

もう下界は見下ろさない。

遙か天空を眺めながら、フレイヤは少女のようにつぶやいた。

御前試合

「ほんまにもう、どういうこっちゃんえん！」

ロキが憤懣やるかたないといった調子で、声を上げる。

それを聞いていたのは、フレイヤとアルテミスだ。

彼女は特に反応を待ってはいなかったのだろう。備え付けられた椅子の肘掛けを、ばんばんと叩いて自分の不平を訴え続けた。

「アイズたんが超ミラクルスペシャル天才様製超兵器のテストベッドになるのはまあええわ！　せやけどなんでそれがうちのファミリアの中の話にならないのや！　うちにやって勇者とか重傑とかLv・6の英傑がおるやん！　なのに、なんでわざわざフレイヤんとこの猛者なんや！」

バンバンバン！　これは再度、ロキが椅子を叩いた音だが。

「仕方ないじゃない」

ふふふ、といつもの調子を崩さず、優美な仕草で対応しているのは、フレイヤだ。

「他ならぬ彼が、オツタルでもなければ力不足だと言ってているんだから」

「なんでや！　フィンたちかて魔導力製武器エビセスを持って、Lv・7相当の実力を持つてるんやで！　それこそ単騎の実力なら以前のオツタルにも引けをとらんレベルやぞ！　なのに！　わざわざ！　こんな性悪女のところに！」

「あら、性悪女とは酷いわね」

全く酷いなどと思っていない様子で、フレイヤ。美の女神らしいその顔かんはせには、ひとかけらの陰りもない。

「なにより気に入らんのが！」

ロキはもう、肘掛けを叩くのはやめていた。かわりに、それを握り潰さん限りの握力で、ぎちぎちと音が鳴るほど握りしめている。しつらえはかなりいい椅子のはずだが、彼女の腕力に負けて聞くに堪えない異音を鳴らし、今にも壊れそうだ。

「うちにも詳細が秘密って事や！　ええやんアイズたん貸してるのは

ロキ・ファミアアやぞ！ 新発明の詳細くらい、景気よく教えてくれたって！ 知りたかったああああ！ 誰より早く知ってドヤつてみたかったああああ！」

「あなた、本音はそれね」

「当然やろ！ 神域金属アダマントの時ですら「ウチ知ってました」。お前らおっくれてるう〜」できんかったんやぞ！」

フレイヤは申し訳程度に眉をひそめて、ロキを見た。

気持ちは分かる、とは誰もが思うだろう。今までの、どんな発明をも過去の物にしかねない、トツドの傑作。それを知るためならば、それこそ神の力を使うことすら辞さない神は山のようにいる。そして、一時の優越感のために言つてやるのだ。ふふん、俺はこれを知つていませ、と。ロキはまさしく、それをしたかった。

それができなかったのは、トツドの課した、徹底した守秘義務と。それこそ張本人のアイズとレフイーヤすら、大雑把な要項すら漏らさなかつたことだ。つまるところ、彼女たちすら思つたのだ。こんな凄いことを自分たちだけが知つていたんだぜ、ふふん、という事を。

ロキは完全にへそをまげて、踵で椅子の前足を持ち上げた。唇を尖らせて、あさつての方向を向いている。こうなると、彼女は面倒くさい。まあ、面倒くさくない時がないと言つてしまえばそれまでではあるが。

研究内容は明かさないという契約があつたのだから（そもそもそんなかつたとしても、当人たちには理解できなかったが）、仕方ないのだが、それについてロキはすでに記憶の彼方だ。往々にして神は、いかにして楽しめるかが重要なからだ。

そういった意味では、フレイヤはしてやったりだろう。ロキ・ファミアが独占していた情報に、割つて入ることができたのだから。その上、十分な見返りもあるのだろうとロキは踏んでいる。ある意味で、ロキはフレイヤに一番おいしいところをかつさらわれた形になる。

「そう機嫌を損ねるのはおよしなさいな。アルテミスが困っているわよ」

いきなり話のだしにされて。なるべく縮こまって、存在感をなくそうとしていたアルテミスがびくりと震えた。

ロキはぎろりとアルテミスを睨んだ。そもそもこいつが眷属をちゃんと管理できていないからこうなった、とでも言いたげだ。

「だから脅すのはおよしなさい」

仕方なしにと、フレイヤはペしりとロキの頭を叩く。

それで当然機嫌が直るわけではないが、とりあえずやつあたりだけはやめた。尖った唇は、正面にだけ向く。

「そもそも、なぜ私がここにいるんだろう……」

アルテミスは、引きつった笑いを浮かべながら、がちがちに緊張している。

今彼女らがいるのは、オラリオ南方郊外の、急造で建てられた主賓席だった。といっても、簡単な木組みで多少段差を作ったという程度のものだが。真正面ではすでにアイズとオツタルが正対している。正しく特等席だ。

周囲では、勝手に椅子を持ち出したり、中にはシートを敷いて座り込んだりと、神、冒険者問わずにかなりの人数が並んでいる。余波を恐れて大分遠くに陣取っているが。それでも半月状に並ぶくらいに、人が集まっていた。実際、ファミリア関係者の大半が見物に来ていそうだった。一応「これ以上前に出てとばつちり食らつても責任持ちませんよ」という線が引かれており、その最前列では、アミッドを中心とした治療術士やら薬師やらが待機している。

そんな中の、ド中心にいる。場違い感に、アルテミスは押せば倒れそうなほど緊張している。見てみていっそ哀れですらあった。

「全く、なんでそんな蚤の心臓なんかなあ」

機嫌は多少直ったのか、それとも腹の中に納めたのか、ロキがいつもの調子に戻る。行儀が悪いのは相変わらずで、アルテミスに吐き捨てるように言った。

「そもそも今回の主賓が誰か言うたら間違いなくアルテミス・ファミリアやる。あんたんとこの発明品お披露目会なんやから」

「そうねえ。うちのオツタルをも差し置いてこれだけ人を集めるなん

て、妬けてしまうわ」

「やめてくれよ……本当にやめてくれよ……私だってこんな大事になるならトッドを止めてたんだから」

「まあ気持ちには分からなくもないけど」

「どう考えたって言って止まるやつでもないやろ」

アルテミスはかたかたと震えている。急造とはいえ一応、作りはしっかりしているため、多少震えたところで土台は軋み一つ上げないが。彼女は以前オラリオの外でファミリアを結成していたため、こういったファミリア合従の大舞台には全く、本当に全く縁がなかった。

ロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアは、ともに押しも押されぬオラリオ最大ファミリアだ。対してアルテミス・ファミリアは、主神一人に眷属がLv. 3とはいえ一人だけの、弱小零細ファミリアである。金銭的にもそこまで余裕があるわけではない。金はトッドがあるだけ研究に突っ込んでしまうから。最近^{アダマント}は神域金属特需で、かなり潤ってはいるが。アイズが受けたバイトのようなクエストは、実はファミリアがかなり切り詰めた結果だったりする、というのは、ロキが後から知ったことだ。

「と、そろそろ始まるで」

審判であるハシャーナ・ドルリアが進み出ている。彼が大声で口上など述べているが、誰も聞いてはいなかった。

アイズがLv. 5 最高クラスなら、オツタルは間違いなく現オラリオ最強の存在だ。その二人の激突に仲介できる人間は少ない。というか、トッド・ノートという超人の介入を考えれば、誰にも不可能だと言つていい。たとえ他のLv. 6であろうとだ。というわけで、角が立たないようにオラリオの治安維持を買って出ているガネーシャ・ファミリアから審判が選ばれたのだが。正直に言つて、これはただの貧乏くじである。この中に割つて入るといふのは、イコール死である。まさか、二人して相手が死ぬまで戦う事もないだろうが。

「それではー」

大声を上げながら、ハシャーナが手を上げる。アイズとオツタルが、同時に得物を抜いた。

「始めっ！」

そして、勢いよく手を振り下ろす。

今ここに、世界の常識を覆す対戦が始まった。

開始の合図とともに、オツタルは大剣を振り上げた。そして、数メートルの間合いを一瞬で詰め、袈裟斬りにアイズを両断した。かに見えた。

切ったのは残像でしかなかった。それは、手に残らなかった感触で分かる。オツタルは下ろした剣を即座に右脇へと移動させた。甲高い、金属の擦れ合う音がする。アイズは最小限の動きで斬撃をくぐり抜け、すれ違いざま、脇腹を薙いでいた。

剣と剣が接触している。間合いは小柄なアイズのものだが、そもそも膂力が違う。彼は崩れた姿勢のまま、腕に力を入れ、その少女を弾き飛ばそうとした。

もくろみには、一応成功した。が、思ったより間合いは稼げていない。彼女は自分の間合いを保ったまま、オツタルの背後で構え直していた。その頃には、彼も振り向いて姿勢を直していたが。

(なるほど)

剣を握る力を込め直して、内心でひっそり賞賛を送った。

(あの男の発明も伊達ではないわけだ。この少女も、思ったより腕は上げている)

問題は、それが本気を出すに足るものかという事だったが。それはまあいいと思考を脇に置いた。それこそ試せば分かる問題だ。

先手はもらい受けた。であれば、次は相手の番だ。それが決まっているわけではないが。彼は自戒した。何事もなく一方的に終われば、それこそ興ざめというものだろう。誰にとつても、それこそ主神フレイヤにとつても。

何をしてくるのか。半ば面白いるように待ち構える。

彼は己に誓って言うが、待ちはしていても油断はしていなかった。それでも、一瞬アイズの姿を見失った。

(!?)

驚嘆し、気配だけで備える。剣を持ち上げたのは反射的だったが、そこでまた耳にいたいほどの高音が鳴った。跳ねたアイズが、オツタルの背丈より高く飛んで、大上段から剣を振り下ろしていたのだ。

「馬鹿なー」

思わず叫んで、上空に追撃する。が、そこにはすでに、アイズはいなかった。彼のやや左方で、またも同じ構えで悠然と構えている。

(どういう事だ……?)

訳が全く分からなかった。

自分は確かに、アイズの動きを子細余すところなく注目していた。筋肉の挙動一つ見逃すはずがない。だが実際に、彼女は予備動作もなしに動いていた。一瞬、エアリアルの効果かとも思ったが、そもそも魔法を使った様子もない。

アイズが軽く右に跳ねた。だけに見えた。実際には、目で追うのも難しいほどの速度で、かき消えるように風に溶け込む。

なんとか体勢だけは維持し、体を向けた。

動いたはいいが、アイズのそれは闇雲にしか見えなかった。維持していた間合いが開く。が、彼女はその姿勢のまま、剣を振った。届くはずのない距離だが。

オツタルは悪寒とともに、剣を持ち上げた。まるで斬撃を受けたかのような衝撃が、剣から伝わってくる。それもけして軽いものではない。重く、骨の芯にまで響くような強烈なものだ。それからいくらか遅れて、旋風が体を撫でる。

どう見ても困惑しているオツタルに、しかしアイズは追撃してこなかった。その場でステップを踏み、まるで最後の調整でもしている風だ。

(読めてきた……)

風の内、一筋が頬を撫でていた。うつすらと皮膚が裂けて、一筋の血が流れる。それは、肩を上げて拭ったが。

(いや、わざと理解させられたか)

つまりはこれがトッド・ノートの作った武器の効果なのだろう。

魔剣……ではない。彼が公開したステイタスを信じるならば、そも

そも彼に魔剣を作る技能はない。武器そのものに属性を付与している。壊れず、堅固で、ひたすらに強力。それがこの武器の正体だ。(なるほど)

オツタルは緊張を一段高めて。剣を掲げた。

(確かにこれであれば、魔導力武器を持ったLv. 6であれば、相手にもならなかったかもな)

アイズの姿が、またも前兆なくかき消える。魔導力武器で強化された動体視力でも追えないが、しかし気配は掴んでいる。右に飛んで、死角から迫る一撃に痛打を与えた。威力に押し負けて、アイズの体が吹き飛ぶ。いくら武器の性能で力を増しても、体重差までは補えない。

(これならば全力で戦える！)

その思考に、一瞬遅れてオツタルは知った。それは高揚だった。

半ば浮いて引きながら戦うアイズに、オツタルは連打を与えた。彼女はそれを防御し、時にはいなし、反撃まで与えてくる。それらも、うまく受け止めて致命撃とはならない。

彼女の厄介なところは、前兆なしに体を消えさせるという点だった。筋肉の動きから予測する動きを、たやすく裏切る。そして、浮いた状態でも体重を乗せた強力な一撃を容赦なく放ってきた。

たかだかLv. 5の上位と、Lv. 7の、それも頂点。本来であれば、兇戯にもならない戦闘。それが長続きする。

めまぐるしく変わる攻防の中で、しかしオツタルは冷静だった。相手を観察し、分解し、状況を冷徹に見定める。

(力、耐久力ともに俺が明確に上。手数こそ劣るが、そう差があるわけでもない。速度も俺の方が上のはずだが、風をうまく使った奇妙な動きでその差を埋めている。剣もそれなりに習熟したのだろう、狙いは定かだ)

点と点を、一つ一つつなぎ合わせていく。部分部分でアイズが勝る点もあるが、総合すればまだオツタルが上だ。

(どうするっ！)

オツタルは戦法を変えた。アイズに合わせたそれから、自分が勝つ

ている点を前に出す形に。

むやみに動かない。どうせ遠距離攻撃は、致命撃たりえない。強力ではあるが、それだけだ。モンスターになれば有効だろう。その程度。迫ってくる瞬間を狙い、時には腕力差で押し込み、時には甘い一撃をいなして剣をたたき込む。武器の効果か、それらまで軽減されているようではあったが。それとて、ダメージが蓄積すれば長く続くものでもないだろう。

アイズの連打は続く。とてもLv. 5とは思えない無数の斬閃だ。が、オツタルには通用しない。防御を要所だけに絞り、的確に反撃を与えていく。

当たり前に、先に音を上げたのはアイズだった。オツタルがいくらかのかすり傷なのに対して、彼女は所々血が滴っている。防具のおかげで、致命的な部位までには至っていない様子だったが。

「やっぱり……このままじゃ勝てない」

「この先がある、とでも言いたげだな」

言葉に、挑発の意図はなかったが。しかし、彼女はそう捉えたようで、顔を引き締めた。

「この剣は、私専用にしつらえられた物」

「だろうな」

そこは疑うべくもない。風使いのアイズに、空気を支配する剣を与えたのだ。誰よりも風の中で生きる彼女だからこそ、このような武器が拵えられたのだろう。

思つて、はたと気がついた。風使い専用に使われた武器？

オツタルの察知を、アイズも捉えたのだろう。アイズは頷いて、剣をまつすぐ、自分の目の前で掲げた。

「これはもともと、エアリアルと併用して使うことが前提の武器。私の乱暴だった風を、精緻に、精密に、そしてより強力にしてくれる」とつとつと、それは歌うようでもあった。

アイズの目が、一瞬間じられる。そして、次の瞬間には、強く見開かれた。

「目覚めよ」
テンペスト

それで、暴風がうねる、などという事はなかった。以前の彼女の魔法であれば、まず間違はなくあったであろう、その乱暴な起動がだ。アイズ・ヴァレンシュタインは蒼く揺らめいていた。強烈な風の嵐が、ただ一点に集中されているのが、可視化されるまでになっている。背中には、大きな風の翼が生えていた。景色を歪め、白い雷光すらも生み出している。青白い輝きが少女を照らし、そのすがたは、まるで精霊そのものにすら見える。

「ここからが、本当の本番」

その言葉が詠唱の終わりだとしても言うように。

アイズは空を飛んだ。今までのように風で跳ねているだけではなく、自由自在に。

『宝剣』

「おいおいマジかよ」

わあっ、と会場は沸いていた。

アイズ対オツタルの試合。この状況に周囲は盛り上がっていたが、同時にどこか冷めてもいた。どうあがいたところで、アイズがオツタルと勝負になるとは誰も思っていなかったのだ。Lv. 5とはいえせいぜい上位でしかないアイズと、頂点たるLv. 7のオツタルとは、それだけ大きな差がある。

それはロキとて同じだった。アイズたつての願いとあつて、試合は許可したが。勝負と言えるほどのものになるとは思っていなかった。

蓋を開けてみれば、下馬評は大きく崩された。

正体不明の移動術と遠距離攻撃、オツタルの足下にさしかかる身体能力で、戦いと言えるものになっていた。

「ほんまかいな」

「ええ、これにはさすがに私も驚いたわ」

ぽつりとした、ロキの独り言に。フレイヤが返してくる。

オツタルがアイズを舐めていないのは、最初の時点で分かっていたが。今はもう、手加減すらしていない。

アイズが体の動きを最小限以下に、まるで消えるかのように体を動かす。すれ違いざま剣で連撃を入れるものの、それは防がれる。しかし、完璧でもなかった。たかだか薄皮一枚、されど薄皮一枚、オツタルが対処しきれない速度と威力で確実に当てている。

ダメージこそアイズの方が積み重なっているだろう。しかし、全く通じていない訳でもない。これはかなり重要な事だった。レベルの差を恐ろしく縮めている。

しばらく両者の攻防が入れ替わる。アイズが動であり柔、オツタルが静であり剛で。戦いのやりとりは、かなり離れたこの位置まで届いていた。金属がこすれ、すれ違う、ともすれば耳鳴りにも聞こえる音。それが連続して届く。

しかし。

この中で、ロキだけが気づいていた。アイズは本気で戦っているが、まだ全力ではない。彼女は魔法を使っているようで、まだ使っていないのだ。

ロキは、ぞわりと背筋が泡立つのを感じた。手が震え、笑みが漏れる。

(こんなになるもんなんか?)

その凶暴ともとれる笑いを見た者はいない。いや、フレイヤくらいは気がついていられるかもしれないが、どうでもいい。ただロキは、感情があふれるままにそれらを注目し、ただただ歓喜に震えた。

(当代最高クラスの剣士と、歴史に残るレベルの天才、これらが組み合わせたら、ここまでなるもんなんか?)

その問いに、回答を出せる者はいない。しかし、その結果の一つが、目の前にある。

アイズが研究成果の何かを隠すことに、不満がなかったわけではない。むしろ大いに不満だった。しかし今は、それももう吹き飛んでいた。こんな力を発揮できるならば、確かに秘密にして、大々的に発表したくもなる。

アイズとオツタルの距離が開いた。その間、何かを話している様子だったが、さすがにここまででは聞こえない。

が、次の瞬間。

アイズの背中から、羽が生えた。半透明の膜の中に、雷光が煌めく。ばちばちと何かを弾くような音が、ここまで聞こえてきた。周囲のどよめきは、一層大きくなった。

「まさか、今まで魔法を使っていなかったのか!？」

「それであるの強さだったのか……!？」

「くそつ、あの剣は一体どんな武器なんだ?」

「うおおおお! すげえええ!」

アイズが剣を構える。見えたのはそこまでだった。彼女の姿が吹き消えた。それは戦闘の挙動だったのだろう、証明するように、オツタルの胸元から血が吹き出てきた。すんでの所で対処したのか、深手ではなかったが。それでも、オツタルほどの存在が対処しきれなかつ

たという事実は大きい。

どよめきは爆発になった。

レベル差の短縮ではなく、レベル差の超越。それは、かつて無数の人間が挑み、そして失敗した事の一つなのだから。

アイズはオツタルの背後に陣取っていた。地面に立つてはいない。背中の羽をはためかせ、宙に浮いている。

「飛んでるぞー！」

「そんなことまでできるのか!？」

「くそお！ トツドもアイズも化け物かよー！」

魔法の発動、それを機にして、攻防は入れ替わった。今までオツタルが優勢だったのが、アイズの攻勢に入れ替わる。

アイズは高速で空を飛び回り、オツタルに一撃を与え続けていた。時にはヒットアンドアウェイで、時には真正面から連撃を与えて。山ほども攻撃を積み重ねて、勝勢を維持している。尋常ではない力だ。

オツタルとて無策ではない。アイズの戦法に即座に対応し、防御を主としたカウンターに注力している。しかし、それでも足りない。速度の差が、それほどまでに大きな影響を与えていた。

アイズの速度は、もはや視認できるレベルではなくなっていた。残映すら捉えるのが難しい。背中から発生するプラズマのおかげで、その軌跡だけはなんとか捉えられるが、その程度の話だ。いや、むしろ速度は上がっているようにすら思える。実践で力を試し、武器とのかみ合わせをどんどんよくしている様に見える。

少女が空を飛んだ状態で、距離を空けた。今まで見えなかった姿が、やつと捉えられる。そして、彼女は剣を高く振り上げた。そこから延びるようにして、空気が歪む。振り下ろすと、空気の層はしなるようにして、大男に襲いかかった。空気の鞭だろうか。圧縮空気は荒れ狂い、乱れて、軌道が読みづらい。時には接触する瞬間に跳ねて、向きを変えたりまでしていた。これは、対応しているオツタルを褒めるべきだろう。

アイズはまるで遊んでいるようにも見えた。ふざけている、という訳ではない。最高の武器を手に入れて、なんでもかんでも試したく

なっているのだろう。

オツタルは駆け回り、なるべく攻撃方向を一つに絞らせようとしていた。それが無駄だとまでは言うつもりはない。しかし、アイズの速度の冴えはそれ以上だった。風の翼を得たアイズの速度は、すでにオツタルが対応できる能力を超えている。

飛んでいたアイズが、地面に降りた。精神力の節約か、あるいは舐めているのか？ 誰もが思った。しかし、違った。踏み込みと翼との連動で、彼女はまた一つ速度を上げたのだ。

アイズとオツタルが正面衝突した。互いに振り上げた剣をたたき合わせ、衝撃波が生まれる。その空圧は、かなり遠くで観戦している者たちまで届いた。砂が風に煽られ、ロキは思わず手で目を覆った。

一瞬でも見逃せる戦いではない。それは分かっていた。砂利を振り払うように手を振って、戦場を見直してみると。アイズとオツタルがつばぜり合いをしていた。

そう、つばぜり合いだ。速度で優位に立っても、力はやはりオツタルが上。その既成概念を覆した。翼の推力を得て、凌駕とまでは言わないまでも、オツタルに力で対抗できるまでにパワーアップしている。

「ええでアイズたん！ 行け！ 行けるとこまで行くんや！」

ロキはいつの間にか立ち上がり、叫んでいた。

見てみたい。Lv. 5がLv. 7を超えるとところを。アイズがオツタルを超える所を。強さを求めた少女が、最強を超える所を見たい！

近くで、がたと音がした。椅子が蹴飛ばされる音だった。

「負けてはだめよ、オツタル！」

見れば、フレイヤも思わず立ち上がったところだった。音が鳴ったのは、立ち上がった際に椅子を蹴倒しかけた所だったからだろう。彼女が焦るほどに、この戦いは接戦だと言うことだ。

声援に、オツタルが応えたのかどうかまでは分からない。ただ、口を大きく開けて、絶叫している様子ではあった。

次の瞬間、ただでさえ巨漢である男の体が、一回り盛り上がった。

拮抗していた秤は傾き、アイズが弾き飛ばされる。オツタルのスキルであるのだろうか。何か聞いたことがある気がする、とロキは思った。しかし今は、そんなものを思い出す間も惜しい。

アイズは相変わらず地上戦だ。しかし、今度は力で対抗しようなどとはしなかった。超高速で攪乱し、走り続ける。駆けた跡が、発生したプラズマにより地表を削っている。ただでさえ、異様な速度で捲られた地面の跡をだ。

両者は再び互角の状態になった。速度で勝るアイズだが、致命撃を与えるには、オツタルのパワーと反応速度が許さない。が、それはオツタルから見ても同じ事で、いくら力と行動予測で対応しようとも、アイズがそれ以上の速度で動き、一撃を与えさせない。

戦場はどんどんと広くなっていた。オツタルがパワーアップしたことで、アイズの飛び回る範囲が広くなったのだ。審判などさせられているハシャーナが、頭を抱えて遠くへと逃げているのが、視界の端に写った。

アイズが地を焼く速度ならば、オツタルは地を削るパワーだ。ただでさえ一撃一撃が強烈なのに加えて、今は魔導力製の剣まで装備している。剣の切れ味はさらに増し、まるで地面をこそぎ落としているようだ。

両者が蓄積した疲労は、かなりのものだろう。戦闘時間では、さほどではない。が、互いに限界を超えた行動をしている。魔導力製の武器は、身体能力の向上こそ精神力の循環を利用したもので、精神力自体は消費しないのだが。魔力撃自体は、わずかながら精神力を消費する。何度も攻撃を行っている両者は、それだけで、少しずつではあるが精神力を消費しているはずだ。ましてやこの激しい、極度の集中力が要求される戦い。精神的疲労はかなりのものだろう。

拮抗していたバランスが崩れる。

オツタルの一撃が、アイズの胸を打ったのだ。

ロキは思わず、悲鳴を上げそうになった。それでもなんとかこらえたのは、アイズが出血をしていない事だった。一撃は確かに胸元をえぐったが、しかし浅い。ライトアーマーだけを寸断し、半分は裂かれ

た鎧が宙を舞って、転がるのが見えた。

この結果が、偶然であるはずがない。オツタルが、アイズの速度と技量に対応し始めた。アイズの成長速度を、オツタルの経験と対応速度が上回った結果だ。それを一番痛切に感じているのは、他ならぬアイズだろう。遠目からでも、歯噛みしているのが分かる。

アイズは距離を置いた。今までよりも、遠く、広く。

剣を構えた。かと思えば、体にねじ込むようにして、思い切り引き絞っていた。右足を大きく引き、体を縮めて。まるで引き絞った弓のようだ。

再度魔法を唱えたのだろう。翼は、もはや空気の塊とは言えなくなっていた。圧縮されすぎた空気がプラズマを生み、内部が雷撃だけで埋め尽くされる。雷が走ったのは翼だけではなく、剣もそうだった。最初は渦巻くようにして刀身に集まっていた風が、やがて剣身すら歪ませる。それは一瞬だけで、やがて剣すらも雷光を迸らせ始めた。極度に圧縮されているのか、プラズマが剣の外まで飛び出すことはない。その代わりに、刀身そのものを埋め尽くすようにして、やがてプラズマそのものが剣になった。

アイズ必殺の一撃、リル・ラファールである事は疑いようがない。対してオツタルは、大上段に剣を構えた。そして、何かをぶつぶつとつぶやいている。魔法の詠唱だろう。それがどんな効果かまでは分からないが、ここまで力を振り絞っているアイズに対抗しようというのだ。尋常でない事だけは確かだろう。魔導力製の武器で底上げされた身体能力と攻撃力、加えてスキルによるブースト。さらには、魔導力の恩恵を一番大きく受けるであろう、魔法の行使。間違いなく必殺の一撃だ。

瞬間、ロキの胸に浮かんだのは。今までの高揚が凍り付き、生まれ出た恐怖だった。互いに、後先などない一撃を放とうとしている。己の身を賭して。

「審判！ 止めえや——」

「はやく辞めさせなさい——」

ロキとフレイヤの絶叫は、同時だった。が、それは遅すぎた。

アイズが音をも置き去りにする速度で、突撃する。もはやそこに彼女の姿はなく、雷の槍だった。暴風が地面すら揺らがし、焼かれ、黒い焦熱の跡を残している。

対抗したオツタルは、しかしまだ動かなかった。限界まで引きつけて、その刺突に合わせる。唱え終えた魔法は、剣に収束され、魔力の陽炎すら生み出していた。

接触――

瞬間、大爆発が起きた。瀑布が地面を削り、観客を吹き飛ばす。特別にしつらえたとはいえ、所詮仮組みの土台だ。それすらも崩すほど、膨大な乱流の衝撃波。爆裂した必殺同士の一撃は、それこそオウリオの外壁まで削るほどだった。

それから、何秒か、何十秒かの時間がたつて。やっと余波が収まって、ぽつぽつと顔を上げる者が出てきた。

ロキは頭を打って、最初は朦朧としていたが。やがて意識をはっきりさせて、がばつと起き上がる。

「アイズたん！」

「オツタル！」

ほとんど同時に、フレイヤも身を起こす。

その先にあったのは。

迎撃したオツタルが、その場で倒れている。その背後、大分離れたところで、アイズもぐったりと、意識を失って身を伏せていた。

「試合終了！ 勝負は引き分けだ！ 救護班早く！」

最前線で衝撃を食らったはずだが、さすがはLv. 4でもあるハシヤーナ。いち早く復帰し、指示を出していた。

準備をしていた救護班は、ぼろぼろの姿のまま駆けだした。ともに倒れ伏すオツタルとアイズ、両方に駆け寄って、両者を確認する。

たったそれだけの時間が、ロキには何時間にも感じた。もしかしたら。このままアイズが死んでしまうのではないか。そんな恐怖が、心臓を締め上げる。もしそうになったら、いくら悔いても悔やみきれない。

ばくばくと鼓動する心臓を締め上げるように、胸元を掴んで。やが

て、ぱつと救護班の顔が上がるのを確認する。

「アイズ氏、無事です！」

「オツタル氏、同じく！」

「は——」

声が上がって、やつとロキは胸元を使む手を離した。予想以上に強く掴んでいたようで、胸部まわりがうっ血している。しかし、そんなことはどうでもいい。

へたり込むようにして、瓦礫の上に座り込む。

「はああああああ……よかつたあ」

「心臓に悪いわ、全く」

つぶやくように言って。さっきから同じ事ばかりを言っていたフレイヤと、思わず視線を合わせる。

二人してきよとんと、しばらくそうしあつて。やがて、けたけたと笑い始めた。自分でも何がおかしいのか分からない。それでも、とにかく笑いが止まらなかった。

近くで、がざりと音がした。

そちらを確認してみる。と、そこにはぼろぼろの姿になったトッドがいた。いつもの白衣は、今はどこと言わずとも土にまみれている。どこかに引っかけたのだろうか、一部が破けている、かなり無残な姿だった。

もはや崩壊した特別席に、彼が上がってくる。どうやら、ひっくり返ったアルテミスを看に来たようだ。

「アルテミス様、アルテミス様」

ぺちぺちと頬を叩くが、反応はない。完全に気絶しているようだ。が、何をしてもし起さないの、やがて諦めてその場に体を横たえ直した。

「まあいいか」

「お前んとこの主神やろ。それでええんかい」

「いいですよ。息はあるから生きてるし。まあたんこぶくらいはできてるかもしれませんが」

言って、今度は戦場だった方を確認して。

「どうやら二人とも生きてるようですね」

「せやな。まあ一安心や」

「手足がちぎれ飛んでるような様子もないし。結果よければとは言いたくはないけどね」

「さすがに死人が出たらしやれにならないですからね。予定よりかなり激しく戦ってくれたみたいだし」

怒ったのか、とロキは思ったが。彼の語調も、そして表情も変化した様子はない。本当に、ただ安心しただけらしい。

「まあこれで、最後の仕上げができる」

(仕上げ?)

疑問に思ったが、それを口にするより早くトッドは動いていた。どこに隠していたのか、メガホンなど持ち出しつつ。足場の悪い瓦礫と化した、元特別席で、なんとかバランスをとって立ちながら。

戦場を背後にして——つまり観客に向けて、大声を張り上げた。

「諸君、今の戦いは見てもらえたと思う」

未だ戦いと、物理的な衝撃でざわめいていた会場が、いくらか時間をかけて静かになる。それを確認して、彼は続けた。

「今、アイズ・ヴァレンシユタインが使っていた剣は、俺が想定した最終形、完成形だ」

言葉に、いったん静かになった会場が、再びざわめきを取り戻す。周囲の者と話し合うなり、胸のざわめきを抱えるなり、それぞれだが。ロキも、同じような心境だった。

「ひたすらに堅固であり、所持者の力を飛躍的に高めてくれて、なににより魔法より強力な権能を持つ。それが俺の開発した宝剣だ」
シザウロス

ざわめきは、さらに大きくなった。それこそ、トッドの声が聞こえなくなるのではないかと言うほどに。

気持ちは分かる、とロキは思った。同時に、感じてくれた。歴史が動く瞬間。その先駆け。

「分かっているものはもう分かっているだろう。これは決して壊れず、魔法以上の力を発動できる武器だ。はっきり言おう、俺の作り出した研究成果は今、魔剣を過去のものにした事を証明した！」

その興奮には、おそらく覚えがあつた。過去にラキアが魔剣を手に入れたときのそれだ。しかも、今回は限られた者だけが作れるといった類いのものではない。

トッドは特別な恩恵をもらっていない。ステイタスで言えば、良くも悪くも平凡なものだ。ステイタスそのものは、Lv. 3にしては高めといったところだが。それすら、特筆すべき所ではない。

つまりは、この武器は、作ろうと思えば誰でも作れるのだ。腕さえ届けば、の話だが。それも、将来的には分からない。

彼はさらに声を張り上げて、宣言した。

「これからは宝剣シザウロスの時代が来る！ レベルの、ステイタスの差を、本人の技術と、俺の研究結果が埋めてくれるだろう！ レベルが低くとも戦闘技術に自信がある者はそれを磨け！ さすれば必ず報われる！ 俺の宝剣シザウロスが、それを可能としてくれる！」

わつと、歓声が沸いた。

それはアイズとオツタルの戦いへの賞賛でもあり、未来への希望でもあつた。

いくら技術を磨こうとも、強くなろうとあがこうとも、レベルの差は覆せない。覆せなかつた。しかし、今それが変わった。時代が変わる。冒険者の在り方の分岐点が、今確かに生まれた。

会場は、もはや狂乱とも言える状態だつた。誰もが、その辺にあるものを投げて喜んでいる。自分が何をしているのかすら分かっていない者もいるだろう。

「こういう事があるから、下界はやめられん」

「そうね。全く、その通りだわ」

ロキとフレイヤ、互いが互いを見合いながら、つぶやいた。眷属が生きていたという安心感もある。が、それ以上に、やはりこの狂乱が楽しくて仕方がない。

本当の時代の節目は、神域金属アダマントができた時ではなかつた。ここなのだ。宝剣シザウロスなる武器が表舞台に出てきたこここそがそうなのだ。ましてや、その伝説はオラリオから生まれた。

まだまだだ。

下界はまだまだ楽しくなる。これからもっと。いや、さらに加速して。変わらないはずだったものを、無理矢理ねじ曲げて加速する。

伝説の始まる瞬間を目撃して、ロキにもう胸の焦燥などなかった。ただただ、胸が躍るままに、この時に身を任せた。

デミ・ゴツド

「えー、大体約三千数百回めの……正確な数字もわからないのに、この口上いるのかい？」

「ええねんええねん形式美や」

「ならいいけど……」

どこか頭痛を抑える仕草で、アルテミスが言う。何か漏れ出そうなもの^をを堪えながら、しかしそれでも言葉にしないわけにはいかず、続けた。

「今回の司会進行役は私、アルテミスが仕切らせていただきます。よしなに」

「よしなにー！」

(悪) ノリのいい神が、同じように言葉を返す。

どう考えても真つ当とはほど遠いそれに、アルテミスは口元を引きつらせた。それでもなんとか、苦笑と言える程度にはとどめられたが。

そこは、バベルにあるとある一室。三ヶ月に一回開かれる^{デナトウス}神会と呼ばれる会合だ。

主に下界で起こった事件や問題を話し合う場として設けられているが、現在ではそれも有名無実化している。当たり前だが、千年という長いスパンで生きている神にとって、大抵の事は有事ではない。話し合われる事は概ねどうでもいい雑談や、益体のない事だ。こうなると、むしろ数千回も定期的に続いたことを褒めるべきかもしれない。参加資格は、眷属にLv. 2以上の者がいること。基本出席だが、それをご丁寧^にに守っている者もない。その証拠に、円卓にそろえられている席の数は、明らかにLv. 2以上を抱えているファミリアのそれより少なかった。

「えー、それでは……」

「今回のハイライトは間違いなくアイズ対オツタルの対戦つしよ！」

アルテミスが言葉を発しかけたが、途中で遮られ、沈黙を余儀なくされる。司会者が力を持ち、なおかつアクティブな性格でないと司会

進行すらままならない。神会ではよくある光景だった。

さすがに、それを自分の時にされると多少ならずへこむが。隣の席に座っているヘファイストスが、慰めるように背中をさすってくれたのが、また切ない。

「やっぱアイズな！ やつべーよ、大番狂わせ！ まさかオラリオ最強に相打ちまで持ってくとは思わなかったぜ！」

「オツタルだって最強の名に恥じないくらい強かったのになあ。まさかまさかだよ」

「なんてつたつけ？ 宝剣シザウロスだつけ？ あれの詳細公開はよ！ はよ！」

最後の言葉で、急に好き勝手な発言がぴたりと止まる。同時に、視線が一斉に、アルテミスに集まった。

彼女はおほん、と一つ咳払いをする。司会進行の役割を忘れたわけではないが、そこはそれ。ファミリアの話となれば別問題だ。

「黙秘します」

「何でだよオー！」

「アダマント神域金属の時は景気よく教えてくれたじゃないか！ あのとときのキップの良さをもう一度！」

「ア・ルテ・ミス！ ア・ルテ・ミス！」

「いくら煽られたって教えないよ。そのためにわざわざトラウム魔導力エビセスの製造方法まで教導したんだからね。トツドの言葉を借りて言うなら、その二つもまだろくに作れてないなら、そもそも鍛冶師としての練度が低すぎるのだよ」

きつぱりと、そこだけは断言しておく。

不満げな神たちがブーイングを投げてきたからという訳でもないが、彼女は続けた。

「この件に関して、ギルドに問い合わせても無駄だよ。そもそも発明した新合金公開の時点で、ギルドに大きな貸しを作ったんだ。誰にもとやかく言われる筋合いなんてないのだ。相応の対価を払うならいいけど……最低でも数兆ヴァリスだよ？」

う……と、あまりの金額に、さすがにすべての神が沈黙した。数兆

ヴァリスなど、そもそも単独ファミリアが用意できる金額ではない。ロキ・ファミリアかフレイヤ・ファミリアのような超大手が、売れるものすべてを売り払っても全く届かない額だ。当然、ファミリアに公開するために、ギルドが払ってくれるはずもない。

あまりこういった場所に慣れていないアルテミスだが、この点だけは譲らないと胸を張り、続けた。

「何もずっと秘密にするって言ってる訳じゃないんだ。今は周りの鍛冶師のレベルが低すぎて、教えても意味がないって言ってるだけで。粗悪品が横行するのも、望むところではないだろう？」

「まあ確かに、粗悪品を数億ヴァリスで買わされたら泣くに泣けんけど」

その神のつぶやきで、一応要求は収まったようだが。代わりに突き上げられたのは、鍛冶の神だった。

「ゴブニユ……はいねえや。ヘファイストス、お前ならイケるんじゃないの!？」

「冗談言わないでよ」

彼女はうんざりしたように言った。そのうんざりが果たして何に對して向けられたのかは分からない。

「単純に鍛冶の腕だけで見ても、私と互角ほどもあるのよ？ 発想なら確実に負けてるわ。ましてやあの性能の武器、私は神聖文字ヒロエグリフを付与しても追いつかない。言葉通り神の力アルカナムを注がなきゃ互角の品が作れないわ」

「だからこそ、作り方教わって一人でも宝剣シザウロスの作り手を増やしてだな」

「冗談はやめてよ。私にだってプライドはあるの。そんな乞食みたいな真似は絶対しないわよ。多分ゴブニユもね」

くう、と悔しげに、しかし問いかけた神もそれ以上は言わなかった。とりあえずこれで、宝剣シザウロスの窓口はトッド一本に絞られたわけだ。これを喜ぶべきかどうかは、まだ分からないが。

なお、ギルドはこの件に関して、すでに動いていた。おそらくだが、魔剣シザウロスを宝剣と偽って裏で販売する者が出てくるだろうと見込みを立

てている。そのため、正規品の取引にはギルド印のある証書が必要だったりする。まあ、その対応が、あまり広まっているとは言いがた
いが。

「まあ何にしろ、エルフは大喜びだねえ」

話題を変えるように、別の神が言った。わざとらしく肩をすくめて
いる。

「ああ、エルフはなあ」

「あいつらクロッゾアンチ通り越して、魔剣アンチ発症してるやつま
でいるからなあ」

「うちにいるエルフ、『魔剣はすでに過去のものだ』発言で狂喜乱舞し
てたぜ」

「エルフはいろいろめんどくさいからな。まあめんどくささの一部が
解消されたと思えば」

わいわいと言う。

が、当然だが、魔剣の有用性がなくなったわけではない。

現時点ではだが、そもそも大前提として、生産力が違う。魔導力エビセスで
すら作り手が非常に限られているのだ。なにしろ完品を作れるのが
トッド以外、鍛冶系の神しかない。

さらに、求められる役割も違うだろう。宝剣シザウロスはメインウエポンと
しての性能を求められているが、魔剣は違う。どちらかと言えば、使
い捨ての道具として携帯されている類いのものだ。少なくとも、魔剣
をメインウエポンにしている者は、相当な大馬鹿かつ自殺志願者か、
もしくは限度を超えた大富豪である。

益体ない会話が（そもそも益体ある会話こそがないが）収まってき
たのを見計らい、アルテミスは手を叩いた。

「では次の話題、ランクアップした冒険者の命名式について」

「待ってましたアー！」

再び、わつとノリがいい神（つまりほぼ全員）が、椅子を蹴倒す勢
いで拳を上げた。

「じゃあトップバッター。アヌビスの所のヘテシユがLv. 2になり
ました。候補をどうぞ」

「喪失連打とかどうよ！」
パニシング・ラッシュ

「じゃあ俺は超熱血を推すねッ！」
ハイパー・フレイム

「イヤアアアアアアアア!？」

アヌビスから、甲高い悲鳴が上がる。これは耳を塞いで耐えた。幾人かの(比較的良識的な)神もそうしていた。いつものことなので、慣れたものだった。

喧々囂々と命名式は進み、やがて流されるままに、アルテミスは発表する。

「はい、それでは連続回転斬に決まりました」
ハイ・ラッシュ・スピニング

「すまぬ……ヘテシユよ、不甲斐ない私を許してくれ……」

はらはらと涙するアヌビスを哀れに思ったが、実のところ、アルテミスだって他人事ではなかった。

「では、最後の三名ですが……」

「うちのアイズたん、オツタル、トッドやな」

ランクアップした団員がいるファミリアの主神は、デナトウス 神会への参加が半ば義務、というか最後の抵抗の場である。もし何かしらの理由で不参加だった場合、非常に痛々しい(もしくははひたすら情けない)命名をされる事がある。アルテミスが今回参加しているのも、それを防ぐためだった。

「アイズは……変えなくてもいいんじゃないか？」

「いやいや、今回の活躍を鑑みて、フェアリー 剣舞の姫なんてのもありだと思う」

「じゃあ麗しき天昇とかどうだ!？」

「殺すぞ」

「ごめんなさい」

悪ふざけで命名した神は、即座にロキから睨まれていたが。

結局の所、アイズは剣姫のままになった。もじった戦姫の語感がよすぎたというのものもある。

アルテミスは紙をめくって、次へと進んだ。残り枚数は二枚。

「次はオツタルだけど……」

「これも猛者以外にあるか？」
おっじゃ

「オラリオ最強がより高みに上ったってのはセンサーシヨナルだけ

ど、まあそれだけって感じはするよなあ」

「むしろ注目すべきは、なぜランクアップできたか、だよな」

誰が言ったかは知らないが。言葉は、その通りではあった。ランクアップは安くない。これはすべての神の共通認識だ。

オツタルはLv. 7。現オラリオでは文句なしの最強だ。その彼が、冒険と言えるほどの試練に出会うこと自体が、まず難しい。ましてや魔導力武器を装備して、能力的には掛け値なしのLv. 8だったのだからなおさら。

そんな彼が、ランクアップした。これはどちらかと言えば、アイズの方がおかしかったのだ。

宝剣シザウロスを使い、オツタルと互角以上に戦った。その上、最終的には相打ちにまでなった。この事実が示すのは、当時Lv. 5でしかなかったアイズが、武器の力を得てLv. 8相当まで強化され、それどころか、瞬間的にはLv. 9にまでなった。こう考えるしかない。

レベルが上の相手と相打ちにまで持ち込んだ。こう考えれば、たしかにランクアップのつじつまは合う。

「改めて考えると宝剣頭シザウロスおかしすぎだろ。所持者を恒常的にレベルを3つ上げて、瞬間的には4も上乘せしてくれるとか。おっそろしいわ」

「神の恩恵涙目だな」

「いや、さすがに剣だけが凄かったとは言えんだろう。使いこなしたアイズこそを賞賛すべきだと思うね」

「トッドの口ぶりじゃ、精神力さえ足りてればもつと底上げしてくれるみたいだぞ。やっべえーよ、あいつ本当に人間か？」

「えー、話がそれています。今はオツタルの命名なので」

一応、路線修正はするが。皆の意識は、すでに次へと移っていた。

「オツタルは今のままでいいでしょ」

「フレイヤがそれでいいならそれで」

鶴の一声で決まった。

「では最後、トッド・ノート……つまりうちの子なんだけど……」

「ランクアップの理由は……まあ宝剣シザウロスを完成させた事だろうな」

「まあだろうなあ。あんな俺らだつて満場一致で偉業だよ。格上のモンスター倒すよかよっぽど難しいわ」

会場がざわめく。が、今までのような、どこか暢気なものとは雰囲気が違うていた。どこか、ぴりぴりとしたものがある。

「アルテミス、ちよつと聞きたいんだけど。答えられなかったらそれでもいいが」

「なに？」

「トッドは結局、鍛冶の発展アビリティをとったのか？」

問いかけに、アルテミスは少しだけ悩んだ。漏らしてしまつていいものか。

基本的に、ステイタスをさらすのはタブーだ。詮索すること自体、忌避されていると言つていい。しかし、彼は自分のステイタスのことさら隠そうとは思つていないし、そもそも一度皆の前で開帳している。

顎に手を当てながら、しばらく考え込み。やがてアルテミスは、口を開いた。

「ううん、取つてないよ。どうも上級鍛冶師ハイ・スミスになるつもりはないみたい」

「げえーっ」

「それであの能力か」

「やべえよ、やべえよ」

「そういうトッドの今までの二つ名つて何だつたんだ？　なんか作つたもんばかり有名になつて、そつち忘れてるんだが」

「武器マルチウエボン使いや」

答えたのは、ロキだった。

神はそろいもそろつて、微妙な顔をした。明らかに名前が負けている。そもそもあの男の真骨頂は、武器の扱いなどではない。それは誰しもが——それこそアルテミスまでもが——思ったことだった。

ロキは椅子によりかかり、頭の上で腕を組み、ぎしりと音を立てながら体重を預けた。

「うちのラウルと同時期のランクアップやったから、よう覚えとるで。」

両者とも万能の武器使いつちゅーことで、比較されとったからな。トツドの方が一回り技能が上つちゅー事で、武器使いマルチウエボンの二つ名はそつちに流れたわ。おかげでラウルは超凡夫ハイ・ノービスなんちゅうええんだかわるいんだかよう分からんもんになった。いやあ、懐かしいなあ」

ロキは、まるで昨日を思い出すように言った。まあ、長命の神からしてみれば、数年前など昨日とさして変わらない。

「てかさ」

神の一人がつぶやいた。

「トツドつて準デミ・ユツド神じゃん」

準デミ・ユツド神。これは言葉通りの意味だと言えるし、そうでないとも言える。

神そのものではない。しかし、世界を変える者である。あるいは思想で、あるいは指導で、あるいは発明で、人間の世界そのものの在り方を変えてしまう。まるで、神が人にするように。そういった力を持った者に与えられる、いわば名誉称号だ。

人の時代の節目、数百年か数千年に一人現れる、天才を超えた超人。

「まあ確かに、命名するならこの上なく合ってるものではあるけど」

「うーん……」

珍しく、神がそろつてうなった。

そのまま準デミ・ユツド神の命名。それ自体は何がある訳でもないのだが。問題は、それを思った子たちがどう思うかだ。

ただでさえ紛らわしい。そのうえ、曲がりなりにも神の名を拝命するのだ。最悪、架空の神として奉られかねない。フィアナと同じ轍を踏ませかねない事は、さすがにあまりにも忍びなかった。単純に気分がよくないという問題もある。

「あくまで私からの希望だけ……」

おずおずと、アルテミスが手を上げる。

自分の眷属の事だが、話が話だけにあまり突っ込んだ事も言いにくい。

「準デミ・ユツド神はやめてほしいかな。あくまで神々のなかでのみ通用する名誉称号だし、第一紛らわしい」

「主神がそう言うなら、まあ……」

他の者も、乗り気ではなかったのだろう。命名は振り出しムードになっただ。

「ストレートにクロツゾを超えし者とか？ 自称までしてたし」

「クソダセえし、さすがにクロツゾにケンカ売りすぎだろ」

「こんなのはどうかしら？」

助け船を出したのは、いままで沈黙していたフレイヤだった。あるいは、ずっと二つ名を考えていたのかもしれない。

「錬金術師。彼の技能を考えれば、これ以上はないと思うけど」

「そうだなあ」

「そのあたりが妥当か」

「えー、ではトッド・ノートの称号は錬金術師アルケミストという事で」

宣言しながら、アルテミスはほつと安堵の息を吐いた。

とりあえずは、当たり障りのない称号になってくれた。早めに終わってくれたのが功を奏したのだろう。これがもし長引いていけば、飽きて緊張感を失った神が、どんな痛々しい命名をするか分かったものではない。

(だいたいどの神も、自分の所の子には無難なものを求めるのに、他人の子には容赦なく痛々しい称号をつけようとするんだよ)

ぶつぶつと、安堵と苛立ち半分ずつで。司会進行という役割もあつたため、普段よりよほど緊張を強いられた。

とりあえずこれで、今回の神会はお開きとなった。そのまま帰って行く神がいれば、その場に残って雑談を続行する神もいる。アルテミスは……まあどちらでもなかった。ひとまず自分に乗っていた重責が外れてくれて、テーブルの上でぐたつと体を横たえている。

と、緊張を解していたアルテミスに、近寄ってくる者がいた。フレイヤだ。

「小さいけれど、とりあえずこれで借りの一部は返したわ」

どこまでも完璧な、恐ろしく典雅な仕草で、まるで指を流すようにしながら。

「借り？」

「オツタルのランクアップのよ。あの子、最強だ何だと言われてても、やっぱりずっと伸び悩んでいたから。おまけに今回の件で、宝剣のシザウロス専用武器まで作ってもらえるしね。その一部を返したってわけ」
「そんならうちも礼を言わんとな」

続けてロキまでやってくる。こちらはフレイヤと対照的で、着飾っているのに、どこか俗っぽさが抜けない。

「アイズさんの武器に、ランクアップ支援に、礼が尽きんわ。強くなることにストイックすぎて、ちよつと前以外見えない子やからなあ。うまく誘導してくれたこと、感謝しとるって言つといてや」

「そういうことなら、まあ……受け取っておくよ。トツドも喜ぶ……かな？」

どうだろう、とは思ってしまふ。トツドは、そういった点に関してかなり無関心ではあつた。基本的に趣味人なのだ。やりたいことしかやらない。その結果で感謝されても、さほど興味を持たない気はする。研究成果を大々的に発表するあたり、名誉欲はあるのだろうか。

ともあれ、一般的な感性とはずれていることは間違いない。いつか直さなければと思う反面、あれはもうそういうものだろうと半ば諦めてもいた。

「さてと、じゃあ私も帰るよ。トツドにいい知らせをとどけなければだしね」

「うちもや。アイズさんがまた無茶しないか見とらんとな」

「オツタルも、久しぶりにステイタス更新の価値ができて喜んでるわ。またダンジョンに潜りたくて仕方ないみたい」

和やかに。三人して、子の話でくすくすと笑い、それぞれの帰路についた。

一人になって、アルテミスは考える。帰つて一言目は、何がいいだろうか。とりあえずは、二つ名の更新からだろうか。唯一の眷属がどんな反応をするか、楽しみにしながら、彼女は靴音を踊らせた。

ヘステイアちゃんの一日

オラリオの裏通りを、小さな影がスキップをしながら歩いていった。子供くらいの身長だが、胸は不釣り合いに大きい。長い髪はツイントールにしてくくつている。白一色の一張羅で、腕にはなぜだか青い紐を通している。

オラリオという街は、決して治安がいい街ではない。というか、きつぱりと悪い。司法制度はほぼ機能していないと言つてよく、いくらかのファミリアによる自浄作用だけが治安を守っている。冒険者と言えば聞こえはいいが、所詮はただの荒くれ者だ。そんな人間が跋扈し、治安維持まで行っているのだから、よくなるわけもなかった。とはいえ、である。いくら少女一人が無防備に路地裏を通っているからと言つて、さすがに神まで無差別に襲う者もいなかった。

そう、少女は神だった。竈の女神、ヘステイア。それが少女の正体だった。

真つ当な感性を持った親なら一人で歩かせないような道でもなんのその、機嫌良くステップを踏みながら、彼女は進んでいく。

危険な通りを抜けて、中小ファミリアのホームが乱立する場所までたどり着いた。そこまでたどり着けば、さすがに無体を働く者もない……が、まあもとより少女には関係のない事でもある。

行き先は決まっていた。ファミリアが並ぶ中でも、一風変わった建築様式の一棟。アルテミス・ファミリアのホームだ。

ノックもそこそこに、ヘステイアはドアを開けた。

「やーあ、アッルテツミスー！ 遊びにきたよー！」

「いらっしやい、ヘステイア」

急な訪ねに、しかしアルテミスもにこにこしながら快く迎え入れた。

ヘステイアは、下界新参者の中の一柱だ。最近降りてきて、しばらく神友であり、大規模ファミリアの運営者でもあるヘファイストスのところで居候をしていた。しかしいつまでもそんなことをしているものだから、彼女の怒りに触れてホームをたたき出されてしまった。

曰く、少しは下界で苦勞でもしてきなさい、と。

という訳で、今はほとんど廢墟になった教会に一人住んでいるのだが。たまに寂しくなつて、こうして同じく神友であるアルテミスのお邪魔していた。

彼女のホームへ居候になろうと思えばできただろう。規模こそ弱小であるが、アルテミスのファミリアは、今では知らぬ者などいない超有名ファミリアなのだ。当然のごとく金も有り余るほどある。それでも居着かなかつたのは、主神一柱眷属一人のホームに上がり込むのは気が引けたのと、さすがにヘファイストスに怒られて反省した、というのがある。

「ちようどお茶を入れた所なんだ。さあ、入ってくれ」

「わーい♪」

が、まあちよくちよくというか、かなり高い頻度で尋ねてもいる。反省はしているのだ、一応、本当に一応は。

「おや、ヘステイア様。いらっしやい」

「やあトッド君。今日も精が出るねえ」

ちようど通りかかった、唯一の眷属に挨拶をされ、彼女も返す。頭は下げられなかつたのは、彼が大荷物を抱えて移動している所だったからだ。

「何も無い所ですがゆつくりしてってください。俺はあまりアルテミス様の相手をできないので、感謝していますよ」
「ボクもそう言ってもらえるとありがたいよ」

人当たりのいい笑顔を浮かべる男に、ヘステイアもにっこりと返した。

彼は急いでいたのか、そのまま奥へと引っ込んでしまう。確か奥は、かなり堅固な作りの研究室だったか。一度興味を持って、のぞかせてもらつたことはあつたが。何をしているのか全く分からず、それ以降向かつたことはない。さらに奥は倉庫らしいが、それもまあ、興味の埒外だった。

「トッド君は相変わらずいい子だねえ」

「うーん」

言うへステイアに、しかしアルテミスは困ったようになつた。

「確かにいい子ではあるんだけどね。あんなに愛想いい相手つて実は珍しいんだ。彼は何というか、人見知りと言うより、身内とそれ以外をきつぱりと隔てるタイプだね。人によって対応の温度差が激しくて、ちよつと困つてる」

「へえ、とてもそうは見えないけどね。ここに来る子にはいつも歓迎ムードだし」

「そりゃあ、わざわざホームにまで来る人にはね」

あくまで困り顔のアルテミス。まあ、ファミリアを運営するとなれば、それなりの苦労もあるのだろう。その程度に思っておく。

リビングに案内されると、彼女はちよつとお茶をしている所だったらしい。奥からティーカップのセットをもう一つ取り出し、へステイアの前に置いた。

とりあえず紅茶を一口すすって、なんとなしにホームの中を眺める。どこか特別なところがあるわけでもない、ごく普通の家だ。冒険に必要なものは奥の倉庫に詰まっているらしいから、なおさら一般家庭のそれと大差ない。あえて言えば、二人で住むと考えると、ちよつと寒々しいといった所だろうか。

「そういえば、アルテミスは眷属を増やさないのかい？　これだけ有名なら、希望者なんていくらでもいそうなんだけど」

「うーん、それが、条件が結構厳しいというか、局所的というかだね。あまり合致する人がいないんだよ」

うなりながら、これは多少というよりは、本当に困つたように顔を顰めている。

「うちのファミリアは、分類上だと研究ファミリアになるんだ。一応商業系や生産系の真似事もしてるけど、一番はそこなんだよね。でも、オラリオに来る人は基本的に冒険者志望だろう？　極端に言ってしまうと、研究には神の恩恵ファルナすら必要なくてね。周りからはなんだかよく分からないファミリアとして、入団そのものの条件が合わないんだ」

「ふーん。なんだかよく分からないけど大変だねえ」

「ヘステイアの方こそ、眷属はどうなってるんだい？」

問われて、彼女はしよんぼりしながら答えた。

「勧誘してはいるんだよ。それでも、大抵はすでにどこかに所属してるんだよね。たまに見つける新人も、わざわざ眷属ゼロの零細ファミリア未満には来てくれないって具合さ」

「そうなんだ……やっぱり眷属集めって大変だね」

「ねー」

と、和やかに話を進める。

会話の中で、ヘステイアが意図的に秘した事はあった。それはつまり、アルテミスファミリアが探索系ファミリアとして大々的に人を集めれば、引く手数多だろう、という事だ。

アルテミスがかつて運営していたファミリアは、まさにそうだった。そして、壊滅した。

当時まだ下界に降りていないヘステイアだったが、我が子が皆死んでしまった彼女が慟哭したのは想像に難くない。そして、死亡率が高い探索系ファミリアとして立ち上げるのは半ばトラウマになっているであろう、という事も。

神友の、一番心の柔らかい所に、わざわざ触れることはない。ヘステイアなりの気の使い方だった。

ヘステイアは気分を変えるように、ぐつと拳を握った。そして、力こぶを作るように（ぜんぜんできていなかったが）むん、と腕に力を込める。

「でも、ボクは諦めないぞ！ かならずいい子を眷属にしてみせるぜ！」

「うん、頑張つて」

ぱちぱちと拍手をするアルテミス。挙動はどこか力ない。それは、必ずしも、彼女が探索系ファミリアを作ることに対する不安だけではないだろうと思っていた。

ヘステイアがアルテミスと下界で出会って、いくらか経過した頃に分かったことだが。彼女の神としての気配が、どうにも薄かった。神の中には、神の力の気配をゼロにできる者もいると言うのだが（ヘス

ティアはそんな神に会ったことがないが。彼女のそれとは、また違った気がした。こればかりは、深く聞いてもはぐらかされるので、ヘスティアはそのうち、そういうこともあるのだろうという程度で納得したが。

そのまま、いくらか雑談をしていると。ドアがノックされた。アルテミスは立って、ドアにまで向かっていく。

「はい、どうぞ」

「こんにちは、アルテミス様」

「来ちゃいました……」

訪ねてきたのは、アイズとレフイーヤだった。

部屋を案内されてくると、二人はヘスティアに気がついた。

「やあ二人とも、先にお邪魔してるよ」

「あら、こんにちはヘスティア様」

「お久しぶりです」

ペこり、と二人は挨拶をして、テーブルに座った。

アルテミスはさらにティーカップのセットを二つ出し、さらにお茶も入れ替えて、二人のために振る舞った。

アルテミス・ファミアは、訪ねてくる人間こそ固定されているものの、その頻度はかなり高い。そのため、椅子や食器といった調度品は、二人暮らしとは思えないほどに多かった。ヘスティアや今の二人はもとより、ミアハ・ファミアやタケミカヅチ・ファミアの人間もそこそこ訪ねてくる事を知っている。まあそれ以外にも、アダマント神域金属製造から向こう、来客の足は絶えないらしいが。

「今日はお仕事お休みですか？」

「うん。だから久しぶりに、昼間に遊びに来られたわけさ」

「毎日……大変ですね」

アイズとレフイーヤは、ともにいい子だった。なので、すぐに仲がよくなった。といっても、同席した事はあまりない。

彼女ら二人は、以前クエストで毎日のように訪ねてきていた、と聞いた。現在はクエストも終了し、訪ねる理由もなくなっているのだが。それでも、なんだかんだ縁ができたからか、たまに訪れてはいる

らしい。

出会う頻度が少ないのは、主に訪ねる時間が原因だった。ヘステイアは仕事が終わってから来る事が多いため、だいたい夕方から夜来る事が多い。それに対し、彼女らが主に訪ねるのは昼ごろだ。そのため、遭遇するのは珍しかった。

唯一の難点と言えば、彼女らがあのいけ好かないロキ・ファミリアの人間という事だが。まあそれを理由に、差別をするような神格ではない。余談だが、彼女らに自分の所へ改宗^{コンバージョン}を勧めて断られた事があり、ぐぬぬった事もある。

ととと、と音を鳴らして、アルテミスが戻ってくる。お盆にのせたティーカップのセットを二人の前に置いて、それぞれお茶をついだ。

アルテミスは席に着き直し、アイズとレフイーヤに聞いてみる。

「君たちの宝剣^{シザウロス}の調子はどうだい？」

反応は対照的だった。アイズは自信満々に、レフイーヤは何か思うところがありげに。

「嵐碧宝^{ラファエラ}の剣の調子は……とてもいいです。凄く、強くなつた実感があります」

「私の賢者^{ワイスマン}の杖は、正直……。アイズさんみたいに方向性がはっきり分かっていないというのもありますが、正直持て余しています。魔導力^{エビセス}製の武器より強力なのは間違いないんですが……」

アルテミスは小さく頷きながら、神らしく導くように言った。

「トッドの作るものに悪いものはない。少しずつでも解き明かして、自分の経験と力にしていくといい」

アルテミスがふふ……と笑った。ヘステイアもつられて、小さく笑う。

下界の子の成長は早い。そして、底なしだ。彼らは懊悩し、悔やみ、時には後ろも向く。しかしそれでも、最終的には進むのだ。その姿を見るのは、神最大の楽しみだった。

それから暫く、他愛のない話をしていたが。急に、奥から絶叫が聞こえた。

「あああああああー！」

次いで、がっしやんがっしやんと何かが崩れる音がする。さすがにそれ以上——つまり研究資材を壊すような——音は聞こえなかったが。

「トッドが壊れたねえ」

「はい」

「いつもより、激しい」

「たまに壊れるねえ、トッド君は」

四人とも慣れたもので、その音を聞き流す。

トッドは優秀な研究者だ。実際、当代最高の研究者と言ってもいいだろう。が、それは彼が迷わないという事を示してはいない。むしろ、彼こそがもつとも苦悩の中にいると言っても過言ではない。

まあつまり、割としよつちゆう研究に行き詰まるのだ。そうするとどうなるかと言うと、まあ聞いたとおりに壊れる訳だが。今日の崩壊は、むしろいつもよりいくらか早いと言ってもいいくらいだ。普段であれば、もうちよつとだけ時間がかかる。

宝剣シザウロスの発表から向こう、トッドの研究は一応落ち着いていた。落ちて着いてしまった。現在は依頼のある宝剣シザウロスを作りながら、新しい研究テーマを探っている状態だった。その研究テーマが定まらないため、とにかく何でも試してみる。試行錯誤しようにもテーマそのものがふわふわしてるため、壊れる頻度は高かった。

いったん音が落ち着く。と、彼は大股で奥から出てきた。白衣は着ていない。多分、研究室に投げ捨てたのだろう。

部屋に入ってくるなり、彼はそのまま、家の規模からしたらかなり大型なキッチンに引っ込んだ。それを見て、全員が思った。ああ、今日の研究は終わりだな。

「今日の夕飯はおいしくなりそうだねえ」

アルテミスがとろけた顔で言う。それを見て、アイズとレフイーヤは羨ましそうにしていた。

「いいなあ……」

「私たちは夕食前にホームへ帰らなきゃですからね」

二人とも、トッドの料理が異様に上手な事を知っている。

彼曰く、研究は仕事、料理は趣味らしい。元が凝り性であるからか、料理は訳が分からないレベルでおいしかった。そして、研究が早めに行き詰まると、料理をする時間が長くなる。つまりそれだけ手の込んだものが多くなり、結果味も上がるのだ。

「ヘステイアは食べていくだろう？ トッドも多分そのつもりで作ってるよ」

「いいのかい？ それじゃあご相伴にあずかろうかな！」

「いいなあ……」

と、再びアイズ。彼女はかなり本気で羨ましそうにしていた。

ロキ・ファミリアの食堂で出る料理が、まずいわけがないだろう。何しろあれだけ大きなファミリアだ。料理人だって相応の人間がいるに決まっている。だが、それでもやはり、トッドにはかなわないみたいだ。

ロキ・ファミリアのそれよりおいしい。その事実には、ヘステイアは特に意味のない優越感を味わっていた。悪い神格ではないが、小物ではある。

日も暮れ始めると、アイズとレフィーヤは帰って行った。

それから暫くして、トッドが厨房から顔を出す。

「ヘステイア様、今日は何カリクエストがありますか？」

食べていく事を全く疑わない口調だ。

ヘステイアも当然のように返す。

「なんでもいいさー！ トッド君のご飯はどれも絶品だからね！」

「了解です」

言うのと、また厨房へと消えていく。

ちなみに、ヘステイアは食事をしていくにあたり、金銭を払ったことはない。これは彼女に限った話ではなく、誰でもそうだが。

以前、ヘステイアは言ったことがある。さすがにこれだけのものを食べさせてもらって、お金を払わないのは悪い。せめて材料費だけでも納めさせてくれないか、と。

その時、彼は、

「俺の料理は人に振る舞うためのものです。けして金銭を対価に要求

するものではありません。俺の気持ちをくむのでしたら、なおさらお金など払おうとしないでください」

と、断固とした口調で言われた。それは、嘘を見抜くまでもない、頑ななものだった。

以来、彼女は彼に対してその手の話をしたことがない。すれば失礼だからだ。

日も完全に暮れた頃だろう。トツドの料理は完成し、広いテーブルに並べられた。ヘステイアは、それを小躍りしながら眺めていた。

「アルテミス様、ヘステイア様、ご希望の食前酒などはありますか？」
「トツドに任せるよ」

「ボクも」

そう言われると思っていたのだろう。彼の手には、すでに酒瓶がもたれていた。これも、トツドが作ったものである。

彼は凝るものにはとことん凝る。逆に、興味を持たないものにもとことんということになるが。とにかく、その酒もトツドが作ったものだ。

彼は、どこだかかの土地を借りて、酒造場を作ったらしい。そこは彼の研究成果がふんだんに使われており、常に最高品質の酒ができる。造った酒は瓶詰めし、ホームに持ち帰っていた。そして（勝手に）地下を作り、そのセラードで超高速熟成までさせてるか。細かいことはヘステイアには分からなかったが、彼の料理と同じく、酒も最高の味だという事だけは知っていた。

「本日の酒は、八百年相当熟成のもです。どうぞ、お召し上がりください」

「わーいー」

「うーん、いい香りだな」

二柱は差し出された酒の香りを楽しんだ。この芳香だけで、すでに味が約束されていると分かる。

一口舐めるように飲んで、それを味わった。少し辛めだが、まろやかさがその棘を感じさせない。飲むと言うよりも、勝手に流れていくような味の深さと飲みやすさだ。

「やっぱりトッド君のお酒は最高だね！　以前ソーマをいただいたけど、ボクはこつちの方が好きさー！」

「ありがとうございます」

彼は恭しいと言えるほどに頭を下げた。

ソーマ。それは、おそらく世界最高の酒だろう。少なくともヘステイアでは（金銭的な意味で）逆立ちしたって手が出ない酒だった。それを飲んだことがあるのは、トッドが仕入れてきたからだ。曰く、世界最高の酒を一度飲んでみたいとのこと。そのときに、ちようどヘステイアも居合わせたので、飲むことができた。

ソーマはうまかった。が、そのうまさは、殴りつけてくるよううまさだった。確かに最高の酒と言うだけはあるが、しかしそれは飲み手を全く無視したものだ。トッドはその時「高級食材で作ったジャンクフード」と表現していた。それはうがち過ぎだと思ったが、あながち間違いでもない、とヘステイアは思った。

ともあれ、トッドの酒と料理だ。片方でも、オラリオ最高峰のものだと言えるそれら。ましてや、料理と酒は併せて最高のパフォーマンスを出すように調整されている。間違いなくオラリオで一番おいしい料理だった。

「うんうん、最高だよトッド君！」

「ああ、いつも通りいい味だ」

「どういたしまして。そう言っていただけだと、作った甲斐がありません」

ちなみに、酒は夕飯時にしか振る舞われない。酒は頭を鈍らせるから、という至極もつともな理由でだ。なので、基本昼しか来ないアイズとレフィーヤは、トッドの酒を飲んだ事はない。

惜しいな、とヘステイアは思う。今度夕飯に招待してあげればいいのか、とも。まあ、彼女たちとてファミリアの事情というものがあるだろう。ほいほい訪ねられないのは残念ではあるが、仕方がない。

ちなみにこの、トッド製の酒造機と熟成機、なぜだか妙に有名だった。酒の味は取り沙汰にされていないのに変だな、とはヘステイアも思ったが。まあ彼も、それらを秘密にしている様子はない。意図的に

広めている様子もないが。作るに当たり、ギルドくらいには報告しているだろうから、案外そこから漏れたのかもしれない。

夕食を終えて、食後のお茶を飲む。酒とは違い、こちらはトッド製ではないが。使っている葉はいいものなのだろう、味わいはとてもよかった。

食後の休憩を挟んで、ヘステイアは帰ることにした。特に手持ちもなかったため、身支度は必要ない。

「それじゃあ、またね、アルテミス」

「うん。また来てね、ヘステイア」

別れの挨拶を終えて、彼女は帰路へとついった。自分以外誰もいない、侘しき漂うホームへ。

ふと、後ろ髪を引かれる。主神一柱に眷属一人の、小さなファミリア。それでも楽しそうだったなど。

「あー、ボクも早く眷属作らなきゃな」

ぐっと大きく伸びをしながら、彼女は自分を叱咤するようにつぶやいた。

ヘステイアに眷属ができるまでは、もう少しの時間が必要そうだった。

ヴェルフの憂鬱

目を閉じ、神経を集中する。

それはどちらかと言えば、慣れた動作ではあった。鍛冶には、時に極限の集中力を要求される。超がつく高熱に煽られながら、一分の隙もなく槌を下ろす。それは、余人が考えているよりも遙かに難しいことだ。

だから、集中することは苦ではない。だから、何が苦かと問われれば。その態勢のまま、ずっと待ち構えている事だ。何時間も続けている正座は、すでに痺れを通り越して麻痺に近い。今動こうとしてもまともに動けない状態だろう。

それでも、彼——ヴェルフ・クロツゾは待ち続けた。意識を尖らせて、ただその扉が開かれる瞬間だけに構え続ける。

そして、扉が開き。彼はかっと目を見開いた。その先にいる人間が、自分の目的である事を悟って。

「お願いします！ 弟子にしてください！」

それはそれは、見事な土下座だった。下半身に重くのしかかる重圧も、このときばかりは忘れて。綺麗に体を折りたたむ。

出会い頭に土下座された男——トッド・ノートは。

ちらりとだけヴェルフを確認すると、その男を跨いで、ホームから出て行った。見事なまでの無視であった。

事の始まりは、数日前に遡る。

ヴェルフは、自分の鍛冶の腕前に行き詰まっていた。

宝剣シザウロスが発表されて、しばらく時間が経過していた。その間、彼は狂ったように鍛冶場に閉じこもって、鉄を打っていた。上級鍛冶師ハイスマスマでない事など言い訳にならない。特殊武装という事すらもおこがましい、超常的な武器。それを作り出した人間は、本職の鍛冶師ですらないのだから。

ヴェルフは一度だけ、技術公開という事でトッドの鍛冶を見たことがある。それは、どう控えめに表現してもすさまじいものだった。レ

ベルが違いすぎて、何をしているかもほとんど分からないほどだった。あれですら、その後に発表された武器に比べれば、兎戯に等しいというのだから表現のしようもない。

彼には目標があった。決して折れぬ魔剣を作るという目標が。

しかし——ああ——そのの、なんと低レベルな願望であったことか。宝剣シザウロスという、あらゆる意味で魔剣を超越した武器がこの世に現れた。それに比べれば、自分がどれだけ低い位置でふらふらしているかが分かる。

打てるだけ武器を打って、そのたびに絶望し、しかし彼は諦めきれなかった。

自分より遙かにハイレベルな鍛冶を見て、彼のレベルは確実に上がった。鍛冶場の隅に転がっている武器たちは、今までのものに比べれば、数段性能が上だろう。しかし、その程度だ。目指す場所——それすら鼻で笑うような天上——には、全く届かない。

行き詰まり、悩みに悩み、ヴェルフが出した結果は、トツドに弟子入りしようという事だった。とち狂った結果とも言える。

まず最初はホームに突撃した。その結果、興奮のままにまくし立てる。折れない魔剣を作りたいと熱弁した記憶もあるが。数秒後、鼻っ柱を殴り折られた。その衝撃たるや、自分が何を言ったかすら思い出せないほどだった。

それからあの手この手で技術伝授を願ったが、結果はどれもすげなものだった。というか、そのたびにぶん殴られたとも言える。

最終的にいきついたのが、待ち構えての土下座だったが。これもすでに三日目であった。

今日もトツドが外出し、用事を終えて帰ってくるまで正座の姿勢を崩さず待ち構えて。帰ってくると同時に、また弟子入り志願の希望を入れて。

今度の反応は違った。彼は荷物を片手に抱えながら、大きく、とても大きいため息をついた。

ヴェルフの熱意に、トツドが折れた瞬間だった。

「お前みたいに弟子入りを申し出てきたやつは山ほどいたがな」

ぶつぶつと、うめくようにしてトッドが言う。手に持った荷物——
食材か何かだろうか——を、テーブルの上に置いて、振り返る。

「こんなにしつこかったやつは初めてだよ」

「ありがとうございます」

「褒めてない」

彼はきつぱりと（そしてうんざりと）言った。

荷物を置いて、彼は首をこきこきとならした。次いで、壁のハンガーに釣つてあつた白衣を羽織る。ハンガーには他にも似たような白衣が無数にかかつていたが、どれも使い込まれていないものはない。い。

「先に言つとくが」

彼は襟を正しながら、続けた。

「俺は本職の鍛冶師じゃない。元は研究者だ。だから、お前に応える事はまずできないと思つた方がいい」

「それでも俺より数段上の鍛冶師つす」

宣言されるが、ヴェルフの気持ちは変わらなかつた。背筋を伸ばし、トッドの準備が整うのを待つ。

「まあ、それが分かつてるならいいが……いやよくはないが」

ぶつぶつと、うめくように彼はつぶやく。

着付けが終わると、トッドの雰囲気が変わつた。どこか気だるげだったが、意識をしゃんとさせる。目つきまで、どこか鋭くなった。

「とりあえず、折れない魔剣だったか？」

「覚えていてくれたんすね」

「しつこかったからな」

半眼になつて、トッドが見てくるが、今更その程度でひるむなら、そもそもここまですつこく頼み込んでない。

彼はしばらくそうしていたが、やがて諦めたようにため息をついた。

「とりあえず魔剣だ。失敗作でもなんでもいい。一番できがいいのを持つてこい」

「ほーい」

言つて、ヴェルフはすぐさまアルテミス・ファミリアのホームを飛び出た。向かったのは、自分の鍛冶場だ。

魔剣はすでにある。折れないそれを作れるまでは、と自戒していた彼であったが。神域金属アダマントと組み合わせれば、作れるかもしれないと希望を持って、何本か試したものがあつた。

結果は失敗だつた。今までの魔剣のように、耐久回数を超えれば砕け散るといふ事こそなくなつたが。それでも全体がひび割れ、武器としては使い物にならなくなつた。当然、魔法も発動しない。

秘密裏に作つた魔剣は五本。そのうち、一番できがいいと言えるものを引つ張り出す。一応誰にも見られないように、全体に布を巻いた。そして、来た道を駆けるようにして、戻つていく。

鍛冶場とアルテミス・ファミリアのホーム。距離にしてそれなりにあつたが、かなり早く走つたために時間はそれほどたつていなかった。

ホームのドアを開ける。トッドは待っている間、テーブルでお茶をしながらくつろいでいる。

「早かつたな」

言う彼のお茶は、まだ半分ほど残っている。それを一気に飲み干して、ソーサーに置いた。

「庭に出るぞ」

彼は一言言つて、とつとと家の中を歩いて行く。ヴェルフもそれについていった。

庭は、とくに何かがあるわけでもない。狭い空間に、手入れの届いた芝生が生えている。隅の方に一本木が生えていた。季節のせいか、それとも元々そういう品種だからか、種子らしきものは見当たらなかつた。中央に一つ、剣立てがあり、そこに一本の剣が立てかけられている。

トッドは剣を手にとると、肩に担いだ。

「そこに置きな」

指さした先には、つい今し方トッドが回収し、空いた剣立てがある。

ヴェルフは布を丁寧に折り払うと、それを剣立てにおいた。むき身であるため、木製のそれを切らないよう、慎重に。

設置された剣を、トッドは眺めた。剣の背に指を這わせたり、軽く叩いて剣の調子を確かめたり。いくらか試してみても、まあ満足はしたのだろう。小さく頷きながら、剣から視線を離す。

「なるほど、一応神域金属アダマントで魔剣を作ってはみた訳だ」

「魔剣の力に耐えられる鉱石って言ったなら、これしか思い浮かばなかったすから」

「まあそれは正しいよ。不壊属性デュランダルに限りなく近い強度に、精神力を自在に操り、増幅さえする自由度。魔剣の素材にするにはもってこいだ。後はまあ、神域金属アダマントの素材はせいぜい中層でとれるもので、かなり安価に手に入るしな」

それは、彼なりのジョークだったのだろうか。よくは分からない。ただ、顔色も変えずに、肩はすくめて見せていた。

安価といっても、神域金属アダマント登場以降は事情が変わってきている。今までは捨て値で取引されていた素材が、価値を見たものまであるのだ。新合金の登場以降、十倍、百倍の値で取引されるようになっていく。これらは第三級冒険者以下の新しい稼ぎになっているのだから、まあ良いことではあるのだろう。巷ではトッド特需、などと呼ばれるものである。

彼はひとしきり魔剣を確認すると、一歩引いて、剣を鞘から抜いた。見た目は普通の剣だ。どこかに特徴があるわけでもない。売り物にする気がないためか、つばなどもついていない、本当に刀身と柄だけの剣。

「いいか、これが魔導力製エビセスの剣の完品だ」

「おお……」

ヴェルフはうなづいて、その刀身に魅入られた。

トッドが作った剣は、そう簡単に拝めるものではない。魔導力製武器こそ、今ではそれなりに出回っているが。彼が作ったものと比べれば、天地の差だ。大抵は高ランクファミリアが大枚はたいて買っている。ヘアリストス・ファミリアにも、見本品が一振りあるだけだっ

た。これには、高レベル冒険者の方が必要に迫られているため、あまり下手に買い集めてひんしゆくを買わないため、という事情もあるのだが。

「ふッー」

彼は一息短く漏らすと、そのまま無造作に剣を振った。

剣は吸い込まれるように魔剣へと向かい、そして魔剣は、あっけなく両断された。折れも割れもしない、綺麗な切断面でもって、剣立てから滑り落ちる。落ちた魔剣が、分かれた上下ぶつかり合い、小さな音を立てた。

トツドの剣の腕は、目を見開くほど見事な訳ではない。少なくとも、ヴェルフでも見切れる程度だ。それでもこう鮮やかに切れるものなのか。彼の心に、怒りはなかった。ただその武器の美しさに、心奪われていた。

「これがお前の今の地位な訳だ」

剣の切っ先で、破壊された魔剣を指す。

「こんなんじや神域金属アダマントとは言えない。単純に質が悪い。本当に神域金属アダマント同士が斬り合った場合は、絶対に両方とも切れない。理由は明々白々で、お前の能力不足だよ。まずは腕を上げてから出直せ」

「お……おお……すっげえ……！」

魔剣を破壊されて、しかしヴェルフに怒りはなかった。ただ、感嘆だけが胸を占める。本物とはこういうものか。頂点とは、ここまでのものなのか！

「これだけじゃあれだから、ついてきな」

「お……おう」

未だ興奮冷めやらぬ中、声をかけられて、なんとかうめきのようなものだけ返す。

熱に浮かされながら、ふらふらと後をついて行く。案内されたのは、彼の鍛冶場……のようだが、かなり余計なものが多い。鍛冶場というよりは、とにかく何かを作る設備を無節操に一纏めにしたと言った方がしっくりくる。

「先に行っておくが、ここで見たことは他言無用だ」

「うつつす」

彼は炉に火を入れると、脇にあつた作りかけの剣を鍔で掴んだ。

剣、というのは便宜上の呼び方だ。それはかなり大きく、そして不格好だった。剣の刀身を斧のそれにすればこんな形状になるのではないだろうか。そう思える代物だ。

「これは何つつすか」

「特注品だよ。オツタルの宝剣だ」

言われて、ヴェルフの喉がおもわずひゅつと鳴った。

宝剣シザウロスの製造方法は、秘中の秘だった。魔増トラウムと魔導力エビセスの製造方法は、大々的に公開された。これはギルドの成果だとも言えるが、逆に、宝剣シザウロスの製造方法までは引つ張り出せなかった。前者の作り方を聞き出し、公開させることで、大きな借りを作りすぎた結果でもある。

つまり、ヴェルフはこれから、トツド以外で宝剣シザウロスの作り方を、たとえ一片でも知る唯一の人間となる。

オラリオの炉は、魔石によつて運用される。当然コークスやらも使われないことはないが、やはり一番の燃料は魔石だ。なので、温度がピークに達するのも早い。炉はすぐに煌々と赤く燃え、膨大な熱量を発した。

トツドはそこに剣を差し込んで引き、槌で叩き、さらに金属を上乗せするように纏わせる。

(積層構造?)

ヴェルフの目からはそう見えたが。それが正しいのかは分からない。ただ、自分の目から見ても問題ない部分まで鍛え、時には針のようなもので線を入れて、何遍も積み重ねているように見える。

「宝剣は」

熱気に煽られ、滝のように汗を流しながら。ぽつぽつと、トツドは語り始めた。

「基本的には魔導力エビセスと変わらない。というか、魔導力エビセスの発展系が宝剣シザウロスだ。力の効率化と変換はもちろん必要だが、それ以上に重要なのが、力の出し場所と逃し場所だ。これがなければ、あるいは足りなければ、自壊する」

視線は鍛えている武器から動かない。手の動きにも澱みはない。もしかしたら、言葉すらヴェルフに向けられたものではないのかもしれない。それでも彼は、訥々と語った。

「言うまでもなく繊細な武器だ。が、武器である以上、多少の問題で機能を果たせないようじゃ話にならない。そのためには強度が必要だ。どんな過酷な状況でも問題なく機能を果たせる強度が。そこまでたどり着けたのは、実は結構前の話だな。汎用性に問題なしと判断できたのが、つい最近だというだけで」

それ以上、彼の言葉はなかった。ただただ、武器を鍛える音だけが響く。

彼の作業は、観察する事だけに集中しても、疲労を要求された。それほどまでに高度で、繊細で、自分の何十歩も先を行く技術だ。

何時間も経過し。トッドの手はやっと止まった。やっと汗を拭い、剣を元あった台の上に置く。どうやら、これでもまだ完成ではないらしい。もつとも、現時点でどれほどの完成度なのかは、ヴェルフにははかることもできなかったが。

やっと集中を途切れさせ、大きく息を吐きながら肩を解すトッドと、彼はヴェルフの方を見て言った。

「なんだ、まだいたのか」

「うつつ。神をもうならせるその技術、堪能させてもらいました」

深々と頭を下げる。トッドはどうでも良いというように手を振った。

「かまわんが。何度も言うが、ここで見たことは他言無用だぞ。将来的にはともかく、まだこの秘密を明かすつもりはないんだ」

「安心してください……っっていうのも変っすけど。俺程度じゃまだ、何をやってるかも分からなかったっす」

「ならいいが」

どうやら、今日の作業はこれで終わりらしい。トッドに「もう来るなよ」と一言添えられて、ヴェルフはホームを出て行った。途中、いつの間にか帰宅していたアルテミスに挨拶をしながら。

「うっしー」

久方ぶりに外の空気を吸いながら、ヴェルフは自分の体に、灼熱が渦巻いているのを自覚した。

超常的な合金の発明。そして、その製造。生半な事だと舐めたつもりは毛頭ない。しかし、その程度の認識では全く足りなかったのも、また事実だった。

「まだまだだ！ 俺なんか！ 全然まだまだだった！」

外で吠える。途中、彼を何事かと眺める者もいたが、そんなものは全く気にしない。

神域金属^{アダマント}。そう、神の領域の金属。そう言う事が許された、唯一無二の超絶合金。自分は、その製造の、まだ麓に踏み入れたにすぎない。

同時に、確信する。もしそれらを上り詰めれば、いつかは絶対に折れない魔剣にたどり着くだろう、と。トッド・ノートが作り出した、宝剣^{シザウロス}みたい。さすがに、あれだけの性能を出せるかは分からない。目指す先としては、悪くない。本当に、全く悪くない。

熱気は全く静まらず、むしろ燃え上がり続けた。

「うおおおおお！」

「うるせえー！」

吠えていたら、背中からトッドに蹴飛ばされた。ホームの入り口で叫んでいたのだから当然だが。

それから数日、ヴェルフは何かにとりつかれたかのように、剣を打ち続けた。そんながむしやらかな行為で、腕が上がるほど鍛冶は簡単な行為ではない。それでも彼は、気絶するまで打ち続けた。

当たり前に、彼が目指す場所には全く足りない出来のものばかりだったが。しかし、倒れ伏して床に寝転がる彼の顔は、どこか満足そうだった。

オツタルの力

オラリオ南方にあるフレイヤ・ファミリア本拠である地、戦いの野。ホームというのは主神の色が出る。例えば、ガネーシャ・ファミリアであれば陽気な雰囲気であつたりだとか。とはいえ、人が増えればそういったものが薄れていくのも常だ。フレイヤ・ファミリアのホームも、例に漏れなかった。フレイヤの性質らしく荘厳な雰囲気こそあるが、やはり人が多い分だけ希釈される。

その日は、特にそうだと言えた。ファミリア自体が、どこか浮き足立っている。主神であるフレイヤすら、どこか落ち着きなく、お茶請けのクツキーを口に含んでいた。

フレイヤは今、私室ではなく、ホームの上階、見通しのいい部屋にいた。そこからホームを見下ろす。何が見える訳でもないが、ホーム内の変化くらいは分かるかもしれない、と思つて陣取っていた。

近くには、オツタルが控えている。ランクアップし、ほぼ上限いっぱいだったステイタスも改めて延びるようになった。そのため、最近をよくダンジョンに潜っていたが、この日だけは、彼もホームにいた。主神であるフレイヤがやや落ち着きないのと同様、彼もまた、表面には出さないものの、そわそわとしていた。

(いかな……)

入り口の前で、不動の姿勢を保ちながら、しかし彼は自戒した。

(フレイヤ様を差し置いて、俺が浮き足立つなど)

短く思い、瞑目する。一瞬の事だったが、それだけで彼は意識を切り替えた。といつても、それも長くは続かず、やはりまた心が浮つき始めてしまったが。

彼は自分のこらえ性のなさに、ひっそり嘆息した。そして、自らを戒めるように念じる。

(いかな。新しい武器が来る程度の事で、このような……)

かぶりを振——ろうとして、それもまた自制する。

みつともない。思わずにはいられない。これではまるで、新しいおもちやを楽しむにしている子供と大差ないではないか。実際そうだ

と言われれば、まあ確かに否定はできない。だからこそ、表面上だけでも取り繕う。少なくとも、オツタルはそれが、自分に必要なことだと信じていた。

逸る鼓動を鎮めようとして——わっと、ホームから声が響いた。

反射的に、オツタルの耳がぴくりと動く。同じように、フレイヤがお茶菓子に伸びる手も、ぴたりと止まった。

忙しない足音が、ホームに響く。普段であれば、注意の一つでもされる無作法だろう。だが、この日だけは、それを指摘する者はいなかった。勢いはそのまま、扉を開ける音に変わる。

「団長、フレイヤ様、届きました！」

「来たのね」

「……………」

つぶやくフレイヤとは対照的に、オツタルは沈黙したまま首肯しただけだった。

二人して、先行く団員に連れられる様にして、ホームの入り口へと向かっていく。団員の足は速く、二人をせかすようでもあった。とはいえ、オツタルも、人のことは言えない。普段よりかなり足早になっているのは自覚していた。よく見れば、フレイヤの足取りも、普段より軽い。

二人が向かったのは、ホームの中でも一等上な貴賓室だった。部屋自体はさほど大きくないが、ただ一室にかけた金銭は、ホームの中でも一、二を争う。普段は、ギルドや大ファミリアの公的な来賓を迎えるためのものだが。

部屋につくと、ファミリアの団員が、山のようにそろっていた。さすがに中をのぞいたり、話を盗み聞きしようとするような不調法を行う者はいない。が、誰も彼もが、そわそわとしながらそこで待機していた。

先行していた団員が、ドアを開ける。中に入って良いのは、フレイヤとオツタルだけだ。彼らが入ると、団員たちは無礼にならない程度まで距離を空けた。

中に入って、オツタルはドアを閉めた。

室内で座っていたのは、トッド・ノートだ。外行きという事がか、いつもよりいくらかちゃんとした恰好をしている。髪も整えたかのような跡があった。そして——これが一番重要なのだが——彼の身長に近いほどの巨大な何か、布にまかれ、膝の上に乗っている。かなり重量があるようで、トッドを乗せているソファアが、かなり深くまで沈んでいるのが分かった。

フレイヤは、もう隠す必要はないとも言うように、微笑む。そして、問いかけた。

「それが宝剣シザウロスかしら？」

「ええ。注文通り、オツタル殿専用調整したものです。申し訳ありませんが、受け取ってもらえませんか？ 大剣だけあって、かなり重いのですよ」

「分かったわ。オツタル」

「はっ」

小さく返事して、トッドの近くへ寄っていくオツタル。

トッドが、立ち上がりながら布巻の剣を持ち上げた。Lv. 3……いや、今はランクアップしてLv. 4だったか。彼ほどの能力があれば、剣を重く感じることもないだろうが。それでも重量感を感じるのは、それだけ慎重に扱っているからだろう。

オツタルは巻いてある布を取り払って、それを露出させた。

鞘に収まった剣は、少々特殊な形状をしていた。刃の一方だけが弧形に変化している。その場で抜いてみると、どこか斧を思わせる形状となっていた。さすがにこの部屋で振り回すことはできないので、手に持っただけだが。たったそれだけでも分かることはあった。

「オツタル、どうかしら？」

「恐ろしく手になじみます。信じられないほどです」

言葉に、トッドは当然と言うように頷いた。

「彼の剣筋、もつとも振りやすい重心、その他諸々……すべてをオツタル殿に合わせてます。ただの剣としてだけ見ても、今までのどんな剣より優秀だという自信がありますよ」

「あら、嬉しいことを言ってくれるわね」

フレイヤが微笑む。その笑みは、どこか熱っぽさを感じさせた。

「じゃあ、行きましようか」

女神が言うと、全員が歩き出す。ドアを開けると、ざわりと皆の喧噪がささやかれた。

そのままオツタルを先頭に、ホームを出て行く。

まだこの大斧剣の性能は知らないが、アイズと戦ったときの事を思えば、ホームの中で扱っていいものでもない。庭で使えば庭園そのものが消し飛びかねないし、下手をすれば、ホームにまで致命的なダメージを与えかねない。

ホームを出て、オラリオ南を目指す。向かう先は、思い出深い場所、アイズと戦いランクアップまで果たした、あの荒野もとい闘技場だ。

向かったのは、オツタル、フレイヤ、トツドだけではない。その場にいたフレイヤ・ファミアの団員多くが一緒だった。列の中には、アレン、ヘデイン、ヘグニといったフレイヤ・ファミアの幹部たちもいる。誰もが、新しく作られた宝剣シザウロスがどれほどのものか、一目見て見たかった。

フレイヤ・ファミアの行列に、メインストリートを歩く一同がぎよつとする。中には、何かのイベントかと思つて、流れに混ざる者もいたが。まあ見られて悪いものでもないし、そもそもイベントだという事を否定できる者もないので、あえて追い払ったりはしない。「トツド」

と、背後で声がした。言葉を発したのはフレイヤだ。凜とした佇まいを思わせる声を、オツタルが間違えるわけがない。

トツドは、軽い調子で答えていた。オツタルとしては、もつと敬意を払えと言いたい所ではあったが。彼の主神であるわけでもなし、さすがに高望みだろう。思うところはあれど、口にはしなかった。

「なんででしょう?」

「アルテミスの事について少しね。彼女があなたに隠し事をしているのは分かっている?」

「ええ。アルテミス様は隠し事が下手なので」

「では、その内容も?」

「すべてとは言いませんが、おおよそは。俺に言わないと言ったことは、聞かれたくないという事なのでしょう。ならば、わざわざ詮索はしません」

「そう……」

つぶやくフレイヤの声色は、どこか不満げだった。これは……不安だろうか。

「彼女が口にしないなら、私にも言う権利はないわ。でも、気にしてあげた方がいいわよ。彼女は、その……ごめんなさい、やっぱり言えないことだわ」

「いえ、ご忠告だけでありがたいです」

それに、とトツドは続けた。

「アルテミス様が何も言わないように、俺もアルテミス様には言わず、可能な限りの準備はしています。これには気がついてないようですが、まあ、秘密ごとに関してはお互い様でしょう。アルテミス様が俺に言わないように、俺もアルテミス様には何も言わずに話を進めます」

一瞬、フレイヤがきよとんとしたのが気配で伝わった。続いて、くすくすと上品に笑いながら。

「あなたはいい眷族ね。いえ、悪い眷族かしら？」

「さあ、どうでしょう。結局の所、どちらかは、結果しか語ってくれそうにない。そんな気がしますよ」

「あの子の事、ちゃんと見てあげるのはよ。普段はそう見えないように振る舞っているけれど、あれで重いものを背負っているのだから」
「もちろん」

盗み聞きをするつもりはなかったが。両者ともに、特に話を隠すつもりはなかったのだろう。自然と会話のすべてが聞こえていた。

オツタルはそれに対し、何を言うつもりもなかった。できることと言えば、素知らぬ顔で進む程度の事だった。

オラリオ市壁の南門へとたどり着く。衛兵は当然立っていたが、先にギルドへ話を通していたため、何の問題もなく通り抜けられた。

オラリオの外には、ギルドの職員が幾人か、状況を確認するために

待機していた。後は、なぜだかロキ・ファミリアの主神と、幹部が何人か。中には、オツタルと激戦を繰り広げたアイズもいる。

「あら、ロキ・ファミリアがなんているのかしら」

「へっへーん、あんたらが今日ここで宝剣シザウロスの試験をするのはギルドで確認済みや！　うちらも第二の宝剣がどれほどのもんか、確認したいと思ってな」

「ギルドで、ねえ……」

「し、仕方ないじゃないですか」

フレイヤに睨まれて、ギルド職員はひるみながらも答える。

「どのファミリアが都市外へ出るかは基本公開情報なんですよ。隠すとギルドが後ろ暗いことをしてるなんて言われかねませんし……。こちらも事情が事情ですからなるべく秘密にしようとは思っただんですよ？　ですがピンポイントで確認されては公表せざるを得ず……」

「まあ、そういう制度だものね。仕方ないわ」

どうせ見物人がついてきてもいるし。つぶやいて、フレイヤは諦めたようだった。

「どうせ遅かれ早かれよね。オツタルが迷宮で戦えば、嫌でも割れてしまう情報ではあるわ。ライバルに多少の情報提供くらい許しましょう。こうなったら、オツタル。できる限り派手に見せつけて頂戴」

「無論です」

女神の切り替えは早かった。多少の力の確認から、素早く変更する。

「オツタル」

トツドから声をかけられる。そして、手の中に紙を渡された。二つ折りで、中に何かが書いてあるようだ。

「フレイヤ様が楽しみにしてるから、性能は秘密にしたが。全力で使うっていうなら話は違ってくる。あんただけでも性能を把握してくれ」

「ああ。配慮痛み入る」

言って、オツタルは紙にさっと目を通した。それで、大体の性能は

把握した——そこから想定される出力も。

彼は紙を持ったまま進んだ。返してもよかったが、これから起きることを考えるとどちらでも同じではある。

鞘から大斧剣を引き抜き、前に進む。十歩、二十歩……それくらい進んだあたりで、誰かが言った。

「いや、遠くねえ？」

疑問も無視して、オツタルはさらに進んだ。

荒野に静かな風が舞いすさぶ。ほんの数週間前に感じた、激闘の足跡。乾いた砂が運ぶそれは、オツタルにはむしろ心地よいくらいだった。ランクアップの足跡はもとより、久しく感じた激闘の涼風さえ含めて。

観客が小さくなってきたところで、オツタルは足を止めた。手に持っていた紙を捨て、剣を構え。そして、大斧剣をいきなり最大出力で稼働させた。

瞬間、爆発が起きた。

「うわあああああ！」

「きゃあああああ！」

観客から悲鳴が上がる。

瀑布にすら思えたそれは、実はただの熱風だった。ただそれがあまりにも高温であつたため、吹き荒れた風が、爆発を思わせただけで。近くで丸められ、捨てられた紙は、一瞬のうちに灰になって消滅した。熱気の上昇は止まらない。ただの熱は空気を焼き、視界すらも焼きかねないほどだ。それでも、オツタルに熱さは感じない。この専用武器の、異様な性能の高揚こそあれど、発揮される灼熱の影響は、ひとかけらとて体に障害を与えない。

そのまま、剣を三度ほど振ってみる。ただの剣という部分だけでも、以前持っていた魔導力製のそれとは比べものにならないほどなじむ。加えて、特性の調整がされたそれは、オツタルの身体能力を二段も三段も上げていた。

(素晴らしい！)

心の中で歓声を上げる。想定を遙かに超えた武器の出来だ。

(なるほど。アイズ・ヴァレンシユタインもこれを感じたか。ならば、俺に挑戦し、勝つつもりであつたのも頷ける)

ただ剣を起動し、数度振つただけでそれを感じさせる。麻薬のようなものだ、と思った。確かにこの高揚に勝るものはない。

「一撃、試しますー!」

オツタルはフレイヤに向けて声を上げた。声を届けたかつたのは、彼女にだけだったが。その場にいた全員にも聞こえていただろう。トツドが、大声で皆にしゃがむようにと指示するのが聞こえた。

剣を大上段に構える。そして、力の奔流を制御した。それは、思っていたよりあっさり、そして想定より強力に凝縮された。

剣が生まれた。

大斧剣から炎が膨れ上がる。ただの熱の塊は、ついに空気すら焼きだした。煌々と、紅蓮の刃が膨れ上がる。大斧剣から延長して、およそ十メドルほどだろうか。巨剣が生まれ、周囲のいかなるものをも焼き尽くそうと大気の渦を作る。

大延焼が振り下ろされる。

爆発が起きた。

いや、それは爆発と言っていないものかは分からない。ただとにか、嵐のように風が舞った。暴風が流れるものの、衝撃波はない。近くにいれば、それから生み出される熱風だけで焼け死ぬほどの熱量。大分遠くにいた観客たちも、影響は無ではなかつただろう。全身が焼かれるような高熱を感じているはずだ。

振り下ろされた巨剣は、何にも触れなかつた。

超圧縮熱の剣は、確かに地面に振り下ろされた。しかし、地面はその熱量に負けて、瞬時に蒸発した。それを免れた部分すら、溶岩化し、刀身に接触することさえない。

オツタルは剣の機能を停止した。そして、鞘に収める。機能を終われば、帯びた熱すら瞬時に分解し、平常へと戻った。残心をしながら、オツタルはそれでも、笑みを抑えきれなかつた。いい剣だ。本当に、とてもいい剣だ。

振り返って、観客の元へと戻っていく。そのままフレイヤの元まで

向かい、そして跪いた。

「見ての通りでございます」

「素晴らしかったわ、オツタル。それに、トツドも。良い仕事をしてくれたわ」

「彼に見合う武器との注文ですからね。これくらい当然です。習熟すれば、さらに力も増すでしょう」

オツタルは立ち上がると、今度はトツドの前にまで進んだ。

「この剣の銘を教えてください」

「イフリート紅皇主。それがこの剣の名だ」

「イフリート紅皇主か……。さすが炎の魔人の名を冠するだけはある。素晴らしい剣だ」

「お褒めにあずかり」

二人が、ほぼ同時に、にっと笑った。

フレイヤがにこりと瀟洒に——それでも抑えきれぬ興奮をたたえて——トツドに言った。

「改めて、あなたの実力が確かだと確認させてもらったわ。それで、うちの他の子供たちの剣も頼みたいのだけど……」

「おおーっと、そいつはちよい待ちー！」

待ってました、とばかりにロキが言う。実際、このときを待ち構えてはいたのだろう。

へっへっへっ……と笑って詰め寄る姿はまるでチンピラだが、この場でそれを突っ込む人間はいない。

「実はもううちの子らの武器作成を予約済みやで！ フレイヤ・ファミリアに行き渡るんはその後やー！」

「うそっ!?! ……まったく、ずるいじゃない」

「いやあー、よかった。やっどドヤれたで！ まったく、いつドヤれるかと待ちに待つとつたけど機会が来てくれてよかったわー」

にっこにっここと、そりやもういい笑顔でロキが笑う。

一方、フレイヤは拗ねたように唇を尖らせて、トツドを見る。彼は、見られて肩をすくめるだけだった。

「仕方ないでしょう。模擬戦の後、すぐに予約を入れてきたんですか

ら」

「おかげでファミリアの財政も大分傾いたけど、それだけの成果があるって見せてもろたからなー。いやー、今日はええもん見たし、買って正解だったと再認識させてもろたわ」

「してやられたわねえ。まあ、仕方ないわ」

「ま、これも試験段階から関わってたうちのの特権っちゅーことで」
「くう……」

珍しく——本当に珍しく、主神が表情を崩して悔しそうにしている。

まあ、気持ちは分からないでもなかった。宝剣がファミリア主力級に行き渡り、下位の援護要員にも魔導力製武器が行き渡れば、それこそ踏破階層更新も夢ではない。オラリオ全盛期、ゼウス・ファミリアが打ち立てた記録を破ってた。

「まあさすがに全員分っちゅー訳にもいかんかったけどな。なんやねん一振り最低二十億ヴァリスって」

「それだけの価値があるとは自負してますよ」

「それ以上の価値があるのはうちも認めとるわ。でも、もうちよつと勉強してくれてもええやん!」

「あのですねえ。一振り打つのにどれだけ手間暇かかると思ってるんですか。持ち主のパフォーマンスを最大に生かすため、癖やら何やらを調べるのに三日、実際に打つのに一週間以上ですよ。本当に大変なんです」

「それは分かっとなるけども」

うちの酒があく、とロキが頭を押さええてうめいていた。どうやら、武器をそろえるために断酒まで求められたらしい。

(まあ確かに、値段を抜いても、宝剣を作るのは一種のギャンブルではある)

それは認めて、オツタル。

トッドが専用の武器を作るにあたり、まず最初にする事は持ち主の精神力の質を確かめること、そして武器の形状、バランスを正確に把握することだ。この後者が肝であり、それはつまり、自分の戦法から

癖まですべて把握されるという事だ。他のファミリアに、である。それが漏れないかどうかは、本当にトツドの良心に任せるしかない。

情報が漏れたところでなんとかなるほど柔ではない、とはオツタルも自負しているが。だからといって漏れていいものではないし、それを悪用する輩がいなくても限らない。また、漏れる情報によってはファミリアの育成ノウハウに届く可能性すらある。

とはいえ、その辺の心配は、フレイヤ・ファミリアはしていない。おそらくはロキ・ファミリアもそうだろう。彼の情報管理能力には一定の信用をしている。だからこそ、ロキ・ファミリアは大枚はたいて宝剣シザウロスの注文をしているし、フレイヤ・ファミリアも同じくだ。

(ふ……しかし、これからが大変だな)

異様なほど手になじむ剣の柄を撫でながら、オツタルは微笑んだ。即座に引き締めたが。

宝剣シザウロスがファミリアに行き渡るには時間がかかる。といっても、資金の工面を考慮しても、何年もかかるものではない。その間には彼以外の鍛冶師の腕前も向上して、魔力撃武器ストライクの平均的な質も、トツド製に迫る程度には高まるだろう。

これからのダンジョン攻略は加速する。それをはつきり感じて、オツタルは自分専用専用に誂えられた武器の習熟に集中しようと考えた。

ヘステイアさん家の新人くん

「トッドくーん」

「なーあーにー」

ある日のこと。

ヘステイアはにつこにこに笑いながら、スキップしてアルテミス・ファミリアを訪ねた。アルテミス当人はおらず、どこかに出かけているようだったが。なぜだか最近、彼女がホームを空ける事も多い。どのみち、その日用があるのは彼女ではなかったが。

「えへへー。なんとだね！ ついに！ ボクにも眷族ができたんだよ！」

「そりゃ、おめでとうございます」

胸を張るヘステイアに、トッドはぱちぱちと手を叩いた。

（ヘステイア視点で）万雷の拍手を受けながら、彼女は悦に至っていた。トッドも、調子よくそれに乗る。

今、彼が何をしているでもない事は分かっていた。今一番の稼ぎであるシザウなんちゃらを作るのも、一段落していると聞いている（一本のお値段も聞いた気がするが、その直後の記憶がない。きつと覚えていない方が精神衛生上いいことだったのだろう）。今は、次の研究テーマを決めるための、こまごました研究をしているのだとか。まあつまりは、割と暇なわけだ。

「という訳で、お願いがあるんだけどいいかい？」

「なんすかー？」

庭でひなたぼっこをしながら、あれこれ研究テーマを考えて。そんな風に軽く答える程度には暇だった。

アルテミス・ファミリアは、オラリオでも珍しい研究系ファミリアである。昔は金策のために探索系ファミリアの真似事もしたが（そのため結果的にLv. 4まで上がった）。今はダンジョンアタックをする必要がないほどに、いろいろと潤っている。

「ボクの眷族、ベル・クラネルって言うんだけどね。言っちゃあなんだが、ド素人なんだ。少し面倒を見てくれないかい？」

「いいですよー」

返事は超軽かった。

トッド・ノート。年齢は二十代半ば。研究系ファミリアであるアルテミス・ファミリアの団長にして、唯一の団員。

得意武器はあると言えはあるし、ないと言えはない。徒手空拳から投擲武器まで何でも使える。なんでも、使えない武器を打つのは極めて難しいため、大抵の武器は扱えるよう修行したとか。そのため、少し前までは武器使用マルチウエボンの二つ名を持っていた。今では二つ名も更新され、錬金術師アルケミストになった。

それが、ベル・クラネルが知るトッド・ノートの情報だった。まあ、これも主神であるヘステイアから聞きかじった程度の事ではあつたが。

他にも、人が良いだとか料理が飛び抜けてうまいだとかいう話もあつたが。まあ、それらはこれからする事に必要な情報でもない。

ベルが今いるのは、アルテミス・ファミリアのホームにある庭だった。三方を壁で囲まれ、残りの一遍はホームへとつながっている。こう言ってしまうてはなんだが、ヘステイア・ファミリアのホームよりもしっかりした作りだった。とはいえ、所詮普通の一軒家の延長と言つてしまえば、その程度のものである。

庭の中央あたりで、彼は体を慎重に解していた。今まで特別な訓練をしていなく、また若い体だけあつて、柔軟性だけはそれなりだった。

正面で相対するトッドは、軽く肩を回している程度だった。初対面の時に着ていた白衣は、今は着ていない。半袖の運動着のような恰好で、肩を重点的に解していた。

「んじゃ、ベル君。基礎の基礎の、そのまた基礎を教えるが」

「はいー」

軽すぎず重すぎず、そんな調子で声を発するトッドに、少年は元氣よく答える。

「先に言っておくけど、俺の教えは、修めれば劇的に勝てるようになる類いのものじゃない」

「ええと……はい」

言っていることの意味がよく分からず、返事はぼんやりとしたものになった。

彼は今度は、指のストレッチを始めながら、苦笑した。

「分からないか。そうだな、俺の教えることは、勝てるようになるよ、まず死なないようにするためのものだって事だ。負けない事に重点を置いた教えだ、って言った方がわかりやすいかな？」

「それなら、なんとなく」

言うが、実はそれすらもよく分かっていないのかもしれない、とはベルも思っていた。

トッドがそれを承知していない訳もなかっただろうが。それでも気にせず、習うより慣れろといった感じで、それ以上は何も言わなかった。

彼は腰に下げていたグローブを手にとった。オープンフィンガーの、やたら太いグローブだ。革張りで、ナツクルの部分にはたっぷり綿が入っているのが見ただけでも分かる。グローブをつけて、彼は拳の感触を確かめた。手のひらがナツクル部分に、かなり深く沈む。それだけ緩衝材としての役割を果たしてくれるのだろう。

「ベル君はナイフ使いだったか？」

「はい。ナイフをメインウェポンにしようと考えてます。他の武器も考えたんですが、僕の体格だと……」

「まあ、その身長に体の細さだと、逆に振り回される事になりかねないよな。俺も悪くない選択だと思う。体重差はステイタスの値で埋められないものの一つだ」

彼はグローブの紐を締めながら言った。

「木製のナイフは明日用意しておこう。今日はそのまま我慢してくれ」

「はいっ！」

「先に言っておこう。俺は君に、回避や受け流し重視の訓練を課す。これはさつきも言ったとおり、君には体重がないからだ。攻撃を防御できても、踏ん張れるだけの体重がなければ意味がない。次に続かな

いんだ」

言葉に、ベルは神妙に頷いた。

トッドが左半身を引いて、拳を顎の高さまで上げる。ベルもそれに対して、我流ではあるが構えた。腰を落として、左足をやや引き、自分が一番動きやすいと思える姿勢に。

「行くぞ」

言葉とほとんど同時だった、と思う。最初に頭が揺れて、次いで軽い音が体の中から響いた。

気づけば、ベルは尻餅をついていた。顔がじんわりと熱くなり、それで殴られたのだと気がついた。

まるで分からなかった。すべてが終わるまで、何をされたのかすら。恐ろしく早く、そして鋭い。たった一撃だけで、ベルは今まで出会ったこともないほどの超人的な使い手だと悟った。

「今のはレベル差によるものではない」

トッドが、手を差し出しながら言った。自分を立ち上がらせてくれるようにしているのだと気づいたのは、それから数秒後の事だった。手を取って、なんとか立ち上がる。ダメージはないが、何も分からなかったという衝撃は、未だ深く精神に根付いていた。

「単純に、動きを最適化した結果だ」

「最適化、ですか？」

「そう。体から挙動を可能な限り消して、予備動作を感知させない。戦う場合は、三つの段階が必要なんだ」

言って、彼は指を三本立てた。分厚いグローブをつけているので、見た目は大分不格好だったが。

「対応する、反応する、察知する。この三つだ。対応するは、攻撃に気がつき、それに対処する動きができるという事。反応するは、そもそも挙動に気がついて体を動かせるという事。察知するは、反応こそできないものの、とにかく攻撃をされた事に気がつくという事。俺はこの三つで判断している」

「なるほど……つまり僕は、まだ一番最初の察知すらできてない状態という事ですね」

「その通り。まずは気付く。ここから始めなけりやならん。じやないと、モンスターに何をされたかも分からず殺される、なんて事がある。下級冒険者によくある死因の一つだよ」

「わかりました！ よろしくお願いしますー！」

元氣よく叫んで、ベルはもう一度構えた。今度は先ほどより腰を落とし、目に神経を集中して。

トッドが再び拳を上げると、ぱつと消えた。というか、いきなり拳が大きくなった。すぱん、と軽い音を立てて、顔がはじける。今度は準備をしていたため、転がるような無様な真似はさらさなかったが。反応できていなかったのは変わらない。

「どうだった？」

「ふあい……いきなり、拳が大きくなった気がしました」

「それだけ分かれば上等だ。君はかなり目がいいよ」

トッドが突き出し、いつの間にか引いてきた拳をぶらぶらと振りながら続けた。

「俺はLv. 4だが、同じレベル帯の人間と比べて強いかと問われたら、はつきりと弱いだろな。でも戦っていざ負けるかと問われたら、そうでもないと答える。その理由が、相手の攻撃を察知するのがうまいのと、攻撃を最短最小の動きで放てるなら、相手に気付かせづらいいからだ。これが意外と、モンスターにも有用でね。モンスターは人間より遙かに反射神経がいい。だが、その分素質によりかかりがちだ。気付けない攻撃をできるようになれば、格上とだって戦えるよ」

「僕も、できるでしようか？」

「そりや君しだいだ。ただまあ、できるようには教えるつもりだよ」

言われて、ベルはぐつと拳を握った。

素直にすごいと感動する。同時に、自分がこれができるようになれば、一体どれくらい強くなれるだろうか、とも。

「よろしくお願いしますー！」

叫んで、ベルは再び構え直した。

その日は顔が腫れ上がるくらい殴られた。もらったポーションで傷一つ残りはしなかったが。

それから数日、ベルはまだアルテミス・ファミリアに通っていた。毎日、という訳ではない。時にはダンジョンに潜って稼いだりもしているため、通う日はまちまちだ。それでも、鍛錬の成果は出ていた。ナイフの基本的な戦闘術は習った。これに関しては、自主練に任せるといふ形になっていたが。ベルは毎日欠かさず、ナイフの型練習を行っていた。トツドほどとはもちろん言えないが、それでも三流、つまりド素人を脱却できたと言える程度には腕を伸ばした。

特訓をして、ダンジョンに潜って。その繰り返しをしていると、自分が強くなっていく実感を得られた。人に言えば、一番伸びる頃なんだから当然だ、と言うのかも知れない。それでも、ベルは嬉しかった。動体視力訓練になれてくると、だんだんとトツドの拳も見えるようになってきていた。コツは、攻撃部位には集中しないことだ。むしろその周囲、肩やら腰やら、どこからパワーを伝達して放たれるかを察知することだった。これが分かってから、攻撃の回避率も格段に上がった（といっても、やつぱりほとんど攻撃をもらうのだが）。「ベル君も強くなってきたな。初級は卒業して今日からレベルを上げるか」

「本当ですか！」

やったー、と少年は小躍りして喜んだ。鍛える、そして成果を認められる。これほどモチベーションが上がることはない。

トツドが拳を上げると、ベルも同じく木製ナイフを構えた——トツド曰く、構えが様になってきた——

彼の肩の筋肉が、ぴくりと動いた気がした。本当に、ささやかな変化だ。ともすれば見逃すし、そうでなくとも気のせいだと無視するよくな、そんなささやかな変化。しかしベルは自分の勘に従って、前進しながらヘッドスリップした。

ベルとトツドには身長差があり、それ以上にステイタスによるスベック差がある。そのため、彼の懐に潜り込むには、都合二発のジャブをかかわさなければならなかった。

最小限の動きで、拳の横をくぐり抜ける。頭皮と革がこすれて、焦

げたような匂いがする——いつもならば。

ぱん、と小さな音を聞いて、ベルは目を白黒させた。気がつくど、避けたはずのジャブが軌道を変えて、側頭部を払うように殴っていた。衝撃は相変わらず小さなものだったが、回避を確信していたのと、姿勢が半端であったため、思わず地面に転がる。初日以来、初めての事だった。

ベルはぎよつとしながらも、素早く地面を転がった。すぐさま距離を空けて立ち上がる。これも訓練中に言われたことだ。

つう、と頬から汗を垂らして、ベルが問う。

「今のは……？」

「ネタを明かせば簡単だがな。肘をたたんで軌道を変えたただけだ。たったこれだけで腕はしなって鞭のような動きになり、避けたと思っ込んだ相手に当たる」

軽く手を振って——これも見慣れた動作だ——トッドが言った。

「当たり前だが、ダンジョンじゃ人型のモンスターのほうが少ない。中には軟体で、体を縦横無尽に振り払ってくるタイプもいる。分かるか？ ただの直線、ただ弧を描くだけじゃないんだ。そうじゃなくても、ただ偶然そういう状況になったり、というのもありえる。モンスターと戦うのは単純じゃないぞ」

さあ大変だ。トッドは言って、構えた。

「今までみたいに、単純な軌道だけ警戒してればいいわけじゃない。もっと神経を尖らせてなきゃいけないようになった訳だ」

「う……が、頑張りますー」

言われれば、確かにその通りだった。

トッドの格闘術は、高度に纏まったものだった。素直な戦い方だ、と言ってもいい。ジャブ、アツパー、フック、それらの動作の起点を見つければ、最小限で対処していたのが今までだった。

だが、これからは違う。動きの中に変化が混ざる。この分だと、嘘まで混ざってくるかもしれない。

判断に迷えば、動きは鈍化する。鈍化すれば、対応が間に合わない。選択肢が増えるという事はそういう事だ。いや、もつと複雑に、擬似

的な多対一まで作ってくるかもしれない。こういった点は、意地が悪い師匠なのだ。

「ついでに言うと、これからは左腕と両足も出てくるぞ。気をつけろよ」

「うあ……」

ベルは思わずうめいた。

今までだって、右手一本相手に余裕があったわけではない。いや、むしろいっぱいいっぱいだった。それが、単純計算で四倍。体の警戒箇所を考えれば、要求される集中力はその程度の倍率では済むまい。

「ううう……」

ベルは気弱にうめいた。

が、気合いを入れるように、両手をがごと持ち上げる。そして、声高に絶叫した。

「うがあああああ！ やります！ やってやりますともー！」

「オーケーオーケー、その調子だ」

それから、トツドの手管は苛烈だった。

もらわれないようになってきたジャブに連続して当たる。左の、弱めのストレートが顔にめり込む。蹴りは防具をつけていないため、かなり手加減されたものだったが。それでも、何度も足下を払われ、こかさされた。

(ここまでされると、分かってくる)

顔のすぐ横を通り抜けていく右を、ナイフでいなしながら。しかし、今までとは違い、全然前進できなくなってきた。これは、ただ単に集中すべき箇所が増えただけという訳ではない。

(今まではわざと、予兆を見せてくれてたんだ……もしかしたら、今も)

トツドの攻撃は、素早く、予備動作なく、そして鋭かった。ただ身体能力に任せて、とにかく防御できないのとは訳が違う。ベルが対応できるかできないかのレベルにまで落として、自発的な能力の向上を促している。それを思い知った。

甘くはないけど、やさしい先生。それがトツドだった。

それからいくらかの時間。ナイフと体術の技能も向上して、なんとかついて行けるようになった。手で払うのは、危険が大きいからなるべくしない。ナイフの背で、攻撃を押しようにして躲す。足は可能な限り大きく上げない。上げてしまえば、回避が必要なきにその余裕を失う。視線を絶え間なく動かして、とにかく全身を常に把握できるようにしておく。そして、動いたと思ったら、即座に体を動かす。回避が一番、防御が二番、攻撃が三番という優先順位で。

修行はつらかったが、同時に充実もしていた。強くなるのは楽しい。そして、褒められるのはもつと嬉しかった。なにより、ダンジョン内で修行の成果ができれば、さらに高揚して修行に熱が入った。

適正レベルであればまず遅れを取ることはない、と合格点をもらえたのは、さらに数日後の事だった。

遠征・宝剣編

ダンジョン51階層、カドモスの泉に、今アイズたちはいた。

道中は楽なものだった。ロキ・ファミリアの組織としてのレベルの高さもあつたが、一番大きな理由は、やはり魔導力エビセスの存在だろう。これにより、冒険者の能力そのものが底上げされている。さすがにすべてトツド製レベルの、レベルを一つ分上げてくれるような高品質ではなかったが。それでも攻撃力の向上という意味では、十二分な意味を持っていた。

51階層に降りて、本隊と小分隊二つに分かれ、それぞれカドモスの泉を目指す作戦が実行された。そこには、戦力向上による余裕があつたのは無関係ではないだろう。

なんにしろ、パーティーはアイズ、レフィーヤ、ティオネ、ティオナで一つの小隊が作られ、泉を目指したのだが。泉の守護者たるカドモスは、すでに何者かによつて討ち取られた後だった。ドロップアイテムであるカドモスの皮膜が放置されていることから、冒険者の仕事ではない事は分かつたが。

つまりはイレギュラーだ。

それは滅多にない事とも言えるし、ダンジョンにつきものだとも言える。

ダンジョンは、多くの冒険者によつて発掘され尽くしている。毎日無数の冒険者が挑み、そして一つ一つ丹念に、時には被害を出しながら、秘密を暴いていく。今ではモンスター誕生のロジックから、強化種誕生の秘密まで暴かれている。それでも、ダンジョンに挑んで完全となる作戦はない。常にどこかで何か、想定外の事態が起きる。それが冒険というものだった。

カドモスの皮膜と泉の水を回収し、来た道に戻る。途中、ティオネとティオナがイレギュラーについて話し合っていた。それを耳の端で捉えながら、アイズはそつと腰に佩いている剣を撫でた。

(ちよつと頼りない……な)

ぼんやりと思う。

今彼女の腰にあるのは、嵐碧宝ラファエラの剣ではなかった。整備に出したのだが、遠征に間に合わなかった。そのため、以前トッドからもらった、魔導力エビセスの剣を持ってきている。それが、自分のレベルが一つ下がったような気がして、どうにも落ち着かなかった。

作り手には悪いが、それでもデスペラードよりは半分頼りがいがある。一度魔力撃武器ストライクの性能を知ってしまうと、精神感応武器でないとうちにも物足りなく感じる。これはアイズに限らず、誰でもそうだろうとは思っていた。

宝剣シザウロスがないのはアイズだけではなく、レフィーヤも同じだった。彼女も、同じく悪いタイミングで整備する必要が出てきてしまったため、今回は普通のエビセス（魔導力製の武器を普通というのもおかしい話だが）杖を持って、どこか頼りなさげにしていた。

イレギュラーラファエラが起きるなら、多少無茶をしても嵐碧宝の剣を持つてくるべきだったか。ちようど、そんな後悔を抱えかけている時だった。

悲鳴が、ダンジョンに響いた。

「な、なんなんですか!？」

「これ、ラウルの声だよ!」

びくりとして、よりいっそう強く杖を抱えるレフィーヤに、ティオナが叫ぶ。

全員で迷宮を跳ねるようにして、声がする方へ駆けた。

走ってどれほどもせずに、前方にもう一つの分隊が見えた。そこに、フィン、ベート、ガレス、ラウルの四人が見える。内ラウルは意識を失っているのか、ガレスに担がれた状態で、モンスターに追われていた。無数の、芋虫のようなモンスター。フィンがしんがりを務めて、槍で芋虫を慎重に切り裂いている。

「団長!」

「君たちか!」

ティオネが叫び、フィンが答える。

もつとも反応が早かったのはティオナだった。あるいは、もつとも短絡的だったと言えるかもしれない。彼女は巨大な武器を振りか

ぶって、芋虫にたたき込んだ。

「体液は浴びるな！」

言葉が間に合ったかどうかは分からない。少女は跳ね飛ぶと、武器の重量を生かして敵を両断した。

防御力はさほどではないのか、芋虫は簡単に潰れた。が、それと同時に、体液が体からまき散らされる。回避が間に合わず、ティオナの肌にくらかの体液がかかった。少女の顔が歪められたのは、間違いなくそれが原因だろう。

「あつっ！ いった！ なにこれ！」

「ティオナ！ 武器を発動しなさいよ！」

「分かってるよー！」

悔しさが、それとも単純な痛みからか。彼女は歯を食いしばると、巨大な双剣を構えた。

「いくよ、グラントスラム地裂天双剣！」

言葉と同時に、彼女の双剣が一回り小さくなった。宝剣の発動にかけ声は必要ないのだが、それでも彼女が声を上げる場面は多い。

グラントスラム地裂天双剣。ティオナ専用に使われた宝剣だ。シザウロス見た目は以前の愛剣だった大双剣に近い。それを一回り大きくして、ちよつと手を加えればこうなるのではないか。そう思わせる武器だった。まあ、元々彼女専用調整されているのだから、形状が似るのは当たり前なのだろうが。

双剣から飛び散ったのは、制作者であるトッド曰く『鞘』だ。破片は視認できないほど小さく、宙を漂っている。塵とも言えるほど小さい破片は所持者の意思を反映し舞い散り、時には点が線を結び、面を作る事もある。

つまり、

「よこつよー！」

ティオナはかけ声を上げながら、双剣の一方を突き出した。すると、大量に迫ってきた巨大な芋虫が、見えない壁に激突した。

決して狭いとは言えない通路で、後ろから押しつぶされ、前方の芋虫が潰れる。それでも体液は一滴たりとて通過しなかった。見えな

い壁は、芋虫の異臭すら遮断し、最強の盾として確かにそこにある。「いらしょー！」

再びの咆吼。

双剣のもう一方が、線を結ぶ。剣が振られるのと同時に、盾がねじれて、最前線にいる芋虫が潰されていく。しかし、その隙間から這い出てくる事は叶わなかった。ティオナが剣を振ると、距離にして数十メドルもの間隔を、ダンジョンの壁面すら無視して両断する。

その一撃で数十体の芋虫を切り裂いたはずだが。それすらささやかなようで、芋虫はさらに押し寄せてきた。

「げえーっ、きりがなーい！」

戦っても無為と思ったのか、ティオナは一撃を加えた後、さっさと皆の後を追って走った。

フィンは相変わらず最後尾近くで走り、周囲を警戒しながら言った。

「気をつけてくれよ。このモンスターは倒すと腐食液をまき散らす。ラウルはそれに、武器ごととかされたんだ。トツド製の完璧なものではないとはいえ、魔導力武器だったのだけどね……。今のところ、あのモンスターに触れて大丈夫なのは、トツド製の武器か不壊属性の武器だけだと思われる。つまり、ファミリアのお金を使って特別いい武器を渡された僕らが踏ん張らなきゃいけない訳だが」

「なら、私の出番でもありますね」

にっこり笑って、言ったのはティオネだった。

ぎちり、と音を鳴らして、彼女が両腕を上げた。そこには手甲が収まっている。

ティオネ専用宝剣、怒王鉄塊。その機能は、至ってシンプルだった。

怒王鉄塊が発動する。と同時に、ティオネの髪と瞳が、紅蓮に燃え上がった。続いて、体からも、まるで炎のようにオーラが吹き出してくる。

「おっラあー！」

凶暴な雄叫びを上げて、彼女は後方に向けて両手を振るった。まる

で散弾のように、オーラが飛び散る。

精神力が変換されたオーラは、物理的な干渉力、とりわけ破壊力を持つ。オーラに触れた芋虫は、どれもはじけ飛ぶようにして吹き飛んだ。ただの武器を投げ飛ばしても、このような威力にはならない。まるで炸薬そのものを飛ばしているようだ。ティオネの気性そのものが現れているようにも感じる。

オーラは飛び散らかすだけが能ではない。あらゆる形状に固定して、どんな武器にも変化させられるのだ。それが精神力がなくなるまで続く。猛々しい戦い方と、それを必要とする無数の武器。両者を必要とするティオネにもってこいの武器だった。

ティオネとティオナが多数の敵を潰し、フィンがその穴を埋める。この戦法で、とりあえず退路の不安はなくなつたが、ラウルが負傷しているので、本隊と早く合流したいのは変わらない。

これで、背後の不安はとりあえずなくなつた。本来ならばアイズも背後に混ざる所だが、敵が前からこないとも限らない。レフィーヤや負傷者を抱えているガレスを守りながら、前線を走っていた。

「全く、トツドの武器は頼りになるのう」

「腐食液をものともしないのはよかった。数十億ヴァリスかけて武器が駄目になつたつて言うんじゃない、泣くに泣けないしね」

ガレスとフィンが、軽口を叩きながら走る。

「ねえティオネ、あいつら同じモンスターまで襲つてるよ」

「悪食でやあねえ」

「こちらも、軽い調子でヒリュテ姉妹。もつとも、やっている事は、口調ほど簡単でもないのだが。」

アイズは不安を感じ、漏らした。

「これ……追い込まれてる……?」

「どうやらそのようだね。この先は確か行き止まりだ。そして、最悪な事に悪い予感もする」

「並行詠唱、始めておいた方がいいでしょうか……?」

二人の言葉に、レフィーヤが不安げに問う。フィンはヒリュテ姉妹の猛攻をくぐり抜けてきたモンスターを一刺ししながら答えた。

「頼めるかい？ 行き止まりに追い込まれるという事は、敵もそこに集まるという事だ。そこで一気に殲滅する」

「はいー」

レフイーヤがはつきりと答えた。

^{エビセス}魔導力が誕生して、一番大きな恩恵を得たのは間違いなく魔法使いだろう。これにより、魔法は威力は上がり、難易度は大幅に下がった。さらに、魔法使いの頂点技能とも言える並行詠唱すら、その難度を下げている。といっても、それで言うほど簡単な技能ではないが。逃げながらモンスターを引きつける。その速度は、さほど速いものではなかった。この余裕が生まれているのも、トッドという怪物的な天才がいるおかげだ。

袋小路の部屋に入り込む。それと同時に、壁面が割れた。誰かが割ったのではない。勝手に、ひとりでに。

迷宮はモンスターを生む。そして、無数のモンスターを同時に生み出す行為を、怪物の宴と呼ぶ。アイズたちのパーティーは、モンスターに挟まれる形になった。

「まったく、嫌な予感によく当たってくれるよ」

「打ちますか？」

「いいや、もう少し後ろの敵をひきつけたい。待機してまっけてくれ」
「はいー」

レフイーヤが返事をする。その間も足はとめなかった。

倒せば爆発し、腐食液をまき散らす弱い敵。それか、51階層にふさわしい強さを持つ敵。どちらの群れが与しやすいと取るかは人によるだろう。アイズたちは、おのおのやりやすいと思つた敵に向かいながら、レフイーヤを守っていた。

やがて、通路から出てくるモンスターの数が少なくなってきた頃。フィンが叫んだ。

「今だー」

「ヒュゼレイド・ファラーリカー」

発動する魔法が、部屋をまるごとなぎ倒す。ただでさえ特化型魔法使いな上に、^{エビセス}魔導力による強力な魔法力の向上を受けているのだ。そ

の威力は、部屋を更地にしてなお有り余った。

ダンジョンに激震が走る。無数の矢が壁面を食らい、瓦礫の山を作った。その威力たるや、モンスターの攻撃より、余波を気にしななければならぬほどだ。

モンスターを一掃し終えて、フィンがふう……と息を吐く。が、それも一瞬の事で、すぐに気分を切り替えていた。

「総員、集まれ。すぐにキャンプへ戻るよ」

「え？」

言葉につぶやいたのは、応急処置を終えたラウルだ。

「モンスターの動きがどうもおかしかった。嫌な予感もまだ続いているしね。本隊の方も襲われてない、と思うのは楽観的だろう。皆も、向こうが襲われているという前提で動いてくれ」

言葉で、全員が動き出した。

51階層を抜けて50階層へ戻り、広場に出る。と、遠目からでもはつきりとキャンプが襲われているのが分かった。高台にむけて、無数の芋虫が進軍している。

「リヴェリアがいるからなんともないかも、と思ったが……。どうやら初動で失敗したようだね。僕たちも行くよ！」

「はい！」

「アイズ！ 僕をキャンプまで投げてください！」

「うん……！ 目覚めよ」

言って、アイズはフィンをキャンプ中央近くまで投げ出した。たった一人到着しただけだが、それでも周囲に歓声が広がったのが分かる。

フィンの宝剣シザウロス、全裏紋ルーインの槍。この槍は、少々特殊だった。トツドに言わせれば、最強にも最弱にもなれる武器。それが全裏紋ルーインの槍だ。

この槍の真価は集団戦で発揮される。一言で言ってしまうと、周囲の人間を無理矢理自分の地位まで——つまりLv. 6まで——強制的に向上させられるのだ。当然技量などはそのままだし、同等以上の能力を持つていけば効果はない。それに、急激な身体能力の差に戸惑う事がある。それでも、集団戦で言えば間違いなく最高クラスの武器

であった。その上、反転技法まである。周りに自分の力を集めるの逆転で、周りの力を自分一人に集めるといふものだ。これにより、フィンは軍勢を率いている数に比例し、自分を強化できる。それこそロキ・ファミリア全体の力を合算すれば、Lv. 10すら超える力を発揮した。場合によっては宝剣シザウロスを持ったオツタルすら超えられる。そんな武器だ。

彼の登場により、キャンプの兵が一気に全員Lv. 6相当の力になった。敵の特性上、それで趨勢までは変わらないが、それでも楽にはなつただろう。

「おらアツ！ ザコばつか見てんじやねえよ！」

「テイオナ、思いつきりやんなさい！」

「オーライ！」

「目覚めよ」
テンペスト

さらに、アイズら別働隊が遊撃隊を務めて、横から割り込む。これで、幾分か勢いが殺がれたはずだ。

「避ける！」

フィンの絶叫が響く。同時に、アイズらはモンスターのいない近くの森へと潜り込んでいた。

魔道士部隊の一撃が、炸裂する。芋虫は数が多く、ひしめき合うようにして並んでいた。その姿は脅威であるし、実際ロキ・ファミリアの戦意を大いに殺いでいた。だが、それが致命的にもなった。一列に並んだ敵を直線型攻撃で一纏めになぎ払う。

暫く、敵が再び来ないか警戒して。しかしもう来ないと分かると、アイズたちも本隊に合流した。

そこでは、木箱に座ってしゅんとしたりヴェリアを、フィンが慰めている。

「これは私の失態だ。節約してモンスターを倒そうとなどせず、最初から魔法でなぎ払っていれば……」

「仕方がない、とまでは言えないけどね。今回ばかりは僕も不意を突かれた。責任があると言うなら、僕だってそうだよ」

二人が話しているところに、アイズたちが——つまりロキ・ファミ

リアの幹部全員が——混ざる。

「それで、どうする……の?」

アイズは、周囲の凄惨な様子を見ながらつぶやいた。

負傷者はかなり多かった。腐食液を浴びてしまった者はかなりの数に及ぶ。不幸中の幸いと言えば、その程度なら再起不能にはならないだろう、という点か。皮膚までは焼けても、肉や骨まで一撃で破壊するほどの威力はない。

さて、どうするか。とでも言うように、フィンは肩をすくめた。

「今回の戦闘で、武器や防具の類いは大半を失った。予備まで含めてね。幸いなのは、主力級が持っている武器は、それらに抵抗力があつたから、健在だって点だけだ」

「ザコどもはもうほとんど戦えねえぞ」

「言い方は悪いが、そうだね。ポーシヨンの類いも、ほとんど底をついた。宝剣シザウロスを揃えて、初の遠征だ。いい武器が多少手に入ったからと言つて、驕つた結果かな。芋虫型のモンスターが出ないなら、もう少し進んでもいいと思うけど……」

そのときに起きた振動は、まるで言葉に示し合わせたようではあつた。

地震が、それも階層そのものを揺るがすような激震が周囲を覆つた。土が盛り上がり、弾け、その中から巨大な影が現れる。幅だけにしても十数メドルはありそうな巨躯だ。全高は、もう何十メドルあるか考えるのも馬鹿馬鹿しい。それほど巨大なモンスター。見るだけで生理的嫌悪を呼び覚ますような、気色が悪い形状と色合いをしている。その姿は、先ほどもまで悩まされていた芋虫型のモンスターに酷似していた。

これが、芋虫型モンスターの親玉なのだろう。それを疑う者は、この場になかった。

フィンはため息をついた。そして、つぶやいた。

「撤退、だね。リヴェリア、頼むよ」

「了解した。撤退するとなれば、もう出し惜しむ理由もない」

二人して、何かを諦めるかのようにかぶりを振る。

わかりやすく絶体絶命の状況だが、それに焦る団員は少なかった。リヴェリアの『解禁』がなされた故だ。

「行け、時世界の石よ」

リヴェリアが、己の宝剣シザウロスを解放する。

彼女の背中から、二十もの鏃が飛び出した。それらは高速で飛来し、時に物体に接触し、破壊する。

時世界の石タススラム。フィンルインの全裏紋の槍に並んで特殊であり、かつ扱いの難しい宝剣シザウロスの名だ。二十本の鏃は彼女の意思に従って自在に飛び、標的に突き刺さる。食らった物体は裂けるのではなく、接触時に分解されるらしい。詳しくはアイズも説明されたが、よく分からなかった。ただ、それが必殺の一撃たり得るといふ事だけは理解していた。

並行詠唱の本来とも言えるリヴェリアの頭脳を持ってしても、二十本の鏃を自由自在にとするのは難しい。が、この宝剣の真価はそこではなかった。

モンスターが鱗粉を放つ。その効果が何かまでは分からない。が、その前にリヴェリアはつぶやいていた。

『放て』

瞬時に魔法が発動し、ドーム型の壁が生まれる。鱗粉はどうやら爆発性だったらしく、強烈な音を立てて発破した。ただし、ドームの外で。

これが時世界の石タスラムの真の運用法だ。鏃一つにつき一つ、魔法をストックしておく。つまり、合計二十発の魔法を、彼女は常時発動状態で維持している。それも、込められる精神力に上限がないため、一つにつき精神枯渇一步手前まで力を込めた魔法を維持している。最強の魔法使いが扱うにふさわしい宝剣シザウロスだと言えた。

さらに言えば、時世界の石タスラムは飛翔している。つまり、そこを中心に魔法が発動するわけだ。射程距離は、リヴェリアから半径百メートル。その間を自由自在に刃が飛び、さらに、いつ、どこで、どんな魔法が放たれてもおかしくない。相手をする側からしてみれば、恐怖しかないだろう。

「これで終わりだ。『放て』」

言つて、今度使用された魔法は、レア・ラーヴァティンだった。ただし、広域に火柱を立たせるのではなく、モンスターのいる一点に集中して。火柱一つにしても、そこらの階層主を消滅させるのに足る火力を持つ。それが数十本、集中して放たれた。

巨躯の芋虫型モンスターは、塵一つ残さずに消滅した。

わつと、一般団員から歓声が上がる。それに対し、幹部級は渋い顔だった。とりわけフィンは、今回深層更新を目指していたために、ひとときわ苦汁を飲んでいる。

「アイズとレファイヤが整備中だが、宝剣シザウロス四本も投入されたのだから深層を攻略できて当然なのは、ちよつと甘い考えだったね」

「扱いに慣れていなかっただけというのもまずかったな。とりわけ私とフィンの武器は、使いどころを選ぶ」

「それよりもよお」

二人に割つて入つて、ベートが言う。

「俺の宝剣シザウロス依頼を早くしてくれよ！俺とガレスは順番待ちなんだぜ！」

「ベートに同意するわけではないが、確かに早くほしくはあるのう」

「何よ、順番じゃんけんで負けたから後回しになつたくせに。しつこいわよ」

「そーだそーだ、負けベートー」

「ンだとお！」

「君たちはちよつと静かにしなさい」

放つておけば喧嘩になりそうなベートとヒリュテ姉妹は、とりあえずフィンを止める。

そもそも今のベートと姉妹が戦つても、勝負にすらならない。特殊武装とはいえ未だ通常武器を使っているベートと、宝剣シザウロス持ちの姉妹では地力が違いすぎる。仮に一对一でも、ベートが勝つ確率は皆無だ。

「ごめんなさい……私が時期を間違えて整備に出したばかりに……」

「それについては私も同罪です。すみません……」

「いや、仕方がないよ。宝剣は未だに未知の領域が多い。全部理解し

てるのはトッド・ノートくらいのものだ。作り出せるのだから、彼だけだしね。整備にどれくらいかかるかなんて分からなくてもしょうがない。あと、ベートとガレスはもうちよつと待つてくれ。今のロキ・ファミリアは本当にお金がないんだ」

それは当然だろう。一本最低でも二十億ヴァリスもする宝剣を、四本も揃えたのだ。

「今回の件でトッド製以外の魔導力武器も溶けたし、本当に今回は赤字だなあ。今更ただの不壊属性じゃ誰も納得してくれないだろうし、本当に家計が大変だ……」

「その点についてはな……むしろアイズとレフィーヤの武器が無料で手に入った事を喜ぶしかあるまい」

「あれは本当に助かったよ」

魔導力……というか魔力撃武器といっても、値段はピンキリだ。上位になれば、そこらの特殊武装より高いのは間違いない（トッドが作ったものは特殊武装より確実に高い）。中堅どころの鍛冶師が修行がてらに作って、申し訳程度の性能を發揮できるものが売られていたりもする。なにしろ要求素材が比較的優しいため、試すだけなら割と誰でも試せるのだ。今回はそういうものも投入して、見事に溶かしてしまつた訳だが。

「いつそ値引き交渉をしてみるとか」

うーん、と悩みながらフィンが言うと、リヴェリアはため息をついた。

「つばを吐き捨てて去って行くのが目に見えるぞ」

「だよねえ」

そこまでするかな、とはアイズは思ったが。

なんにしろ、世間から見るとトッドと、アイズとレフィーヤから見るとトッドでは、かなり人物像に違いがある。どちらが正しいとは言えないのが、正直な所だった。

あれこれ言い合っている間にも、撤退の準備は進んでいた。

「とりあえず、まあ、帰ろうか」

フィンの落胆した一言で、遠征は本当に、終わりを告げるのだった。

ローガさん

くああ……とあくびをして、ホームの中をロキは歩いていった。

暇な時間といえ、まあいくらでもある。神は常に時間を持て余している。つい最近遠征を終えて、その打ち上げまで済ませた。そのため、今はファミリア全体で準備期間だ。なので、暇は余計に暇だった。

遠征部隊が帰って帰ってきた、極彩色の魔石——ようはイレギュラーだが、これもまだ進展はない。ついでに言えば、気をもんでも仕方のない事ではあった。ダンジョンは何かあってもおかしくない。千年現れなかった、ダンジョン内全体の変化の予兆と言われたところで、それを否定できる材料もないのだ。

何気なしに外に出る。と、天気は悪かった。うつすらと雲が空を覆い、そのうち雨でも降ってきそうな風さえある。

「あーあ」

頭の後ろで腕を組み、空を見上げる。空の動きは恐ろしく鈍いが、それでも確実に動いている。雲はゆらゆらと揺れて、天候の曖昧な状態を続けていた。

今のロキ・ファミリアと似たようなものだ、と思う。何をしてもない、遠征後の準備期間。団員の治療をしたり、休憩したり、後はなくした物資の補給をしたり。揺蕩う中で、金銭だけがめまぐるしく出入していく。追っても面白くないものだけが変化する。

団員も、同じように穏やかな状態ではある。一部、収支の計算に忙しい者もいるが。

「なんや、面白い事でもないんかなあ」

金勘定をしている者が聞いたら怒りそうな事を独りごちながら、ホームの玄関口を出る。特に意識したわけではない。足が向くままに任せたら、自然とそうなっただけだ。

と、黄昏の館（館と言うより城だが）の入り口で、三人ほどの人間が集まっていた。門番は二人なので、一人は来客ということになる。

入団希望者か、と思いい、そちらに視線を向ける。どうやらそういう訳でもないらしい。遠目でよくは分からないが、来客は背中に大きな

バッグを背負っている。幅はそうでもないが、全長は身長より高いバッグだ。否応にも目立つ。

(つて、なんや。トッドやん)

少し近づいて見てみれば、そこにいるのはトッド・ノートだった。どこが特徴があるわけでもない顔に、仏頂面が張り付いている。アイズたちに言わせれば、ホームにいるときは、もう少し感情豊からしいが。

(こりやあ、ちよいと面白い、かな?)

につと笑つて、ロキは小走りに近づいていった。面白そうだと分かれば接触しないという選択肢はない。それが神だ。

位置取りを調整し、門番の背後ににじり寄っていく。位置的にトッドは気付いたようだが、ロキが忍び足をしていると気がつくど、口をつぐんだままだった。このあたり、なかなか話の分かる面白い男だ。

「わっ!」

「どわあ!?!」

「ひえっ!」

門番二人が、大仰なほどに背を震わせて驚いた。威圧と、そして緊急時の対処のために持っていた武具がちやりと音を立てる。

二人は動悸を抑えながら、振り返った。そこで、悪戯っぽく笑っているロキを確認する。

「なんだ、ロキ様ですか」

「脅かさなくてくださいよ……」

「すまんすまん」

ははは、と笑いながら、気のない謝罪をする。

「で、どしたん」

「武器の納入です。これから案内を呼んで、団長のところまで行ってもらおうかと」

ロキ・ファミアでは、基本的に武器の納入でフィンの立ち会いまではない。特殊武装の場合でも、立ち会う必要があるのは大抵所持者だ。

が、これがトッド製の武器となると話は変わる。単純に一本一本が

高価だというのもあるが、相手に対する誠意という面もあった。

アルテミス・ファミリアはその名をとどろかせてはいるが、人数的には未だに最下層のファミリアだ。当然、物品納入のために顎で扱える団員はいないし、もしもの事を考えると、移送を外部に委託という事もできない。そのため本人が来るのだが。今のところ、ロキ・ファミリアは彼とかなりいい関係を築いている。宝剣シザウロスを一番所持しているのがロキ・ファミリアだという点からも、それは明らかだった。なので、関係を維持するためにも、誠意として団長が対応するようにしていた。

ロキはぼん、と手を叩いた。

「んじや案内はうちに任せとき」

「え？ ですが……いいんですか？」

「ええねんええねん。ちょうど暇してた所やしな。知らない仲やないし。な？」

「まあ、そうですね」

ぱたぱたと手を振って答える。と、トッドも言葉少なに対応した。門番は少々迷っていた様子だったが、やがて決意したように言った。

「じやあ案内はロキ様という事で。連絡員は先に走らせておきます」

「おおきに。ちゆうわけですついできてや」

ロキが歩き始めると、トッドもついていった。

ゆつくり歩いていると、ぱたぱたと団員の一人がロキを追い抜いていった。彼が連絡係なのだろう。

「トッド、そっちのファミリアの調子はどないや？」

「なかなか好調ですよ。以前のように金銭面で悩むことはなくなりました」

軽口にも、どこか硬質的な口調で、トッド。

かなり他人行儀にも聞こえるが、これでも打ち解けた方ではあった。以前であれば、会話は一言で途切れさせていただろう。それこそ「ぼちぼちです」の一言で終わらせられてもおかしくない。というか以前あったし。

(扱いの難しいやつぢやなあ。アルテミスは初対面でどう話を続けたんやろ?)

トッドと初めて会った時のことを思い出し、考える。ロキすら、アイズやら伝いで話をしてるのでなければ、まともな会話が成立できた自信はない。そのアイズたちも、間にアルテミスが入っていた上、事務的な話しかしなかったという。

ロキ・ファミリアは広い。無駄に、とまでは言わないが、かなり入り組んでもいる。これはまあ、ファミリアを少しづつ拡大してきたどこでも共通することだろうが。最初から大人数を抱えたファミリアでもない限り、ホームは拡張をし、その分面倒な形になる。

ロキ・ファミリアのそれは、拡張されたホームの代表とも言えた。可能な限り機能的にはしているが、それでもやはり、迷宮じみている。おかげで、話す時間だけはいくらでもとれた。

「なーなー、トッド。あんたから見て、うちの子らはどないや?」
「どう、とは?」

「宝剣を扱うのにふさわしいか、つちゆう事や。うちも自分の子らに自信はあるけど、人から見たらどうかも気になるやん?」

「そうですね……」

ふむ、と彼は考えて、顎に手を当てた。がしやりと音がしたのは、背負っている納品の音だろう。

「技能的に問題なし、とは言い切れませんね。特にヒリユテ姉妹。彼女らは力任せな部分がある。宝剣シザウロスはスペックよりも、むしろ技術と運用で上を行くような設計になっています。正直言つて、彼女らが使いこなせているとはとても。後はまあ、レフイーヤはあからさまに持て余しているみたいですが」

「あー……レフイーヤはなあ。本人もそれで悩んどるわ」

レフイーヤの賢者の杖は、他の宝剣シザウロスに比べて明らかに一回り劣る。彼の製造、それも最初期で丹念に調整されたものだ。それがレフイーヤに合わないはずがない。のだが、現実にはレベルを二つ凌駕するほどの力は出せていなかった。せいぜいが、普通の武具の延長である。そのことに一番悩んでいるのは彼女自身だ。

本来ならば武器の性能もあってL.V. 5相当の活躍を見込まれている。だが、それができない。悩まないはずがないし、その程度しかできない彼女に嫉妬の目があるのも、また確かだった。

と、二人してだらだら歩いていると。

前からベートがやってきた。恰好は運動着であり、武器も装備している。これから自主練という所だろう。

「よっ、ベート。今日も訓練かいな。精が出るなあ」

「あん？ ロキに……トツドかよ。珍しいじゃねえか」

「ローガさんちーっす」

……

今、妙な言葉を聞いた。それはベートも同じだったらしく、トツドを見ている。彼は相変わらずの鉄面皮だったが。

しばし、沈黙。足まで止めて、全員が黙して。

それを破ったのは、ベートだった。

「なんだその気持ち悪い呼び方は。いつも呼び捨てじゃねえか、テメエ」

「話はレフイーヤから聞いた。後は、ベル——ああ、お前が宴会で馬鹿にしたやつな——からも」

言われて、ベートはぎくりとしていた。

あのとときのベートは、酷く悪酔いをしていた。実際、前後不覚だったのではとロキは思っている。いつも弱者に対して口が悪い（決して態度まで悪いわけではない）ベートだが、あるときばかりは行きすぎていた。仕方なく縛り付けてまでおとなしくさせたのは、記憶に新しい。

彼は気後れしたように後ずさり——本人も言い過ぎたとは思っているのだろう——つぶやいた。

「そーいやアルテミス・ファミリアとヘステイア・ファミリアの主神は神友同士だったか？ 文句があんなならもっとはつきり言やいいだろうが。言っとくが俺は、嘘だけは言ってるぞ」

それはつまり、余計な事は言っていると白状しているようなものだった。

悪いとは思っているが、そこで簡単に引くのもベートではない。やや重心を後ろに下げながらも、しかし足は下げずに言う。

対して、トッドはやはり顔色も変えなかった。いや、いかにもわざとらしく、悲しげに歪ませた。彼の表情を見慣れない者からも、演技だと分かるほどに。

「いや。弱いのが悪い。弱いのは悪だ。それにとやかく言うつもりはない」

「じゃあ……」

「でもなあ……。わざわざ弱いやつをあげつらつて口説くとか、もうダサくてダサくて。その上普通に振られてるし。なんかもう、こんなに格好悪いやつがいるんだなって思うと悲しくなって……」

よよよ、と（これまたわざとらしく）顔を伏せて、トッド。

「好きな女を口説くの弱者を比較にしないと自分をアピールできないヘタレな恋愛弱者だと思うと、なんかもう悲しくて悲しくて。ねえ、ローガさん」

「まずそのローガさんつてのやめろや！」

「正直今は呼び捨てにするほど親しみが持てない」

うがぁ、と吠えて、ベートは頭をかきむしった。吠えて、地団駄まですで踏んでいる。

ぼさぼさの頭で、肩でさえはあと息までしつつ。トッド相手では分が悪いと踏んだのだろう、矛先をロキに変えた。

「ロキもなんか言えや！」

「なんやローガさん」

「ローガさんやめろつて言ってるだろおが！」

「いや、言われてみると確かにああこれあかんや、親しみ持てるキャラちゃうなー思つて。なあローガさん」

「があああああああ！」

もはや訳が分からなくなつて、絶叫していたが。

と、その時。まるで示し合わせたかのように、近くの角からフィンが出てきた。妙に含みがある笑みをたたえている。

「やあ。どうも僕の所まで来るのが遅いと思つて、来てみたんだけど

ね。何やら面白い事になってるじゃないか」

「まさか……」

ベートが戦慄していた。顔を思い切り引きつらせ、目尻に涙すらためている。

「ローガさんも大変でしたね」

ローガさん呼ばわりの上に敬語だった。

「うわあああああああああ！」

「あつ。逃げよつた」

ベートは声を上げると、片手で顔を拭いながら走り去ってしまった。

「お前らなんか、その、何か悪い目にでもあえやあああああ！」

「罵詈雑言のボキャブラリ少ないなあ」

しよっぱい捨て台詞に、フィンが苦笑して言った。ロキはけたけたと笑っていたが。

「このネタで一週間くらいはいじれそうやな。ファミリア内にも広めたる」

「まあ、ほどほどにね」

悪戯を思いついたといった表情のロキを、フィンがたしなめるが。苦笑をしているあたり、本気で止めようともしていないのだろう。

ひとしきり笑った後、ロキは顔を戻して言った。

「なあ、トツド」

「なんです」

「これってもしかして仲がいいヘステイア・ファミリアが馬鹿にされたから、その仕返しでやったん？」

「いいえ、全く。ただ面白そうだったから」

真顔に戻ってそれからは、どちらともとれなかったが。まあ神のセンサーに反応しないあたり、本当にただ面白いからしただけなのだろう。

フィンは肩をすくめて空気を変えると、こちらも表情を正してトツドに向かった。

「それで、納品の確認をしいいかい？」

「これです。どうぞ」

言つて、彼は背中の中のバッグを下ろした。がしやりと重い音がする。ボタンで閉められた中を空けると、そこには六本の武器が修められていた。武器は剣や斧……いろいろあるが、どれも一般的なものだ。団員の誰で使えるように、わざとそうしたのでだろう。

「うん、代金は……」

「いつも通り性能を確かめた後で結構です」

「君の作品に間違いはないと思うけどね」

はつきりとした賛辞だったが、それでも彼は表情をぴくりともさせなかった。お世辞であつてもなくても、言われ慣れているのだろう。

フィンがバッグごと受け取ると（低身長の彼が背負うとより一層大きく感じる）、その場を離れていった。

用事は終わったとトッドがきびすを返す。ロキもそれに習った。

「？ 用事はもう終わりましたが」

「見送りくらいするわ」

歩きながら、他愛のない話をしたり、たまに沈黙が挟まったりする。特に面白い内容はなかったが、まあ今回は、ベートの件があつた分プラスだ。

また迷路のような内部を歩いて。ちょうどホームの外に出るかどうかといった所だろうか。背後から足音が聞こえてきた。小気味よい、というのは少々忙しない音だ。

「トッドさんー！」

振り向く。と、いたのはレフイーヤだった。胸には、整備から帰ってきた、両端に宝石が埋め込まれているような、奇妙な形状の杖を持っている。

ロキは手を振って応えた。なんだか、彼女の目に入っていない気がしたが。

「レフイーヤたん、どないしたん？」

「はい、ちよつとトッドさんに用があつて……」

申し訳なさそうな、それでも耐えがたい何かを抱えているような、そんな表情。

彼女は追いつくといくらか深呼吸をした。走って息が切れた訳でもあるまい。いくら特化後衛とはいえ、Lv. 3がその程度の距離で息を荒らげる訳がない。

震える手を無理矢理押さえ、なんとかそれを治めた頃。彼女は意を決して言った。

「すみません、賢者の杖の使い方を教えてください。私は……その……はつきり言って、これを使い切れていません。どうすればいいんでしょうか……」

まるで、迷子が涙するような口調だった。

それを見て、トツドは――

ひたすら、冷ややかな視線だった。

「貸して」

「はい……」

賢者の杖が渡される。と、彼はそれを何度か握り直した。レフイーヤ専用^{ワイズマン}に調整されているため、手に合わないのだろうか。

「よく見てろ」

言うと、彼は杖の両端から、雷の刃を生み出した。レフイーヤはぎよつとして、それを見る。

驚いたのはロキも同じだった。彼は魔力ステイタスこそ持つものの、魔法は持つていない。魔増^{トラウム}誕生から、このようなステイタスを持つ者は多い。魔力を持てば魔法が後付けで発現する者は大体一割前後の確率で現れるが、彼は外れを引いてしまったはずだ。魔法が使えるようになったという話も聞かない。どのみち詠唱すら行っていないので、速攻魔法すら発動されない。

彼が手の中で杖を回すと、雷の刃は炎、氷などと、その色を変えた。刃はそこからさらに分裂し、魔法（としか言い様がない）の球体を作り、それを自分の体の周りを、高速で周回させていた。何周か回すが、それも時間経過でふつと消える。これは消したのか、それとも消えたのか、分からない。

さらに、いきなりトツドの姿が消えた。これにはさすがにロキもぎよつとして、周囲を見回す。

彼の姿はすぐ見つかった。彼女らの背後、つまり通路の反対側に現れている。

「幻……影……?」

思わずつぶやく。

姿を欺瞞したのだろうか。だとすれば、いつから? 彼が杖を受け取ってからなのは疑いない。では、先のデモンストレーションまですべてが嘘だったのか。

あるいは、高速移動か。だとして、ロキはともかくレフイーヤの目まで欺くその速度は、一体どれほどのものなのだろうか。さらには、そよ風すら感じなかった。周りに全く影響を与えず動くなど、可能なのだろうか。

彼女らの問いに、トッドはなんてことないように言った。

「いいや、今のは空間転移、瞬間移動だよ」

「は……はあ!？」

ロキは大口をあけて叫んだ。レフイーヤに至っては、声すら出せない様子だった。

「瞬間移動で、そんなもん神の領域の力やぞ!」

「そう、その通り。それすら可能とする。だからこの杖の名前は、ワイズマン賢者の杖なんだ」

未だ呆然としているレフイーヤに、無理矢理杖を突き返して、トッド。

「ワイズマン賢者の杖は何でもできる、万能の杖だ。俺程度の魔力操作能力じゃこの程度が限界だろうが、本職の魔法使いが使えば、それこそ多人数を抱えて数十メートルの転移だって可能だろうよ。扱いやすさで言えば他の宝剣に劣るが、どれが傑作かと問われたら、俺は間違いなくこの杖がそうだとする」

語る彼の目は、冷ややかなままだった。

視線に突き刺されて、レフイーヤの表情は青ざめてすらいる。

「これを使いこなせると思って渡したんだがな。どうやら買いかぶりだったらしい」

言葉からは。失望以外の何も感じなかった。

彼はそのまま、振り向きもせず帰って行った。レフィーヤは後ろ姿に視線を向けることもできず、ただはらはらと涙している。

ロキはその場でおろおろした。どうにも慰めの言葉が出てこない。かといって、トッドの言葉がきついとも思わない。彼の失望だって、分からなくはないのだ。それだけの期待をレフィーヤにしていたという事なのだから、叱ることも難しい。

「せ、せやー！」

手を叩いて、声を上げる。その程度では、空気を変える役にもたつてくれなかったが。

「ステイタス更新、まだやったやろ！ やろか！ な？！」

言って、まだ泣いたままのレフィーヤを引っ張っていく。ロキの私室に連れ込んで、無理矢理上着を剥ぎ取った。

普段ならセクハラの一つもするのだが、今は全くそんな気になれない。というか、ここでセクハラなどしたら本当にただのクズだ。欲求すら湧かない。未だ涙をこぼしているレフィーヤを横にさせ、ステイタスを更新し。

「ギターー！」

ロキは思わず叫んでいた。

レフィーヤはびくりとして、思わず涙も止まる。ロキはそんな様子も何のその、紙にステイタスを写し、それを彼女の前に掲げる。

「新スキル、それも見たことのないレアスキルや！」

ぱつと、紙を掲げる。そこには確かに、新しいスキルが浮かび上がっていた。

【応報者】

- ・ 魔力ステイタスの成長率超上昇
- ・ 魔力ステイタスの成長限界突破
- ・ 反骨心が強いほど効果量向上

ロキは目をきらきらと輝かせたまま、彼女の肩を揺さぶる。

「見てみい！ その悔しさは無駄やなかったんやで！ これから見返してやればええんや！ そのためのスキルも出てきた！ せやから、もう泣くのは終わりにせんとな！」

ステイタスを見せられて、レフィーヤはしばらくぼかんとしていた。

やがて袖で涙を強く拭った。それこそ、まぶたがこすれて、赤く変色するまで。それは、ただ涙を消すために必要だった訳ではあるまい。気分を切り替え、さらに高揚させるのに必要な儀式だろう。

「はいっ！ 私、絶対にいつか見返してやります！」

言って、彼女は強く杖を握った。それを大事に、胸にしまい込むようにして。

(これは、トッドに、レフィーヤたんを認めるような事言わんといつて釘を刺しとかんとなあ)

今度はうれし涙すら流しそうな彼女の様子に、苦笑しながら、ロキはそんな事を考えた。

しかし——宝剣だ。その性能は、把握しているつもりだった。だが、その力は、もしかしたら自分たちが思っているより遙かに高いものなのかもしれない。

どれもこれもそれも……全部含めて、下界の面白さだ。

ロキは小さく含み笑いをした。それに、レフィーヤは疑問符を浮かべていたが。答えることもできず、ロキは笑い続けた。

なんだ。面白い事なんて探さずとも、いくらでも転がっているではないか。宝剣シザウロスなんていう超常的な力が生まれた現代なら。

ベルの新武器

「トツドくん、ちょおーつとお願いがあるんだけどさー」

「なんですー?」

「ベルくんがいい武器をあげたいのさ。できれば友情価格で作つてくれないかな?」

「もう作ってますよ」

「さつすがー! トツドくんは話がわかるうー!」

そういう事があつた。

オラリオ北西にある廃教会。そこは知る者こそ少ないが、ヘステイア・ファミリアのホームでもあつた。

内部は、まあわかりやすく廃墟だと言える。

最低限の掃除こそしてあるものの、元が何十人と礼拝を行えるようになっていた教会だ。たつた二人で掃除が行き届かせられる訳もなく、とりわけ上階に、汚れが目立つ。あからさまに壊れたものは撤去しているが、今にも壊れそうなものまではそのままだ。正面のステンドグラスが一応無事なのは、奇跡というか幸運と言うか。とにかくそれが差す光が淡いおかげで、なんとか教会内は、ギリギリのラインで荘厳さを保っていると言える。

まあ、これは仕方のない事だ。とはベル・クラネルは思っていた。生活の基盤は完全に地下に移してしまっている。たつた二人のファミリアではそれで十分なのだ。総面積で言えば、アルテミス・ファミリアのそれより全然広いのだし。さすがに、どこもかしこもというには時間が足りない。(でも、今日みたいな事があるなら、普段からもつとちゃんとしておけばよかった)

ベルはそわそわと落ち着きなく、普段は居着かない教会の地上部でたたずんでいた。

隣にはヘステイアもいる。彼女も同じように、ふらふらと歩いては、そこらにある長椅子に意味もなく座ったり立ち上がったたりして

る。

そんな時間を、どれだけ繰り返しただろう。体感ではかなりのものだが。感情が逸っているため、まださほど経っていないかもしれない。こんな時こそ、時間が早く過ぎればいいのにとと思う。ああでも、やっぱりこうして待っている時間も楽しいな。などと、ベルは考えた。途中、床のささくれに足を取られて、たたらなど踏んだりした。そして。

「こんこん、と二度、扉を叩かれる音がした。続いて、気の抜けた声。「お届け物です」

わつと、ベルとヘステイア、二人して同時に扉に飛びついた。

扉を開く。外には予想通りの人物がいた。兄貴分にして師匠でもある、トッド・ノート。

「いらつしやい、よく来てくれたね！」

「お久しぶりです、トッドさん！」

群がる二人に、トッドは苦笑して収めるようたしなめた。といっても、本人もノリがよく、続けて言う。

「こちらがご依頼の品になります」

「待ってたぜ！ わざわざ持ってきてもらって悪いねえ」

「う、うわあ……！」

「武器の運搬自体はアルテミス・ファミリアの義務みたいなもんですからね。下手に仲介したり、受け取り詐欺なんてあったら目も当てられないんで、俺が作った武器はかならず相手のホームに持って行って渡すことにしてるんですよ。なのでその点は気にしないでください」
背中の小さなバッグを下ろす。いや、バッグというよりは、小さな木箱を布で巻いて、体にくくりつけただけのようなものだったが。

手早く布を解き、木箱を空ける。中には、おがくずの緩衝材に守られた、一本のやや大ぶりのナイフがあった。

「これがベル君専用の武器、^{ナルシル}四界閃だ。受け取ってくれ」

「あ……ああ……」

ベルは、まるで壊れやすい宝物を受け取るように、それを取り出した。さほど重量があるものでもないが、それでも両手で大切そうに。

鞘からそつとナイフを抜いていみる。刀身は淡い青だった。そして——妙な事だが——そのナイフは、奇妙なほどに手になじんだ。今まで使っていた、支給品の粗雑なナイフとは次元が違う。それが、手に持っただけで分かった。

「わあ……すーいや……！」

彼は目をキラキラさせながら、ナイフを掲げた。採光量の少ない教会内にあっても、その刀身は輝いて見えた。

「これが、僕専用のナイフ！」

むき身のナイフを持ったまま、ぐつと体を縮め、力を入れてみる。ナイフを持っただけで体の力が増したのは、気のせいではあるまい。手に持ったナイフには、間違いなくそうさせるだけの力が存在する。

「ベル君は魔力ステイタスを発現してるだろう？」

「はい。冒険者登録をしてすぐ、アクセサリーをもらって……その後すぐ寝込んでしまいましたけど。今は確か……」

「ああ、正確な数値は言わなくていいよ。それはファミリアの秘密に相当するものだから」

思わず口を滑らせようとしたベルを、トッドが制止する。

一般人が初めて冒険者登録をすると、まず最初に最低限の武器と、魔力ステイタスと呼び覚ますアクセサリーが（こちらはレンタルで）渡される。たしか、魔増トラウムと言ったか。それを使って、ベルも魔力は得ていた。低確率で魔法も発現するという説明もあり、密かに楽しみにしていたが、残念ながらそれは叶わなかったが。

ベルの担当アドバイザーであるエイナ・チュールによると、魔力ステイタス——厳密に言えば精神力——は、魔力撃武器ストライクを使うのに重要なものらしい。精神力により、魔力撃武器ストライクを装備したとき、攻撃力が底上げされ、武器の品質によつては身体能力まで上がるのだとか。説明は専門的なものが多くて難しく、ベルにはよく理解できなかつた。そもそも語ったエイナ自身すら完全に理解できていないとか。

とにかく、今の冒険者は、魔法が使えなくとも魔力値を伸ばすのがスタンダードなのだ。それだけ覚えていればいい、とエイナに言われ

た。

「どうだ、力が湧き出るだろう」

「はい……！……！ ものすごい！」

まるで自分の体が自分のものではなくなったみたいだ、と思う。ともすれば体を振り回されそうな上昇幅に、ベルは思わず歓声を上げそうになった。

「これが噂に聞く魔導力武器なんですね！」

「……？ ああ、違うよ」

トツドはきよんとして言った。言われたベルも、そしてヘステイアも、思わず似たような顔になる。

「え？ 違うのかい？ ボクの記憶が確かなら、精神力で身体能力を増幅してくれる武器は現状エピセスっていうものだけだったと記憶してるけど」

「実際には、全部神域金属アダダマントで一緒くたのものだから、どれを持っても恩恵自体はあるんですけどね。まあそこはどうでもいいか」

本当にどうでもいいと思っているのだろう。彼は自分自身の言葉を軽く流した。

「それは魔導力エピセスじゃなくて宝剣シザウロスだよ」

言われる。が、ベルとヘステイアは示し合わせたかのように首をかしげた。

トツドは肩をすくめて小さく笑いながら、つぶやいた。

「宝剣シザウロスの知名度はまだ低いか。まあ、仕方ないか。纏まって持つてるのはロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアくらいだしな。大々的に発表したって言っても、もう結構昔の事だし」

「むむっ」

ロキ・ファミリアと聞いて、ヘステイアは眉をひそめる。

実態は知らないが、ヘステイアはどうも、ロキとはあまり仲がよくないらしい。実際に接触をした所を見たことはないの、ベルには実感が湧かないことだったが。後はまあ、たまに行くアルテミス・ファミリアのホームで、（一目惚れした）アイズとレフイーヤに会うときも、なんだか微妙な顔をしていた。それに関しては、ただロキ・ファ

ミリア所属だからという話でもなさそうではあったが。

ちなみに、アルテミス・ファミリアのホームでアイズと合う時も、ともに話はできていない。会うとどうしても心臓が高鳴り、勝手に足が逃げ出してしまうのだ。なので、実はまだまともに話した事もなかった。

「でもこれでうちのファミリアも宝剣持ちだぜ！シザウロス 意味はよく分からないけどー」

「まあそれでいいんじゃないかな」

彼は未だ肩をすくめたまま同意した。それでとりあえず肩は下げ、続ける。

「それで、ナイフの説明、いるだろう」

「はい！ お願いしますー！」

ベルはむき身のままのナイフを両手に乗せて、ぴつと差し出した。彼は何気ない動作でそれを受け取る。そして、手の中にくると回転させ、最後に逆手に持った。何気ない仕草だが、そんなものまで様になっている。こういったさりげないものまで格好良く見えるのはいいな、とベルは密かに憧れた。

「通常、ストライク 魔力撃武器は精神力を消費して力を発揮する。そのため、マジック・ポーシヨンの需要が増してるが……まあこれは関係ないか。とにかく、宝剣シザウロスっていうのは、それよりちよこつと多めに精神力を消費して運用されるんだ。しかし、ここで問題がある。Lv. 1のそれも新人が使うと、精神疲労を起こす可能性が高くなる。普通は、そこまで無茶な消費をするような設計はしてないんだけどね。機能そのものに精神力増幅機構があるし」

うんうん、とベルとヘスティアは二人して頷いた。自分たちでも分かる、理解できてない首肯だった。

まあ、そうだととはトッドも思ってたんだろう。彼は表情も変えず、言葉をかいつまみ始めた。

「だから、この宝剣シザウロスは精神力じゃなくて技量に反応するようにある。まあ、見た方が早いか」

言って、彼は軽く構えると、ナイフを一閃した。

銀光が走る。が、それは一本ではなかった。輝ける刃の軌跡は、ナイフそのものの他に、五本もあった。

あまりにも理解不能な、そして現実離れた光景に、彼らはぽかんと口を開けた。何が起こったのか、全く分からない。

「見ての通り。四界閃は振るつた使い手の技量に^{ナルシ}応じて刃を増やす。それがこのナイフの特徴だ」

「凄い……凄いですー!」

「やったねえベル君! トツド君もよく作ってくれたよー!」

ベルは興奮に、小さく跳ねてすらいる。

トツドはにっと笑っていた。まるでいたずらっ子のような笑みだ。こうして自分が作ったもので人を驚かせる瞬間が好きだ、という稚気があるのは知っていた。が、それを自分に向けられるのは初めてだった。ちよつと恥ずかしくなつて、ベルは反応を小さくする。

ナイフを渡されて、受け取り直す。そして、自分でも振ってみた。さすがに技量には差があり、ベルでは二本しか刃を増やすことができなかった。

「う……僕じゃまだ全然駄目ですね」

「武術初めて間もないのに二閃も出せれば上出来だよ。これからもつと練習して、大量に出せるようになればいいんだ。計算上だと、一流つて言える使い手になれば、十閃くらい出せるようになってるはずだからな」

「十……そんなにですか!?!」

「ああ、だから頑張れよ」

「はいー!」

満面の笑みを浮かべて、ベルが返事する。それから、彼はぶんぶんとナイフを振るつて、なんとか三本目が出せないかと四苦八苦していた。

「ちなみに、刃の射程距離はだいたい三メドル。発生点や角度も調整できるから、頑張つて使いこなすといい。ちなみに、刃を一本に纏めて数倍の威力を持つ一撃にもできるぞ」

「本当ですか!」

言われて、ベルは神経を集中した。

教えられたとおりの、ナイフの構えを取る。そして、一気に振るつてみた。銀閃は確かに、ベルが思い浮かべたように、縦に振るわれたナイフとクロスするようにして現れる。

続いて、もう一度構え直す。今度は突きだ。体を引き絞り、一気に突き出す。今度は一点集中。刃に重なるようにして現れた閃光は、ひとまとまりに、そしてひととき強く輝いて走った。さすがに体感で威力の向上までは分からないが。それでも、一点に集中できたという実感はあった。

思い通りにナイフが動く。今まで使っていたナイフのように、どこか振り回される感じが全くない。その上、増える刃は動かすも重ねるも自由自在。射程距離だって、長物の武器くらいある。使いこなすには難しいだろうが、それを差し引いても、恐ろしく強力な武器だった。(いや)

と、ベルは内心で否定し、

(僕みたいな駆け出しじゃなかったら、正真正銘トップクラスの武器なはずだ)

思い直した。

ベルとしてしよつちゆうダンジョンに潜る。ヘスティア・ファミリアは探索系ファミリアだ(団員がベルしかおらず、彼がダンジョンに潜る以外何もしていないのだから自然とそうなる)。そこで、別ファミリアの団員を見ることも、少なからずあった。その中で、これほどの武器を持っている者は見たことがない。

そう考えると、急激にベルの胸に不安があふれてきた。

「トッドさん、これ高いんじゃない？」

「ほいトッド君、代金三千ヴァリスびったりさー！」

「まいどー」

「やすー！」

主神とトッドの軽いやりとりにも、ベルは思わず声を上げた。

「いや三千ヴァリスって安すぎませんか!？」

「そう言われても、売値はこっちの自由だからなあ……」

「友情価格ってやつだけ、ベル君！」

「いえ、それにしたって三千ヴァリス……そこらの露天で売ってる中古の下級冒険者向け武器くらいの値段じゃないですか……」

なおも理解に困って、言いつのるが。

しかしトッドはなんてことのないように言う。

「つつても、原価はこんなもんだぞ」

「こんなに強力な武器なの!?!」

「ああ。買い集めた金属の分だけな。他に必要な素材は、前にダンジョンアタックして集めた素材が、研究室にごろごろ転がってるから、それを使った。まあ製造にはそれなりに手間がかかったが、それだけだ」

「でもその……悪いんじゃない……」

「子供が遠慮するな」

言って、トッドはその大きな手で、ベルの頭をわしわしと撫でた。ごつごつして、堅くて、いかにも使い込まれた手のひら。間違ってもここちよいものではなかったが、しかしベルは、そうされるのが嫌ではなかった。

ちよつと卑怯だな、とベルは思った。こうされてしまうと、何も言えなくなってしまう。

「それに、うちとヘステイア・ファミリアの仲だしな。ねー」
「ねー」

ヘステイアとトッドが、ぱんと音を立てて手をたたき合う。そんな様子を見せられると、本当にどうでもよくなってしまう。

「あ、ただし四界閃ナルシナルを売るのはなしな。宝剣シザウロスの扱いはちよつと面倒くさくてね。所持ファミリアをギルドに登録しなくちゃならないんだ。というわけで、下手に売るとギルドからペナルティが発生する可能性が高い」

「そうなのかい？ ボクは初耳だよ」

「さほど有名な話でもないですからね。商人の間じゃ知れ渡ってるでしょうが、その程度の事です。そもそも宝剣シザウロスだって、あまりに数が少ないから、記憶からかすれ始めてますし。何かと混同されてる所すら

最近見ますからねえ。やっぱり作れる人間が未だ俺だけってのが
ネックですね。魔導力エビセスの完品すら作成可能なのが俺か鍛冶の神様だ
けってのがまあなんともし

「へー」

と、これまた分かったようでよく分からないといった風に、ヘス
ティア。

「売ったりしません！　ずっと大事にします！」

「そう言ってもらえると嬉しいよ」

微笑み、そしてあつと何かに気付いたように付け加える。

「これは注意じゃなくて助言なんだがな。扱う武器は一本に……ナイ
フならナイフに絞った方がいい。俺がなんでも扱えるから言える事
だがな、万能ってのは強みであり弱みでもある。一点特化のやつに
は、やっぱり技能面じゃ勝てないよ」

ベルは神妙に頷いた。

用事は済ませて、トツドは帰っていったが。

ベルはその日一日、にこにこ笑いながら、ナイフを振り回し続けた。
早く明日にならないかな、と願いながら。

後日。怪物祭が終わってから。

ベルはアルテミス・ファミリアに駆け込んでいた。

「トツドさーん！　やりました！　僕やりましたよ！」

「おいおい、どうした」

飛び込んできたベルを、トツドが抱える。反動を殺すように、その
場を軸にしてくるくると回った。

「あのですね、先日の事なんですけど——」

「待て待て。今お茶を入れるから、座ってゆっくり話そう」

言われ、ベルは自分が興奮しすぎていた事を恥じた。

それから、多くの事を話した。怪物祭を楽しんだ事（トツド自身は
研究のため祭りには参加しなかったらしい）。そのときに、ガネー
シャ・ファミリアからモンスターが脱走した事。そのモンスターが、
なぜだかヘスティアを狙っていた事。ヘスティアと二人して、ダイダ

ロス通りまで逃げた事。それでも追いかけてきたシルバーバックから逃げ切れなかった事。その場でステイタスを更新し、能力の向上と^{ナルシル}四界閃の力もあつて、なんと11階層相当のモンスターを単独で撃破できた事。

たぐさんの事を、時にはつつかえ、時には順序がめちやくちやになりながらも話した。

トッドはそれに、ずっと微笑みながら相づちをうっていた。

話し終えた頃に、ちょうどヘステイアもやってきて。三人でそのままお茶会になどなったりした。

話している内に、ふとベルは気がついた。改めて思い出した、と言つてもいいかもしれない。

トッド・ノートという人物は、やはり自分にとって、兄貴分なのだという事を。

バッド・サポーター

さして広くない大通りの脇の小道を、小さな人影がぷりぷりと頬を膨らませ、大股で歩いていった。

幼気な見た目だが、胸は不釣り合いに大きい。そのため、外見から年齢を推測するのは困難だった。もつとも、その少女が神であるという点を鑑みれば、年齢の推測そのものが無意味ではあるのだろうが。剣幕はそうとうなもので、すれ違う者が思わず道を空けるほどだ。外見が少女少女しているため、威圧感というのはほとんどないのだが。それでも、あえて火種に触れたいとは誰も思わないのだろう。小脇にそれでは、何事かとその少女をちらりと見ていた。

彼女——ヘステイアは、アルテミス・ファミリアへと向かっていた。彼女に神友は数多くおれど、さすがにアポなしで突撃して、突発的な怒りを受け止めてくれる者は少ない——だいたい誰もが組織運営なりに忙しいのだ。ヘステイア自身が、感情のままに先走る事ができるほどファミリアが小さい、という事こそ問題なのだが。そんな考えも浮かんでくれないほど、彼女は怒っていた。

「アルテミスー」

どぼん、と大きく音を立てて、アルテミス・ファミリアのホーム玄関を叩き付けるように開けた。

返事はない。

怒りは変わらないが、かといって理性までは失っていない。あれ、と疑問に思い、彼女はそのまま立ちすくんだ。

誰もいない、という事はないだろう。ホームに鍵はかけられていなかったのだし（アルテミス・ファミリアは重要情報が多いので、普通のホームよりかなり厳重に戸締まりがされている。誰もいない時に鍵が開いている事は絶対でない）。

しばしの沈黙。から、奥の間から足音がした。

ひよこりと顔を出したのは、アルテミスではなかった。このファミリア唯一の眷族、トッドだ。

「これはヘステイア様。どうなさいました？」

「アルテミスはいるかい？」

「今日も留守ですね。ここ最近、どうも外に出ている事が多くて」
彼は手をタオルで拭いていた。ちやうど何かの実験でもしていたのだろう。使い終えたタオルは、そのままひよいと投げる。うまい具合に近くの棚に乗った。

「どうやらずいぶんとお冠の様子で。愚痴くらいなら俺が聞きますよ」

「うーん……じゃあ聞いてもらおうかな。トッド君にそんなことをするのは悪い気がするけど、そうでもしないとこの気持ちが収まる気がしないさ！」

思い出したから、という訳では断じてないが。ヘステイアはぷくりと頬を膨らませ直した。勝手知ったる他人の家とばかりに、リビングのテーブルにつく。

トッドは白衣を脱いでハンガーに引っかけると、すぐキッチンへと向かった。お茶の準備をしてくれているのだろう。彼が研究や依頼にかかりきりの頃、この手の事はアルテミスの役割だったが。彼の手が空いてきた最近では、彼自身がこういった事もするようになっていた。

お茶セットが用意され、彼も席に着くと、話を促してきた。

「それで、今日はどうなさいました？ いつもとは違う様子ですが」

「聞いてくれよ！ ボクのベル君がたちの悪いサポーターにたぶらかされたんだよ！」

「それはまた……心中穏やかではないでしょうね。俺の神様も、外部からサポーターを雇うのにはあまりいい顔をしてませんでしたよ」

「そうだろう!? しかもベル君は、その中でも特別悪質なやつに引つかかったんだよ！」

ヘステイアは感情のままに、ばんばんとテーブルを叩いた。カップの中で琥珀色の液体が、波紋を描く。

「元からよくない相手だとは思ってたんだ！ その上、サポーター君はねえ、ベル君が君からもらったナイフを秘密裏に売りさばこうとしてたんだぜ！」

「ああ、その件は俺の耳にも入ってますよ」

「知ってるのかい？」

「まあ、宝剣シザウロスに関しては、必ずこちらに連絡が入るようになっていまずから」

言われ、ヘスティアはふと先日と言葉を思い出した。

宝剣シザウロスなる武器は、売買にあたってギルドへの登録が必要。そして、すべて情報が管理されていると。これは作り手がたった一人であるのと、武器があまりにも強力すぎるが故の措置だ。オラリオの外に出るのを防ぐためだと思われる。有力な鍛冶師が増えれば、この制度もなくなるのだろうか。

「そうだよ。ベル君からナイフを盗んで盗品として裏から捌こうとしたんだ！」

「で、それは失敗したんですよね」

「うん。当然の報いだね！」

ふん、と鼻を鳴らして、ヘスティアは紅茶を一口飲んだ。行儀がいんだか何だか、その後腕なども組む。

路地裏の盗品商店で、その盗人は四界ナルシル閃を売りさばこうとしたが、そこで売ろうとしたのが、宝剣シザウロスだったのが問題だった。

ただの冒険者の中ではあまり知られていない事実なのだが、ギルドで宝剣シザウロスは、国宝のごとく丁重に扱われている。そのため商人の間では、闇だろうが裏だろうが、宝剣を扱えば利益以上のリスクがつきまとう事を知っている。仮にその店——ノームの店だったか——が、買い取ったとして。まずオラリオを脱出するまえに、暗殺されていただろう。いや、その前に、対価すら払えないか。なにしろ一本何十億ヴァリスという代物らしいし。

本人もそれを知っていれば、そんなリスキーな真似はしなかっただろう。だが、一般冒険者の中では、宝剣シザウロスの扱いは驚くほど広まっていない。現状だと所持者が、一部例外（つまりベルだ）をのぞき、第一級冒険者に限られるのも、それに拍車をかけているのだろう。

早い話が、名前だけが先走って嘘ばかりが広まっているのだ。宝剣シザウロスという武器は。

「でも、その盗品を扱う店の店主は賢明だったね。買い取れば、自分がどんな目に遭うか分かってたんだろうさ。金品の準備をすると偽って、裏からギルドへ通報したのさ。ギルドは急いで現場に人員を送ったわけだ」

「そこで捕まったって話は聞きませんね」

「店主が戻ってくるのにサポーター君が違和感を感じたらしくくてね。ナイフを持って、その場から逃げたんだ。まあ結局その場はベル君の知り合いに見つかって、なんやかんやあつてうやむやに終わったんだけど……」

ここで、ヘステイアはぐぐぐ……と拳を握った。そして、天高く拳を振り上げる。勢い余って立ち上がったため、椅子ががたと鳴った。

「ベル君も関わるのをやめとけばいいのに、またそのサポーター君を雇ってさあ！ 今度はナイフを奪った上でモンスターをおびき寄せたんだよ！ 殺人未遂だ、殺人未遂！ まったく、ふざけるんじゃないって話だよ！」

ぐあー！ と氣勢を上げて、だんだん両足で床を蹴る。

トッドはどうどうと彼女を押さえながら、紅茶を勧めた。

とても飲む気分ではなかったが、ここでこれ以上暴れるのも悪い。そのため、紅茶を一気に飲み干して、なんとか暴れ出すほどの怒りも同時に流し込んだ。

「それで、どうなったんです？」

「どうもサポーター君も相応に恨みやら買っていたらしくてね。同ファミアの人間やら冒険者やらに襲われたらしいよ。因果応報だね」

ふん、と鼻を鳴らして、ヘステイアはぶいっと顔を背けた。まあ、トッドに怒りがあるわけではないので、すぐに顔は戻したが。

「サポーター君が怪しいと踏んでいたギルドが、ガネーシャ・ファミリアに依頼して張ってもらっていたらしいんだけど。ちやうど現場を押さえたらしくてね、その場で全員お縄さ。ベル君は自力で窮地を脱出し、盗人たちもつかまって、めでたしめでたし……とはいかなかった

た！」

またヘステイアは、天に向かって叫んだ。今度は暴れて迷惑をかけるような事はせずに。

「俺も、ソーマ・ファミリアがペナルティを食らった事くらいは知ってますが」

「ああ、どうやらあそこはサポーター君だけじゃなく、ファミリア全体が問題だったらしいね」

組織ぐるみで犯罪すれすれ、というか中には犯罪そのものの行為を行っていた。そうでなくとも、素行の悪さでは真つ先に名前が挙がるファミリアの一つだ。ギルド職員も、いつも頭を悩まされていたと聞く。

まあ確かに、ファミリア統治組織としては頭の痛い問題だろう。

「さらに問題は！」

ヘステイアは大仰な姿勢から、ぐつと拳を握って胸の前に抱き込んだ。先ほどからボルテージが全く下がっていない。

「それでもベル君がサポーター君をかばうって事なんだよ！ いや、そこがベル君のいいところなんだけどね!? でも今回は、殺されそうになってまでって、さすがにちよつと度が過ぎてる！ そう思わないかい!?!」

「思いますけど、そこがいいところだって自分でも言ってたでしょう?」

「そうなんだよおー！」

「でも、いくらかばっても殺人未遂の現行犯まではかばいきれませんよね。どうなったんです?」

「……ギルドから取引の要求があつたんだ」

「ここで初めて、ヘステイアは気炎を下げた。

「実は彼女も、そのまま処罰の対象となる予定だったんだけどね。ギルドは今回の件を、奇貨と見たんだ。犯罪行為は犯罪行為として、しかし大本はソーマ・ファミリアに原因があるって具合にさ。ただ、現行のままだと、ソーマ・ファミリアがもみ消しのために本当に切り捨てられかねない。だからどこかに改宗して、そこに守ってもらって、

証言の有効性を保たなきゃならなかったんだけど……」

「ははん、なるほど」

トッドは気づき、声を上げた。そつなく、空になったヘステイアのティーカップにお茶をつぎ足しながら。

「どでかいファミリアには入れられない。そもそも拒否される。けどただの弱小じゃ無理。というわけで、うちと縁が深いヘステイア様のファミリアに改宗って事になったんですね？ 最終的にはベル君のお願いに後押しされて。名目上は保護観察処分って所ですかね」

「そうなんだよおー！ ボクとベル君の愛の巢に余所者が、それもよりによって極悪サポーターが来たんだよおー！ それも数千円ヴァリスの罰金つきでえー！ これは彼女当人だけの借金だけどー！」

わあん、とついにヘステイアは泣き出してしまった。その様子に、さすがにトッドもどう慰めればよいか、悩んでいる様子だった。

暫く泣いていると、ドアがノックされた。未だしゃくり上げているヘステイアをとりあえずおいて、トッドが対応する。

「どなたですか」

「ギルドから派遣されてきました。エイナ・チュールです」

扉の向こうでは、ベルの担当アドバイザーということもあって、よく知るハーフェルフの姿があった。彼女はヘステイアを確認して、その涙に濡れた赤い目に、ぎよつとした様子だったが。

「あの、神アルテミスは？」

「今は不在だよ」

「できれば一緒に話したいのですが……」

「ギルドの依頼っていう事なら、俺が先に話を聞く。アルテミス様はあの通り結構厳格なたちでね。俺が先に聞いておいた方が話が早い」
言つて、彼はエイナの分もお茶を用意した後に、

「ちよつと早めだけど昼にしよう。今日はアルテミス様がないのにちよつと作りすぎてしまいましたね。ヘステイア様もどうぞ。エイナ嬢もついでだからとつていけ」

「いえ、悪いですよ」

「君が食べないと過ぎた分は破棄することになる。助けるとでも思っ

てくれ」

「そういう事なら……」

申し訳なきように答えながら、彼女は席に着いた。トッドはそれを確認するより早く、キッチンで調理を始める。

ホームのテーブルは、二人だけの場所と考えれば大きすぎるほどのサイズがある。離れようと思えば、ヘステイアからいくらでも距離はとれただろうに、近くに座った。離れたら離れたで、失礼に当たると思ったのだろうか。

ヘステイアは泣きはらした顔のまま、ぷつと頬を膨らませてエイナを見た。彼女はなぜそんな態度を取られるのか分かっていなく、ひるんでいる。

「先に行っておくけど、ボクは今回の件、ギルドを許したわけじゃないんだぜ」

「ああ、リリルカ・アーデ氏の……。その件に関しては、感謝してもしたりません。同時に、ギルドを代表して謝罪します」

と、彼女は本当に申し訳なきように（根が生真面目なのだろう）頭を下げた。

「今回、ソーマ・ファミリアはリリルカ氏に責任を全部かぶせて、事態の矮小化を図ろうとしています。逆にギルドは、加害者であるけど被害者という形にして、ソーマ・ファミリアの運営にまで手を入れたいと考えていました。無罪にならない程度に罪をかぶせて、ソーマ・ファミリアに責任を負わせるとなると、こういう形にするのが一番だったんです。この件に関しては、私にも口出しする権利はなくて……」

「いいさいいさ。受付嬢一人にそこまでの権限があるとは、ボクだっと思ってないよ」

調理は早かった。元々、ほとんど準備はできていたのだろう。トッドが皿を何枚も持って、テーブルに並べる。

全員で礼をして、食事を始めた。

「うそ……なにこれ！ 凄くおいしい！」

一口食べて、エイナは驚いた様子だった。その後、真剣に料理と格

闘している。

ヘスティアはうんうんと頷いた。気持ちはとてもよく分かる。自分も、初めて食べたときは似たような様子だった。

食事も半ばを過ぎ、皿にのった料理の大半がなくなった頃。トッドが口を開いた。

「それで、ギルドの用事っていうのは？」

いきなり問われて、エイナはんぐつ、と喉を詰まらせた。かなり真剣に食べていたため、それ以外の事に意識が回らなかつたのだろう。胸をとんとんと叩いて、なんとか詰まった食物を嚥下し、ぷはつと息を吐く。

「え、ええ。実は、神ソーマから、ギルドの出した条件を受ける代わりに要求がありました……」

「それがうちに……というか、俺に関係する？」

「はい。実は、トッド氏が持つ酒造機と熟成室を得られた場合、条件を全面的に飲むと言われて、それでこうしてお願いに……」

「いいよ」

「はい？」

「だから、いいって。ギルドは当然その装置を買ってくれるんだろう？ ならわざわざ隠すほどのものでもないし、売るさ。他の所から依頼が来て、いちいち作る羽目になるのは嫌だから大々的に売るとは言わないけど。それでいいだろう？」

言葉は疑問形ではあったが、質疑を許さぬ強さも感じさせた。こういった頑なな所が、アルテミスを悩ませるトッドの人格なのだろう。

「は、はい。それはもちろん。こちらとしてもありがたいです」

「とういかさー」

ヘスティアは、フォークでデザートである、フルーツの蜂蜜漬けをつんつんとつついた。元が酸味のきいていて、甘みが抑えられたものなのだろう。ほどよくまろやかになった酸っぱさと、うまい具合にしみこんだ甘みが、口の中を爽やかにしてくれる。

「ギルドはどうしてフリーのサポーターを放置しておくんだい？ 今

回たまたまソーマ・ファミアから表面化しただけで、今までだって問題がなかったわけじゃないだろうに」

「そもそもサポーター問題を解決する気がないんですよ」

言葉に詰まるエイナの代わりに答えたのは、トツドだった。

「フリーのサポーターなんて、ギルドが窓口を一括管理して条件まできっちり決めてしまえばそれで大半が解決する話なんですから。それをしないってことは、まあ、金にらん事まで面倒見切れんって事なんでしょう。所詮互助組織です。過剰な期待はできませんよ」

「なんというか、まあ……。ギルドの見方が変わってきそうだね」

「ギ、ギルドはそこまで薄情な組織ではありません！ 経営だってちゃんと健全なもので、冒険者の事を考えて運営されています！ その……多分」

最後の一言は、つまり自信が揺らいだという事なのか。なんにしろ、語調は弱かった。

が、トツドの言葉は、どこまでも冷ややかだった。

「つまりギルドとしては、サポーターは冒険者にあらじって事なんだろう」

否定できる材料はなかった。特に、強く言える事では。

感情では納得できないものの、しかし理性では分からざるをえない、とはヘスティアも思った。つまり、どうしたってサポーターの地位は低いのだ。どうやったところで、主役にはなれない。あくまで添え物であり、おまけ。それは大遠征をするような大規模ファミアですら変わらない。彼らは矢面に立たない。立たない。弱いから。

エイナはいくらか、口の中で言い訳を用意した様子だったが。やがて降参したようにうめいた。

「そう、ですね。今のところ、フリーサポーターのバックアップ体制は、ギルドの議題にも上がりません」

「君を責めるわけじゃない。当然慰めてるわけでもないが。だが、ここはオラリオ、力を持つ者のみが栄光を得られる街だ。仕方のない事ではある」

しん……と、静寂。

ヘステイアは苦しくなった。間を無視するためのデザートも、すでに食べ終わってしまったている。仕方なしに、苦し紛れに口を開いた。「ところでトッド君は、今何の研究をしているんだい？」

今までの話題に、特に未練もなかったのだろう。トッドは表情を変えずに言った。

「魔石で稼働する大型転移装置の研究ですよ。今までのように、最初から順に潜るのではなく、点と点をつなぐ……そうですね、例えばバベルから、いきなりリヴィラの街に行けるような。これがうまくいけば、すべての安全階層セーフポイントから冒険を始められるようになりますよ。モンスターを恒常的に追い払う方法などはありませんから、できたとして、まだ問題の多い装置ですが」

「凄いいじゃないですか！」

エイナは思わず立ち上がって、声を上げていた。興奮して、顔まで紅潮させている。

「それができれば、迷宮での『迷子』を劇的に減らせます！ 往路はもちろん、帰路だって格段に安全になりますし！ うまくすれば、さらに下の階層で街を築けるかも！」

「門が完成したとして、それを維持する戦力を捻出できないから、まだまだ机上の空論だって」

「だって！ そんなのオラリオ内に限った話じゃないんでしょう!?! 外の街とつなげられれば、流通だって大幅に改善されますよ！」

「まあ、現状じゃどちらかと言えば、そっちの方がメインになっちゃうのかね」

興奮し続けるエイナに、とつとつと答えるトッド。

その様子を見て、ヘステイアはとりあえず安心した。やはり、息苦しい話は苦手だ。これくらいの話がちょうどよい。

まあ、それはそれとしてリルルカ・アーデは許さないが。それだけは決心して、彼女も話しに混ざっていった。

終わりの始まり

初めて出会ったのはいつのことだっただろう。アルテミスは考える。

少年というほど小さくはなかった気がする。でも、青年というほど熟達もしていなかった。そんなおぼろげな記憶。ただ一つ覚えているのは、寒かったという事だ。身も心も震え、凍えるほどに体が冷たかった。体の芯まで怖気が支配し、彼女はもう、一步も動けなかった。動こうとさえ思えなかった。全身から血の気が引いた体は、全く動こうとしてくれない。動く気にすらならない。それが、失意故の——無力感だった。

そんな状態だったから、どうやってオラリオまで来たのかも覚えていない。最初は、助けを求める気だった気がする。しかし、今更救援を請うて何になる？　すでに助けたいものはすべて失った後なのに。何も無い。アルテミスにはもう、何も無い。

そんな状態で、街の隅の方で、小さくうずくまっていた。確か、そのときだったと思う。彼に声をかけられたのは。

『神様、ですか？』

問いかけには、確か答えなかった。その男は、小さくなって足を抱えて座り込んでいるアルテミスを見下ろしていた。暖かくも冷たくもない目。ただ、疑問だけを投げかけてくる。

それが、逆に心地よかったのかもしれない、とアルテミスは後に思う。哀れまれるのも、気を遣われるのもたたくさんだった。いつそ責め立ててほしかった。ファミリアを壊滅させた、無能な神を。

『ちようどいいや。俺を眷族にしてもらえませんか？』

彼は、アルテミスの事情などお構いなしにそう言った。そのときの自分は、どうかしたのだろう。そう思う。だって、そんな状態で、なおやけになって眷族を作ったのだから。

彼女はぼろぼろの状態で立ち上がった。そして、なけなしの金で借りた倉庫。そこに唯一ある、水晶に包まれた“槍”を手に持たせてみた。結果は……彼には引き抜けなかった。

正直に言つて、当時の彼女にとって、男はどうでもよかつた。ただ、すべてを「終わらせられる」かどうか、それだけが重要だつた。

彼はオリオンではなかつた。当時のアルテミスにとっては、それがすべてだつた。

そこから、一柱と一人のファミリア生活が始まつた。失意に飲まれていたアルテミスは、当時の事をよく覚えていない。が、それがろくでもなかつた事だけは分かつた。なにせ、自分は生ける屍も同然だつたのだから。それこそ、男の名前を覚えたのすら、大分後だつたと記憶している。

男——トッド・ノートはめちやくちやな人間だつた。「槍」の事などすぐに忘れ、残つた金で借家を借りた。そして、とつとと資金繰りのためにダンジョンへ潜つていったのだ。

彼の戦い方は、めちやくちやだつた。武器を持って、とりあえず食料庫に突つ込む。そして、死ぬギリギリか、さもなければモンスターがいなくなるまで戦い続ける。その繰り返し。余人が見れば気でも触れたかと思うほどの無謀な戦い方だつた。だが、そのおかげで、ファミリアに多少の余裕ができたのも確かだろう。

トッドは決して甘い人間ではなかつたが、しかし優しさがないわけでもなかつた。でなければ、当時何もする気が起きなかつたアルテミスを面倒見る訳がない。動くのすら億劫だつた彼女の面倒を見るといふ事は、つまりほとんど介護と同じだつたのだから。

アルテミスは、いつもベッドにうずくまり、そして起きてるとも寝てるとも知れない夢幻の中で、ただ願つていた。今が早く終わつてくれればいい。トッドに逐一面倒を見られるのも、そして彼が自殺のようなダンジョンアタックを繰り返すのを見送るのも、全部たくさんだつた。

女神にいくらか力が戻つてくると、やがて彼女はトッドを拒絶するようになった。それは、強いものではなかつた。そこまで彼女の心は回復していない。やんわりと、無視をする程度のものであつた。

トッドはそれでも見捨てなかつた。

その理由が、なぜだかは今でも分からない。少なくともその時点

で、一年は過ぎていた。改宗してもよかつたはずだ。それでも、彼はそうしなかつた。幾度となく改宗を勧めたのにもかかわらず。

絶望した女神と、何を考えているのか分からない眷族の生活。それは暫く続いた。

彼がLv・2になった頃だろうか。アルテミスは、やつと顔を上げることができた。と同時に、思い知らされた。自分は、彼がそこにいるというだけで、ずいぶんと救われていたのだと。いつしか——涙は流さなくなつた。流せなくなつたわけではない。過去が消え去つたわけでもない。何も代わりはしない。ただ、未来は少しだけ、見えるようになった。それを知って、彼女は泣いた。最後の涙だつた。

そんな風に引きこもっていたものだから、当然神会には参加していなかつた。そのせいで、トツドの最初の二つ名は、とんでもないものにされてしまつたが。出会ってから今まで、ろくに会話をしてこなかつた。初めて彼女から話したのは、たしかそれについてだつたと思う。痛々しい二つ名についての謝罪は、正直おまけだ。ただ、彼の会話の糸口を探していたに過ぎない。アルテミスはベッドから起きて、彼に謝罪をした。そしたら彼は、「どうでもいいです」と、簡単に一言答えただけだつた。

ぶつきらぼうな彼の様子に、アルテミスは笑つた。それこそ、涙が出そうなほど笑つた。彼はきよとんとしていたが、それでも何かが面白くてたまらず笑つた。ファミリアが壊滅して数年、久方ぶりの笑みだつた。

トツドがLv・2になって、稼ぎも増えた。相変わらず彼のダンジョンアタックはイカれていて、今度は中層の食料庫にこもつてひたすらモンスターを倒す、という事をしていた。何度も止めたが、それだけは絶対にやめてくれなかつた。

やがて、ホームを買つた。通常よりやや高い、一戸建てに壊れかけた倉庫がある、庭付きのホーム。新しい門出を感じさせた。

借家を引き払い、引越しをしている最中だつたと思う。アルテミスは、当たり前前の問いを問いかけた。

『なんで君は、私を見捨てて他のファミリアに入らなかつたんだい？』

その方が楽だっただろうに』

『アルテミス様が主神で、俺がその眷族だからですよ』

その言葉に、どんな感情がこもっていたかは分からない。トッドは内心を悟らせないのが得意だった。いや、感情を表現するのが苦手だったのかも知れない。いつもの仏頂面で、何を当たり前前の事をとでも言うようにそう言った。

ただ一つ、アルテミスに分かったのは。

彼はもう、彼女にとってなくてはならない存在だという事だった。かつての家族と同じく、愛しい愛しい自分の子供だという事だった。それから生活は、少しだけ変わった。

トッドは前ほどダンジョンアタックをしなくなった。その代わりに、貯めた金を大放出し、壊れかけた倉庫を改装して、研究室を作った。そこに、自作の研究施設まで作って、ダンジョンに潜らない日はそこに詰めているようになった。

アルテミス・ファミリアが研究系ファミリアとして産声を上げた瞬間だった。

トッドはコミュニケーションが下手だ。口から出る言葉は大抵皮肉気で、ともすれば相手をつついていているようにも感じる。そんな彼の主なコミュニケーション手段が、生産だった。彼は作ったもので、その感情を告げる。今にして思えば、料理もその一つなのだろうと思えた。

トッドの研究に関しては、ほぼ放置していたが。ある日、彼女はトッドの研究室に入って、問いかけてみた。

『トッドは何を作っているんだい？』

『何を……ですか。難しい質問ですね。まあ、ファミリアのためになるものではありませんよ』

そう言つて、彼は研究を続けた。

研究の成果が出るのは、大分後の話だが。彼はそれまで、ダンジョンアタックと簡単な生産品でこまごまと稼ぎ、糊口をしのいでいた。

研究は過大な金銭が必要になるものではなかったが、しかし金がかからないものでもない。生活は楽ではなかった。それでも、二人して

なんとか日々をしのぐ生活は、楽しかった。かつての……もう存在しないファミリアでの生活を思い出させた。そんなときは、少しでも悲しくなった。

トッドがそれに気付いてなかったという事もないだろう。彼はあれで、人の機微には聡い。それでも見ないふりをしてくれたのは、ありがたかった。今と昔を比べているようで、申し訳なく思っていたから。

それからいくらかして、ギルドのクエストからアイズが来た。時をほぼ同じくして、レフイーヤも出入りするようになった。

研究は加速度的に進んだ。いや、前々から研究自体はかなりの所まで進んでいたらしい。ただ、サンプルが足りず、最後の一押しにならなかったのだとか。とにかく、最終パーツが見つかり、アルテミス・ファミリアは一躍有名なファミリアとなった。

やがて神友であるヘステティアも下界に降りて、ファミリアを作った。彼女もアルテミスと同じく一柱一子の小規模ファミリアだが、やはり楽しそうだ。ホームにやってきては、その嘉悦を交換しあっている。

楽しかった——ああ、本当に楽しかった。

この十年近く、日々の進みを感じなかった事はない。大事な子供を愛おしく思わなかった事もない。

そして——裏切りに胸を痛めなかった事もない。

楽しかった日々が終わる。

もう終わらせる。

だから——

アルテミスは、閉じていた目を開いた。

狭い私室で一人、椅子に座っている。瞳を閉じて、まるで今までの日記を読み返すように、懐古していた。それも、もう終わりだ。

どの記憶も、楽しかったことばかりではない。時には苦々しいものも残っている。トッドとは、喧嘩だったこともある。それでも編集してしまえば、最終的に残るのはやはり笑い合った思い出だ。

「うん、悪くない」

アルテミスはつぶやいた。

「本当に、悪くないな……」

窓の外を見る。夜の暗闇を、月光がやさしく照らしている。淡い光のカーテンに、しかしアルテミスは、皮肉と悪意を感じた。この先に訪れるものを分かっているから。

家の中はしんと静まりかえっている。それは、夜だからと言うだけでもない。トッドが不在なせいだった。

研究系ファミリアとして立ち上げて向こう、トッドが長く家を空ける事は珍しくなった。そんな彼が今いないのは、ヘステイアたつての願いのためだ。彼女の子供、ベルがダンジョンから帰ってこなくなったらしい。なんでも聞いた話だと、怪物進呈をされてそのまま迷ったのだとか。捜索隊に、トッドも混ざっていた。もう帰ってきてはいたが、今はバベルで事情を話している最中だ。

これは好機でもあった。トッドがいらないということは、それだけ秘密裏に事を進められる。もつとも、それとて確実とは言えなくはあるが。なんにしろここで稼げた時間は貴重だった。おかげで最後の詰めに入るのに、小細工がいらなくなった。

「やあ、アルテミス」

「ヘルメス」

外を眺めて、ぼんやりとしていた彼女に。一人の神が話しかけた。

ヘルメス。共謀者。そして、終わりを告げる鐘。

「君の言っていた倉庫から、確かに『槍』は回収したよ」

「どうだった？」

「……よくはないね。あれはもう、ほとんど力を残していない。君の仇敵を倒すくらいの力は十分あるだろうけど、それだけさ」

だろうね、とアルテミスは、言葉にせず小さく頷いた。

そして、自分の手を見る。優しい月光に照らされた手は、わずかにその光を貫通しているように見えた。灰色の手袋しか見えないはずのそこに、少しだけ木製デスクの茶色が混ざっている気がする。

アルテミスは気合いを入れて、力を体に集中した。すると、透けか

けていた手も、元に戻る。もう、存在を維持するのすら難しくなっている。

「それは何だい？」

「それ？」

「テーブルの上の」

問われて、ふと気がつく。物思いにふけて忘れていたが。テーブルの上には、封筒が数通あった。

「これは遺書だよ。トッドと、後はヘステイアに最後のお願い、かな」

「……こんなことはあまり言いたくないが、いいのかい？」

「何が？」

「トッド君さ。大事な眷族なんだろう。それを蚊帳の外に置くような真似をして……」

「いいんだ。彼にはもう、十分私の面倒を見てもらった。これ以上、私などの事で思い煩ってほしくない」

「……後悔するよ」

「後悔なら、ずっとしているさ。ファミリアを壊滅させたあの日から……トッドと出会ったあの日から……どこかで、私がもう少しうまくやれば、何かが変わっていたかも知れないって」

「そうかい……。そこまで覚悟を決めているなら、いいんだ」

ヘルメスは一瞬切なような顔をしたが、すぐにいつものへらへらした笑みへと戻した。

「決行は神月祭だ。あの日なら、『オリオン』の選別にもうってつけだよ。君の限界も考えて、その日しかないだろうね」

「任せるよ」

「ああ、任せてくれたまえ。なにせ地上の命運がかかっている」

ヘルメスは言っておどけて見せたが、アルテミスに笑う気にはなれなかった。

彼を視界の端に置きながら、アルテミスはなんとなく部屋を見回した。起きて寝るためだけの、小さな部屋。機能的とも言いがたい。が、何年も使っていれば、そんな部屋でも愛着が湧く。ホームならばなおさら。ここことももうすぐお別れだと思うと、寂しさがこみ上げて

きた。

「何か……」

ヘルメスが、下手くそな笑みを歪めている。いつも微笑を崩さず、のらりくらりとしているはずなのに。そんな男が、こんな風に笑みを崩したら。まるで大事のようではないか。そんなつまらない感想を持ちながら、アルテミスは言葉を待った。

「何か……持つて行けばいいじゃないか。思い出の品なりなんなり。それくらい、許されてしかるべきだろう？」

語調は強かった。放っておけば、絶叫にすらなりそうなほどに。

しかしアルテミスは、ゆつくりと答えた。それが彼を諫めているようでおかしい。場違いな笑みすら漏らして。

「もうたくさん持つてるさ。トッドには、もらいきれないほどの思い出をもらっている。これ以上は強欲だよ」

「そうやって君は、ないがしろにするんだ。自分を。もっと救われたって思っている。いいんだ！」

ついに堪えきれなくなつて、ヘルメスが叫んだ。

だが、アルテミスは力なくかぶりを振った。ただ、口調だけは断固としたものだった。

「いいんだ」

「……………。分かった。ならもう何も言わないよ。後は当日に」

「ああ。あと、遺書は君が預かってくれ。すべてが終わったら、渡してほしい」

「嫌な役回りをさせてくれるね」

「悪いとは思ってるよ」

封筒を受け取つて、ヘルメスは出て行った。

アルテミスは座り直して、またぼんやりとした。

「ごめんよ、トッド」

外を眺めながら、謝罪を口にする。それが偽りにまみれたものだとしても、言わずにはいられなかった。

月が輝いている。それを、暫く眺めた。清く淡く、地上をあまねく照らす。あと何回、それを眺めていられるだろうか。分からない。分

かりたくもない。

やがて、戸を叩かれる音が響いた。トッドがバベルから帰ってきたのだろう。彼女は席を立った。

嘘でもいい。偽りでもいい。ただ今は、彼に気付かれない笑みを作っていられば――

「分かっているさ」

暗闇で、トッドがつぶやいた。

「分からないわけがない。そうだろうか？ 何年も家族をしているんだから」

正面には壁しかない。彼の言葉が、誰に向けたものでもないのは明白だった。ぽつりぽつりと、彼は独り言を続ける。

「俺を騙すなら、それもいいさ。秘密を作るのも、悪くない」

言葉と同じように、彼の瞳もぼんやり透けていた。何も見ていない。ただ、向こう側にある何かを見つめている。

「ただ、何も言わなかったんだ。俺が好きにやったところで、何を言われる筋合いもない。それだけは、分かってもらわないとな」

つぶやき。視線。そして存在までもが、闇に溶けた。

彼はそれ以上、何も言わなかった。ただ、滴る暗黒に飲まれるがままに任された。

終わりを始める

アルテミス・ファミリアのホーム、アルテミスの私室。そこは綺麗に整理されていた。

元が潔癖の気がある神ではある。なので、元々汚れている部屋でもないし、そもそも部屋が狭いのものを多く置ける部屋でもない。だが、それにしただって、この部屋は整然としすぎている。

トッド・ノートは主のいない部屋を、静かに睥睨していた。無断で入ったことは、悪いと思う。が、それは主神が眷族を裏切ったのだからお互い様だ、と自分を納得させた。

アルテミスがいないのは分かっていた。暫く「ヘステイアの所に泊まってくる」と言い残して出て行ったから。今までも、ままそういう事はあった。今にして思えば、この時のためだったのだろう。今日という日の嘘を、もっともらしくするために。

そう、嘘だ。確認したわけではないが、彼女がヘステイア・ファミリアのホームにいない事は分かっている。

これといった特徴のない部屋。狭い部屋をさらに狭くしている、窓際のデスクには、一枚だけ紙が置いてあった。トッドはそちらに近づいていく。外から漏れる明かりはか細く、紙面を確認するには少々頼りない。デスク脇に置いてある、魔石灯をつけて照らした。

紙には簡素にこう書かれている。『捜さないでください。どうか黙って姿を消す私を許さないでほしい。後のことはヘステイアに頼ってください』とだけ。

これだけ。本当に、たったのこれだけだ。

トッドはデスクの、ちょうど紙がある部分に手を置いた。そして、拳を握る。紙はあつけなく、本当にたやすく、ぐしゃぐしゃに丸められて、ただのゴミになる。

何年だろうか。十年は経っていないと思う。しかし、それに近い年月はあった。それだけの時間の答えが、たったこれだけの言葉。

「知っていた」

トッドはつぶやいた。

「いつか、終わりが来る事は」

何をどう表現すればいいのか。全く分からない。だから、言葉を吐き出しながら、歯ぎしりするしかない。

知っていた。確かにその通りだ。終わりが来ることは。だが、これだけか？ 十年も苦楽をともした報いが、たった数行書き込まれ、捨てるように置かれたこの紙だけ？

許されるのならば、絶叫でもしていただろう。思い切り叫び、罵倒をしたっていいかもしれない。なじってやるのだ。そして、自分がしたことがどういうことか、はつきりと分からせてやる。

だが、今はその時ではない。

まだ分からせなければならぬ事はあるのだ。取り返しはつくのだと。非難も、罵倒も、何もかも。そんなものは、すべて失敗したときでいい。

苛立ちを表に出す。当たり散らすほど物は置いていないため、書き置きを破つてくずかごにたたき込む。

トッドは足早に、それこそ目の前にあるものはテーブルだろうが扉だろうが蹴倒すような勢いで歩き始めた。歩幅も広い。多少急いだところで何がどう変わるわけでもないが、それでも彼は急かされるように足を動かした。

向かった先は、ロキ・ファミリアだった。

実のところ、アルテミス・ファミリアと探索系ファミリアとの関係は、あまり深くない。生産系ファミリアや、商業系ファミリアとは、切っても切れない縁があるのだが。理由は簡単で、そもそもトッドに直接依頼できるほど経済力を持ったファミリアはさほど多くなかった。

関係が深く、強力な冒険者を抱えているファミリア。この中で選別し、さらに交渉に応じてくれそうな所となると、ロキ・ファミリアが一番だった。

ロキ・ファミリアの門の前に立ち、門番に声をかける。

「すまないが」

「……………？ ああ、トッドさんですか」

彼らは、ちよūd門を閉じようとしている所だった。ギリギリのタイミングだ。急かされるままに足を動かしたのは間違いではなかったのか、と密かに思う。

「緊急冒険者依頼だ。ロキ様に話を通してもらいたい」

「あ、いや、でも……」

門番の一人が口ごもる。

それも仕方ないだろう。今日はもう閉店しようという時刻だ。これを無視して、依頼を通そうと言うのだ。難色を示すのも仕方がない。

悩む門番に、しかしもう一人の門番が言った。

「さすがにアルテミス・ファミリアを門前払いはまずいつて……。話だけでも上に通さないと」

「う……そうだな。少々お待ちいただいてよろしいですか？」

「かまわない」

待つこと十数分。どうやら確認は取れたようで、門を通された。

案内された先は、ロキ・ファミリアの神室だった。話の内容はまだ分からないという事で、一番防諜に適した場所が選ばれたのだろう。入り口に立って警戒しているのはガレスとベートの幹部という徹底っぷりだった。

扉をくぐる。と、そこにいたのは、ロキとフィンだった。ロキは正面の執務机に座っており、その脇にフィンが立っている。

入って扉が閉められると、まずトツドは頭を下げた。

「突然の面会に応じていただき、感謝します」

「ええねんええねんそういうお堅いのは。急ぎの用事なんやろ？」

「ええ。単刀直入に言います。我が主神、アルテミスが出奔しました。おそらくはそのまま消滅する気です。アルテミス様を追いかけて止め、その原因を先んじて排除するために戦力がほしい。そのために協力していただきたい」

「んん？」

ロキは疑問符を浮かべていた。椅子に片足を乗せて、その上にさらに肘を立てるといふ非常にはしたない恰好だが。脇にいるフィンが、

非難げに彼女を見ていた。

「出奔ってどういう事や。それに消滅？ 訳が分からんわ」

「今のアルテミス様は、アルテミス様であってアルテミス様ではない、
というのをご存じでしょうか」

「いいや……ああでも、何か神威が変やなーとは思っていただけ。
……もしかして、かなりヤバい状態だったん？」

「はい。かなりヤバい状態で自分を保っていました」

「無理してまでロキに合わせようとしなくていいんだよ」

苦笑しながら、これはフィン。

「で、うちの力がほしい……か。ぶっちゃけ聞くけど、ただ危険
なん？ いくらアルテミス・ファミリアの依頼でも子供に命かけさせ
るような事はさせられへんで」

「内通者の情報が正しければ、戦力的には第一級冒険者が一人いれば
おつりがきます。ですが、その手前でどれだけ障害があるかが、はか
りきれません。その上、今回は速度が勝負です。遅ければ、アルテミ
ス様が送還されてしまいかねませんので」

「戦力そのものより速度がほしいから、うちを頼った、か。まあええや
ろ。納得しといたるわ。それでやけど……」

うひひひひひ、とロキはいたずらっ子のような笑みを浮かべた。
と、同時に、すぱあん、と音がする。フィンがロキの頭を叩いた音だ。
うなりながら頭を抱えるロキを無視して、フィンが続ける。

「報酬はどれだけだい？ 言っておくが、安くはないよ。話を聞く限
りじゃ、うちの上位陣を複数ほしいのだろう？ 第一級冒険者多数を
扱うならなおさらね」

「二本でどうでしょうか？」

「？」

言われて、フィンは首をかしげた。その様子を見無視して、トッドは
続けた。

「そちらの幹部である二名に、まだ宝剣シザウロスが行き渡ってないのは確認し
ています。その二本を作ります。それが報酬でどうでしょうか」

「何やってんだロキ早く行くぞオ！」

「そうじゃそうじゃ！ クエストなどつとと終わらせねばのお！」
言ったのは。

扉を叩き付けるように開けた、ベートとガレスだった。

まさか外で聞き耳をたてていたという訳もないだろうが、それでも話は聞こえていたらしい。彼らは部屋に割り込んでくると、ぽかんとするトッドを通り過ぎて、ロキに詰め寄り始めた。

「だいたいおかしいんだよあのクソアマゾネス姉妹に宝剣シザウロスがあつて俺にないのがよお！」

「くっ！ なんであのとときグーを出してしまつたんじゃ……！ しかしそれももう終わりだ！ ついに専用宝剣シザウロスを得るときが来た！」
「待って！ ちよお待ってや！」

ものすごい剣幕で、ロキに詰め寄る二人。トッドは置き去りにされたまま、ぽつんと立っていた。

その様子に、フィンフィンは困つたように眉をひそめながら。苦笑をそのままトッドに向けて、ため息ともとれる吐息を漏らしながらつぶやいた。

「まあ、こうなつたら受けるしかないね。条件も申し分ないと言つていいし」

「なんかこう……すみません」

「いいよ、謝らなくて。……ちなみにだけど、うちに断られてたら、やっぱりフレイヤ・ファミリアに話を？」

「ええ。同じ条件で」

「なら優位を保つためにも、なおさら受けなきやね」

フィンと話をしながら、トッドはちらりとロキを見た。彼女は未だに、ベートとガレスの文句だか愚痴だかに付き合わされており、話ができる状態ではない。よほどの剣幕でまくし立てられ、今にも椅子から転げ落ちそうだった。

視線をフィンに戻して、トッドは言った。

「こちらの輸送手段で連れて行けるのは、八名です。うち魔法使いを二名お願いします。後は、範囲防御手段を持つ者を三名」
「了解。すぐに準備させよう。久しぶりの大仕事だ」

その後、フィンと細かい打ち合わせをして（ロキは結局話に混ざれなかった）ホームから出て行った。

門をくぐる寸前、トッドは背後を振り返る。今まで静まる寸前だったロキ・ファミリアのホーム『黄昏の館』が、多少元気を取り戻した。そんな気がした。

トッドはわずかな喧嘩を感じながら、ロキ・ファミリアに出向いた足で、そのまま秘密の倉庫へと向かった。

オラリオの北西、第七区の奥まった地。ここも細々とした商店が並んでおり、活気がないわけではないのだが。いかんせん他の地区より人気がない。冒険者をターゲットにした店が多いため、夜はなおさら人が少なかった。そのためか、一部区画はまるごと倉庫地帯にされており、あまり人が寄りつかない。治安も比較的悪いため、あまり人が好んで来るような場所ではなかった。つまりはそれだけ、隠し事をするには都合がいい場所という事でもある。

彼は貸し付けの倉庫一つに入って、中を確認した。一応信用がおける場所を借りただけあって、荒らされた様子はない。ため込んでいた保存食なども何かが変わった形跡はない。そのほかについては……まあ、どうせ何があるのかも理解できる者はおるまい。

トッドは保存食をそれに乗せると、起動した。そして南門の市壁へと向かう。

（何というか、つくづく南門とは縁があるな）

特に何を感じたわけではないが、そんなことを考える。

アイズとオツタルの決闘。オツタルの紅皇主機能試験^{イフリスト}。そして——そういえば、初めてアルテミスと出会ったのもこの近くだったような——古い記憶で、定かではないが。

市壁の上には、八名がたむろっていた。どの顔も知ったものだ。ロキ、アイズ、レフィーヤ、リヴェリア、ティオネ、ティオナ、フィン、ベート。ガレスは人員から漏れたのか、それともロキ・ファミリアに何かあったときのための指導者なのか、居残り組にされたらしい。

「おいおい、なんだありやあー！」

ベートがこちらに向かって叫ぶ。

トツドはそれごと降りて、市壁の上に立つ彼らの前に着地した。
「な……なんやこりやあ……」

ロキが愕然としている。他のメンバーも、似たような面持ちだった。

トツドは飛んでいたのだ。

それ——トツドは単純に飛行機と呼んでいる——の形状は、単純なものだった。細長い胴体に、操縦席が一つ、座席が三つ並んでいる。座席は菱形に配置されており、操縦席の他に中部座席が二つ、後部座席が一つという並びになっている。後部座席は、今は食料やテント、念のため換えの魔石を乗せているので乗ることはできない。胴体は細長く、翼は扇状でこれは開閉可能だ。今は他の二機は浮遊状態で待機させ、一機だけ翼を展開させ飛行状態にし、他の二機を曳航していた。

トツドは自分が操縦する飛行機の翼を折りたたみながら、浮遊力を弱めていった。三機の飛行機が、ゆつくりとロキ・ファミリアの前に降り立つ。

「え？ うそ？ なに？ うち夢でも見とるん？」

「……同じ夢なら俺も見てるぜ」

「まさかこんなものがあるとはね。つくづく驚かされるよ」

着地した飛行機に、皆がおそろおそろと近づいてくる。テイオナなどは比較的困惑が少なく、つんつんと飛行機をつついていた。アイズとレフィーヤは、トツドのめちやくちやな発明品には慣れているのだろう。そういう事もあるかというような調子で問いかけてくる。

「それ……なに……？」

「魔法、じゃありませんよ、ね？」

「飛行機——まあざっくり言えば、人が何の手も借りずに空を飛ぶための道具だ。動力は魔石で補ってて、操縦桿を介して上下左右に移動するから、本当にただの一般人でも飛ぶことはできる……まあ、魔力操作で安全弁を捨てるようにしてるから、扱いは魔法使い推奨だが」
開発には苦労した、と過去を懐かしむ。

発明そのものはさしたる労力ではなかった。それこそ使い手の調

子まで見る必要がある神域金属^{アダマント}ほどではない。所詮は浮力さえ発動させてしまえば、後は推力と方向転換だけの話だ。問題は、アルテミスに見つからないようにこれを作り上げる点だった。そのためにガネーシャ・ファミリアに話をつけ、彼らの飛行型モンスター教育に混ぜるようにして試験を重ねた。仕舞うのもいちいち人氣がない時間を選ばなければならなかったため、念を入れて夜間に倉庫まで運ばなければならなかったし。

「ひゃっほーい！」

と、いきなりロキが飛び上がって嘉悦に満ちた声を上げた。

「真正銘うちが第一発見神や！　こら自慢できるでえー！」

ぴよんぴよん飛び跳ねるロキを注意する者もない。周りも似たような反応ではあつた。

彼女はぜーはーとよだれを垂らさんばかりの勢いで、曳航用の紐を解くトッドに詰め寄りながら言った。

「なーなトッド。これいくら？　いくらなん？　うちに一番最初に売つてや」

「ロキ！　うちにはもうそんな金はないぞ！」

眉をひそめて言ったのは、リヴェリアだが。しかし彼女も、やはり飛行機から目は離せない様子だった。

トッドは紐を解き終え、それを荷物を固定する紐の一つとして結び直したところで振り返る。

「事が終わった後は、二機は前金扱いでロキ・ファミリアに譲渡する。それでいいか？」

「マジで?!　いよっしゃ！　言ってみるもんや！　六十億ヴァリス相当のクエストといい、ほんま氣前がよくて最高や！　トッド愛してるでー！」

もはやぶつ壊れんばかりの勢いで喜ぶロキに。さすがにファミリアの仲間も半ば呆れの視線を向けていた。

その場で踊っているロキをおいて、フィンがよってくる。少しばかり声を潜めて、

「うちからしたら文句の出ようもないけど、いいのかい？　これだつ

てしかるべき方法で売り出せば、相当な利益になるだろうに」

「かまやしないさ。元から放出しても惜しくないっていうのが一つ。それに、アルテミス様の安全には変えられない。ロキ・ファミリアだって、主神のピンチだったら何を置いても助けに向かうだろう？」
フィン は答えなかった。それは、答えるまでもない問いだったからだろう。

「パイロットは、一機は慣れてる俺が務める。他のはリヴェリアとレフィーヤに任せたい。やってくれるか？」

「はい」

「任せよう」

レフィーヤは勢いよく、リヴェリアはしずしずと首肯した。

「乗組員はそっちに任せた方がいいだろう？ 能力を把握してるのはそっちだから」

「そうだね。広域防衛が可能なのは、アイズ、ティオネ、ティオナの三人だ。これを分けると……一番宝剣シザウロスに慣れているアイズがトツド班かな。リヴェリア班にはティオネ、レフィーヤ班にはティオナを配置して……」

「はい！ 私 団長とが いい です！」

「言うと思ったよ……。という訳で、僕はリヴェリア班だ」

「せやったらうちはアイズたんと同じ班やな。突撃するならトツドがおるところやろうし、いざという時判断する頭が二つあった方がええやろ」

「だね。余り物みたいで悪いけど、ベートはレフィーヤ班でいいかい？」

「どこだつてかまわねえよ」

とは言うものの、彼はアイズの方をちらちらと見ていた。隣の席になりたいのは傍目からでも分かったが、まあここでごねる事もできない。そんな様子だった。唯一宝剣シザウロスを持っていないため、ロキを除きこの中でも一番戦力になれないという自覚もあってだろう。

「レフィーヤとリヴェリアはこっちに来て。使い方を説明するから」

「わ、分かりました」

「承知した」

リヴェリアは自然体だが、レフイーヤはどこか緊張している。どうにも空を飛ぶという行為に、不安を感じているようだった。

トッドは緊張を解す意味も込めて、なんとか苦手な笑みを作って、肩をすくめて見せた。

「そんなに肩肘張らなくていいよ。魔力操作技能があれば、飛行機は直感的にでも動いてくれる。後は慣れの問題でしかない」

「そう言っただけでトッドさんが作った武器が慣れだけで使えた試しがないんですよ！」

なぜだか憤慨したように、レフイーヤ。たしたしと膝まで叩いている。

一通りの説明を終えて、全員が飛行機に乗った。三機の飛行機が同時に浮く。誰かが悲鳴だか歓声だかを上げるのが聞こえた。

「これには通信機も備え付けられてる。会話がしたかったらそれを使ってくれ」

『もう君の作ったものに驚く事はないと思っただけど……こんな飛行機につけられるだけ小型移動式で、しかも全員同時に？ まったく、どんな脳をしていたらこんなもの作れるのやら……』

通信機ごしにフィンの声が聞こえてくる。他の声も混ざっているが、雑音に紛れてよくは聞こえない。

「じゃあ発進する。一号機、ウイング展開」

『二号機、ウイング展開』

『あ、えつと……！ 三号機、ウイング展開します！』

小さな駆動音を立てて、翼が展開される。これはただ風を掴むだけではなく、アイズの嵐碧宝ラファエラの剣を応用して、空気を自在に掴む機能も果たしている。この感覚が、魔法使いが推奨される理由だ。これがあれば墜落しそうな時、ストールからの墜落を無視して復旧できる。まあ、元々浮遊しているので、その可能性も低くはあるが。

『おい、お前んとこの主神らには先行されてんだろうがよ。これで追いつけんのか？』

乱暴な口調と、低い声はベートのものだろう。トッドは問題ない、

と告げた。

「モンスターの飛行速度より、こちらの方がよっぽど早いよ。最初はパイロットの習熟のために控えめに飛行していくけど。あちらは到着に十日かかるとの見通しだ。それだけあれば必ず追いつく。追いつけるよう設計してある」

『へっ、ならかまわねえよ。とつととやっちまおうぜ』

『もー、ベート顔悪い』

『うるせえ、ほっとけバカゾネス。てか顔が悪いってどういう意味だコラ』

人狼族らしく、凶暴さすら感じる声がスピーカー越しに届く。きつとその表情も、凶ヴァルナガンド狼の名に恥じぬものだろう。

「それじゃあ発進する。目標、エルソスの遺跡！」

『二号発進！』

『や、二号同じくー！』

飛行機の後部から、高圧縮された風が吹き出る。全機が加速を始め、短時間で巡航速度まで加速を終えた。

目指す神ひとまでは、まだ遠い。

在りし日

ぱちぱちと音がする。まだ水分を含んだ薪が爆ぜる音だ。生木を焼くのは煙いし、燻されて気分がいい物でもない。だが飛行型モンスターに頼った度で、乾いた薪や木炭まで持って動けるものでもない。それは仕方がないと割り切るしかない。

キャンプファイヤーを囲んで座っているのは五人だった。ヘステイア、ベル、ヴェルフ、リリルカ、そしてヘルメス。ヘステイアの顔は冴えない。それは、唯一この場にいないアルテミスもそうだろうとヘステイアは思っていた。というか、彼女こそが一番の異常だ。

日はまだ落ちきっていないが、かといって光源がなくとも他者の顔を覗けるほど明るくもない。まあ、この状況で人の顔を見られて楽しい訳もないが。

ヘステイアは一本の枝を持って、火を突いた。燃えさかる枝が崩れて落ちる。その拍子に炎が揺らめいて、それぞれの表情を変えた。

持っていた枝に火が移ったため、それを地面にこすりつけて消す。枝は今にも折れそうだった。死んだ森の枝にしてはよく持った方だろうと言える。

ヘルメスに唆され、アルテミスを救う旅を初めてもう何日か。正確な行程がどれほどかは分からないが、すでに後半だろうという事くらいは判断できた。それは、この死んだ森と、正体不明のモンスターの山とも無関係ではあるまい。

触れただけで枝が崩れるような、死んだ森に入って早々モンスターに襲われた。サソリ型で、さほど強くはないが数だけが多い。本来オラリオの外にはありえない、単一種族のモンスターが数百とあふれていた。どこかで大量に生まれているとしか考えられない。ダンジョンという生産施設がなければ、通常の生殖に頼らなければならぬにも関わらず大量発生だ。無関係と言われても信憑性がない。

死んだ森は一点から広がり、すでに近隣の村などを飲み込もうとしていた。というか、すでに村人にモンスターが襲いかかっていた。アルテミスがモンスターから飛び降りて戦い始めたのは焦った。間一

髪、ベルも飛び降りて戦ったため事なきを得たが。四界閃ナルシナルがなければ危なかっただろう。

アルテミスを救うという名目でクエストを受けた。これはベルが「オリオン」として選ばれたからだ。だがこの場にトッドがいなければ、それが言葉通りではないとくらいは分かる。ただ事でないというのも、薄々分かつてはいた。だが、それでどうにかできることもない。

不穏な思考を肯定するのが、あの「槍」だ。アルテミスの神威がこもって、何もせずとも神の力を感じる事ができる。いや、神威が漏れかけているのだろうか。なんにしろ、感じる圧力に反して長持ちはしなさそうだった。

「ねえ、ベル君」

再び薪を突いた枝が、ぱきりと折れる。枝の切れ端を火の中に放り込んだ。それがきつかけという訳でもないが、ベルに話しかけた。

「アルテミスの様子はどうだい？」

「駄目……なんだと思います」

問われて、ベルは顔を上げたが。話の内容に再びうつむき加減になり、続けた。

「一見して元気はありますが……」

「空元気、なんだね」

「はい……」

ベルは痛々しそうにつぶやきながら首肯した。

アルテミスの様子は、旅を初めてからおかしくなった。いや、それを言うなら、元々おかしくはあったのだろうか。今は取り繕うことすらできなくなったと言うべきか。

「アルテミス様は僕を「オリオン」と呼んで、頻繁に接触しようとしています。でもその割には……」

「絶対に触れない、かい？」

「ええ」

言って、ベルは再び首を縦に振った。

「まるで接触そのものを恐れてるように感じました。見た目は元気な

んですが、ふとした拍子に誰かを探してると言うか」

「誰かというか、まあ、トッドの旦那なんだろうな」

相づちを打って、ヴェルフがつぶやく。彼の顔は難しげだった。

「気がつくとか誰かに話しかけようとしてるし、誰かを探してる。まあ、近しい人間がいきなりいなくなっただとかじゃないと説明がつかないな」

「そんなに気になるなら一緒に連れてくればよかったんですけどねえ」

「リリスケには分からないか？ 心の機微つてもんさ」

「リリを分からず屋みたいに言うのはやめてください！」

比較的気楽に構えている二人が言い合う。じゃれ合っている姿に多少気は楽になったが、それでも混ざる気持ちにまではなれなかった。

彼女の気持ちも分からないではない、とまではさすがに言えないが。アルテミスのファミリアが一度壊滅したのは、それなりに有名な話ではある。その過去に決着をつけようとしているというのも、ヘルメスから聞いた。アルテミスは明言しなかったが。一度育てた我が子を亡くし、その決着をつけようとする。その思いをどう測るにしても想像でしかない。自分がベルを亡くしたら……考えただけで胸が痛むが、それだけだ。それ以上が分からない。

ただの想像でいいなら。全く理解できないわけではない。今の眷族を過去の因縁に巻き込みたくないというのは。

しかしそれでも不明瞭な点はある。単純に勝算を考えた場合、Lv. 4の追加戦力というのはかなり馬鹿にならないもののはずだ。それを数えないというのは、明確な勝ち目があるからだろう。

やはり焦点は「槍」とベルか。疲れたように視線を飛ばしながら、ぼんやりと思う。「槍」の存在はそれだけ不自然であったし、できずきでもあった。全てを終わらせるには都合が良すぎる。

(つまり、トッド君は何か都合が悪いんだろうね)

だから置き去りにされたのだろう。それが実利か、感情的なものかまでは判断できなかったが。

「神様」

ぼんやり考え事をしてしていると、ふとベルに話しかけられる。

ヘステイアは顔を上げて答えた。

「なんだい、ベル君」

「アルテミス様、大丈夫でしょうか……」

言う彼の視線は、夕闇の中を彷徨っている。

その方向に、正確にアルテミスがいると言うわけでもないだろう。念のためモンスターへの襲撃に備えて、見通しのいい場所に備えてはいるが。世界は闇夜に飲まれかけている上、彼女は水くみに出かけている。死んだ森に来てからの約束事だった。単独行動をしていいのは戦闘力のある者のみ。つまりヘステイア、ヘルメス、リリルカは一人で行動しないこと。

正直なところ、水くみはすでに終わっており、これ以上必要ないのだが。彼女も一人になる時間は必要だろうと、誰もあえて指摘はしなかった。

「どうだろうね。難しい質問だよ」

「せめて解決方法が……いえ、せめて原因が分かればもう少しやりようもありそうな気はするんですけど」

言う。と、自然と視線はヘルメスに集まっていた。

彼は今まで我関せずと言った様子だったが、四つの目に射貫かれて、やがて参ったというように両手を挙げた。

「さすがに彼女の元気がない理由までオレに求められても困るよ」

「その言葉はアルテミスが苦しんでる原因は知ってるって白状しているようなものだぜ」

「明かしているのなら彼女がとつくに言っているって分かっているだろう？ 本人のいない間にこそこそと話すのが卑劣でないとは言わせないよ」

「君がそんなに義理堅いとは思わなかったよ」

皮肉を吐き捨てる。彼は上げていた手を下ろした。

肘を突いて、ヘステイアがそうしていたように、多少勢いを弱めた薪を枝でほじくる。

「そりゃあオレは軽薄な男だけどね。それでも言うべきことと言うべきでない事くらいは分かっているつもりさ。これがどちらか、分かってくれない訳でもないだろう?」

「……分かった。ボクが悪かったよ。アルテミスに聞いてもはぐらかされるから、ちよつと気が立つてた。悪かったよ」

「分かってくればいいさ」

ヘルメス。いつもヘラヘラしており、間違っても信頼を置いていい神ではないが。それでもやらなければならぬ場面で戸惑うようなやつではない。良くも悪くも。

「まあ、空元気も元気の内と言いますしねえ。顔を上げてられる内は大丈夫じゃないかとリリは思いますよ」

かつてソーマ・ファミアで搾取されていた彼女が言うと言得力があった(だからといって過去の悪行を許したわけではないが)。

「こうなってくると考えなきゃいけないのは、アルテミス様の暴走だな。感情がパンクしない程度に見ておくしかないんじゃないか?」

これは、腕を組みながら難しげにしているヴェルフだ。彼はリリルカと並んで、アルテミスとはあまり関わりのない人間の一人だ。話したことも数えるほどしかないだろう。トッドとはそれなりに交友があるようだが(かなり一方的だとも聞くが)。

なんにしろ比較的客観的な意見ではある。アルテミスの側によりすぎている自覚はヘステイアにもあった。彼の言葉は、比較的受け入れやすかった。

「それに、当てが全くないわけでもないしね」

「当て?」

ヘルメスの言葉は、おそらく独り言だっただろう。それくらいに小さな声だった。それでも、ヘステイアは耳ざとく聞いていた。

「ああ、うん……」

どこか言いにくそうに、ヘルメス。ぽりぽりと頬を搔いて、やはり集中していなければ聞き逃しそうな声でつぶやく。

「どれほど当てにできるかは分からないけどね。まあオレもオレなりの考えがあるって事さ。それが誰の意に沿うかまでは保証できない

だけで」

これだよ、とヘステイアはうんざりした顔をした。こういった所があるから、ヘルメスは油断できない神なのだ。

(アルテミスも、ボクにくらい本音を吐き出してくれてもいいじゃないか)

外には出さないが、内心憤って、ヘステイア。

アルテミスは神友だ……とヘステイアは思っている。うぬぼれでなければ、彼女もそう思ってくれているだろう。少なくともヘステイアは、アルテミスにならどんな秘密も明かせると思っている。

それが、ヘステイアにも秘密を打ち明けられない理由。考えつくことはそう多くない。

オリオンと言う神話機能と、アルテミスの神の力がこもった“槍”。目を追うごとに弱くなっていくアルテミスの神威。そして、ヘルメスの徹底した機密厳守。

真っ先に思いついた考えが正しいのならば、事態を収束することは難しくないのでだろう。だが、それは同時に、アルテミスにとって最悪の未来が待っている事も意味する所だった。

(アルテミス、君は……)

話題はアルテミスの事から、他愛ない雑談に戻っている。暗くなっていた雰囲気も、多少緩和されていた。

その中でヘステイアだけは、顔を潜めて考え事をしていた。

(まさか自分一人犠牲になればいいなんて思っていないだろうね?)

それは、陰謀論とも言える、予感というよりは妄想の類이었다が、一度考え始めてしまうと止まらない。厄介なことに、状況証拠にだけは事欠かなかった。

(せめてトッド君がいれば……)

今更ながらに後悔する。無理を言つてでも、出かけのあの日、トッドを連れてくるべきだったと思う。あのときは状況の勢いに押し込まれたのと、アルテミスの焦燥に気づけず流してしまった。

もうすぐ日が落ちきる。アルテミスの姿はまだなかった。周囲の声、まるで雑音のように耳の中で反響する。

トッド・ノート。今は何をしているだろうか。神に置き去りにされ、オラリオで一人、戸惑っているに違いない。彼一人がいたところで何ができるといふわけでもなかったのではないかとも思う。

それでも、考えずにはいられなかった。アルテミスに今一番必要なのは、家族——トッドなのだ。

川縁の浅瀬で、アルテミスは水桶を持ってたたずんでいた。桶にはまだ水を入れていない。水をもつてすぐ戻ると言った手前、時間をかければ心配させてしまうのだろう。すぐ戻る気にもなれなかった。

川の流れは緩く、透き通っている。うつすら差す光に反射されて、自分の顔が映った。顔は暗く、目も濁っている。酷いものだ……と、他人事のように評する。実際、この旅に対してすら、どこか人ごとのような印象があった。薄く、浅く、定まらない。自分がこんなに弱いとは思わなかった。

一人でいるのは好きではなかった。とりわけ、こんな旅をしている間は。しかし、無性に一人になりたくなる時はある。例えば、そう。弱音を吐きたくて仕方なくなる時などだ。

(トッド……)

そして、一人になる時に思い出すのはいつも同じだった。

今となつてはたった一人の眷属。十年近くを共にした者。あのなんだかんだ身内と定めた者にはどこまでも甘くなる男。人を突き放すようにしておきながら、どうしようもなく世話焼きな青年。

彼がこの旅についてきていたならば、ささやかながらも成功率は上がっただろうと思う。だが、感情がそれを抑制した。彼には何も見せたくなかった。自分が消える瞬間などは特に。せめてもの手向けというよりは、これもやはりただの感情論だったが。

アンタレス——自分を封じ、神の力アルカナムを奪った相手。そして、旧アルテミス・ファミリアを壊滅に追いやった怨敵。

勝つだけならばなんてことはない。『矢』と『オラオン』さえいれば、結果は勝手に付随してくる。

オラオンは神アルテミスが運命として定めた最高の戦士だ。感情

や理性の出る幕なく、アルテミスという存在が求める。ならば、今代のオリオンとなったベルとはもつと仲を深めた方がいいのだろう。それが自然だ。運命なのだから。しかし感情がひっかかり、それもうまくいつているとは言いがたかった。

その感情の根底にいるのが、やはり日々をともにしたトツドだった。

彼を巻き込めない。巻き込みたくない。しかしそばにいて欲しい。相反する思いがある。結果は、義務と責任と……その他多くの要因が絡み合い、決別を決断した。その選択が正しいかは今でも分からない。おそらくは永遠に、正しいかどうかは判断できないだろう。

(やっぱり、私は弱くなった……)

水鏡に反射した自分の無様な顔を見ながら、そう思わずにはいられない。

ファミリアが壊滅した直後であれば……いや、もう一度ファミリアを結成などしなければ、これほど弱くはなかっただろう。自分の感情に蓋をして、アンタレスに対する激情と無力感も隠して、自分を殺せただけだ。しかし、そうはならなかった。

アルテミスはひっそりと瞼を落とした。目を閉じれば、今でも思い出す。自分の愛しい子供たちの断末魔。一人一人、神のためと義務を背負って死んでいく子供たち。あんな無力感は二度とごめんだった。もしわすかでもトツドがそうなる可能性があるならば。どれほど必要だと言われても、眷族を連れてくる決断はできなかった。

そして同時に、トツドも同じ思いを味わうだろう。目の前で主神が死にゆく姿を見せつけられる。自分が味わうのも二度とごめんだが、誰かにそれを味わわせるのも、絶対に嫌だった。

それでもトツドの事を考えてしまう。

(未練だ)

それらを振り払うように、かぶりを振って目を開いた。顔色は先ほどよりも悪くなっている。

どのみち定命の者とは同じ時を生きられない。神は必ず人を置き去りにする。それが多少早くなっただけだ。言い聞かせる。どれほ

ど納得できなくとも。

「怖じ気づくな、私」

自分を叱咤するようにつぶやいた。こんな表情のまま戻ることはできない。

ブーツを脱いで、足を水に浸した。日が暮れば肌寒くなる季節だ。流水に足などつけければ、刺すような痛さすら感じる。それでも気付けと、感情を整理するには必要な儀式だった。

大丈夫だ。念じる。

ファミリア崩壊当初なら、自分を殺して何も考えず自滅できた。無邪気を演じてはしゃぐことだつてわけなかった。ならば今でもできるはずだ。そう思い込む。

——本当に？

自分の中で、自分の内の誰かがささやいた。無視をしようとしても耳に残る言葉が。

——嫌だな。

またつぶやかれる。今度のは先ほどのそれより明瞭だった。それだけに苛立ちが募る。考えていいことではないのだから。

自分は変わった。それだけは、認めざるを得ないことだった。トツドと暮らす十年が、自分を変化させた。もしくは、ファミリア健在の頃まで戻してしまった。未練が……無数の未練が、アルテミス的心中を渦巻いた。

「やめるんだ。この期に及んで、私が助かるすべはない。アンタレスを生かしておいてはいけない。どうあがこうと、私の身は長続きしないんだ」

言うが、今度は自分の顔を見ながらではなかった。気付けば目を背けていた。

どのみちアンタレスがいなかったとして、自分を“矢”に封じ込めておくのは限界だ。すでに込めた力が漏れ始めている。それがアンタレスの封印と時を同じくしたのは、できすぎた偶然と言えそう
だ。

水辺から足を引き上げる。長く冷水に浸かっていた足は、すでに感

覚が喪失しそうなほど冷えていた。軽く拭って、ブーツをはき直す。足の感触が曖昧なため、多少苦闘した。

桶に水を汲む。水は、忌々しいほどに透き通っていた。

(考えるのはやめよう……そうすれば、少しだけ気が楽になる)

道化を演じている内は、あれこれ考えなくて済む。全く褒められた事でないのは分かっていたが。アルテミスには他に対処法も思いつかなかった。

足が冷えたため、歩みはおぼつかなくなっていた。それでも重たい水の張った桶を持って、帰路につく。

(他にも問題がない訳ではないしね)

例えばヘルメス。協力者であり、彼の力なくしてこの作戦は実行できなかつただろう。だが、無条件に信頼もできない。ヘルメスはどこかで嘘をついている。それは分かっているが、具体的にどことは言えない。その上、彼の裏切りが分かっていたとして、協力を拒むという選択肢もない。

それにヘステイアだ。彼女は新参の神であり、下界にも慣れていない。そのため神威の感知に乏しかったが。さすがに「矢」とアルテミスを見比べれば、そろそろ異常にも気がつくだろう。所々に鈍い彼女であるが、さすがに神の力アルカナムが漏れていけば気付かないはずもない。最悪、今夜にでも追求されるだろう。おそらくは第三者がいないところで。そういった優しさがヘステイアにはある。

問題は多い。それ以上に、疑問点も。そして、そのどちらもが、おそらく永遠に明かされることはない。自分の死によって。

重くなりそうな足取りを務めて軽くし、アルテミスは戻っていった。自分の最後を看取る者たちの元へ。

救援と救助

「アルテミス」

ヘステイアは寝転がりながら、シユラフ代わりの毛布をかぶってつぶやいた。まっすぐ正面には、天蓋がある。さほどの高さはない。骨組みに布をかぶせた簡素なもので、ヘステイアの身長でも立って手を上げれば天井に届く程度の高さ。

返事はない。アルテミスは隣で寝ているはずだ。気配で、背を向けていることは分かる。それで答えを拒絶している訳ではない事も。

「君の行動は矛盾だらけだ。ボクの子供をオリオンと呼んだり、君の神アルカナムの力が降り注いできたり……言っておくけど、嫉妬じゃないよ。本当だ」

「ああ、知っているさ」

声の最後の方は、多少震えていたが。それにもさして反応せず、アルテミスは答えた。

彼女の声は小さかった訳でもないのに、とても静かだった。まるで、何も音を発していないかのような静謐。あるがままの音が、そのまま流れ去っていったような気さえする。

「ただ、トッド君を置いてきたことだけは、ボクは許せない。彼は絶対に連れてくるべきだった。彼を頼るべきだった。彼は……最後を知るべきだった」

「分かっている。分かっているよ、ヘステイア。それでも私はね……」
静謐が揺らいだ。どこまでも広く平らかな板に、亀裂が発生したかのようなノイズ。彼女の声は果たして自ら震わされたのか、それとも震えたのか。ただ、動揺は確かにあるのだという事だけは分かった。

「私はアルテミス。これだけ変えられないんだ。私が選ぶのは、オリオン」
「なんだよ。運命だ。神だって、これだけ変えられない……」

「それはトッド君に嘘をつく理由にならないだろう！」

ヘステイアは怒りのままに声を荒らげた。毛布をはねのけて起き上がり、アルテミスを見た。

彼女は――震えていた。小さな体を、寒さから自分を守るように丸めて、不定期に体を揺らしている。もしかしたら泣いているのかも知れない。しかし、それを確認するような無粋な真似はしなかった。「嘘つきで、裏切り者で……卑怯者。それが私だ。分かっている。でも……それでも……トッドだけは、私を私に戻してくれたあの子だけは……せめて残酷な真実など知らず、安らかにいてほしいんだ……」やがて、アルテミスから嗚咽が聞こえてきた。その背中を暫く見て。

ヘステイアは、責める事も慰める事もせず、毛布をかぶり直した。そして、また天蓋を見つめる。あるいはもつと先を。

死を決意した者にかける言葉は、どうしても思いつかなかった。

ただ、言葉にできず、口の中でだけ反響した言葉だけはあった。理由も分からず主神が消えてしまうほど残酷な事はないんだよ……

追跡を初めて八日と少し。この頃になると、だいたい誰もが飛行機の操縦になれていた。

「うちは風になつたる！ なつたるでえー！」

『ぎゃー…… いやー…… やっほー！』

……慣れすぎでもあった。

飛行初日はおっかなびつくりという様子だった。まあそれは、トッドに都合がよかったとも言える。なにしろ、現状の話をしなければならなかったのだから。といっても、彼とてすべてを把握しているわけではない。

エルソスの遺跡とは、かつてアルテミス・ファミリアが壊滅した地であること。そこで戦った何者かは、アルテミスを取り込んだということ。彼女は封印され、力を奪われる代わりに、その敵を休眠状態にもっていったということ。それと同時に、自分の力を“矢”として切り離し、自分の分身を作ったと言うこと。つまり今のアルテミスはアルテミス本人ではなく、その分霊のようなものだということ。

時には飛行中に、時にはキャンプ中に。知りうる限りの情報を話した。それですべてが納得いったわけでもないだろうが、とりあえず口

キ・ファミリアはクエストの続行を決意してくれた。

そして暇になった。

四日を過ぎたあたりで、まずロキが自分も操縦したいと言い出した。ので、飛行機の操縦を教え始めた。そして見事にはまった。今ではいっぱしの飛行機乗りである。ついでにレフイーヤも飛行機が楽しいらしく、声を上げながらかつ飛んでいる。

今では彼女らは、曲乗りをするほどに飛行になれていた。同乗している人間にとってはたまった物ではないのだが、しかし運転してテンションが上がっている者にはそれも通用しない。今も上空で一回転したり、機体を回転させながら急降下したりしている。時折エンジンを吹かせては上昇し、またどんな乗り方ができるかを確かめていた。

『あはははははは！』

『いい加減にしろバカエルフ！』

『いーなあー！ 次降りたらあたし！ あたし運転だかんね！』

『ロキ……もうちよつとおとなしく……』

「言うてアイズたんも操縦桿握つたらめちやくちやくかつ飛ぶやん？」

「その………うん」

『やれやれ……』

唯一普通に操縦している（のだからただ単に自重している）リヴェリア班が、呆れてつぶやいた。

『お前たち、少しは加減しろよ。トッド、こんなにめちやくちやくに飛んで大丈夫なのか？ 確か魔力が動力なのだろう』

「かなり余裕を持ってるし、予備の魔力も積んでる。だから帰れなくなるとかそういう心配はいらない。こういう可能性も織り込んでいたし」

『面目ない……』

かなり本気で申し訳なさそうに、リヴェリアが言う。

まあ確かに、飛行自体は楽しいだろう、と思う。今も、アイズが操縦しているロキを羨ましそうに見ているし。

ふとレフイーヤ班を見てみると、彼女は野生の飛行モンスターを煽っていた。モンスターはダンジョン以外にもいる。大昔、ダンジヨ

ンからあふれ出たそれらが野生化したものがあるらしい。この辺の歴史には、トツドはあまり詳しくなかったが。とにかく野生のモンスターはいきなり挑発され、怒って三号機を追いかけていた。が、彼女が魔導エンジンを回せばあっさりと引き剥がす。どうしても追いつこうとモンスターは必死だったが、やがて無理だと悟り、しょんぼりとした様子で去って行った。

全く自重を知らない連中だった。もしかしたら、今クエスト中という事も忘れていているかも知れない。移動の行程には遅れがないため、わざわざ注意までしようとは思わないが。

「レフィーヤたん楽しそうやなー。うちもやってみよか」
「ロキ、やりすぎ。トツドも何か言ってる」

中部座席から身を乗り出して、アイズがロキの服を引っ張っている。そして、トツドを見ていた。この訴えの意味はすぐに分かった。早くロキに指摘をして、自分と操縦が変わるように説得して。

ふ……とトツドは笑った。さすがにそこまで面倒見切れない。彼女の視線には気付かなかったことにして、未だめまぐるしく変わる視界に酔わないよう集中しながら外を眺める。

その姿勢が、トツドが説得に応じる気がないと判断するには十分な物だっただろう。アイズは不服そうに顔を膨らませて（気配でだけが）未だにロキの服を引っ張っている。

（しかし……）

こうも座ってばかりだと、考える時間だけはいくらでもあった。

（ベル君に宝剣シザウロスを渡したのは、正直正解だったな）

思うのは、先日というほど早くはないが、しかし思い起こすほど昔でもない時のことだ。

アルテミス・ファミアリアとヘステイア・ファミアリアは蜜月関係にある。これは秘密でもなんでもない事だ。主神同士が極めて仲が良く、眷族もそれなり以上に交流がある。まあ、わざわざ招いて食事を振る舞うような関係を険悪だと言ったところで、説得力はあるまい。

ベルに宝剣シザウロスを渡したのは、九割は善意だった。しかし残りの一割、これは自分のため……というかアルテミスの為だったと言える。

自分が見ている範疇でなら、何かあったところでうまく対処できる自信はあった。だが、見てないところだけはどうしようもない。当たり前前に気づけない。そして、アルテミスの行動範疇には、ヘステイア・ファミリアの比重がかなり大きかった。つまりベルが強くなれば、その分自分が見てない場所でのアルテミスの安全が確保されることになる。

アルテミスの安全が一パーセントでも保証されるなら、宝剣シザウロスくらいやっても全く構わない。そもそも宝剣シザウロスが高いのも、量産されないのも、必要技術が高いというただそれだけの理由なのだし。

(最初はその程度の意味だったが……)

ここに来て、ベルが宝剣シザウロスを持つという意味の比重が変わってきた。内通者の話によれば、槍、もとい「矢」が選んだのはベルらしい。当然行動も共にしている。

アルテミスはしっかりとっているようで、どこか抜けた神格をしている。はつきり言って頼りあるような見せかけで全く頼りないのだ。この道中、どこでへまをして自分を脅かすか分かったもんじやない。ベルと四界閃ナルシルならば、そこを補ってくれるだろう。

過去を清算する途中で脱落などしやれにならないが。とりあえずはその可能性を極めて下げてくれる。

(ここに来て、それ以上の意味を持つようになった)

自分が唯一、無料と言ってもいい値段で作ったベルが、四界閃ナルシルが、「矢」に選ばれて同行した。ただの保険が、掛け金以上の意味を持って支払われた。

こういう言い方は嫌いだったが。自分に運が向いているとは感じざるを得なかった。

と、ふと思う。

(この場合、持つてるのは俺なのか、ベル君なのかどっちなんだろうな)

疑問に答えは出なかったが。どちらであっても、数奇ではあると思う。

今日という日から逆算すれば、ギリギリのタイミングで宝剣シザウロスが完

成した。大なり小なり、オラリオ全体のレベルアップも果たせし、ロキ・ファミリアをこのタイミングで引つ張り出せた。内通者の情報と飛行機の性能を吟味し、彼らが到着するであろう時間とほぼ同時に遺跡までたどり着けるよう段取りもつけた。

運命まで含めて、奇縁の連続だ。これが良縁となるかは、これからの行動にかかっている。

(無論、無理矢理にでも良縁にしてやるがね)

縁に肘を突き、外を眺めながら思う。

運の向きなどという漠然としたギャンブルは嫌いだ。が、人事を尽くして、自分の手元までそれを引つ張り出すというのは好む事だった。何度も失敗し、失敗し、失敗し……そして成功を収めた。この一つが全てだ。これだけで、全てをうまく行かせる。それができる能力が、自分にはある。それだけは信じて。

『トット』

と、声がしてくる。これはフィンのものだ。彼の隣からは『きゃー、こわーい』などという妙に明るい悲鳴が聞こえてくる。

リヴェリア班はパイロットの変更を一切していなかった。テイオネがフィンの隣という地位を手放したくなかったためだ。リヴェリアも自分がずっとパイロットである事に文句はないようで、常にそのままである。フィンだけは、やや迷惑そうだったが。

『そろそろエルソスの遺跡とやらのはずだが、どうだい?』

「視界がぐるんぐるんして全然分らない」

『ああそうだね、すまない……こっちで確認するよ』

ロキが操縦桿が壊れんばかりの勢いで、がっちゃんがつちゃん弄っている。それでも失速から墜落の様子がないのは、センスがあるんだかないんだか。視界がめちやくちやに移り変わる中、上下の判断をし続けられるのも地味に凄い。

飛行機は本体に対する空気抵抗の軽減と、多少の慣性制御も行っている(これを言って理解される事はまずないが)。そのため、飛行機に乗っていて船酔いのような症状を起こすことはまずなかった。まあ視界がめちやくちやに動くので、それに対する酔いまで防いでくれる

わけではないが。この辺は冒険者という事で、全員三半規管が強い。ロキは例外のはずだが、まあ彼女の場合は体質なのだろう。

『！ 全員、注目！』

フィンが叫ぶ。と、飛行機は即座に飛び方を水平に戻した。見ると、レフイーヤ班も同じように、曲乗りを即座に辞めている。多少遠くで、やや下方を飛んでるリヴェリア班。そこにいるティオネも、すでにフィンから離れて顔を緊張させていた。

このあたりの判断の速さは、やはりさすがロキ・ファミリアの団員といった所だろう。

『なんだア、ありやあ……』

ベートのうめきは、全員の言葉を代理したものだった。

まるで線を引いたかのように、森が紫色へと変色している。いや、変色しているのは森だけではない。大地、そして遠くに見える水辺。すべてが形容しがたい色へと変じていた。

「こりやあ、ちよい下を確認した方がええかもな」

『じゃあ私が行ってきます』

ロキの言葉に、三号機が速度を落としながら下降する。

飛行機は空気抵抗を軽減しているとはいえ、無力化している訳ではない。とりわけ翼は、その空気抵抗で方向転換等をしているわけだし。

三号機に合わせて、他の二機も速度を落とすとして彼女らの反応を待った。

『きやつ』

『どないした!?!』

レフイーヤの小さな悲鳴が上がる。それにいち早くロキが反応して、問いただした。

『いえ、何があつたわけではありません。ただ、森の近くを飛んだら、多分風に煽られただけで木々が崩れ始めたんです』

『これは……森が死んでるのかな？ ちよつと急いだ方がいいかもね』

荒廃した、というのともまた少し違う寂れた光景。それを前に、舌

打ちが聞こえた。

『胸くそ悪いな』

『ベートじゃないけど、たしかにこれはなんかヤダよね。あたし、ここ嫌い』

もし顔を見ることができたなら、うえつと舌でも出していたのではないか。そう思えるような声が、ややひび割れたスピーカーから聞こえる。

「フィンが言うなら決まりや。飛ばすでえ！　アイズたん、トッド、しつかり捕まっときー！」

言つて、ロキが思い切りアクセルを踏み込んだ。圧縮空気が強力に打ち出され、慣性制御でも打ち消せないほどの強力な負荷が体にかかる。体が座席に押しつけられて、ぎしりと音が鳴った。

二号機、三号機も習つて最高速度まで加速している。互いに乱流の影響をうけないため、少しずつ機体の位置は離れているが、それでも編隊は崩さない。ファミリアがダンジョンでそうするような経験を、そのまま応用しているのだろう。つくづくトップ・ファミリアはとんでもない。

機体が小さく軋みを上げ、体が席に押しつけられて強い圧迫感を感じる。それでも誰も、アクセルを緩めなかった。

飛行機の最高速度はとてつもなく、それこそ飛行型モンスターとて比較にならない。もっとも、この速度をさほど長期間維持できるわけではないが。強力な速度を出しているということは、そのまま無理をしているという事にもつながる。機体は持つても、魔石の消費が激しいのだ。今は限界まで魔石を回している状態、という事になる。

かなりの倍率で増幅しているとはいえ、所詮動力は魔石だ。このペースで消費されれば長くは持たない。

「見つけた……エルソスの遺跡！」

アイズが叫ぶ。

正面よりやや左方、確かに崩れかけの遺跡が存在した。

死んだ森の半径から考えれば、ほぼ中心あたりに位置するのだろう。一本の大きな巨塔を、周囲で小さな塔が囲んでいる。バベルが折

れて、時とともに風化すればこういう風になるのではないか、という
ような光景だった。

『待ってください！ 下で戦闘が発生しています！』

『どここの連中だ、あいつら！』

『見たことある！ あれ、ヘルメス・ファミリアだよ！』

言われて、トッドはとつさに下を見た。

遺跡よりほど離れた場所で、確かに戦闘が発生している。遠すぎ
て、トッドからは誰が誰だかまでは判断できなかったが。

『いや、上だ！ 全員守れ！』

そんな状況であっても、フィンは正確に状況を把握していた。白銀
の雨が、こちらへと降り注いでいる。

防御班が、全員とつさに叫んだ。

「目覚めよ！」
テンペスト

「地裂天双剣！」
グランドスラム

『オッラア！』

アイズの防護風膜が。テイオナの不可視の壁が。テイオネの赤い
攻勢防壁が。降り注ぐ神威の矢を次々と防いでいく。

「これは……アルテミスの神の力！？」
アルカナム どういうこつちや！」

ロキはアクセルから足を離さないまま、こちらを向いた。

「何か知つとるんか!？」

「アルテミス様の力が何者かに奪われた、くらいの事しか知りません
よ！ おそらく眷族である俺に反応して攻撃してきたんだと思いま
す！」

制御されているとはいえ、風の圧力は強い。近くに座っていても、
大声で叫ぶようにしなければ声は届かなかった。

「案の定厄介ごとやな！ まあええわ！ 六十億ヴァリス分の働きく
らいしたる！」

『下はどうするの!？ 今は優勢に戦ってるみたいだけど、さすがに多
勢に無勢だよー!』

トッドからは戦況まで見えないが。それでも、モンスターが多さだ
けは見て取れる。一瞬の優位があろうが、それにどれだけ価値がある

だろうか。いずれは数に押し込まれて、殲滅されるのは目に見えて言える。光景はさながら怪物の宴だ。

『つ……い・トッド』

フィンが苦渋を飲み込みみきれず、口の端からこぼすかのようにうめく。

言わんとすることは理解できた。なので、トッドは即答した。

「必要なのは第一級冒険者の援護だ。残りは最初から邪魔が入らないよう足止めをもらうつもりだった」

『感謝する！ リヴェリア班、レフィーヤ班、下降する！ 目的はヘルメス・ファミリアの援護だ！』

『了解しました！』

『承知した！』

言葉と同時に、飛行機二機が急降下を始めた。

トッドらはそれに目もくれず、遺跡を目指して全速力で飛んでいった。

ヘルメス・ファミリアの戦場に向けて、二機の飛行機は一直線に突っ込んだ。そして直前で急制動をかけて、勢いが死にきらぬまま、半ば地面に激突するようにして着地する。

それに驚いたのはヘルメス・ファミリアの面々だった。背後からの急な襲撃（に思えた）に、面食らっている。が、それが人間だと分かると、すぐ声を上げた。

「ロキ・ファミリア!？」

「なぜここに!？」

「事情は後だ!・ 援護する!」

フィンが叫ぶと、全員が一斉に飛行機から飛び出た。

ほぼ全員が第一級冒険者。それも、一人を除いて宝剣シザウロス所持者だ。その殲滅速度は、今までの比ではないだろう。不可視の刃が、灼熱のオーラが、自在に飛び回る鏃が、ファミリア最速の音の蹴りが、まるで雑草でも刈るかのようにモンスターを駆逐していく。

フィンはその中から、一歩引いて集中した。

普段はそんな儀式は必要ない。だが、この場にはヘルメス・ファミリアがいた。彼らを仲間と認定するには、少なからず精神集中と自己欺瞞が必要だった。それでも一瞬で済ませられたのは、会心の出来と言える。

「光灯す槍よ！ 皆に力を！」

全裏紋ルイイの槍を掲げ、魔力を解放する。その感覚は、フィンも知っていた。逆転法で力を得るとき、同じ感覚を味わうのだから。

その場にいる全員に、フィン相当の力、つまりLv. 6のステータスが与えられた。初めて味わうヘルメス・ファミリアはぎよつとしている。その隙に、モンスターに攻撃を与えられる団員もいたが、Lv. 6のステータスの前ではかすり傷のようなものだ。

本当ならば、自分も強化したかったが。この状況がどれだけ続くかわからない現状では、賢明な判断とは言えず断念する。そもそもスベックだけ見ても、Lv. 6が数十人という状況ですら、過剰な戦力と言えるのだ。

「いいか！」

フィンは後方で槍を掲げて、全員を鼓舞した。ヘルメス・ファミリアの、みなぎった力の動揺をそれで無理矢理押さえ込む。

「僕の戦場に敗北はない！ 剣を持って！ 槍を持って！ 盾を持って！ 敵に立ち向かえ！ 君たちの勝利は約束されている！ 後は戦うだけだ！ 総員、我に続け！」

激励を残し、フィンは一步を踏み出した。Lv. 6のステータスは、たった一步で後方から最前列へと体を躍らせる。

モンスターの数は多い。そして、狂ったように暴れている。しかし、強くはない。今も、たったの一撫でで数体のモンスターが消し飛んだ。魔石を狙ったわけでもないのに体がまるごと消えるのは不思議ではあったが、今はそれを考える時でもない。

「うおおおお！」

「よっしやあー！」

「ロキ・ファミリアが来てくれたなら百人力だぜ！」

「行くぜ！ 奴らを叩きのめせ！」

ヘルメス・ファミリアの軍勢が興奮のままに、モンスターへ躍りかかった。勢いが先行して、隊列が乱れているのはあまりよろしくないが。これはフィンの、全裏紋ルイの槍インの恩恵を得た者に多い傾向なので仕方がないと割り切る。

「すまねえ、助かった」

その中でも冷静だったのが、ヘルメス・ファミリアの副団長であるファルガー・バトロスだ。アスフィの姿が見えないあたり、この場の指揮権は彼にあるのだろう。

弱いモンスターではあるが、それでも油断しない。モンスターがモンスターである以上、何が起きても不思議はないのだから。注意はモンスターから離さず、しかしファルガーの言葉にも反応して、片手を振った。

「かまわないよ。僕たちも僕たちのクエストあつての行動だ」

「それでもだ。このモンスターの数だろ？ 正直何人かの犠牲は覚悟していたが、その必要もなくなった」

「では、感謝は素直に受け取っておくことにしよう」

ふ……とフィンが笑うと、ファルガーも同じく笑みを返した。

負ける気がしない、しかしいつ終わるかも分からない戦闘は、まだ始まったばかりだった。

「で、どうすんのやー！」

ロキが操縦桿を小刻みに動かしながら絶叫する。

それは、飛行機が言うことを聞かなくなり始めたのも無関係ではないだろう。曲乗りの上、極めつけの全力飛行。魔石の力はいつ尽きてもおかしくない状態になっているはずだ。

「空……月が二つ……！」

アイズが荒れ始めた風に髪を押さええながら、天空を見上げた。

確かに空には、月らしきものが二つある。エルソスの遺跡からあふれた何かが、空の上にもう一つの三日月を作っている。いや、それは正確には弓か。引き絞られて、矢がつがえられつつある。

「げっ……あれは神アルカナムの力……アルテミスの“矢”やん！ あんなもん

地上にぶっ放されたら、それこそ下界は終わりやで！」

時間はもうどれほどもない。それは、誰もが思い知らされた事だった。

「入り口へ！」

「もう行つとる！」

トッドが叫ぶと、ロキはそれに答えながら、操縦桿をひねった。

遺跡の周りを多少迂回し、直線で突入できるように軌道を変える。安定しない視界の中、遺跡の崩れかけた門が連なった場所に位置を変える。

直線上に障害物は多少あれど、飛行機のサイズならくぐり抜けられる程度のものであった。が、その真正面。まるで腐った肉が盛り上がるようにして、扉の代わりに入り口を塞いでいる。

「なんかメツチャキしよい壁があるんやけど！ 止まるんか!?!」

「そのまま突っ込んでください！ アイズは風で飛行機を守って！」

「分かった。目覚めよ！」

渦巻く空気の層が、飛行機の先端部分を中心に生まれる。まるでドリルのような形状で、飛行機全体を守っていた。風の流れまで遮断しているの、代わりに飛行機は小回りを失ったが、問題ない。

トッドは背後の荷物に手をつ突っ込むと、二本の剣を引つ張り出した。ともに両手剣で、剣の幅はさほどではなく、凝った造りでもない。それを両腰に佩いた。

「ぎゃあああああ！ 怖い怖いぶつかるぶつかる死ぬ死ぬ！」

ロキは迫る壁に、悲鳴を上げながらも速度は緩めなかった。その事に感謝しながら、トッドは左の剣を抜き放った。

宝剣、虹。自分のために作った上、ギルドに提出するわけでもないため、凝った名前をつけていない。ただ、虹。それが剣の銘だった。

椅子から無理に立ち上がり、座席の縁に片足を乗せる。そして、剣を何度も振り払った。

虹の性能は、極めてシンプルだった。その能力は、テイオネに渡した怒王鉄塊にも似ている。剣から極光の光を生み出し、接触したものを問答無用で破壊する。ただそれだけだ。剣閃の先にもみ破壊的な

光が生み出されるため、応用は全くもってきかない。ただし、その破壊力だけを取れば上だ。何でも壊せる、ただそれだけを目指して作られたのが虹だった。

虹で切り裂かれた破片を、風の防護膜が吹き飛ばす。飛行機はそのまま、中に突入していった。

内部は、まるで生き物の体内のようになっていた。壁という壁すべてを肉腫が埋め尽くし、所々卵に似た塊がある。どこも粘液を纏っており、それがまた一層嫌悪感を煽っている。

ここまでできてやつと、ロキはアクセルを緩めた。それでも、走るよりは大分早い速度で飛んでいるが。

「生き物の体内……いや、こらもうダンジョンやな」

「気色が悪い……」

「確かにもう、これは遺跡とは言えませんね」

飛行機に揺られたまま、思い思いに感想を述べる。

途中、モンスターが降ってきたり、入り組んだ場所などもあったが、虹とアイズが作り出した壁で、無理矢理破壊しまっすぐに進んでいく。

やがて、塔の中心部らしき部分に出て。飛行機をゆっくりと下降させていく。

その場では戦闘があったようで、破裂音やら何やらが聞こえてきた。崩落の音も響き反響している。

飛行機が地面に着地する。と、そこでもう、飛行機はうんともすんとも言わなくなった。

「あかん、ガス欠や。ギリギリやったな」

「ロキ!? それにアイズ君やトッド君まで!」

それは、絶望のような、希望のような。なんとも言えない声だった。声の発生者はすぐに分かった。近くでたたずんでいるヘステイアだ。近くに幾人かいる。全員一応知った顔だった。

ヘルメス・ファミアリアの主神ヘルメスに、その団長アスフィ。飛び込みで弟子入りなどしてきたヴェルフ。ベルのサポーターをしている（確か宝剣シザウロスを盗んだとか言う人間だった気がする。あまり覚えて

ないが)リルルカ。後は、豊穰の女主人の店員だかをしているリユ・リオンだったか。彼女だけは名前も臍気だが。

「なんでロキたちとここに!?!」

「それは後だ! トツド! アンタレス——アルテミスを捉えている元凶は崖の下に落ちた! アルテミスとベルも一緒だ!」

「ありがとうございます」

ヘステイアの事を相手している時間も惜しい。申し訳ないが無視して、彼は崖に走って行った。

「アイズ! こっからあなたの出番だ!」

「分かった……! ロキを、お願いします」

二人して同時に、崖の下に飛び降りる。その背中に、ロキの声がかかった。

「アイズたん! トツド! 絶対うまくやるんやで! 失敗してアルテミス送還なんて事になったら承知せんからなー!」

背後からの激励を受けて。

アイズとトツドは、アンタレスが作る闇夜に飲まれていった。

アルテミスの矢

円形に抉られた崖の下は凄惨な有様だった。

そこかしこに人の死体が転がっている。腹を破られて臓物をまき散らしている者、頭を砕かれて脳漿がはみ出ている者……いちいち数えるのも馬鹿馬鹿しいくらいのおびただしい死者の数。それらが全員、元はアルテミス・ファミアの団員であった事は、簡単に予想がついた。

周囲に血痕は散っていない。しかし死体はまだ新しく、服についた血は、まだ赤黒く変色もしていなかった。

死体の時が止まっているのだろうか。トッドは考える。いや、と彼は思い直した。もし時が止まっているとしたら、おそらくはこの遺跡そのものがそうだ。アルテミスの神アルカナムの力によって強制的に静止させられていた。だから、アルテミスの力が弱まるまでアンタレスは動き出せなかったのだろう。同時に、アルテミスが到着するまで、事態が動き出さなかったのも。

崖下には、動く者は三つしかない。アルテミスとベル、そして大型のサソリ型モンスター。これがアンタレスとやらのだろう。今も大きな悲鳴じみた絶叫を上げて、こちらを威嚇してきている。トッドに刻まれた、アルテミスの神ファアルナの恩恵に反応したのだろうか。あるいはもっと単純に、ただ敵が増えたことに対する警戒か。

「トッド!? なんでもっと早く！」

アルテミスの驚愕が、狭い崖の中で響く。彼はそれを無視して、右手の剣を振り下ろした。

オーロラ膜のような破壊エネルギーの塊が、アンタレスへと直進した。アンタレスはとっさに鋏のような腕を上げて、それを受けた。オーロラはそれに食らいつき、鋏ごと寸断する。が、体まで切り取るとまではいかなかった。アンタレスの強度は——少なくとも装甲部分は、虹でもそう簡単に破壊できるものではないらしい。さすがは神アルカナムの力を食らって力をつけただけはある。

一瞬遅れて、アイズが降りてきた。

地面に墜落するように着地したトッドと違い、彼女は風で落下速度を軽減しながら降りてきたようだ。

魔法を唱えて、背中から雷光の翼を生み出す。そして、狭い中であっても縦横無尽に飛び回り、アンタレスに斬りかかる。剣は装甲の大半をえぐり取るが、しかし切断するには至らない。アイズは一瞬の動揺も見せず、翼をはためかせ、真後ろに飛びすきった。

「堅い……い！」

「さすが、神を取り込んだだけはあるって事だろうな」

おまけに。

ぐじゅぐじゅと、切断面がうごめき始めた。それは破裂するように一気に膨れ上がると、破壊された装甲と鋏を生み出す。高速再生能力まで持っているらしい。

厄介だな、とトッドは飛び降りた拍子に唇についた砂を指でこすり落としながら、考える。高い防御力、再生能力。間違いなく上位のモンスターとして数えていいだろう。が、それだけだ。動きそのものは遅い。攻撃力も、今のところ見るべき所はない。想定之最悪を下回る力に、密かにほっとする。

「魔石だけは壊さないように！」

「分かった！」

アイズに指示するが。

かといって、簡単な相手でもなかった。これの魔石を破壊して終わりならば、さしたる労力は必要なかっただろう。だが、今回に限って言えば、それはできない。アルテミスが封じられているとしたら、魔石——モンスターの心臓であり核であり存在そのもの、そこ以外あり得ない。隙を見つけるのは、それなりに困難な作業だった。

「なんでここにいるんだ、トッド！ 君は、来てはいけなかった！」

背後から絶叫が聞こえる。が、トッドはこれもまた無視した。口を開けば、何を言ってしまうか自分でも分からなかったから。

飛び降りてきた時は気がつかなかったが、崖の縁は螺旋階段のようになっているらしい。そこを、先ほど出会った一団が駆け下りてくる。中には当然ロキもいた。

「なんや、あのまがまがしいバケモンは!？」

「あれがアンタレス！ アルテミスを取り込んで、アルカナム神の力を得た最悪のモンスターだ！」

ロキの驚嘆に、ヘルメスが返す。

トッドも前に出てアンタレスを止めようと思ったが、それはやめた。今のところ、アイズ一人でもアンタレスに対し、優位に戦闘を進めている。鈍足だが装甲だけは厚いアンタレスに、彼女は相性がいいのだろう。ならばと、トッドは真正面から受け止める形で、アルテミスの盾になる状況を選択した。

アルテミスははっとしたように、声を上げた。

「ヘルメス！ 裏切ったな!？」

「俺は言ったはずだよ。トッド君にも知る権利はあるってね」

悪びれもせず、というのとはちよつと違うのかも知れないが。彼はどこ吹く風とばかりに受け流していた。

その通り。ヘルメスは裏切っていた。どこからと問われれば、ほぼ最初からだった。アルテミスがモンスターに取り込まれた事も、彼女がどうやってそれを解決するつもりかも、いつ決行するかも、どこに向かうつもりかも、何もかも彼が明かしてくれた。ヘルメスの裏切り、もとい協力がなければこの時は存在しなかっただろう。

「なぜだ!？ あなたは私の気持ちを知っていたはずだ！」

「なら子供の気持ちも知るべきだったんだ！」

何かを言い争っている。が、それを気にする余裕まではない。

他の冒険者が降りてきて、戦闘に混ざってくる。そこに、トッドは即座に指示を出した。

「俺とアイズが主力！ リューとアスファイは遊撃！ そのほかは牽制だ！」

彼らの戦闘力を一瞬で読み取って、というほどトッドの目は便利なものではないが。ある程度なら強さを知っている。アスファイとリューはLv. 4相当として扱える。リューはなぜだかエビセス魔導力を持っていないので、攻撃力という面では一段下に見なければならぬ。残りはLv. 1とLv. 2のため、アンタレスに有効打となるほ

どの攻撃力は期待できない。援護に集中してもらえばいい。

「ならっ……！ オリオン、今のうちに『槍』を！ 早く突き刺して、すべてを終わらせてくれ」

「でも、それは……！」

「やめろ！」

逡巡するベルに、トッドは怒声を上げた。びくり、とベルが震えて、手から『槍』がこぼれ落ちる。

「そんなことする必要はない！ そのために俺が来たんだ！」

「じゃあどうするっていうのだ!? もうこれ以外、アンタレスを……私を止める方法はないのだぞ！」

絶叫が——涙すらこぼれていそうな絶叫が、背中を叩く。

それでもまだ、言葉は無視した。喉元まで迫ってくる吐き気が、どうにも収まらない。堪えられないものが、今にも吹き出てしまいそうだった。

「アルテミス様を……殺さなくて、いいんですか……？」

「そのために俺が来た」

「っ……はい！」

ベルは涙を拭うと、ナイフを持ってアンタレスへ躍りかかった。

彼は決して強いとは言えなかった。しかし、戦闘訓練と今までの経験の成果か、動きは巧みではあった。鋏の一撃を避けて潜り込み、繊維質の関節へ刃を突き立てる。同時に魔法を放って、その爆熱で鋏を吹き飛ばした。巧みな動きだったのはそこまでで、二の撃に晒されそうになるが。それは遊撃を担当している二人に援護されて、なんとか後ろへと引くのに成功していた。

「なんでだ、トッド君！」

アルテミスの絶叫は、すでにトッドにだけ向けたものになっていた。

「私は君だけには知られたくなかった！ 君だけは何も知らず、いずれ私の事も忘れて……静かに暮らしていてほしかった！ 私の咎になど巻き込みたくなかった！ 私が新たに得た、そして最後の眷族だから、君だけは守りたかったんだ！」

アルテミスが涙すら流して叫ぶ。座り込んで、それでもなんとか肘だけはついて、突つ伏すことだけはしまいとしながら。

アンタレスの巨大な目から、ビーム——いや、オリオンの矢か——が放たれる。それが縦横無尽に周囲をなぎ払う前に、トッドは虹を振った。オリオンの矢と極光の拮抗は一瞬だった。虹色を雑に混ぜて光らせたような光帯は、オリオンの矢を押し戻して、本体に多少のダメージを与える。いくら神の力を吸い取っていると言っても、そのリソースを地上一掃のために割り振っている状態では、さほど力を込められないようだ。

そんな器用な真似ができるのも、アイズのおかげだろう。彼女はひたすらに素早く、そして戦いがうまかった。即興の連携で苦勞しているのは彼女も同じはずだが、しかしもつとも味方が生かせる位置取りと攻撃を繰り返している。

関節部が弱点と分かってから、皆の攻勢は執拗だった。リユーとアスフィは飛び回り、少しでも機動力を殺ごうと刃を突き立てている。アスフィは爆発性の液体が主要な攻撃のようで、リユーほど攻撃的な動きではなかったが、それでも炸薬液を利用して、目くらましをしている。

低レベルの二人は下手に近づこうとせず、伸びてきた触手だけを相手している。ベルは、敏捷性を生かして果敢に攻め込んでいた。かなり危なげな場面もあるが、それは仲間を信用してだろう。リユーとアスフィは彼の攻勢を中心に援護している。

戦況は、およそ理想的な状態と言えた。

背後で泣き叫ぶアルテミスを除けば。

「君は私なんかを気にする必要などなかった！ 穏やかに、好きな事をしていればよかったんだ！ なんて……なんて、こんな所に来てしまったんだあ！」

「うるせええええええ！」

ついに、トッドに我慢の限界が訪れた。目の裏が熱い。堪えていた吐き気が喉を通過する。あまりの怒りに、強く結んだ歯が、ぎしぎしと音を立てる。体からあふれる衝動を、吹き出るままに任せた。

剣を持ち替えて、腹を向けて握る。そして、アンタレスの目に向かってなぎ払った。薄く集中されていた極光は、太い帯となって、アンタレスの目らしき部分をえぐり取る。これで暫くオリオンの矢は発動できないはずだが、そこまで考えたわけではない。ただ怒りのままだに、当たり散らした結果だった。

トッドは剣をその場につきたてると、背後を向いた。涙を流したまま、しかしきよんとしているアルテミスにむかって大股で進む。そして、彼女の胸ぐらを掴み上げて、無理矢理持ち上げた。

「俺がどうだかとか知るか！ そんなもん、全部あんたの勝手な想像だろうが！ 俺は俺のやりたいことしかやらない！ だからここにだっているんだ！」

「……、私の罪に付き合う事がか！ そんなもの、絶対にやりたいことでもなんでもない！」

一瞬息に詰まったアルテミスだったが、それでも言い返してきた。はらはらと涙を流し、犬歯までむき出しにして。表情は、怒りと悲しみが混ざり、それでも収まらずこぼれ出ている。

「私は死にたかったんだ！ ずっと……ずっと終わりたかった！ 終わらせるために今まで生きてきた！ やっと死ねるんだ！ それを邪魔しないでくれ！」

「嘘をつくな！」

絶叫に、咆吼で返した。

さらに胸ぐらを強く掴む。アルテミスが多少苦しそうにしたが、知ったことか。彼は鼻先が顔につくほどに接近させて、怒鳴った。

「死にたいやつが笑うか！ 神友とお茶して穏やかに過ごすか！ 子供の成長を見て喜ぶか！ 人の心配なんてするか！ 喧嘩なんてするか！ 皆と一緒に楽しむか！ つまらない事で一喜一憂するか！ ふざけた事を言うのもいい加減にしろ！」

言うべきではない——分かっていた。それでも、言葉は止まらなかった。

こんなこと、言うべきではない。相手すべきですらない。それは分かっている。それでも、激情は止まってくれなかった。どうしても吐

き出さずにはいられない。思い違いをした神にむかって。

「あんたはいつもそうだ！　嘘で取り繕う！　本音を隠す！　なんで言わないんだ！　言えばいいんだ！　なんだって、どんなことだって！　わがままでなんでも、好きなことを吐き出せばいい！　じゃなかったら、なんで俺がいるんだ！」

「じゃあ……じゃあ私を殺してくれよ！　私の力が、愛する地上をなぎ払ってしまう前に！　『矢』でアンタレスを突き刺す邪魔をしないでくれ！」

アルテミスはトツドに吊された状態から、自分で立ち直した。それも、全く力のある動作とは言いがたいが。そして、両手でトツドの手を叩いて払った。そんな動作をする彼女の手は……いや、全身が、少し透けている。少しだけ透過した姿のまま、彼女はトツドの胸ぐらを掴み返した。

彼女は涙目をきつと強く引き絞って、トツドを見据えた。やっと、真正面から見てくれた。その表情は、今まで見たこともないほどの剣幕で、そして悲壮感が漂っていた。

「私が死ぬ邪魔を……するなあっ！」

「そんな言葉を聞くために俺はここまで来たってのか!？」

今度はトツドが手を振り払う番だった。力は込めていなかったが、その拍子に少女はよろめいた。感情の爆発に任せた行動だから、踏ん張りがきかなかったのか。あるいはもう、普通に立っているだけの力もないのかもしれない。

「違うだろ!?!　自分の願いを言えよ！　あんたはどうしたいんだ!?!　ただ死ぬためなら十年近くもファミリアを経営する必要なんてなかったはずだ！」

「だから……私は……死んで……天界に……送還されて……」

「それは神アルテミスとしての言葉だ！　俺が聞きたいのは違う！　アルテミスっていうただただ一個人の言葉だ！　どうしたいんだ！

言え！　言ってくれよ！」

激憤に任せて問い詰める。いつからか、トツドの瞳からも涙があふれかけていた。熱くなる目頭を止めるには、労力が必要だった。

アルテミスは、よたよたとその場で何度か足踏みしながら、顔を伏せた。表情は見えない。代わりに、瞳から滴る涙だけが、頬にその筋を作っている。

「……………。トッド……………君の成長を見るのは楽しかった。神々の馬鹿騒ぎに振り回されるのは大変だったけど、不思議と嫌な気分ではなかった。下界は面白い所だったよ。いつも同じようで、常に違う顔を見せる。ああ……………君が神域金属アダマントを作ったときは大変だったね。君の口数が少ないばかりに、私はいつも振り回されっぱなしだった。神の宴でステイタスを公開した時なんて、本当に驚いて心臓が止まるかと思っただき。アイズにレフイーヤ……………いい子たちだった。暇を持て余していた私に付き合ってくれて、よく談笑したものだ。やがてヘステイアも下界に降りてきた。あのときは……………安心したなあ。トッドを任せられる神がやつと現れたと思って。気難しい君をさせるには、他の神だちとちよつと不安だったからね。それで……………それで……………」

はらはらと、涙の勢いは強くなった。ぽたぽたと地面に黒い染みを作っては消えていく。それが連続し、やがて地面に消えきらない足跡を残した。

「嫌だ……………嫌だよ……………。君と出会う前ならば、何の未練もなかった。家族が皆消えてしまったんだ。あの時すぐに送還されていれば、こんな思いもしなかった……………ずっと、隠しておけた。なにもないままでいられた！」

絶叫し、顔を上げる。女神の顔は、涙と、そして恐怖でぐしやくしやになっていた。

「死にたく……………ないよ……………！ 助けて、トッド」
「……………。最初から、そう言えばよかったですよ」

トッドは、消えかけたアルテミスの頭を、くしやりと一度だけ撫でた。触れたのはそれだけだった。

脇で、黙って聞いていたヘルメスが進み出てくる。

「それで、君は見せてくれるのかい？ 誰も悲しまない、完全無欠のハッピーエンドを」

「知りません」

「えっ？」

問われ、トツドは吐き捨てるように言った。いや、実際に吐き捨てた。いつの間にか下唇を噛んで、皮膚を破っていた。口の中にたまった血をつばと一緒に捨てて、地面に射して置いていた剣を引き抜く。「ハッピーエンドなんぞ知りません。俺がやるべき事をやる、それだけです」

「うん……そうさ、それでいいんだよ。神だって人だって、皆がやるべき事を目指して、それを完遂する。そこに結果がついてくる。それだけさ。誰も泣かないエンディングかどうかは、後からついてくる」

「……神らしい事を言うじゃないですか。珍しく」

「珍しくは余計、かな？」

剣を一度振った。刀身についていた土が振り払われる。

「トツド。失敗したら許さへんで。一生分ひっぱたいたるからな」

「あいにくと成功には縁があるもので」

ロキの激励（だか何だか）を受けて、トツドは改めてアンタレスを見た。

戦闘は、当然ながら続いている。再生能力は異常そのものだが、しかし限界がないわけでもないらしい。天空の矢を作っているならばなおさら、そちらに割けるリソースは少ないだろう。最初の頃より再生速度が遅くなっている気がした。

「トツドさんー！」

ベルが弾かれる……前に、自分から後ろへ飛ぶ。それはちょうど、トツドの斜め前だった。

「アルテミス様は、助かりますか……？」

先ほど答えたはずだが、それでもまだ不安だったのだろう。

しかしトツドは、力強く答えた。

「任せろ。ベル君、〃矢〃を持ってきてくれ。使う必要はない。俺が渡してくれと言ったときに、すぐ渡せるように」

「はいっー！」

言ってから、トツドは虹を構えて、力を集中した。

手慣れた持ち主ならば話も違うのだろうか。トツドにとっては剣

も宝剣^{シザウロス}も、数ある獲物の内の一つでしかない。本気で集中し、そして発動しようとするれば、ある程度の儀式が必要だった。

集中を追えると、虹の周りに極光のオーラがまとわりつく。それを確認して、トッドは叫んだ。

「アンタレスから胴体以外のすべてを粉碎する。全員距離を開けて！」

言うが早く、総員が距離を開けた。アンタレスが回復しかける、その前にトッドは剣を何度も振り抜いた。

膨大な光量の剣閃が幾重にも走る。今度は装甲で受け止められることはなく、そのまま背後の壁までをも消滅させていた。ざつくりと、いびつな球形が壁面に作られる。それと同時に、アンタレスがすべての足を失った。

胴体だけの達磨状態にされ、アンタレスがその場に崩れ落ちる。それに対し追撃が始まった。リユウの魔法が断面に叩き付けられ、アスフィの爆発葉が降り注ぐ。アイズは、背面から生えているサソリの針を根元から削っていた。

トッドは剣を捨てた。そして、もう一本、今の今まで右腰に封印していた剣を引き抜いて、アンタレスまで一直線に突撃する。

「アイズ！ 魔石を仕舞っている胸部装甲を切り取って！」
「分かった！」

彼女の反応は早かった。刃にプラズマを纏わせると、胸部装甲をくると一回転するように周回する。体中の装甲の中でも、ひととき頑健なはずの鎧は、それであっけなく切り落とされた。

中から魔石が現れる。全長二メドルほどもありそうな、巨大な青い魔石。その中心では、裸体で眠るように動かないアルテミスがいた。

アンタレスの再生速度が上がる。おそらく、本能的にトッドを近づけてはならないと思ったのだろう。それでも、彼は足を緩めず走った。仲間たちが援護をしてくれる事を信じて。

胸部装甲の再生も始まる。ぶくぶくと気味の悪い音を立て、肉が盛り上がるようにして、再びアルテミスを包み隠そうとする。が、トッドの方が早い。

トッドは剣を腰だめに構え直して、刃を平らにした。そのとき、刀身がかすかに視界の端に映る。見た目はただの長剣、とは言えないか。なにしろ刀身は何色とも形容しがたい色をしており、そもそも半透明だ。見た目通り特殊な刀身であり、専用の鞘でなければ納める事もできない。

そして、アンタレスが動き出すより前に。同時に、胸部装甲が再生し終わる前に。

宝剣シザウロスが一太刀、シザウロス “夢幻” は、巨大な魔石ごと、アルテミスの胸を突き刺した。

誰が物語

トッド・ノートという男について。あるいは、名もなき少年について。

最初の記憶は、薄汚れた路地裏だったと思う。が、よくは覚えていない。本人もどうでもいいことといって、ろくに記憶には残っていないかった。

少年は孤児だった。親の顔も名前も知らない。その土地は浮浪者に特別厳しい土地という訳でもなかったが、かといって団結を許すほど寛容でもなかった。薄汚れたはみ出し者たちは思い思いの場所で、ただ日々を漫然と過ごしていた。

少年に少し違いがあつたとすれば、それはほんの少し頭が回つた、という点だろう。彼は程なくして掃きだめから抜け出して、街の外へと出た。街の名前も、国の名前すら思い出せなかった。

小ずるい頭脳で、多少の金を稼いではいろんな街を回つた。大金は持たなかった。持てば殺されると、その頃には理解していた。小さな、片手に乗る程度の革袋に入った金銭が、常に彼の全財産だった。それと同時に、知識も貯めていった。運がよかつたのだろう。彼が回つた土地は、どこも知識をため込むには不足ない場所だった。

不満はあつた。彼は成長して行くにつれて、好奇心が旺盛になつていったのだ。何でも知りたくなつた。何でも調べたくなつた。何でも作りたくなつた。何もかもを、自分の脳にたたき込みたくなつた。

研究者として産声を上げたのは、この頃だった。

まだ少年という年から脱却できない頃。彼はオラリオに定住する事に決めた。

迷宮都市オラリオ——それはこの世でもっとも野蛮な都市の名だ。聞いた限りでは、ろくな統治機構もない。すべてが神々の楽しみの為に作られ、神々が思つたことこそが法になる。そんな、世界一馬鹿げた土地だ。

それでもオラリオに行こうとした理由は二つある。一つは、いくら馬鹿馬鹿しい場所であっても、正真正銘世界の中心であるから。もう

一つは、財産など体一つしかない元浮浪者の孤児であっても、成り上がるチャンスがあるからだった。

都市に入るのは簡単だった。基本的に誰でも入り込める場所だったから。だが、それからが難航した。

オラリオにはファミリアというものがあり、そしてそれが全てだった。オラリオの中心は間違いなくファミリアであり、それを中心にしてギルドが回している。が、それには欠点もあった。ファミリアには色がある。もっとも多いのが探索系であり、そのほかに生産系やら商業系やら。簡単に言ってしまうえば、トツドが望むファミリアはなかった。

ファミリアに入ること自体は、造作もなかっただろう。いつしか青年に片足を踏み入れるほど大きくなった男は、長年の放浪生活で、それなりにいろんな事を経験していた。商売の真似事をした事もあった。そもそも、道中はモンスターやら野党やら危険が山ほどあったため、武器は一通り扱えるようになっていた。

どこにでも入れる。しかし、望んだ系統のファミリアはない。ここに来て、トツドは頭を悩ませた。どうすればいいだろうか。

候補がなかったわけではない。団員に比較的寛容なファミリアであれば、自分だけ研究者として成り立つ事も出来たかも知れないが。その場合も、他の団員がネックだった。

トツドは人生のほとんどを一人で生きてきており、仲間など持った事がない。戦うすべこそあれど、他者と連携をするような器用さや寛容さは持っていないかった。厄介なことに、それを自覚もしていた。普通のファミリアには入れない。

ファミリア一覧の用紙に、半分ほど線が引かれた頃だっただろうか。その女神と出会ったのは。

その神は、一言で言っただけでボロボロだった。風体が、ではない。その精神が壊れかけていた。壁により掛かり、力なく体を預けている。頬には幾重にも重ねた涙の跡があり、それが落ちないほどになっている。目元には隈があり、充血もしていた。しかし、泣いてはいなかった。もう涙も出ない。そんな事を連想させた。

当時のトッドは、彼女について何も思わなかった。ただ、ファミリアをなくしたのだろう、その程度に感じていた。同時に、都合がいいとも。

団員一人の小さなファミリアであれば、ファミリアを好きに扱える。団長の座に立つてしまえば、何系のファミリアと言ってしまうことも出来る。

トッドはその女神に、契約を持ちかけた。

女神はチラリと男を見た。ガラス玉のような、何も見ていないとすら思える眼球。それが本当に彼を捉えていたかどうかは分からない。

ただ、彼女は契約に応じた。それが捨て鉢故の行動だとは、傍目から見ても分かった。

神の恩恵を刻まれた後、彼はどこかの倉庫へと案内された。小さな倉庫だった。倉庫と言うよりは、大きめのロッカーとでも言った方が正しいかも知れない、それくらい小さな倉庫。そこには、結晶に穂先を包まれた、一本の槍があった。

引き抜いてみて、と女神は言った。トッドは言われるがままに、槍に触れた。力を入れても何も起きなかった。

女神はそれで、何を言ったわけでもない。ただ、絶望は絶望のままだった、それだけが知れた。

それからの生活は、少しばかり忙しかった。手持ちなど何も無い神一柱と人一人。借家を借りるだけの手持ちがあったのは、奇跡と言っている。

トッドは探索系ファミリアの真似事をしながら、とにかく戦った。幸い、彼は小器用であったため、獲物は選ばなかった。なので、改めて武器を買わずとも、ダンジョン内でうち捨てられた武器を拾っては整備し、それで戦い続けることができた。

女神はほとんど動かなかった。日がな一日椅子に座っては、ぼんやりと外を見ている。ただ、時折何かを思い出してか、涙を流していた。何をするにも、世話してやる必要があった。介護とダンジョンアタックの二重生活は大変なものだった。

やがてLv. 2になると、生活は楽になった。トッドは中層で戦え

るようになった。相変わらず食料庫に突っ込んで殲滅するまで戦うという無茶な方法だったが、それを中層で行えるようになったため、稼ぎが桁違いになった。ホームを買ったのもその頃だ。これでやっと、研究にも打ち込めるようになると思んだ。

女神が自発的に動くようになったのも、この頃だったと思う。ほんの少しの差ではあったが、自分で立ち上がるようになった。初めて向こうから話しかけられた。彼女の名前がアルテミスだと、その時初めて知った。ずいぶんと遅い名乗りだった。

それからの生活は、楽しかった……のだと思う。

食卓と一緒に囲むようになった。雑談をするようになった。一緒に買い物をするようになった。危険なダンジョン探索に、怒られるようになった。他にもたくさん——本当にたくさん、思い出ができた。

いつしかトッドにとって、彼女が隣にいるのが当たり前になっていった。一緒に笑い合うのが、嬉しくて楽しくて仕方なかった。時には喧嘩もしたけど、それも悪くないと思うようになっていた。

何のことはない。彼は生まれて初めて、家族を得たのだ。

トッドはいつしか、考えるようになっていた。アルテミスは闇がある。それが何かは知らないが、どうにかして晴らすことはできないか。

昔——初めて会った場所に向かった。目的は、その近くにあった倉庫だ。あの槍を調べれば、何か分かるかも知れない。昔取ったなんとならで、簡単なピッキングくらいはできる。果たして、その場に向かって……しかし、槍はもうそこにはなかった。場所を移されたのか、それとも手放したのかは分からない。

アルテミスにそれとなく探りも入れてみた。それも、理解されないか、あるいははぐらかされるかで、要領を得なかった。ただ、頑としてその件については話すまいというアルテミスの意思は感じた。これは無駄だと諦めて、トッドはそれ以降、話題にも出さなかった。

ダンジョンアタックの合間に、研究を続ける。が、うまく手につか

ない。

理由は簡単だった。テーマが決まらないのもあるが、アルテミスの事が気になって仕方がないのだ。

アルテミスの神威が弱いのは分かっていた。それは自ら抑えている訳ではない事も。加えて、あの正体不明の槍だ。それらには必ずつながりがあるはずだ。しかし、どんなつながりがあるかまでは分からない。そもそも何がアルテミスを苛んでいるのかも。何をするにしても、情報が足りなかった。

それを打開したのは、一人の神だった。

神は、ヘルメスと名乗った。自分はアルテミスの協力者であり、同時に今から裏切り者にもなる、と。

トッドはヘルメスから聴ける限りの事情を聞いた。アルテミス・ファミリア壊滅の経緯。槍、もとい“矢”に残されたアルテミスの残滓と言える存在。いずれアルテミス・ファミリアを壊滅させた何者かは封印を破り、復活するだろうという事。その時こそがアルテミスが完全にこの世から消える時であろうという話まで。

最初、ヘルメスが彼に期待して話しかけた訳ではなかったのは明らかだった。ただ、ファミリアだからその覚悟はしておいてくれ。せめて穏やかに過ごせるように、それが無理ならば、なるべく穏やかに改宗するよう。その程度。

だが、トッドにとつてはそこそが始まりだった。

研究のテーマは決まった。『アルテミスの救出』その点にのみ絞った。

まずは力そのものからだ。神アルカナムの力は精神力に似ている。それを見して、彼は魔力の研究に打ち込んだ。

冒険者に限らずあまねく人に、魔力という力が発現するようにした。これにより、個人差のブレを観測し、マクロな視点から調整できるようにしようと考えた。

次に考えたのは、その扱いだ。精神力という力を自在に操り、調整できるようにした。これにより、力の流動を可能とした。

最後に考えたのは、力の変換だ。力を別の力に変じて出し入れでき

るようにすれば、あらゆる事象を起こせるようになる。力を、魔法という超常現象に頼らず変えることも、ため込むことも、自由自在に。

精神力の発現までは順調だった。だが、力の操作と変換には手間取った。単純にサンプルが足りなかったのだ。一人分の観測結果では、もしかしたら神アルカナムの力にそれを流用することができないかもしれない。

結果が出たのは、研究期間を考えると本当について最近だった。アイズとレフイーヤ、都合がいい二つのピースを揃えて、初めて完成形を想像することができた。

宝剣シザウロスという力を生み出すと、ヘルメスからの接触が増えた。彼も、もしかしたらと思ったのかも知れない。もしかしたら、本来あるべき結末とは、また違う結果を生み出せるかもしれないと。

トッドは十何本かの宝剣シザウロスと、それに数倍するサンプルを作り続けた。あらゆる方法を試した。力の返還、蓄積、流動、融合、拡散、収束……

——アルテミスは、もう忘れているかもしれない。トッドに“矢”を触れさせた事も、彼が彼女に懸念を持っている事も。全てを忘れ、そして忘れさせ、いずれ来る破滅に悲しみながら、今を楽しんでいたのかも知れない。それでも、彼は忘れたことはなかった。初めて触れた“矢”の事も、彼女の失意の事も。わずかに残った記憶から、あらゆる可能性を想定して力を蓄えた。一度として忘れたことはない。

同時にトッドは隠した。隠し続けた。もし知られてしまえば、アルテミスがどんな行動を取るか予想ができなかったから。

そして、集大成は生み出された。

もし、宝剣シザウロスという力を、アルテミスを救うためのものを指すならば。無数の宝剣シザウロスは、ただの副産物に過ぎない。

唯一その剣だけが、“宝剣”と呼べるものである。

アンタレスの魔石を正確に射貫いた剣は、正しく言えば剣ではない。いや、そもそも実態ですらなかった。その証拠に、アンタレスが身をよじると、魔石には傷一つない状態でそこに存在している。

「こいつを動かすな！」

言うが、全員言葉の前に動いていた。

アイズは風を網状にして、アンタレス全体を包んでいる。アスフィはもとより、リリルカとヴェルフも執拗に断面へ攻撃を加えていた。ベルだけは、唯一攻撃に参加せず、言われたとおり「矢」を持ったまま、トツドの近くで待機していた。

「この剣はな……」

トツドは誰に聞かせるでもなくつぶやいた。

いや、聞かせるつもりはあったのかもしれない。物言わぬ、言ったところで理解せぬアンタレスへ。それに皮肉のつもりがなかったとは言いがたい。

「冒険者が使うものと考えたら、全くの無力だよ。なにせ、攻撃力なんてかけらもないんだからな」

アンタレスが激しく体を揺さぶった。だが、その程度で動けるようにはならない。

あるいは、これから何が起こるのか獣じみた予感があったのかもしれない。それでも関係ない。この状態になった時点で、全ては終わっている。

きい……と音を立てて、その剣が起動した。その瞬間、アンタレスがびくりと痙攣したのは無関係ではあるまい。

「宝剣^{シザウロス}、夢幻^{シザウロス}」の機能はただ一つ。持っている力を再編集、再分配することだけだ」

「アアアアアアアアアアアアアア!!」

アンタレスが悲鳴を上げた。今までの咆吼とはまた違う、苦しみにもだえたものだった。

夢幻は使用されるに当たり苦痛が伴うのだろうか。試したことはないのだから。が、どうでもいい事だった。むしろ小気味よくすらある。ほんの少しでも苦しまなければ、今までのアルテミスを思えば、採算がとれない。

「奪い、混ざり合った力は分離する。刀身の中でそれらは編纂される。そして、所持者の好きなように割り当てを変えられる」

剣に光が幾筋も走った。太陽光に当てられ、陽光が刃の上を滑って行くようだ。それが何本も、何十本も、何百本も高速で行き来する。アンタレスが残った胴体で、ジタバタと左右に体を振ろうとする。が、それもやはり他の冒険者に止められた。アイズが魔法を唱える。風の網は、雷撃の刃へと姿を変えていた。目もくらむ光が全身に食い込む。装甲は炎熱に剥ぎ取られ、肉を焼く異臭が漂った。

「この通り即効性もない。だが、感じるだろうか？ お前の中から神の力が抜けていくのを」

力を証明するものが何だったかは分からない。だが、確かにアルテミスを封印する、蒼穹とも表現できそうだった青い魔石、それが色を失っていく。濃い青に邪魔されて姿形も朧気だったアルテミスの姿が、次第にくつきりしていく。

巨大な魔石の中で封印されているアルテミスは、まるで眠るように瞳を閉じていた。

「ああ、当然お前自身が元から持っていた力も残さん。剣を通じて虚空に消えていくさ。『夢幻』ならそれくらい造作もない」

言葉の通りに、アンタレスの抵抗はどんどん弱まっていった。再生速度すら、目に見えて弱まっていく。

が、アンタレスはまだ諦めていなかったのだろう。モンスターにまともな思考回路があればだが。

アンタレスは、他の戦士の合間を縫って、足の一本だけを再生した。その鋭い爪が振りかぶられ、トツドの脇腹に突き刺さる。

爪はかなり深く、トツドの腹に刺さっていた。ぐつとうめきが漏れる。

「トツド……!?!」

「くっ……このおー!」

アルテミスから悲鳴が上がる。ベルが、とっさにナイフを振って、足を断ち切った。さらに後、ヴェルフが根元を切りつけて切断する。

かなりの苦痛だったが、それでも冒険者だ、苦痛には慣れてる。ただ、その一瞬だけは集中が途切れて、『夢幻』の流れが多少滞ったが。それでも誤差の範疇内と言える。

トッドはこれ以上遅れないよう、歯を食いしばって耐えた。幸運にも言うべきか、傷は少しばかり放っておいたところで死にはしない程度だ。爪は筋肉で止まっており、内臓までは達していない。

「大丈夫……夫？」

「気にするな！ それより拘束の継続を頼む」

こちらを心配げに見るアイズに告げる。

実際、重傷と言っているいいダメージではあったが。もっとうまく宝剣シザウロスを使えていれば、こんなこともなかったかもしれない。

(俺自身も、宝剣シザウロスの習熟をしておくべきだったかね)

今更悔やんだ。まあ、もう遅いし、そもそもどうでもいい。こんなつまらない苦痛など、明日に捨ててしまえばいい。

「無駄だよ！ お前はもう終わりだ！」

トッドはアンタレスに向けて、声高に絶叫した。まるで自分を叱咤しているみたいだ、とも思えた。苦痛に、その意味がなかったとも言い切れない、と苦笑する。

夢幻の中で行き来する光が増える。同時に、頭が沸騰しそうになった。いくら夢幻にある機能だからといって、それを処理しているのは、所詮一人の人間だ。トッドの情報処理が間に合わなければ、今までの苦労が水の泡だ。

なんでもいい。頭がぶっ壊れたってかまわない。ただ、トッドは最後の絶叫を上げた。

「よくもまあ長々と、うちの神様をいじめてくれたなあ！ くたばれくそつたれ！」

その言葉と同時に、アンタレスがびくんと震えた。

初めて、魔石の中にいるアルテミスが動く。まるで深い水の中をゆっくりと落ちていくように、体を落としていった。

「ベル君、 〃矢〃を！」

「はい！」

トッドは右手を離すと、ベルから 〃矢〃を受け取った。

〃矢〃を、夢幻の刃の上、魔石との中間点に当てる。すると、 〃矢ヒエログリフは神聖文字を起動した。機能が発揮された訳ではない。夢幻によ

る力の編集で、それが編纂し始められたのだ。

やがて“矢”に描かれ、光っていた神聖文字ヒエログリフは力なく薄まっ
ていく。

「アルテミスー！」

「どないしたんや!?!」

背後で声がある。振り向くほど余裕はなかったが、何が起きたか
くらしいは予想できた。

アルテミスの姿が消えかけているのだろう。この場にいたアルテ
ミスは、いわば魂の分体。本体から切り離された、もう一人のアルテ
ミスにして、アルテミス本人。それが、夢幻の力により本体に帰ろう
としている。

「帰って……いよ……！」

“矢”から神聖文字ヒエログリフの光が完全に消えるのと、魔石が色を失うの
は、ほとんど同時だった。

アルテミスの体が、魔石の境界面へ触れる。接触し、表面は波打っ
て、そして彼女の体がゆっくりと降りてきた。

トッドは夢幻を捨てて、アルテミスを、両肩を押さえるように支え
た。そして水面を漂うように落ちてくる彼女の体を、なんとか支え
た。

人一人分の重みに、脇腹が悲鳴を上げた。が、そんなものに負けて
いられない。これが終わったら、もう倒れたって何したっていい。そ
う思いながら、賢明に彼女の体を支えた。

魔石から彼女の体が出ると、アンタレスは最後の悲鳴を上げ
た。そして、最初は青から、次に透明になった魔石は、アルテミスを
失って通常の色に戻る。本当にただ大きいだけの、普通のモンスター
の魔石に。

「今っ！」

その叫びは、誰のものだったか分からない。もしかしたら、皆のも
のだったかもしれない。

アイズとリユーが、同時に魔石へ飛び込んだ。と、ほぼ同時に、ア
スファイが爆発液を投げた。三つの線が重なったと同時に、爆発が起き

る。それだけで、魔石はあっけなく——本当にあっけなく砕け散った。

煙が晴れると、すすで黒く染まった二人がたたずんでいた。

「……危険物を投げ込む時はですね、もう少し周囲に気を遣って……」

「ご、ごめんなさい。ついチャンスだと思って」

「……けほっ」

三人で、なんだか一悶着あったようだが。

トッドはアルテミスを胸に抱えたまま、上着を脱いだ。そして、全裸の彼女にかぶせる。

アルテミスは、暫く微動だにしなかった。が、そのうちぴくりと指が動く。連動するように、全身が動き始めて。やがて自重を足で支え、ゆつくりとまぶたを開いた。

「……トッド」

「よかった、記憶もちゃんと受け取ったみたいですね」

夢幻の機能を考えれば、当たり前前の結果ではあったが。なにしろ初めての行いの上に、事前に試せるような状況も、余裕もなかった。成功して、ほっと吐息を漏らす。

「君は馬鹿だよ」

「アルテミス様ほどじゃありませんよ」

「そんなことはない。こんな、私のために怪我までして……」

言って、彼女は脇腹の近くをそっと撫でた。苦痛を与えないためだろう、直接は傷口に触れなかった。それでも引きつるように響いたが、それは隠しておいた。

彼女が神威を発し始めた。今までのように、弱々しいものではない。普通の神が当たり前に発するのと同じ程度に、彼女は神威を出している。

アルテミスが手を引く。と同時に、トッドの胸へと手を当てた。

「君はオリオンじゃなかった」

「知ってます」

遙か昔、〃矢〃を抜くことはできなかった。無垢なる、アルテミスが望む魂の持ち主ではなかった。とつくの昔に思い知らされた事だ。

「私はずっと君に嘘をついていた。裏切っていた」

「さつき聞きましたし、そもそも今更です。ずっと気付いてました」

アルテミスが唇を噛む。その感情は分からない。

引き絞った口を開き、視線を上げた。ちょうど、トツドのそれと交わるように。

「それでも君は、こんな私を助けてくれた」

「家族、ですから」

アルテミスは笑みを作った。と同時に、涙も流していた。

トツドは彼女を抱き寄せた。久方ぶりに見た気がする彼女の微笑みは見ていたかった。が、それと同時に、もう彼女の涙は見たくなかった。相反する感情は後者が勝って、女神の涙は自分の胸に押しつけた。

「——ただいま、トツド」

「——お帰り、アルテミス様」

トツドは小さな小さな女神を抱きしめた。彼女も同じように、ちっぽけなちっぽけな眷族の背に腕を回した。

「わああああああん！ アルテミスううう！ 無事でよかったよおおお〜！」

大泣きしたヘステイアが、二人に向かって飛び込んでくる。アルテミスはなんとか受け止めたが、トツドは傷に響いてその場で転んでしまった。

「イっつうー！」

「トツド!?!」

「ああっ、ごめんよトツド君！」

「とりあえずこれ、ポーシオンです。どうぞ」

「ありがとう」

アスファイから受け取ったポーシオンを腹に垂らす。それで完治とはいかなかったが、今までのように立っているだけで響くほどではなくなった。なんとか立ち上がり、周囲を見回す。

アイズとリユーは、体中についた汚れをはたいて落としていた。ベルはパーティーごと、手をたたき合って喜んでいる。残りの神二人

は、にこにここと笑いながらこちらに近寄ってきている所だった。

「ところで、こんなこともあろうかと着替えの服一式があるんだ。半裸もなかなか眼福だが、乙女をじろじろと見るのも申し訳ない。受け取ってくれたまえ」

「こんな状況って、お前一体どんな状況を想定して生きとんのや」

ヘルメスの厚意に、ロキが呆れのため息をはきながら。

戻ってきた冒険者一同に囲まれて、アルテミスはもみくちやにされていた。互いに抱き合い、喜び合い、満面の笑みを浮かべている。

トッドは一步引いてそれらを眺めていた。

ヘルメスは輪から抜け出てくると、そつとトッドの隣に立った。そして、誰にも聞かれないよう、小声で話しかけてくる。

「これが君の描いた、誰も泣かない最高の物語ってやつかい？」

「そんなんじゃないです」

「？」

「本当に、そんなんじゃないんですよ」

ヘルメスは理解できないという様子だったが。トッドは口の中で繰り返した。本当に、そんなご大層なものではない。

他の人の事なんて考えもしなかった。地上がどうのなんてご大層な事、思いつきもしなかった。

ただ。

彼はただ……

これは、魔物に汚されてしまった神から、世界の命運をかけて戦うような物語ではない。

一人孤独に泣いているただの女の子を、泣いたままこの世の理から切り離し救う話でもない。

ただ、一柱の神が、一人の眷属の元へ帰る。ただそれだけの話なのだ。

エピローグ

オラリオに戻って、しばらくは忙しい日々が続いた。

丸々二月。それが《アルテミス事件》の事後処理に必要な時間だった。

「ふう……やっと落ち着けるねえ」

「そうですね」

どかつと音を立てて、アルテミスが椅子に座り込んだ。トッドはそれほど無作法ではなかったが、それでも疲れはたまっている。吐息をはきながら、椅子が軋みを上げる程度には体を強く落としていた。

どちらも、今はお茶を入れる気力もない。静寂の中、どちらともなく家の中を見回した。

家の中は、何が変わったわけでもない。いつも通りのやや古びた一軒家で、当たり障りない程度の調度品があり、壁の隅にあるハンガーラックには白衣が並んでいる。

「お金、なくなっちゃったねえ」

「金銭で片がつくなら安いもんでしょう」

彼女の言葉の通りに、今までアルテミス・ファミリアがため込んだ資金は、今やゼロに近かった。

オラリオに帰ってきて後から知ったことだが、アンタレスが発した神威の影響は遙か遠く離れたオラリオにまで届いていたらしい。『オリオンの矢』こそ発動はされなかったが、ダンジョンはその神威に触発されていた。無数のモンスターが暴走し、多くの冒険者に被害を出していた。それを押さえたのがロキ・ファミリア居残り組であり、フレイヤ・ファミリアであつたらしい。

アルテミスの事を隠そうとすれば隠せやし、しらばつくれる事も不可能ではなかっただろう。だが、彼らはそれを選ばなかった。

被害に遭ったファミリアに、賠償金を渡しながら謝罪して回った。もちろんロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリアに感謝を告げにも。

一カ所一カ所に渡す資金はさほどではなくても、何しろファミリアの数が数だ。その上、ギルドからモンスターを活性化させた（どうや

らしていたらしい。後から知ったことだが）罰で（それと名言はされてい
ないが、神の力アルカナムの領域に手を入れた事も無関係ではないだろう）
ペナルティを言い渡された。渡して回れば、資金はあつという間に尽
きてしまった。

はあ……と息を吐いて、アルテミスはべたつとテーブルに突つ伏
した。両手を伸ばし、顔だけは上げている。

「それでも、弔うのに足りるだけの資金が残ったのは助かった」

「時が再び動き出した遺跡の中、さすがに腐らせて放置はできません
からね」

「そこら辺、トッドはよく財務管理をしてくれたよ」

「俺にとつても先輩の話ですから」

方々に感謝と謝罪を追えた後、彼らは再びエルソスの遺跡へ向かっ
た。

飛行機二機はロキ・ファミリアに譲渡したが（しよつちゅうホーム
上空を飛んでいる。これをうらやましがってか、いくつかのファミリ
アから注文が入っている。フレイヤ・ファミリアからは一番最初に納
入するようにと釘を刺された）、一機はファミリアに残っている。そ
れを飛ばせば、遺跡まではさほど時間を取らなかった。

改めて入ったエルソスの遺跡は、多少戦闘で荒らされているもの
の、本当にちよつと大きめの遺跡でしかなかった。アンタレスがいな
い影響か、中に明かりは確保されていなかったが。念のため持って
行った魔力灯が役に立った。

さすがに無数の遺体をオラリオに持ち帰るほどの余裕はなかった。
仕方なしに、遺跡周囲に彼らを埋葬した。それで満足してくれるかは
分からない。死者の声など聞こえない。だが、せめて、あの世でアル
テミスが健在である事に満足してくれればいいと思う。

元ファミリア団員の墓碑を前にして、アルテミスが何を思ったかは
分からない。だが、祈祷を終えてあげた彼女の顔は、その前より幾分
さっぱりしているように見えた。

「しかし、これでやつとゆっくりできる」

アルテミスははしたない声を上げながら、テーブルから体を起こ

し、伸びをする。

「俺はまだ、これからギルド通いですよ」

「またギルドかい？ 彼らも強欲だな」

アルテミスが眉を潜めて言った。

今回の事件について、ギルドは事態を重く見ている（事になっている）。フアミリア資金の大半が飛んだのも、主にそれが原因だ。罰金がかかりの額になったのだ。そのほかにも、要求された事がある。

「新しい研究成果の権利譲渡、だっけ？ いいのかい、そんなことをして」

「まあ、うちが抱えてても持て余すものではありませんからね」

ギルドが要求したのは、意外にも宝剣シザウロスの製造法ではなかった。前にヘステイア、エイナと少し話したときに話題に出た、大型の転移装置技術をほしがられたのだ。どうやらギルドは、大型転移装置を通じて流通の支配、財源としたいらしい。

まあ元々ダンジョン管理はギルドの役割だし、理屈は通っている。セーフポイント安全階層に通すと言われれば、はねのけるのも難しい問題ではあった。ただ、それが下界での流通でも使えると言うだけで。

そのことについて、エイナからは平謝りされた。自分が迂闊にも漏らしてしまったせいで、研究成果の要求をされてしまったと。

アルテミスはぷくつと頬を膨らませた。

「そうじゃなくて、彼らは君の技術の私物化をしようって言うんだよ。それを許してしまっただいいのか？」

「よくはありませんけどね。借りがある場合、これ以上の要求は、自分たちの方に問題があるという位にまで譲歩したほうがいいですよ。その証拠に、彼らはこれ以上こちらに干渉する姿勢は取っていないでしょう？」

「それはそうだけど」

言うが、アルテミスはまだ不満げだった。

「それに、『夢幻』も渡してしまった」

「あれは正確には、ギルドに渡したのではなく、神ウラノスに譲渡したんですけどね」

「同じ事さ」

言葉の通りに、今「夢幻」はウラノスの管理下にある。

「夢幻」は、剣とみた場合、失敗作以下のものではあるが。神になんらかの異常が発生した場合、その蘇生を試みるという観点から見れば、切り札たり得る。今頃は、使い手たりえる者の厳選でも行われているのではないかとトッドは予想していた。

アルテミスが地上で神アルカナムの力を行使した事は、表向き罰則はあるが、事実上は不問となっている。

モンスターが神を取り込み、その力を好き勝手に扱う。これは神にとっても予想外の事だった。それも、最悪に近い。一番問題となったのが、これからもそんなことがあり得るという点だった。明日は我が身なのだ。

勝手に使われた力の責任を負わされて強制送還。これはどの神も望むところではなかった。せつかく元に戻る手段が現れたのに、強制送還など冗談ではない。それを嫌って、神々は口をつぐんだ、と言える。

「誰も彼も自分がかわいいから私を許した。勝手なものだよ。……それで下界に居続ける事を許された私が言える立場ではないけど」

「ははは、本当に。でもいいじゃないですか。そのおかげで、アルテミス様もこうしていられる」

「感謝がないわけじゃないさ。本当だよ。ただそれでも納得いかない所はあるって言うか……」

アルテミスは指を絡めにもよもよもつぶやきながら、なおも言いつづめる。どうやら先日行われた神会デナトウスで、よつぽど腹に据えかねた事があつたらしい。

彼女のご機嫌取りという訳でもないが、トッドは苦笑した。本当に、まあ、今回ばかりは神の変わり身に感謝するしかない。わざわざ謝罪と賠償を払って回った甲斐があつたと言うべきか。

「やっつこ」

トッドは重たい体を引きずるようにして起こした。連日の用事で、疲れはまだとれきっていない。それでも、しなければならぬ事はあ

る。実際、山積みだと言っている。

「どうしたのだい？」

「研究に戻ろうかと思いましたがね。ギルド長から、大型転移装置の完成を急かされているんですよ」

壁に掛かっている白衣を取って、研究室へ向かう。

大型転移装置について、実はもうほとんど完成していた。そもそも、レフイーヤに渡した賢者の杖ワイスマンで、短距離ながら無設置式空間転移は成功していたのだ。点と点をつなぐならば、それより遙かに簡単に行える。後は、装置の大型化と大容量化をするだけだ。問題点と言えば、まあこれも宝剣シザウロスと同じ、現状作り得る者がトッドしかないという点だろうか。

研究室に入って、炉に火を入れる。と、後ろをちよこちよこと、アルテミスがついてきていた。

《アルテミス事件》から向こう、彼女は少しだけアクティブになったと言ふべきか。とにかく、スキンシップが多くなった。前はトッドが研究室に入ると、ほとんど接触してこなかったが、今では普通に入ってくる。

「今日は何をするんだい？」

「門ゲートの支柱造りですね。一つの設置点に四本、つまり八本作れば、転移装置は稼働できるわけですから。さっさと作ってくれとせつつかれていますよ」

「そっかー。んふふ」

何が楽しいのか、アルテミスが含み笑いをする。

と、背中に寄りかかってきた。しゃがんだトッドにのしかかるように、両手を首に回して。伸びた肘から、彼女のなめらかな両手が眼前に浮かぶ。

耳の後ろで、妖精がささやくようにアルテミスがつぶやく。

「ふふ……トッド……」

ささやくのと同時に、トッドは槌を下ろした。火花が飛び散って、アルテミスの手に降り注ぐ。

「あつつうー！」

「ああもう。なんでいつも俺が白衣なんて着てると思ってるんですか」

アルテミスが床を転げ回る。机やら何やらに当たって、がっしやんがっしやんと音を立てる。それで背中やらも打ってるだろうから、痛くないはずもないだろうに。

トッドは炉の火を落として、彼女を抱え上げた。

「ほら、手を冷ましに行きますよ」

「うん……ぐすっ」

半泣きになりながら、両手を押さえて涙目になる少女。

キツチンにまで戻って、手を流水にさらしていると、ドアベルが鳴った。

「どうぞー」

今は手が離せないの、声だけをかける。と、扉が勢いよく開かれた。

「やあやあアルテミス！ ボクが来たよ！ そろそろいざこぎも収まってきたって言うから様子を見に来たぜ！」

「えへへ、お邪魔します」

やってきたのは、ヘステイアとベルのヘステイア・ファミリアコンビだった。その背中から、さらに二人、入ってくる。

「こんにちはー」

「お邪魔します」

「ちなみにアイズ君とレフィーヤ君もいるぜ。来る途中でちょうどあつたんだ」

ぱたぱたと、さらに二人が入室してくる。

家に六人。ホームの規模を考えると、まだ適正人数だと言えるが。今までが二人だけだったことを考えると、騒がしさは感じた。

「って……何をやってるんだい？」

「ヘステイア……痛いよ……」

「アルテミス様がやけどをしましてね。今は治している最中です」

たいした怪我でもないの、彼女の治療はすぐに終わった。まあ、腕は所々赤く変色しているが。これくらいなら、わざわざ薬で治すほ

どでもない。

未だ涙目であるアルテミスの手をタオルで拭ってやり、ダイニングへと促す。さすがに客人だけで座らせておく訳にはいくまい。その間、トッドはお茶菓子をとり出し、紅茶の用意もした。自分も含めて六人分となると、手間とまでは言わないが、さすがに少し時間がかかる。ティーポットも一つでは足りない。

アルテミスが席に座ると、なぜだかヘステイアが笑い出した。

「へっへっへっ、それで、どうなんだいアルテミス？」

「なんだいヘステイア。まるでチンピラみたいな笑い方だよ」

「ほっとしてくれ！ そんなことよりだよ」

言つて、彼女は身を乗り出した。秘密話でもするように手で口元を覆うが、そもそも席が離れているため、あまり意味がない。

「しらばつくれちゃってさ。ウブなネンネちゃんでもあるまいし」

「処女神きみが処女神わたしにそれを言うのかい……？」

ヘステイアの顔は、とびきり下世話だった。あまりのアレっぷりに、アルテミスが少しばかり引いている。物理的にも心情的な意味でも。

そんな様子も意に介さず、ヘステイアは続けた。

「おいおい、子供が自分の為に半生をかけて救う手立てを模索してもがいて、そして救われたんだぜ？ これで何も思わない訳がないじゃないか。あのお堅かった君からコイバナの一つでも聞きたくなくなるってもんじゃないか」

「な……っ！」

アルテミスの顔が、かっど紅潮したのが分かった。背を向けているので顔は見えないが、耳が真っ赤になっている。

「子供にずいぶん愛されちゃってさ。ねえねえどうなんだい？ そこんとこどうなんだい？ 聞かせておくれよ」

「そ……そんなの言うような事じゃないっ！」

「でも、私もちよつと聞いてみたいです」

「その……私も、興味……ある」

「あ、ええと、すみません僕もです！」

「あわわ……」

アルテミスは顔を覆って、ぶんぶんとかぶりを振った。

「知らないっ！ そんなの知らないよっ！」

「そうじらすなよ。全部暴露しちゃえばいいじゃないか。それこそ出会いから、愛情が育つ所まで赤裸々にさー！」

ヘステイアはにやにやと笑いながら、無理して体を伸ばし、肘でアルテミスをつついてる。

周りは敵だらけ。孤立無援だった。彼女は振り向いて、声を上げた。

「トツドー！」

「黙秘します、でいいでしょう」

「そこでトツド君に聞くのはずるいだろう!？」

「トツドさんからじゃ何も聞き出せませんよう」

「顔色も……変わらない」

「トツドさんはポーカーフェイスがうまいですもんね」

実のところ、動揺するほどの場面というのが少ないと言うだけなのだが。言ったところで通じる様子でもない。

お茶を用意して、トツドも席に混ざった。それからは、やはりアルテミスがからかわれたり、脱線して普通の雑談に戻ったり。まあ、他愛のないものだった。

と、いきなりヘステイアが声を上げた。

「そうだ、今日は二人にプレゼントがあつて来たんだった」

彼女はガサゴソと持ってきた荷物を漁りだす。取り出したのは、布にくるまれた一枚の板だった。

「これは……?」

「えへへ、見ておくれよ」

トツドとアルテミス、二人でのぞき込む。と、そこにあったのは、一枚の看板だった。

「ホームの名前、やっと決めたんだろう? だから、必要になると思つてね」

「これは……うん、ありがとう。この上ない贈り物だよ。さっそくつ

けようか」

アルテミスは、看板を大事そうに抱えた。

皆で外に出て、玄関口に集まる。

この家は、というかここらの家は、元からホームとして利用されるために建てられたものばかりだ。そのため、ドアの上には元から看板をかけられるとつかかりがある。改めて釘を打ち付ける必要はない。

一番背の高いトッドが看板を受け取り、そこにひっかけた。木造で真新しい、ワックスも塗り立てだと分かる看板にはこう書いてあった。

【狩人の隠れ家】それがホームの名だ。

「うんうん、ずいぶんホームらしくなったじゃないか」

「やっぱりホームの名前あるなしじゃ違いますね」

「うん……似合ってる」

「いつか僕たちのホームにもほしいですね」

口々に感想を言う。看板が輝いて見えるのは、それが新しいからだけではあるまい。

皆がそろってホームに戻っていく中、トッドだけはその場でたたずんで、新しくかけられた看板を見続けていた。

実のところ、もうアルテミス・ファミリアは研究系ファミリアの看板を下ろしてもいい。そうするだけの理由は失っていた。アルテミスが助かった時点で。もう探索系でも生産系でも、どんなファミリアに変わってもいい。商業系は、やはりちよつと違うが。

今まで上げた名声もあつて、募集すれば団員は山のように来るだろう。あるいは、完全な魔導力^{エビセス}ほしさにやってくる団員もいるかもしれない。一時的な改宗を望むという線もあり得る。

それでも、まあ。あえてそうする必要もない。古びた家に新しくつけられた看板を見て、トッドはなんとなしにそう思った。アルテミス・ファミリアはこれでいいのだ。そんな風に思った。なにより、長年住み慣れた家だ。団員が増えたからと言って、わざわざホームを変えるのも違う気がした。

(まあ、いいか。そんな事、あとでいくらでも悩めば)

風に揺られながら、トッドはそんな風に独りごちた。
この日常はもう、終わらないのだから。

ガチャ

オラリオは広い。これはまあ、今更あれこれと注釈するほどの事でもないのだが。とにかく、バベルを中心に何本ものメインストリートが通っており、それらをつなげるように蜘蛛の巣状に道が作られている。さらにそこから枝分かれして、誰も数を把握できていないほどの路地裏ができており、ひたすらに広大な敷地を市壁が囲んでいる。発展はいつそ異様とも言えるほどであり、都市というには収まらない規模の市壁で囲まれているにも関わらず、迷宮じみた建設をしなければならぬダイダロス通りなんてもうのまで生まれる事になったのだが。何が言いたいかと言うと、区画ごとに——場合によつては区画内であつても、その性格が全くもって違うという事だ。

性格の違いは、そのまま多様性を意味する。そして——これは意外な事だが——その多様性は、他の色の浸食を許さない。

つまり何が言いたいかというと、オラリオ全体の祭りというのは少なくとも、区画や一地区ごとでの祭りはそこそが行われているという事だ。毎日とまではさすがに言えないが、探せば月に何度かは、どこかしらでお祭り騒ぎがある。そういった意味でも、神を退屈させない楽しい土地ではあつた。

だから……

「当てるぞ、絶対に当てるぞおおお！」

「なけなしの三百万ヴアリス、これが我がファミリアの全財産だ……」

「命、お前に我らの命運全てを賭ける。やってくれるな……！」

「無論ですタケミカツ子様！」

「俺の右腕よ、全ての運を使い果たしてもいい……今日この時だけは豪運を我らに与えてくれ！」

「お願いしますお願いしますお願いします！　うちのファミリアが一つレベルを上げるチャンスなんです！」

「栄光を手に行けるかもしれない……しかしヴアリスを全て失うだけかもしれない……こええよ、こええよ……」

その会場、第七区からほど近い場所にある、大きな会館。その場に

所狭しと人が並び、希望と恐怖に満ちあふれている。

その様子を、ステージから見下ろすのは、数名の人間。トッドとアルテミス、そしてギルドからの派遣員、エイナ・チュールだった。

「思いのほか大事になりましたねえ」

「あは……あはは……なんでこんな事に」

暢気に言うトッドとは対照的に、アルテミスは壊れた笑みを浮かべていた。

エイナも物言いたげではあったが、オンになったマイクを持ったままでは何も言えそうにない。ただ、場違い感に胃を痛めながら、それでも役割を果たさんとしているのは分かる。複数の意味で損な役回りだ。

「あの小人族パルウムの口車にのりさえしなければ……」

「今更言っても仕方ない事は言うの辞めましょうよ」

トッドとて今の状況に思うところがないわけではない。が、すでに彼は諦めている様子だった。

彼を恨めしげに見る。こんな時ばかりは、トッドの凶太さと諦めの良さが恨めしい。

なぜこんなことになったのか。再度胸中でうめく。

事の始まりは、およそ一週間ほど前の事だった。

「金がない」

「どうしたんだい？ 藪から棒に」

昼食も終わって暫く。今はちようど、暇つぶしの種に始めた、編み物などをしている時だった。相変わらず研究室にこもっていたトッドが出てきたかと思うと、はじめにつぶやいたのがそんな言葉だった。

「いや、本当に金がないんです。ギルドから大型転移装置の買い取り依頼が来てるのは知ってると思いますが、それを作るための素材が買えません。今は宝剣シザウロスの作成依頼もないですし、このままだと依頼が滞ります」

「それってまずいのかい？」

「割と。いや、うーん、そこそこくらい?」

トッドが首をかしげながら言う。

とりあえずアルテミスは、動かしていた手を止めて、編みかけのマフラ―をテーブルに置いた。

彼のこの手の弱音は初めて聞いた。本当なら財務管理はアルテミスがすべき事だったが、なにしろ彼の研究は数字にし辛い。というか、彼の頭の中で数字が飛び交っているの、最終的な額面しか入ってこないというのが正解だが。なので、帳簿だけはトッドがつけていた。

やはり非難を避けるために、金をばらまきすぎたか、とも思う。が、それは仕方のないことでもあった。なにしろモンスター狂乱の被害が大きかったため、その補填はしなくてはならない。尾を引かないため、相手が過大だと思うほどの支払いは無駄とは言えない。

予想外と言えばギルドの依頼であったし、その納期でもある。いや、それを言ったら問題は、依頼に必要な資材の量か。

「ダンジョンアタックで急場を凌ぐとか」

「それも考えたんですけど、納期を考えると結構ギリギリになりそうなんですよね。そもそも今更ダンジョンに入る理由もありませんし。あまり冴えたやり方とは言いがたいです」

「それは、困った、のかな?」

「まあ、困りました?」

二人して暢気に首をかしげる。ここで慌てもしないのは、最終的にどうとでもなると分かっているからだ。ギルドの納期に遅れたとしても、借りが一つ増える程度の話でしかないし。そもそも前金もないギルドが悪いとも言える。

「それで考えたのが、倉庫なんですが」

トッドがちよいちよい、と手を招いた。言われるがままについて行く、研究室のさらに奥、倉庫にたどり着く。

ここは完全にアルテミスの興味外で、中がどうなっているかも知らない。さすがに覗いた事もない、とまでは言わないが。

トッドが扉を開ける。と、アルテミスは思わず口を開いた。

「うっわ」

中には所狭しと武器が並んでいた。ついたてを作って、そこにまで武器を並べている。無理矢理増設などしたものだから、体を横に向けないと間を通り抜けられそうになかった。

「いつの間にかこんなことに？ 前にちらつと見たときは、多少武器が多い程度だったと思うんだけど」

「魔導力エビセスが完成してからですね。あれの量産試験品やら、宝剣シザウロスの試作品や概念実証品やらを保存してたらこうなりました。ちなみに奥の倉庫はもつと酷いです」

「で、これがどうしたんだい？」

「売れば多少はたしになるかなと。一応許可をもらおうかと思って。最悪インゴットに加工しなせば、鍛冶師が買ってくれるでしょうし」

「トッドがいいならそれでいいんじゃないかな」

大分雑に、そういった品の処分が決定された。

その時、ドアがノックされた音が聞こえた。遠くにいたので、大分聞こえづらかったが。

トッドと一緒に、家まで戻る。扉を開ける。外にいたのはベルと、彼の背に隠れるようにしている見知らぬ小人族バルウムだった。

(いや……見たことは……ある?)

定かではなかったが。確か、エルソスの遺跡に、こんな子がいた気もする。

「やあいらっしやい。お茶しに来たのかい？」

まだティータイムには少々早い時間だったが。まあ、多少早まったところで困るわけでもない。

しかし、ベルはかぶりを振った。

「いえ、今日はそういう訳ではないんです。ほら、リリ」

「あの、こうして名乗るのは初めてですが、リリルカ・アーデと申しませ……」

おずおずと、なぜだかおっかなびつくり自己紹介をしてくる。

「実はリリがトッドさんに謝りたいことがあって……」

「俺に？」

今までもてなしの準備をしようと、半ば体を引きかけていたトツド。急に名指しにされて、きよとんとする。

小人族の少女はびくびくした様子のまま、それでも勇気を振り絞ったという風に、一歩前に出た。つまりは、ベルの影から進み出るように。

「いままでちゃんと覚えませんでした、申し訳ありませんでした！」

リリがベル様の宝剣シザウロスを盗んでしまつて……」

「はあ？」

と、これは怒りの声ではない。本気で何を言われているのか分かっていない声音だ。それでも、その子からは威圧的に聞こえたようで、びくりと身を震わせていた。

彼は少しばかり考える。顎に手を当てて、明後日の方を見ながら。やがて手を引くと、ああとつぶやいた。

「そういうやそんなこともあったな。それで、なんで俺に謝罪しに来るんだ？」

「いえ、ですからあなた様の作品を盗んでしまつて」

「それはギルド案件だし、だいたい誰が怒るべきかって言つたら間違はなくベル君だろう。俺も思うところがないわけじゃないが、だからつて謝りに来られても困るぞ。かなり本気で」

「リリの事……怒つておられないのですか？」

「そもそもお前誰だよつて認識だが」

「ね？ トツドさんは怒つてないつて言つたじゃないか」

(怒る怒らないも、そもそも忘れてるんだけどなあ)

それは指摘しないでおいた。

「ところで、今わたわたしてた様子でしたが、何か急いでたんですか？」

「急ぐつて言うか……」

トツドはかいつまんで話を説明した。資金が足りない事。倉庫に武器があふれていること。これら売って、当座の財源にしようということ。

説明し終えたあたりで、なぜだかりリルカの目がぎらりと鋭く光った。どこか自信ありげににやりと笑ってもいる。

「そういう事でしたら、リリにいい案があります！　一応聞いておきたいのですが、倉庫にある武器は失敗作という訳ではないのですよね？」

「魔導力エビセスはどれも完品だ。宝剣シザウロスの試作品は、完成品ほどの力はない。というか、完成品のためのすりあわせのため、出力やらを制限して機能の実証をするために作ったもんだ。ものとしちや魔導力エビセスよりは上だよ。ただ、レベルを二つ三つ上げてくれるほどの力はないってだけで。俺はサンプルにシザウロス0.5って呼んでる。ただ、曲がりなりに特殊機能がついているから、ギルドに所持者———というか所持ファミリアの申請をする必要があつて面倒くさい」

「十分です！　それならとっておきの方法がありますよ！　資金難だつて一発で解決です！」

ふん、とりリルカは胸を張った。身長が身長なので、子供がささやかに威張っているようにしか見えないが。

「ギルドを巻き込んで抽選会をすればいいのです！」

その意味は、アルテミスにもトッドにもよく分からなかったが。

なにしろ、金にはなりそうなので飛びついた。飛びついてしまった。

『えー、静粛に！　静粛にお願いします！』

エイナが声を上げる。が、さほどの成果は得られなかったようだ。それでも根気強く呼びかけて、会場が静かになるのを待つ。

やつとささやき声が聞こえる程度になったあたりで、エイナは大きく息を吸った。

『これからアルテミス・ファミリア主催の抽選会を始めます。先に説明したとおり、参加には主神と眷族が最低一名が必要です。これは特定ファミリアが何度も引く事を防ぐためです。参加料は一回百万ヴァリス、一ファミリアにつき三回まで引く事ができます』

ここは事前説明の通りであるし、エイナも十分知っている事だ。そ

れでも、手元のカンペを見ながら、慎重に言葉を重ねていった。

『景品は三等、参加賞のティッシュ、二等、トッド製魔導力武器^{エビセス}、一等が宝剣^{シザウロス}の試作品になります。なお、二等の当選率は2パーセント、一等の当選率は0・5パーセントとなっております。その点を十分承知でご参加ください』

会場から、一斉に歓声と悲鳴が上がった。運に自信がある者、ない者、人それぞれだが。さすがに百万ヴァリスで準宝剣^{シザウロス}級の武器が手に入る機会となると、参加せずにはいられないらしい。そうでなくとも、魔導力武器^{エビセス}が百万ヴァリスは破格である。

悲惨なのは、運がない者だろう。出ないと悲観していても、参加せずにはいられない。彼らにとっては、ほぼ資金三百万ヴァリスを溶かすに等しい行為だ。自分もどちらかと言えそう考えるタイプのアルテミスには、痛いほど気持ちがあった。

『一等賞の準宝剣^{シザウロス}には、機能の説明書が同封されています。扱いが分からないという事はありません。なお、抽選にはナンバリングがしてあり、その通りの景品が得られます。自分で選べるわけではないので、注意してください』

ここまで言って、エイナは呼吸を改めた。再び会場が落ち着くのを待ったという意味もあるだろうが、それ以上に彼女が緊張しているようにも見えた。

『なお、準宝剣^{シザウロス}当選者はギルドに所持登録が必須です。別室にて登録を行ってください。当選者同士の武器交換や、購入交渉などはここで行えません。ご了承ください』

わっと、また歓声が上がった。これは一部、大規模ファミリアのものだ。彼らは当選者から、金にものを言わせて購入しようと考えている。

抽選会に来たファミリアが多いのもこれが理由だった。零細ファミリアやレベルの低い冒険者しか抱えていないファミリアが準宝剣^{シザウロス}を手に入れても持て余す。そのため、金品その他のやりとりで手に入れようと考えていた。もつとも、本当に大手のロキ・ファミリアなどは完成品を持っているので、この場にはいないが。

『それでは、抽選会を開始します！』

エイナは半ばやけくそのように叫んだ。そして、舞台の中心にある深紅の布を思い切り手で取り払う。布の内側から、回転式抽選器が現れた。

わつと人が詰め寄ろうとする。それを、ギルドの職員たちが懸命に押さえ込もうとしていた。なんとか列を作ろうと四苦八苦ししているが、その試みはうまくいっているとは言いがたい。

我先にと抽選器を回そうとするファミリアもあれば、あらかた外れが引かれた後に回そうとするファミリアもいる。いくらかのファミリアは、とつとつその場を離れて当選者用の別室へ移動したりすらしていた。

とあるファミリアが前にいる人間をひつかいて押しつけようとするれば、さらに他のファミリアが後ろから迫る相手を殴り倒す。もう秩序も何もなかった。とにかく当たりを求めて、好き勝手暴れ回っている。

「まるで人の醜悪さを煮染めているような光景だよ……」

「偶然ですね、俺もそう思いました」

アルテミス・ファミリア主催にして、当選者に当たりの品を渡す役割として、壇上に立っている二人。目の前の混沌を、どこか遠い世界のように感じながら眺めていた。

ギルド職員は大変だが、しかし助ける気はアルテミスにもトッドにもなかった。みかじめ料として、抽選料の一割を上納する事で話をつけている。そこら辺かなりドライな二人だった。かわいそうだが巻き込まれたいくなかったとも言える。

混沌としたまま、一番手が壇上に向かってくる。どこのファミリアだか知らないが、素行は悪かった。へっへっへっ、とチンピラみたいな笑いを、主神ともどもしている。顔にビンタの跡があるのは、背後から一撃食らったからか。どこか着崩れてもいた。

「はっ！ 悪いが俺のファミリアが一等賞一番乗りだぜ！」

『ええと……はい、じゃあ抽選お願いします』

三百万ヴァリスを払って、三回抽選器を回して。

予想通りというかなんというか、まあ全部外れだった。

「なんでだあああああああ！」

「これは何かの間違いだ！ やり直しを要求する！」

『はい次の方どうぞー』

騒ぐ二人をよそに、エイナは進行を続けた。

彼女も状況になれたか、さもなくば落ち着いたのかな、と思って横目で見ると、が、どうやら違うようだ。エイナの目は据わっている。収まらない混沌に、半ばキレかけているのかもしれない。なんにしろ、下手に触れない方が良さそうだ。

抽選会は続く。内容は悲喜こもごも、と一言で言っているのだから。なんにしろ涙をのむ者の方が圧倒的に多いのだから。

人も半分ほど捌けてきた頃だろう。このあたりになると、さすがに初期の頃の狂乱というものもなかった。

次に会場に上がってきた者を見て、アルテミスは目をむいた。

「ヘステイア。君も参加していたのかい？」

「やあアルテミス。ボクたちもあやかろうと思つて、なけなしの三百万ヴアリスで参加したのさ！」

ふふんと鼻を鳴らすヘステイアに、しかしアルテミスは不安を感じた。どう考えたって分の悪い賭けである。しかし、彼女は眷族二人を率いて、抽選器の正面に立った。

「さあベル君！ 君の力を見せてやるんだ！」

「はい神様！」

ベルはぐつと（入れる必要もない）気合を入れて、抽選器を三度回した。

そして。

エイナは驚嘆に、一瞬言葉が詰まった様子だった。しかしすぐに平静を取り戻し、声を上げる。

『一等賞、出ました！ それも二つ！』

「な・に・い・い・い・い・い！」

会場全体から声が上がった。悲鳴とは裏腹に、壇上にいる三人は抱き合いながら喜んでいる。

「やってくれたぜベル君！ 一等賞、それも二つだよ！」

「僕、やりましたよ神様！」

「さすがベル様です！ リリは信じてました！」

喜ぶ三人に、それに数倍する絶叫が上がる。

「ふざけんなロリ巨乳がああああ！」

「テメエその無駄にでかい乳房引きちぎってやるからこっち来いや！」

「恨めしい恨めしい恨めしい……」

抱き合う中、リリルカだけがすすつと身を引いて、人の悪い笑みを浮かべた。

「リリの思った通りです。以前ベル様には幸運に関する発展アビリティがある和小耳に挟みました。やはりこういう形であれば、ベル様の独壇場ですねえ」

放っておけば笑い出しそうな小人族に、さすがのトッドも引いている様子だった。というか、今でもすでに含み笑いをしている。

「だから抽選会なんて提案したんかい……」

「あの小人族、えげつないなあ……」

とりあえずアルテミスは、信じてはいけない人間リストに、リリルカという名前を太字で記すことにした。

それから幾ばくかして、抽選会は終わった。景品がなくなつて引けない者もいたが、そもそもそういった連中はただの冷やかしかつたのだろう。喧噪を楽しむだけ楽しんで、帰って行った。

会場には疲れ切ったギルド職員と、アルテミス・ファミリアだけがいる。別室ではまだ交渉やらが続いているようで、やや語調の強い言葉が届きもするが。

「とりあえず、なんですが」

「なんだい？」

ぽつりとつぶやいたトッドに、アルテミスは疲れた声で返す。

「これ、よくないことなので二度とするのはやめましょう」

「そうだね」

その点だけは、拒否する理由も全くなさく。

アルテミスは彼と同じく、こんなことは二度としないと、心に強く
刻み込んだ。

大戦争遊戯・上

地上のどこかで世界を揺るがす騒ぎが起ろうと、街のどこかで悲喜こもごもの抽選会が行われようと、オラリオは変わらないう。昨日のこととは昨日のこととして、今日を面白おかしく生きていた。この切り替えの早さが、神が地上を楽しむ秘訣なのかもしれない。

昨日がよくとも悪くともそれはそれ、今日と明日のことだ。過ぎた事は思い悩まない。神とはなんとも現金なものだ。

(ま、ボクがそれを言えた義理じゃないけどね)

ふふん、と鼻を鳴らしながら、ヘステイアは楽しげに会場を散策していた。

その日も、神の宴が開催されていた。此度はアポロン・ファミリア主催の、かなり大きな宴会だ。規模に比例して、参加する神の数も多い。実際、オラリオにいるほとんど全ての神が参加しているのではないかとすら思える数だった。

(この前三百万ヴァリスも散財しちやっただからねえ。たくさんご飯持って帰らないと！)

先日行われた、アルテミス・ファミリア主催の抽選会。それにヘステイア・ファミリアも参加して、大戦果を得ていた。まあ、その分とどうか何というか、とにかくしつぺ返しは家計にダイレクトで入ってきたのだが。

ヘステイア・ファミリアは小規模ファミリアだ。何せホームすら廃墟である。当たり前前に、三百万ヴァリスは大金だった。というか、ほぼ全財産だ。不要な品を売ってまで用意した、文字通りの全力である。

まあ、その甲斐はあったので文句もない。なにせシザウロス0.5(トッド命名)を二本も手に入れたのだ。

最初は(主に家計を握っている)リルルカが一本は売ろうと提案したが。ヘステイア・ファミリアはちょうどその手前で、団員が幾人か増えていた。そのため、シザウロス0.5が彼らに使ってもらうことになった。リルルカは家計簿を眺めながらちよつと涙していた。

というわけで、ヘステイア・ファミリアは現在真正銘の無一文。現在は団員も頑張つてダンジョンに潜り日銭を稼いでいる頃だろう。かわいい子供たちが頑張っている。それなのに自分が頑張らないわけにはいかない。というわけで、ヘステイアは宴に潜り込み、恥を忍んで食料を選んでタッパーに詰め込む作業をしているのだが。(……なんだかおかしいな)

周囲を警戒し(一応恥じてはいるのだ)、見回していると。なんだかどの神も楽しそう。いや、宴なのだから楽しそうである事に何も問題もないのだが。何というか、そう、色が違うとでも言えばいいのか。皆が皆、ニヤニヤしている。

(というか、ボクの方を見ているよう……)

なんだか、視線が絡みついてきている気がする。これは、食料をくすねているから目が気になる、というだけではない気がした。

むー、とうなりながら、タッパーに詰める合間に、口の中にも食べ物詰め込む。どうにも気になって仕方がない。

「やあ、ヘステイア」

と、声をかけてきたのはアルテミスだった。

今日の彼女は、普段着の戦闘衣ではなかった。おそろくトツドが用意したのだろう、青が基調のドレスを着ている。おそらく髪色に合わせたのだろうが、その姿はとてつもなく似合っていた。

「や、アルテミス」

「うん。……というか、何をしているんだい？」

「子供たちの為に食糧確保さ！」

「そこまで……」

なぜだか、恐ろしく衰れんだ目で見られたが。そんなものは気にしない。気にしないのがヘステイア・ファミリアのルールだ。

「お金がないなら抽選会になんて参加しなければよかったのに……」

「成果があつたからいいんだい」

「まあ、ヘステイア・ファミリアの問題ではあるけども……」

彼女は眉を下げて、困ったようにしている。

神友の彼女であるが、今日ばかりはそこに構っていられない。すぐ

さま次の料理に移ろうとして、ふと彼女は振り返った。

「ところでアルテミス。なんだかボクがかなり注目を浴びてる気がするんだけど……」

「本日は我がアポロン・ファミリアの宴によくぞ参加してくれた！」

ヘステイアの言葉は、全てを告げる事はできなかった。その前に、壇上に上がったアポロンが声を上げたのだ。

壇上では、むやみやたらに華美な服を着たアポロンが、ポーズまで決めている。見方を変えればアホともとれる様子をぼんやりと見ていると、急に彼の指が、びしつとヘステイアを指した。

「唐突だが我がアポロン・ファミリアはヘステイア・ファミリアに対して戦争遊戯を申し込む！」

「……………」

ぼんやりと彼を眺めながらも、タツパーに食べ物を詰め込む手だけは止めずにいると。なんだか訳の分からない事を言われた。

「……はあ？ 急に何を言い出すんだい、アポロン。言っておくけどボクはそんなもの受けないぜ。今うちは大変なんだか……」

「な、なんだってー」

ヘステイアの言葉はまたも遮られた。

言ったのは、隣に立っているアルテミスだった。彼女は誰からもわかりやすく棒読みで、言葉を続けた。

「それでは私のアルテミス・ファミリアはヘステイア・ファミリアに味方するぞー」

「ちよつ、アルテミス!? いきなり何を言い出すのさ!」

「ならば俺のファミリアはアポロン・ファミリアに味方する!」
「!?」

また別の神が叫んだ言葉に、ヘステイアはぎよつとした。

彼女らの言葉に同調するようにして、会場の神という神らがヘステイアに、アポロンに味方すると宣言を始めた。当事者であるヘステイアを置き去りにして。

極めつけは、

「ドチビは気に入らんけど、アルテミスには借りがあるからな! う

ちのロキ・ファミリアはヘステイア陣営に入るで！」

「じゃあフレイヤ・ファミリアはアポロン陣営かしら？ そうじゃないと面白くないものね」

オラリオ二大陣営とも言えるロキとフレイヤが、そんなことを言い始めた。

「?!?!」

「?!?!」

ヘステイアは混乱の局地にあった。なぜこんなことになっているのか。というか、これは一体どういう状況下なのか。何一つとして分からない。大口を開けて、タツパーをテーブルの上に落とした。

彼女が混乱した状態でも、話は進んでいく。というか最初から無視して進められていく。会場、日取り、対戦方法。あらゆるものが、ヘステイアの耳に入ってはそのまま抜けていった。

あらかた決まったところで、アポロンは壇上に上がったままふっと笑って。そして、一枚の看板を取り出した。『ドツキリ大成功』

「はっ、はあああああああ〜?!」

ヘステイアが絶叫を上げる。と、会場がどつと笑いに包まれた。

「なんだこれ、なんだこれなんだこれ！ つかアルテミス、君までグルなのかい!?!」

「ごめんね、ヘステイア」

アルテミスはやや眉を下げて、困ったように言った。が、許されない。今回ばかりは、そんなかわいい仕草で許される事ではない。

「酷いや！ 神友だと思つてたのにひっかけるなんて！ でもよかつたよ……。戦争遊戯なんてしないんだね」

「いや、それはするが」

「!?!」

きつぱりと言うアポロンに、再びヘステイアはぎよつとして。

「本当は、ベル・クラネルがほしかったのだがな。彼をかけて戦争遊戯をしようと思つたら……」

「さすがにそれは許容できないよ」

「と、姉上に叱られてしまつてな。仕方なく戦争遊戯だけすることに

した」

「そこにボクの意味がないだろう!？」

「はっはっはっ。大勢さえ決まってしまうえばそんなものはいらん」

再度『ドツキリ大成功』の看板が掲げられると、神たちは一斉にわつと騒ぎ出して。

「ああああああ、もおおおおおお!!」

がしがしと頭をかきむしって地団駄を踏むヘステイアだが、当然のごとく彼女に決定権などないのだった。

なお、その姿は、周囲の神々には大受けだった。

乾いた風が頬を撫でる。

荒野には、砂塵が吹き荒れていた。それでも軽く撫でる程度しか感じないのは、人が多いからだろう。先頭に立っている自分ですら、その程度しか感じないのだ。人の波にのまれている者たちからしたら、それこそ風が吹いている事すら感じないだろう。

大戦争遊戯、アポロン陣営総大将、オツタル。それが今の彼の肩書きだった。

大層なものだとは思う。が、自分以外に総大将を受けられる器がある人間がいないのも、また事実だった。それを認めて、彼は大斧劍・イフライト紅皇主を地面に刺し、その柄に手をつけて立っている。

普通ならば不快に思ってもおかしくない風に、心地よさを感じるのは。やはり自分は根っからの武人なのだろう、そうオツタルは思った。

そして、これから起こる大戦に、心が躍るのも。

『俺が！・ガネーシャである!』

拡声器で拡大された、神ガネーシャの声が上がった。

数百人だか数千人大か、参加者を単純に数えてもそれだけいる。その上、二つの陣営に分かれて、互いにかかなりの距離を取っていた(初手大規模魔法での殲滅を防ぐためにこうなった)。それでも声が届くのは、ひとえにトッドがこの日のために作り上げた大型拡声器のおかげである。あの男は本当に何でも作るな、とオツタルは思った。

『今日は良き戦日和だ！ 互いに思い残すところなく、全力で戦うように！ なお、審判はこのガネーシャ・ファミリアが務めさせていただく！』

一人ではなく、ファミリアが、それも大手がまるごと審判を務めるといふ事実。これが、今回の戦争遊戯の規模を示していた。

他にもディアンケヒト・ファミリアが救護班を務めていたりなどする。といっても、出番はそう多くあるまい。それぞれの陣営に、医療系ファミリアも組み込まれている。何かあれば、まず自陣営の救護班を頼りにする手はずだ。

『それでは、戦争遊戯ウォーゲームを始める！』

そこで、絶叫はいったん止まった。

さしものガネーシャも、これだけの大戦争を前にして、興奮を隠しきれないのだろう。少ない言葉の端からでも、それを察することができた。

『勝負、開始イ！』

言葉と同時に、オツタルは大斧剣を引き抜いた。そして、天に向かって掲げる。

「細かい事などは言わん！」

可能な限り声を張り上げて、言う。人数を考えれば、全員に届いているはずはないが、それでもいい。近くで、誰かがつばを飲んだのを感じた。

「ただ敵を倒し、おのおの勝利を主神に捧げるのだ！ 総員、突撃！」

わあっ！ その場の総員から、咆吼が上がった。そして、目の前の敵を叩きのめさんと進軍を開始する。

敵側の進軍も、ほとんど同時だった。両者の進行速度を計算して、激突するであろう時刻を頭の中で計算する。

が、その計算は、かなり早い段階で狂った。集団の中から一人が抜け出して、こちらに突撃してきたのだ。動きが特別速いわけではない。魔導力エビセスを装備していると仮定しても、レベルにして2か、せいぜいが3といった所だろう。白い髪を風がなびかせるままに揺らしながら。ナイフを持った小さな人影。

彼は戦場の中央あたりに到達すると、その場に止まって大声を上げた。

「僕はヘスティア・ファミリア団長ベル・クラネル！ アポロン陣営総大将、オツタルさんに一对一の決闘を申し込めます！」

驚いたのは、アポロン陣営だけではなかった。ヘスティア陣営も、所々ざわめいているのが、遠目にも分かる。さすがに中枢までは、混乱している様子はなかったが。

まだ大分離れているが、その少年——ベル・クラネルは、それでも分かるほど興奮していた。顔が紅潮して、呼吸も多い。冒険者がその程度走ったくらいで肩で息をする訳がないので、彼が落ち着きないのは興奮故だと一目で分かった。

進軍速度が落ちる。と同時に、オツタルはただ一人だけ前に出た。まだ、戦闘が発生するほど距離はつめていない。それでも、声を張り上げれば届く程度に近づく。

「自分でも分かっているだろう。お前程度では相手にならない。それを分かった上で、俺に決闘を申し込むか」

「……！ はい！ 僕は、どうせ倒されるなら、最強がいい！」

なるほど、とオツタルは思った。彼が神フレイヤのお気に入りである事は、近づいてくる途中で気がついていた。

しかし、と思う。いい啖呵に覚悟だ。悪くない。本当に、心地がいくらいまっすぐな意思だ。フレイヤが気に入るのも領けた。

「いいだろう。その決闘、受けて立つ」

わっ、と声が上がった。これは戦場だけではない。この光景を遠くから見ている神々も、同じような様子だろう。

少年は一瞬顔に嘉悦を浮かべたが、すぐ表情を引き締めてナイフを構えた。その姿は、控えめに言っても様になっていない。元から何か心得があったわけではなく、本当に冒険者になってから武を修めた、技能が浅い者のそれだ。

そのちっぽけなものを頼りに、オツタルの前に立つ。それが並ならぬ事だというのは、自分の経験からも分かった。かつて、弱かった自分もそうしてきた。オツタルも対応するように、大斧剣を振り上げ

る。

いつの間にか、両軍の進行は止まっていた。ただ、二人を見守るように、弧を描いて列をなしている。

しばしの静寂。

ベルが緊張しているのが分かる。彼は小さく体を揺らしながら、それでも攻め込んで来なかった。攻め込めないのだろう。いくら打ちかかろうとも、オツタルに叩きのめされるヴェイジョンが見えるはずだ。だから、迂闊に攻め込めない。

暫くそのままだったが。やがて彼は大きく息を吸うと、自分を鼓舞するように叫んだ。

「行きますー！」

走る。レベルを考えれば早い。が、オツタルに対抗しようと考えた場合、それは遅すぎた。

彼のナイフが振るわれる。彼の得物を考えると、それは一步分も遠いはずだったが。しかし、その間に銀色の閃きが現れる。オツタルは驚きながらも、それらを迎撃した。割れる音こそしなかったが、ガラスが砕け散るような光景で、刃は消え失せた。

そういえば、と思い出す。ベル・クラネルは、第一級冒険者以外では数少ない、完品の宝剣シザウロスを持つ者だったか。トツドの作った武器を持つのならば、何を起こせても驚きはしない。

続く二撃目。ベルの刃が翻って、本命の一撃を繰り出す。

オツタルは刃の筋に合わせるようにして、大斧剣を振るった。今度、刃は増えなかった。代わりに刀身が銀を纏っている。

一撃は、予想していたより重かった。が、彼には関係ない。力の差を考えれば、増えた威力など微々たるものだ。大斧剣は渾身の一撃をあっけなく粉碎し、ベルを吹き飛ばした。

ベルの矮躯が転がる。地面を何度かバウンドして、やがて薄く煙を撒きながら止まった。

気絶してもいいダメージだったはずだが。ベルは最後の力で、顔だけを上げた。まだ気絶すまいと堪える少年に、オツタルは声を届けた。

「いい一撃だった。そのまま鍛えて行くがいい」

「は……」

言葉は、最後まで続かなかった。音を立てて、ベルの頭が落ちる。これで、戦争が再開されると思ったが。その前に、またもやオツタルの前に人が現れた。その男の動きに合わせるようにして、救護班がベルを回収していく。

現れたのは、巨躯の男だった。それこそオツタルと同等の体格を持つている。その動きは力強い。まず間違いなく、第一級冒険者と見て間違いはない。

(確か……)

思い出す。

ここ最近、オラリオより離れた地から、大勢の冒険者がやってきた。その中でも有力な者は、オツタルの記憶に残っていた。

浅黒い肌をした大男。牛人のアステリオスと言ったか。二つ名も同じで、雷アステリオス光だった。

「団長がやられた。敵は取る」

「お前には無理だ」

前に出てきた男が、告げながら大剣を持ち上げる。その構えは、奇しくもオツタルと同じものだった。

合図もなく。両者が同時に飛び込んだ。

接触する剣と剣。大音量で、甲高い音が鳴り響いた。衝撃が戦場を揺らす。

拮抗は一瞬だけだった。火花が散りきる頃には、アステリオスは片膝をついて、オツタルの大斧剣に耐えていた。状況こそつばぜり合いだが、その力の差は歴然だった。スタイルが同じだけに、はつきりする。この状況こそが、彼我の差だ。

「ぬうんー」

アステリオスが絶叫すると、なんとその大剣から炎が舞った。炎は周囲に巻き散らかし、熱圏を生み出し、それを推力にしてなんとかオツタルの臂力に対抗しようとする。

「なるほど、トッドが試作品のシザウロス0.5とやらを売りさばい

ているとは聞いたが。俺の紅皇主イフリートの試作品はお前に回ったか」

だがそれも、憂慮するほどの事ではない。

二回り足りないレベル。二回り足りない技量。二回り足りない経験。その中に、二回り足りない武器が追加されたただけだ。スタイルが同じ以上、その差は決定的であり、絶望的だ。

熱気が爆発する予兆を感じ、オツタルは瞬時に身を引いた。爆熱がオツタルがいた場所を、一瞬遅れて包み覆う。

「おおおオオオ！」

炎熱の中から、雄叫びを上げてアステリオスが飛び出してきた。大剣には炎を纏っているが、オツタルの大斧剣、紅皇主イフリートに比べれば遙かに弱々しい。

この後の事など考えない、捨て身の一撃だ。裂帛から、彼は攻撃をそう判断した。

アステリオスはオツタルより弱くはあるが、そう加減して対処できる相手でもない。ならば、と、オツタルも紅皇主イフリートを起動した。熱量は絞り、大斧剣と推力にのみその力を纏わせて。

今度の接触は、先ほどの比ではなかった。高熱と高熱がぶつかり合い、大規模な爆発が起きる。熱気と衝撃を肌身を感じながらも、オツタルは大斧剣を振り抜いた。剣に、一瞬何かが引つかかるような感触を感じる。しかし、それだけだ。後は木の葉でも舞い散らかすような勢いで、巨軀は吹き飛んでいった。

「……見事だった」

ベルのように吹き飛ばされ、大の字で転がるアステリオス。大剣はさらに遠くへ吹き飛ばされ、大地につき立った。

結果だけ見れば、たった二撃で敗北。それも、かすり傷一つ負わせられず。だがそれでも、オツタルは賞賛の言葉を投げた。彼がすでに気絶しており、声は届いていないのは分かっていたが。それでも言わずにはいられなかった。

オツタルはそれ以上彼を見もせず、大斧剣を振るった。周囲を満たしていた、空気すら焼きそうな熱気は、紅皇主イフリートの力で空高くに散らされる。あつという間に空気は冷えて、勝負の熱があつた場所に心地よ

いくらいの冷気が流れ込む。

次は誰だ。そう言わんばかりの視線を、ヘステイア陣営に投げかける。もつとも、ここで出てくる者など一人しかいないだろうが。

ヘステイア陣営が、左右に割れた。中央を、一人の人影がゆつくりと歩む。

それは、小さな男だった。外見だけで言えば、幼さの残るベルよりなお頼りない。その小柄な影が自分の身長より高い槍を持つ姿は、何も知らない者から見たら滑稽にすら映っただろう。

だが。

それは間違いなく、オツタルと並びオラリオ最強と称される男だった。

「やあ、待たせたね」

「よく言う。一番槍を任せておいて」

「彼らたつての願いだったからね。無碍にする気にもなれなかったのさ」

その男、フインは軽い調子でそう言った。

闇派閥残党との幾度もの戦闘と、人造迷宮クノツソス完全攻略の成果を持って、Lv. 7へとランクアップしたその男。ロキ・ファミアア団長にして、仲間の力を自分一人に集める事ができる特殊な宝剣ンザウロスの持ち主。

すでに槍は起動しているのだろう。彼から、紅皇主イフリートを最大稼働した自分より大きな力を感じる。

「この状況は、お前の独壇場か」

「まさか全裏紋イルの槍ンを最大限に稼働できる状況があるとは思わなかったよ。この槍が最大のパフォーマンスを発揮するには、申し訳ないが、ロキ・ファミアアは少しばかり小さすぎる」

「そうか……そうかもな。俺が全力を振るい、それでもなお足りない唯一の男よ」

「賞賛してくれるのはありがたいね」

「しかし、よかったのか？ その力で俺と戦うより、お前の力を皆に分配した方が勝率も上がったろうに」

「その通りだけど、さすがに無粋な真似だろう？ それに、僕も欲しくなってしまうんだ。都市最強という肩書きを」

「ふ……なるほど。最強の名、軽くはないぞ。取れるものならば取ってみるがいい」

「言われるまでもない。今日ここで、僕が君に勝って、僕こそが最強となる」

にっつと笑って、その小男が構える。それに対抗するよう、オツタルも紅皇主イフリートを構えた。先の二人に備えたそれより、数段油断なく、力を込めて。

「行くぞ、都市最強！」

「来るがいい、集団戦最強！」

言葉と同時に。

二つの最強が激突した。

大戦争遊戯・下

敵の群れ。攻撃の津波。それらを、剣を手首で翻し、受け流す。

剣の背を刃が滑っていく感触を確かに感じながら、男は手近な敵へと刃を叩き付けた。敵は反応すらできず、胸に攻撃を受けてもんどり打った。

それを隙と見て、また別の敵が襲いかかってくるが。男は超反応を見せて、それに対応した。振り下ろされる槍を剣で受け止める。相手はぎよつとしていた。攻撃に対処される事は想定範囲内だったとしても、まさかそれで小揺るぎもしいとは思わなかったのだろう。

男は剣を振って槍を落とし、踏み込む。槍使いは慌てて槍を引こうとしたが、遅かった。その前に、男の拳が槍使いの顔面にめり込む。小気味よい衝撃が腕を伝い、槍使いは宙を舞う。

「へっ、弱えぜー」

並み居る敵をなぎ倒す彼を支配するのは、圧倒的な全能感だった。今なら誰と戦っても負ける気がしない。自分は強い。そう、この戦場を支配できるほどに、圧倒的な強者という立場にいる。

男の強さに、敵も怯んだのだろう。攻勢が弱まり、攻め入るのに躊躇している印象がある。これもまた、男の矜持を満たすのに一躍買っていた。へへっ、と鼻を鳴らす。

(全く、すげえぜこいつはよお)

ぺろり、と舌で上唇を撫でながら、心の中で喝采を上げた。親指が柄をそつと撫でる。

その剣は、見た目はなんてことのない普通の片手剣だった。通常の片手剣よりはやや長い。鏢も一般的な十字の構造で、柄には滑り止めのテーピングがしてある。銀色の刃は、刃こぼれ一つなく、またその輝きを損じる事もなかった。

魔導力製武器エビセス。それも、最上級の。それがこの武器の正体だった。

「おらおらー！ 俺を倒そうってやつはいねえのか!？」

声を張り上げながら、腕を持ち上げた。手に持つ剣を見せつけるようにして。

男がそれを手に入れたのは、本当に幸運からだった。

先日行われた抽選会。その会場に、男が所属しているファミリアも参加していた。三百万ヴァリス払って、三回の抽選権。倍率を考えると全くもって頼りないが、しかし男のファミリアはその幸運を引き当てた。そして手に入れたのが、トッド製の完全品魔導力片手剣エビセスだった。

それを誰が使うかで、多少もめはしたが。ファミリアで唯一のLv. 2である彼が使う流れになったのは、当然だった。強いやつが強い武器を扱う。当たり前前の事だ。途中、片手剣使用の同ファミリア所属者が文句を言ってきたが、それもはねのけた。強いやつが強い武器を使う。その何が悪い。弱いやつは弱い武器を使っていればいいのだ。

「へへっ、怯みやがって」

にんまりと笑いながら、男は剣の腹をそっと撫でる。大事な大事な相棒だ。これを損じる事はあってはならない。もつとも、完璧な神域金属武器は、不壊属性に準じるほどの強度があるらしい。その言葉を信じるならば、どれだけ粗雑に扱っても問題なくはあるのだろう。

しゃにむに突っ込んできた敵——どうせLv. 1の雑魚だろう——を軽くないなして、前者たちと同じようにぶっ飛ばしてやる。心地よい衝撃が、剣から伝わってきた。

「オラアツ！ 弱えぜ！」

男は哄笑しながら、敵に一步踏み込んだ。敵は同じだけ下がる、というはさすがに無理だったが。怯んで、半歩ほど引いてはいた。

(やっぱ武器が違くと持ち主の格も現れるってもんだ。今まで持っていた武器がカスに見えるぜ)

彼とて、今まで魔導力エビセス製武器を持っていなかったわけではない。だが、その性能差は明らかだった。

魔導力エビセスにはランクがある。これは明確に格付けされたものではなく、あくまで使用者らが勝手にそうつけているものだが。

まず三等級。これは最低限魔力撃ストライクが発動するという程度のもので

しかない。次いで二等級。精神力の循環が始まるのはこのクラスからだ。多少の身体能力向上を感じられる。そして、一等級。このクラスになると、ランクアップに相当する身体能力向上を感じられる。

が、男が手にしているのは、そのさらに上だった。特等級。創造者トッドと、他にオラリオでも数名しかいない者しか作れない、完全な品。身体能力だけではなく、反応速度やらまでランクアップに準じる影響を感じられる。文句なしのオラリオ最高武器。今まで持っていた三流品とは桁が違う。

Lv. 2である自分とこの武器が合わされば、もう敵などほとんどいないとすら感じられた。ダンジョンに潜っても、パーティーメンバーの愚鈍さのため息すら出ないほどになってしまう。

「やっぱり俺は強え！　そこらの三流とは格が違うんだよ！」

誰にとも無く絶叫する。声を否定する者はいなかった。できるはずがない。弱いのだから。

と、右側で轟音が鳴った。振り向くと、そこではロキ・ファミリアヴァルナガンドの凶狼、ベート・ローガと、フレイヤ・ファミリアヴァルナ・フレイヤの女神の戦車が戦っていた。先ほど聞いたときは、確かオラリオ最速決定戦だかをするんだとか。

（くわばらくわばら。ああいうのには関わらないに限る）

今の自分は圧倒的強者の側に立ったという自負はあるが、同時に身の程も知っていた。第一級冒険者など、雲の上を通り越してただの化け物だ。おまけに、半ば都市伝説と化している宝剣シザウロスまで持っている。張り合うべき相手ではない。

剣を肩において、改めて敵軍に向き変えると。合間を縫って、誰かがやってきた。槍を持った、中年の男。

最初、第一級冒険者でも出てきたかと警戒した男だったが。相手の姿を見て、にやにやと笑い直した。見たことのある顔だった。

「おいおい、誰かと思えばLv. 1のザコじゃねえかよ。わざわざ俺様にやられに来たか？」

「それはどうかな？」

言って、中年は構えた。

やれやれと男はかぶりを振って、相対してやる。あえて相手してやるほどの敵でもなかったが。正面に出てこられたら仕方ない。倒すより他ない。

男は一步踏み込むと、中年に向かって。剣を振り下ろした。が、それが難なくいなされる。思わずぎよつとして、男は一步引いた。

「てめえ、普通の武器じゃねえな！」

「その通り。この武器はシザウロス0.5。彼のフィン・デイルムナが扱う槍の劣等品だ。周りの力を集めるだけのものだが、その程度でもいい。俺を周りと同じレベルまで上げてくれる」

「その程度でよお！ この俺様に勝てると思ったか！」

言葉を信じるならば、特殊な機能などほぼない武器。せいぜいが自分と同じ、Lv. 3相当にまで能力を上げてくれるというもの。それならば、自分が負けるはずがない。

と思ったのだが。

次の瞬間には、石突きが喉を突いていた。猛烈な吐き気に襲われるが、息を吐く事もできない。そして、側頭部に衝撃。視界が暗転する。(なんでだ……中年になってもLv. 1の、なんで冒険者をしてんだかわかんねえようなやつに……いい年して槍一本で技術を磨いてるなんて事くらいしかプライドのないやつに……この俺が……)

そこで、男の意識は途切れた。

リヴェリアは空を飛んでいた。いや、正確には違う。空を飛ばされていた。

フィールドの中心に、彼女は立っていた。周りには妖精精部隊を中

フェアリー・フォース

心とした魔法攻撃部隊がおり、最前列にはレファイヤがいる。

そこは鉄壁だった。障害物もなく見通しも良い空を飛んでいるのだから当然だが、下から矢や魔法攻撃が飛んでくる。が、全て弾かれ、曲げられ、一つとして届かない。圧倒的な防御力は搭乗員も承知しているの、誰一人として焦りは見せない。

(化けるものだな)

ぼんやりと、中央——つまり司令部——で思う。

戦場の最中、呆けるのは致命的ではあるのだが。本当に安全すぎて全くすることがなかった。せいぜいが、飛んでくる攻撃の中で（僅かな可能性でも）防御を突破してきそうなものに、時^タ世界^スの石^{ラム}で迎撃を行う。その程度だった。

（というか、化けすぎではないか？）

うーんとうなりながら、せつせと何かの作業をしているレフイーヤの背中を見る。

空中機動要塞『賢者の筐』。それがこれの名前だった。

空中に透明な足場を造り、その周囲を斥力場で覆う。後は、それを動かすだけ。行っている当人はなんてことのないように、そう言っていたが。恩恵にあずかっている身からすれば、それはしやれにならないものだった。

これのおかげでダンジョン攻略も、人造迷宮クノツソス攻略も、大分助けられた。なにせその気になれば、遠征部隊全員を乗せて長時間飛行できるので。移動速度も遅くはなく、Lv. 3が走っているのと同程度の速力が出る。

控えめに言つて、イカサマジみた性能だ。本人は、これを実行すると他にはほとんど何もできなくなるからと言っていたが。この上何かできてたまるか、とはリヴェリアだけの感想ではない。

かつて賢者^{ワイズマン}の杖を持って余っていた頃は、リヴェリアの後継者という事もあり、やつかみが多かったが。今ではその立場を疑う者はいない。というか、現時点ですでに、後継者ではなく右腕扱いである。

本人はこれでもまだ自信が持てないらしい（ロキはステイタスに関する事があるからあまりその点をつつくなど言っていた）。どこまで成長するのか、見たくもあり、恐ろしくもあった。

「右方向、旋回しますー！」

レフイーヤが言うと同時に、『賢者の筐』が右折する。それと同時に、リヴェリアは声を上げた。

「射撃部隊、用意ー！」

言うのと、搭乗員が一斉に弓を掲げる。

矢はつがえない。というよりも、必要ない。魔導^{エビセス}力製の弓は、弦を

引き絞ると魔力の矢を生成してくれるのだ。創造者は当然トッドであるが、発案はリヴェリアである。まあ、できたらいいなという程度の事だったのだが。彼女も本当にこんなものが作れるとは思わなかった。

魔力弓は、生まれてまだ浅い武器である。さしものトッドも、魔力操作を全くせずに（つまり魔法詠唱の邪魔をせず）精神力の矢を作るのは苦難したらしい。おかげで、ただでさえ高い魔導力製武器の難易度が、さらに高まった。作り手もオラリオに幾人といない。だが、それだけのコストを支払ってでも集めるだけはある武器ではあった。なにせ普通の矢より威力が高いのに、残数を気にする必要がない。精神力の消費も、魔導力製武器だと考えれば無視できる程度だ。

リヴェリアも同じように、弓を引き絞った。時世界の石は背中に装備するものなので、彼女は両手が空くのだ。普段なら弓など持たず時世界の石で直接攻撃してしまうのだが、戦争遊戯では威力が高すぎる。そのため、主力攻撃手段を弓に変えていた。

精神力の矢は、半透明な白だ。それらが一齐に並ぶ姿は、いつそ壮観ですらある。

「放てー」

号令を下すと、一齐に矢が放たれた。通常の矢であれば曲射になるのだが、精神力の矢である場合、まっすぐ飛ぶ。そのため、通常の弓矢とは使い勝手が多少違った。

矢が曲がることで、射線の通っていない相手に当てるという技術がある。精神力の矢はまっすぐにしか飛ばないため、そういった曲芸じみた真似はできなかった。まあ、ただでさえ強力な武器なのだ。そこまで求めるのは酷というものだろう。

「撃ちますー！ ヒュゼレイド・ファラーリカー！」

レフィーヤが叫ぶ。と、地上に無数の矢が突き刺さった。当然Lv.1でも死なない程度に手加減しているため、全員掃討とはいかないが。それでも、敵部隊の大半を行動不能にしたのは変わりない。

レフィーヤは『賢者の筐』発動中ほとんど何もできないが、魔法の使用はそのほとんどに含まれていなかった。なので、空中で仲間を安

全に輸送しながら地上を絨毯爆撃という、もう訳の分からない事が実行可能だった。これは並行詠唱というか、並列詠唱とも言うべきもので、リヴェリアにも再現できない。

ぶつちやけリヴェリアもちよつと引くレベルの能力である。

「リヴェリア様、次の指示を！」

「あ、ああ……」

元気よく声を飛ばしてくる彼女に、ちよつと引きながらも答える。

とりあえず、遠からず自分を超えるんだろうなあなどと思いがながら。今は戦争遊戯に集中して、次の指示を飛ばすことにした。

「いけーっ！ 行け行け、そこだ、やれー！」

ヘステイアは眼前の状況に絶叫していた。

この規模の戦いになると、全容を見るのも難しい。というわけで、不参加者と神たちは、市壁の上で戦場を見下ろしていた。これでは細かい状況などは分からないが、それでも全体的にどちらが優勢かは分かる。

「ちくしょーっ！ がんばれよー」

「ヘステイア、落ち着いて」

隣で見ているアルテミスに、そんなことを言われる。

それでも彼女は市壁ぎりぎりまで乗り出して、腕を振り上げていた。

「だってボクの勢力のはずなのに早々にボクのファミリア参加者が全滅したんだぞ！ ベル君もアステリオス君も先走っちゃったからさあ！ もうやけくそで応援するしかないじゃないか！」

「そう言っても、これ以上乗り出したら落ちてしまうぞ」

言いながら、アルテミスはヘステイアの服の端を掴んでいる。もし本当に落ちそうになったら、捕まえてくれるつもりなのだろう。やっぱり神友は神友だった。裏切ってドツキリなんてなかった。そう思っておくことにする。

「アルテミスこそ冷えすぎだよ！ もつと頑張って応援しないと！」

「まあ私の場合、いざヘステイアに助力したはいいものの、参加者ゼロ

だからなあ」

彼女の言うとおりで、トッドは参加していなかった。それこそ後列の救援部隊などにもいない。

本人が戦争遊戯に興味を持たなかったからというものであるのだろうが。そうでなくとも、ただ戦えると言うだけで、元は戦闘畑の人間ではない。ろくな連携経験もなくただレベルが高いだけなのだから、いても邪魔になるだろうと辞退していた。

どうせただのお祭りなんだから、参加すればいいのに、とヘステイアは思っていたが。彼は依頼が山のように入る、多忙な人間である。そうでなくとも研究に忙しく動いているし。邪魔をするのも悪いということ、無理して参加は望まなかった。まあ、拡声器などの技術提供はしていたが。

というわけで、アルテミス・ファミリアは酒やら何やらの嗜好品を提供するに止まっている。

「うおー！ いけー！ やれー！ ベル君たちの敵をとれー！」
「もう、しょうがないなあ……」

仕方ないなとつぶやくように言う。こういった場面で無理に止めないあたり、根っから優しいアルテミスだった。

戦況は、大きく分けて三つに分かれている。

中央ではオツタルとフィンが、一進一退の攻防を続けていた。優勢なのはフィンだ。オツタルも持ち前のレベルの高さと宝剣シザウロスの性能でなんとか退けてはいるのだが、そもそも今回の戦争方式がフィンに優位すぎる。オツタル以上の身体能力と、冗談じみた耐久力で、炎熱の塊を散らしては追いかけている。

右翼ではロキ・ファミリアとフレイヤ・ファミリア両主力の戦いが続いていた。それぞれの主力が好き勝手暴れ回るものだから、戦場が狭く感じる。戦場とて狭くはないはずなのだが、彼らのせいで戦える範囲そのものが少ない。そのため、後続も数があまりいかなかった。戦う気がある人間は、次々と中央へ移っている。

左翼、これは完全にロキ・ファミリアというかエルフの独壇場だった。大人数が空中から爆撃を繰り返している。ただでさえ空中要塞

まで届く攻撃が少ない上に、届いたとしても攻撃が通らない。しゃれにならない戦法だった。今回の戦争遊戯では、ある意味フィンより凶悪と言えるかもしれない。

というか、左翼は本当に手のつけようがなかった。興奮していたヘステイアも、思わず素に戻るほどである。

「あれって誰か止めなかったのかな」

「止めなかったというか、誰も知らなかったというのが正解みたいだよ。まあ、ロキが黙ってれば分からない事ではあるしね」

「うわあ……ロキがドヤってるのが目に浮かぶようだよ」

「というか、ドヤってるね。現在進行形で」

アルテミスが視線を飛ばした先には、ロキがいるのだろう。彼女の自慢げな顔など見たくもなかったので、ヘステイアの視線は戦場に向いたままだったが。多少聞こえてくる声も無視する。

戦況は右翼が互角、中央がやや優勢、左翼が勝勢で遂行している。認めたくはないが、この原動力になっているがロキ・ファミリアだ。

彼らは強い。というか宝剣シザウロスと、戦争遊戯との相性がとてつもなくいい。宝剣シザウロスの扱いでは、フレイヤ・ファミリアよりロキ・ファミリアに一日の長があるというのも関係あるだろうか。

左翼はもうほとんどエルフの蹂躪にしかなくなっていないので、見るのも哀れな状態だったが。右翼と中央を見れば、それほど悪くない。とりわけフィンとオツタルの戦いは、手に汗握るほどのものだ。

現在のオラリオ最強はオツタル。これは全員の共通認識だった。その上で、フィンがどれだけ食い下がれるかが議題になっていたのだが。これだけフィンの攻勢が続くと、もしかしたらと思わせる。オラリオ最強が入れ替わるのかもしれない。

と、市壁に立っているフラッグが、一齐にブルーからイエローに変わった。それを確認して、ヘステイアはきよとんとした。

「あれ、もう?」

「戦況が偏ってるからね」

今回の大戦争遊戯にあたり、ルールは二つ作られた。一つは全体の6割がやられたら負け。もう一つは期間は半日とするというものだ。

おそろしくぎつくりしすぎているとは思うのだが、なにしろこれだけ大規模な戦争遊戯は、オラリオでも初の事だ。どうしたつてうまい具合に調整はできまい。ましてや今回は、エルフが大暴れしすぎている。

フラッグが立ったという事は、片方の勢力が戦力の四割を喪失したという事だ。これは言うまでもなく、ヘスティア陣営が勝っている。

エルフ特務部隊が、ついに左翼を食い破り、中央後列へと襲いかかった。左翼主戦力はそのまま、エルフについて行く組と、残敵を追撃する組に分かれる。

中央に届いて、連続して魔法が放たれた。いや、連続してと言うか、ほとんど同時に、同じ魔法が。リヴェリアが持っている宝剣シザウロス、時世界タスマラムの石の効果だろう。

中央が一気に削り飛ばされた。氷結の魔法で、ほとんどの人間が動きを止められる。下手に火力がある攻撃では、戦争遊戯では使えないが。氷結し足下を凍らせるなら、うまい具合に行動不能にできるのだろう。

結局は、それが決め手になった。戦力を一気に削られる事になったアポロン陣営。赤のフラッグが立ち、ヘスティア陣営の勝利が決まった。

『終了！ 勝者、ヘスティア陣営！』

ガネーシャの声が戦場と言わず市壁と言わず、全体に広がる。それと同時に、戦場の動きもややゆっくりしながらだが、落ち着いていった。

「やったー！」

「よかったねえ」

勝ったところで何があるわけでもないが。とりあえずヘスティアは、勝利を喜んだ。結局ロキ・ファミア対フレイヤ・ファミアは決着付かずで終わってしまったが。それを加味しても、見応えがある戦いだっただ。

周りでも喜んだり、悔しがったりしている。この規模の催しだから、どこかでギャンブルにもなっていただろう。

ひとしきり勝敗を悲喜した後も、ざわめきは止まらなかった。ヘステイアも興奮しっぱなしである。なにしろこの規模の催しは、今までにないものだった。

「いやー、なんだかんだ楽しかったぜ！」

「そう思ってる人も多いみたいだし、もしかしたら定期的に行われるかもね」

「それも悪くないかもしれないね。でも……」

「うん、そうだね……」

ヘステイアとアルテミス心が一つになった。

次回からは絶対に、空中移動は禁止だな、と。

異端児

その日、オラリオ全体に激震が走った。

本当に唐突に、何の予兆もなく、町中にモンスターが現れたのだ。それもただのモンスターではない。理性を持ち、会話すら可能なモンスター^{フアルナ}の群れ。しかも、あろうことか、彼らはファミリアに所属し、神の恩恵^{ナルナ}まで授かっていたのだ。

そう、彼らは人間だったのだ。つい前日までは。親しい隣人がいきなりモンスターに姿を変えた。

オラリオは混沌に包まれた。しかし、何が一番問題かと言えば、それでどうすることもできないという点だった。ギルドすら黙して語らない。

この未曾有の異常事態がなぜ起きたのか。話は数ヶ月前まで遡る。

そこをオラリオの頂点というには、語弊があるかもしれない。しかし、オラリオの中心と言って否定する者もいない。ギルド地下に存在する、主神ウラノスの祈祷室とはそんな部屋だった。

部屋は広い……のだと思う。うまく推測できないのは、明かりが少ないせいだろう、とトツドは思っていた。

中心と思わしき場所に、巨軀を持つ老人が厳かに座っている。明かりもその近くに一つ、ぽつんとあるだけだった。他に光源はなかった。明かりは小さく、壁面まで届いていない。中央、つまりウラノスの近く以外は、完全に闇だった。その光景が、余計この場を神秘的に感じさせる。

(狙ってるのかね)

部屋と言うには、あまりにも使い勝手が悪いそこを見ながら、トツドはつぶやいた。

狙ってこの部屋をミステリアスにしているのならば、まあ、思惑は成功だろう。他の神々があまりにも俗物的というのもあるが、その中で彼はいかにも神らしい存在だと感じさせた。もつとも、彼はこの部屋で延々祈祷を続け、モンスターの進行を食い止めているらしい。

そのためこの間取りと光加減が必要なのだと言われてしまえば、まあそれも否定できるものではなかった。

ウラノスが君臨する部屋。それこそ神々とおいそれとは入れないと聞く。実態は、まあ、わざわざこんな辛気くさい部屋まで来て話す内容などほとんどないからだろうな、とトッドは勝手に思っていた。

それに。

何を言ったところで、否定まではしないのだろう。そう思わせる何かが、ウラノスにはあった。

「それで」

トッドは言いながら、つま先で地面を確かめた。明かりがそこまで届かないせいとか、どうにも足下が不安になる。

「わざわざ呼び出して何の用です？ 別に呼び出されるような事は……まあ、全く思い当たらないとまでは言いませんけどね」

頭をよぎったのは、つい先日の事だ。

アルテミスを助けるために、大分無茶をした。それこそ神アルカナムの力の領域にまで手を出しているのだ。それが禁忌だという話はない。単純に、今までそこまでできる者がいなかったから。だから、それに文句をつけるのであれば、あえて否定もできない事であった。

とはいえ、一応この件に関しては決着がついている。宝剣シザウロス、夢幻“を、ギルドもといウラノスに提出しているのだ。その上でまた何か言われるのは納得がいかないというのも確かだった。

「相談がある」

「相談？」

が、ウラノスが発した言葉は、トッドの予想外のものだった。言われて、小首をかしげる。

研究系ファミリアという奇異な立場だからか、ギルドとははつきり言って接点が少ない。神域金属アダマントを作って初めて関わりがあったと言ってもいいくらいだ。ましてやその頂点であるウラノスである。まさか相談などされるとは思っていなかった。

「研究者としての腕を見込んでの話だ。先に行っておくが、ここでの

話は他言無用」

「はあ……まあ口は堅い方だと思いますが」

口から出てきたのは、なんだかなーとぼんやりした返事だった。今までひどかけらも関わりがなかった相手からいきなり相談などされても困るといのが本音だった。

「フェルズ」

ウラノスが言うと、闇の中から、そつと人影が現れた。

トッドはわずかに警戒して、腰を落とした。

この暗闇の中、隠れる場所には事欠かない。が、何も考えずただ突っ立っていて、気配も感じないほどではない。

(頻繁に出入りしてるなら……来訪者に悟られず隠れることはできるだろうな。つまり、返事によつては出てこなかった訳だ)

信頼していいものか、考える。それはウラノスも、フェルズと呼ばれた人物もだ。

「初めまして。自己紹介は必要ないかな?」

「どちらでも」

「では一応しておこう。私はフェルズという」

暗闇の中に三人。うち二人は結託している。警戒しないわけにはいかなかった。

トッドはフェルズを注視してみた。黒いローブを羽織っており、暗闇の中では顔も見えない。いや、見せないのか。そのため男か女かも分からない。声からすら、おおまかに性別を当てはめるのが難しかった。

彼は何者だろうか。このタイミングで出てくるのだから、ウラノスの懐刀である事は間違いないだろうが。だたの冒険者と考えるには、楽観的に過ぎる。なんとなしに、トッドは自分と互角以上と彼を設定した。つまりは、L v. 4 以上という形で。

神に謁見するのに、武器を携帯しているわけもない。今の状態じゃ相手は難しいだろうな、と大雑把に計算しながら、背後の出入り口があるだろう方向を意識した。

「モンスターについて、どう思う?」

「どう、とは？」

「どうやら話はウラノスが進めるらしい。フェルズは彼の隣で、相変わらず顔を見せない角度でたたずんでいる。

「言葉の通り、モンスターについてだ。嫌悪、忌避感、関心、なんでもいい」

「個人的には、モンスターとひとくくりになっっている状況が興味深いと思ってますね」

ほう……とウラノスがつぶやいた。

「生態、形状、種族……何もかも違うのに、魔石と、そして既存の生物に襲いかかるという共通点をもっている。かと思えば、モンスター同士で種族を超えた同族意識があるわけでもない。まあ、気にはなりませんよ」

研究するほどではありませんが、と最後に付け加える。

「では、モンスターが人のような意思を持ち、人と話したら？」

「可能性がないわけではないでしょうね。個人的には、モンスターそのものの誕生に比べればあり得る事だと思います。いえ、これだと語弊がありますかね。モンスター誕生の謎に比べれば、些細な問題だと考えます」

「なるほど、人のようなモンスターに嫌悪はないと」

「そうですね」

軽く同意して、言葉を追求はしなかった。

おそらくはそこそが、今回呼ばれた件での要点なのだろう。

(しかし、モンスターねえ……)

表に出さずに、内心だけでつぶやく。

モンスター。今まで特に深く考えはしなかった。それは、オラリオの外の世界であっても、すでに普通にそこにいる生き物になっているからだ。オラリオの外で対峙した事もあるし、当然ダンジョンでは虐殺の限りを尽くした。わざわざ食事中の中に突っ込んでぶつ殺しまくっているのだから、それ以外に言い様がない。

(モンスターに意識があるなら、俺たちを恨んでるのかね?)

思う。答えはどちらとも言えないだった。

冒険者の多くは、金を稼ぐためにモンスターに襲いかかっている。外に出さない為だとか、誰かを守るためだとか、そういったお題目を掲げている者こそ少数派である。同族が殺されまくっているのだから恨んでいないとは言えまい。

といつても、トッドとてオラリオの外で、人を殺したモンスターがいたところで所詮は他人事だ。わざわざ義憤を感じる事もない。

結局は人それぞれなのだろう。

トッドの言葉に満足したかどうかは知らないが、ウラノスはちらりと隣のフェルズを見た。彼が頷くと、ウラノスは視線を戻す。

「モンスターには異端児ゼノスという存在がいる」

「それが今言った、人の思考を持ち、人の言葉を話すモンスターという訳ですね？」

「話が早くて助かる」

なるほど、と思う。蓋を開けてしまえば簡単な話ではあった。

モンスター。それがダンジョンからどれだけ生まれているかは分からない。冒険者が毎日せっせと刈り取っているが、それ以上のペースで生まれているのは確かだ。そのサイクルの中で、何か異常を起こした個体が表れたとして、何もおかしくない。それが異端児ゼノスとやらな訳だ。

そして、おそらくその個体は一体や二体ではない。少数であれば、かくまってしまえばいいだけなのだから。それができないだけの数があるわけだ。

「単刀直入に言おう。我々は異端児ゼノスとの共存を目指している」

「難しいのでは？」

言葉に、端的に答える。そう言うしかなかった。

モンスターに思うところがないというのは、所詮トッド個人の感想だ。モンスターに恨みがある者は無数にいるし、それに倍する数が受け入れがたいと思っっているだろう。なにせオラリオは最前線。世界でもっともモンスターと戦っている土地である。

それをギルドの長が分かっているはずもないが。彼は小さく頷くだけだった。

「その通り。故に知恵を借りたい」

「言われてもですねぇ……」

そういったことは、どちらかと言えば政治家やらの仕事ではないだろうか。少なくとも一介の研究者に相談する事ではない。

が、まあ。それをできるなら、とつくにしているだろう。

「受け入れざるを得ない状況にするとか」

「ほう、例えば」

「すでにファミリアに所属している状況にすれば、拒否もしづらい、とか？」

「新しく異端児ゼノスのファミリアを作るか」

「それだとファミリアごと拒否されるだけでしようねぇ。という事は、それと分ならず方々のファミリアに入団させて、一定期間友好関係を持たせる……」

言って、トッドは肩をすくめた。

「まあ、そもそも神の恩恵ファルナが刻めるかも分からないのですけどね」

「それは刻めると分かっている」

言ったのは、フェルズだった。相変わらず男女の区別もつかない声音で続ける。

「刻めるが、それはあくまでモンスターとしてのステイタスだよ。Lv. 1からのスタートではない。見た目こそ普通の冒険者と変わらないけどね。ステイタスの更新はできるが、それが人と同じ成長なのか、それとも違うのか、そこまでは分かっていない」

「つまり、そう長期間でもなければ区別はつかないわけだ」

ふむ、とトッドは頷いた。

「ならこういうのはどうです？ モンスターを人に擬態させて、遠方の地から来たことにする。元のファミリアは解散したとでも言うことにして。そうすれば、ステイタスがある程度成長している事も、団体でオラリオに現れてもそう疑問は持たれません」

「人に擬態か……それが一番難しいのだから」

「いやまあ、それ自体は簡単ですよ」

「なに？」

ウラノスが、怪訝そうに眉をひそめた。

この見るからに超然とした、厳かな神の表情が変わるのを初めて見た。得点一、とどうでもいいことを考える。

「変身というよりは変形に近い形になりますから、本来の体が人からかけ離れているほど動きはぎこちなくなりそうですけどね。そこはまあ、異端児とやらの中から人に近い姿形を持つ者を選ばいいでしょう」
「いや、そもそもそんなものを作れる理由が不明なのだが……」

「俺がアルテミス様を助ける為にいろいろしていたのは、ウラノス様も知っているでしょう？ その初期案成果の一つですよ。姿が変わっていられる時間が限られる、混ざり合っている二つを分離できない、そもそも神の力アルカナムに干渉できないという三つの問題があつて廃案しましたが」

「そうか……いろいろやっていたのだな。未完成品まで含めた研究成果を聞くのが怖いと同時に、聞かなければいけない気もしてきた」
「別に大層なものはないですよ。ほとんど途中で投げ出した研究です。効果が目に見えてるものはほとんどありません」

大体が役立たずな研究を頭の中で並べて言う。

いちいち見せるのが面倒くさいというのもあつたが。研究内容はほとんど無意味なものだというのも、嘘ではない。当たり前前に、成果を見込めず投げだした方が多いのだ。まあ、結果を出したのが神域金属アダマント一つだけだから、これは当然だが。

「あー……少しいいか？」

と、フェルズが口を挟んできた。

ローブの端が震えている。今までも声から感情は察せられたが、表にまで出たのはこれが初めてだ。

「本当に、できるのかい？ モンスターを人にすることが」

「正確に言えば、なんであろうと人型になつてしまうんだ。それ以外の効果がないし、なつても三ヶ月ほど戻つてしまう」

「私の苦勞は……」

指先までローブがかかつていて見えないが、手を上げて頭を押さえているらしい。とてつもない痛痒を堪えているようにも見える。

まあ、モンスターとの融和などという問題を掲げて苦勞がないわけもないだろうな。と、他人事のように思うことにした。彼の奮闘と、その結果に対する苦難は、それこそトッドの知ったことではないし、知った風にされてもうつとうしいだけだろう。

「良い。その案を採用しよう。その薬だか何だかは、量産はできるのか?」

「やろうと思えばすぐにでも」

「ではそうする。この件をもって、トッド・ノートの神アルカナムの力に干渉した話、全て賞罰を相殺とする。フェルズも良いな?」

「ええ……」

ウラノスの決断に、疲れた様子で返すフェルズ。

そこからの話は早かった。オラリオにいない、かつ誰にも知られていないオイフェという神の名を使い、モンスターはそこに所属していたことにする。場所は北方の辺境に決めた。これに意味はなく、ただ単にオラリオの住人が知らない場所を選んだというだけだ。

モンスターの中から人間に友好的な者を選別し、人に変えた。そして、主神がファミリアを解散したということにして、ファミリアへの大移住と錯覚させたのだ。

なお、この件に関して、アルテミスは一切干渉しない。また、アルテミス・ファミリアとしても関わっていないということにした。失敗した場合、罪科があくまでトッドで止まるよう求めたのだ。これは認められ、暗躍したのはあくまでトッドとウラノス、フェルズだけとなった。もつとも、元から何かあっても知らんぷりをするつもり満々だった。

これが、オラリオに突然ファミリアに加入しているモンスターが増えた裏舞台だった。

かくしてオラリオという都市は、都市まるごとモンスターにほだされ始めた事になる。背後に隠れ画策していたウラノスの思惑ままに。

ロキ・ファミリアのホームが『黄昏の館』。その神室で、大きな、とても大きなため息が吐き出された。

部屋には二人しかいないと言うべきか、それとも二人もいると言うべきか。ロキとその眷族であり、ファミリアの団長でもあるフィンが、疲れ果ててへたり込んでいる。

二人ともしやべらない。しかし、静寂は訪れなかった。ファミリアの中は、ずっと騒乱に満ちている。今でもモンスターの団員に対してはか否かが、盛んに論議されては無益かつ無意味な結果が吐き出されている。

「どないしよ……」

「どうしようか……」

どちらともなくつぶやく。

「オラリオ・モンスターシヨック」とも言うべき、オラリオのそこら中のファミリアで、突如人間がモンスターとなる事件から数日。どこもかしこも混乱から抜け出す様子はない。それは、ロキ・ファミリアでも同じだった。

オイフェなるどこぞの神が消えたため、ファミリア全体でオラリオに大集団がやってきた。オイフェ・ファミリアは武闘派ファミリアだったらしく（今思えば、これもただの設定だったのだろう）、その多くが探索系ファミリアに所属した。

そして三ヶ月ほど。どのファミリアも当たり前前に彼らを迎え入れ、そして友として扱った。当たり前だ。同じ人間なのだから。

が、結果は違った。彼らは実は、モンスターだった。

ただモンスターだったというだけならば、話は簡単だっただろう。おそらくは多くが排斥派となり、彼らを迎え撃ち、そして討ち滅ぼしたはずだ。しかし現実にはそうならなかった。三ヶ月の間、普通に接した事により一定数の許容派が生まれたのだ。

同じ種族である事よりも、意思疎通ができ、友好的である事が重要。そう思うのは、日々荒くれ者どもと接し、時にはファミリア内でも争いをする探索系ファミリアでは当たり前前の事ではあったのだ。

ロキ・ファミリア内でも意見は二つに割れた。といっても、排斥派からしても、つい先日まで同じ釜の飯を食い、同じように笑っていた相手だ。問答無用に斬りかかるのは、心情的に難しいものがあった。

モンスターだと一纏めにして切り捨てるには、彼らは良き隣人でありすぎた。

ロキはがはつと息が吐き出されるに任せる。そして、天を仰いだ。本当に、どうしてこんなことになったのか。

「ねえ、ロキ」

反り返り、答えの出せない問いに悩んでいるところで、不意にフィンから声がかかる。

ロキは顔を戻すと、フィンへと視線を向けた。彼はソファアーの上で、両手を組んで座っている。指が小刻みに動いているのは、親指の感触を確かめているためか。

「なんや?」

「この件、ギルドの差し金だと思うかい?」

「ああ……」

もつともなフィンの疑問に、ロキはうめいた。

この件に関して、ギルドの動きは極めて鈍かった。鈍すぎると言ってもいい。なにせ吐かれた唯一の声明が、『各ファミリアは早まった真似をせず、現状維持に励むよう』である。

まるで今の状態を少しでも長く続けたいような言い方だ。彼でなくとも怪しむだろう。

「ギルドは白、ウラノスのジジイに限って言えば黒やろうな。黒も黒、真っ黒や」

「断言するね」

「ギルドに、えーと、理性のあるモンスターを異端児ゼノスと命名しとったか? その異端児ゼノスを受け止める器量も、余裕もないからな。組織ぐるみで準備してたって線はないやろ。じゃあ誰が画策したかつちゅーと、これはもうウラノスしかおらへん」

「彼の大神から見れば、理性あれば人もモンスターも同じ、か……。参ったね、どうも」

お手上げだと言うように、両手を振りながら、フィン。

実際、手も足も出ない状況ではある。現状維持ということは、モンスターを否定はできても、積極的に排除まではできない。

これを破つてペナルティが発生するという事もないとは思ふ。が、それを抜きにしても、難しい問題ではあつた。

「アイズたんたちはどうや？ 落ち着けられそうか？」

「今のところは積極的に動きはしないだろうと見ている。そのためにリヴェリアやガレスを置いて、監視の真似事までしてゐるんだし」

アイズは排斥派の頭だと言えた。もつとも、派閥というほど纏まつてはいないが。それでもレベルや立場を考慮すると、代表のような立場になつてゐる。

彼女がモンスターを憎んでゐる事は、秘密でもなんでもない。まあ明けて透けてもないのだが。だから、こうなる事は分かつていた。

しかし、そのアイズからしても、いきなりモンスターに斬りかかるという事はなかつた。剣の柄に手をさまよわせはするものの、それだけだ。この事態をどう飲み込めばいいのか、迷つてゐる様に見えた。

現在、ロキ・ファミリア内では急先鋒と言える勢力はない。モンスターが倒されたという話も聞かないから、おそらくはどのファミリアでも同じような状態なのだろう。

この状態が続けば、なし崩しにモンスターを家族として扱うしかない。おそらくはウラノスが企んだ通りに。

それが悪いとまでは思わないが、気分的に良くないのも事実だつた。手のひらの上で踊らされるのは、ロキの趣味ではない。といったところで、今更どう動いても予想の範囲内なのだろうが。

「ちようどいいと思つて五人も入れたんはミスつたなあ……。フレイヤン所なんか七人も入れとつたぞ。あいつ絶対分かつてやつとつたやろ」

「まあ、こうなつてしまつてはもうファミリア内だけの問題じゃない。オラリオ全体の問題だ。入団させなければ他人事でいられたか、と問われればそうでもないよ」

「かーっ、面倒くさいこつちやー！」

悩んでゐる風に言うが。自分の負けだという事はよく分かつていた。彼らの扱いに思慮する時点で、モンスターを我が子として見てゐる。その程度の自覚はあつた。

ロキは椅子の上でばたばたと暴れた。しつらえのいい椅子はそれで軋みもしないが。精神的にはごりごりと削られている。

と、ロキはぴたりと動きを止めた。伸ばした手足を引っ込めて、体を少しだけ倒し、フィンの方へと向ける。

「なあ、これトッドが関わってると思うか？」

「僕の私見でよければ。限りなく黒に近いと言っていると思う。数ヶ月前、なんかギルドに呼ばれているのは秘密でも何でもなしね。当時は、『アルテミス騒動』の後片付けだと思ったけど。今にして思えば、この悪巧みに組み込まれたんだろうと思うよ。こちらは裏まで取れてはいないが、謎の納品をしていたらしいし」

なにより、と彼は続けた。

「今のオラリオで、いや世界で、こんな神がかった真似をできるのはトッド以外にいないだろう？」

「ま、その通りやな」

あくまで推定黒ではあるが。神が認めた技術力は伊達ではない。

(ホンマ、難儀な話や)

最後に一つ、伸びをして。

ロキとフィンは、一時の休憩を終えた。

「カンパニー！」

四柱の神が、一斉に声を上げる。それと同時に、杯がふれあい、きちんと小さな音を立てた。

メンバーはミアハ、タケミカツチ、アルテミス、そしてヘステイアだ。下界での仲良し四神組とも言える。

場所はアルテミス・ファミアアのホームだ。テーブルの上には、料理が所狭しと並んでおり、食前酒としてトッド製の酒も置かれていた。プチ神の宴といったところだろうか。

ごっつきゅごっつきゅと音を立てて、ヘステイアは杯を干した。ぷはあ、と声を立てて口を開く。きっぱりとはしたくない真似だが、この場でそれを指摘する者もいなかった。

「いやあー、世間は大変だねえ」

「ヘステイア・ファミリアとて他人事ではないだろうに」

気楽につぶやいた言葉に、タケミカツチが苦笑して返した。

「そう言われても、ウチにいる異端児^{ゼノス}はみんないい子だぜ。アステリオス君なんてめちやくちや強いしねー」

「ヘステイアは気楽だな。まあ、うちも商業系ファミリアだからあまりピンと来ないが。ナーザも世間での話に首をかしげていたよ」

「私としては、一人くらい来て欲しかったのだがな。まあ、武闘派ファミリアというお題目があった以上、それも難しかったのだろう。今後出てくる子に期待しているよ」

「うちには二人来たな。といつてもヘステイアと同じく、いい子しか言い様がないが」

皆が皆、世間で騒ぎになっている異端児^{ゼノス}について好き勝手話し合おう。

彼らにとつては、本当に他人事だった。なにしろほとんどのミアハ、アルテミスについては全く関わりないし、残りの二柱にとつても、特に問題のある事柄ではなかったのだから。

「そうそう、トッド君も一人くらい入れようとしなかったのかい？」

「私もそうも思っただけけど、残念ながら条件が合わなかったんだよねえ」

ふう、と困ったように、この場にはいないトッドに向けて吐息を吐くアルテミス。

トッドは外出中だった。何をしに行っているかはアルテミスも知らないらしい。ただ、ギルドに向かうとだけは本人から聞いた。彼は宴の準備をした後、そのまま神らと入れ違うように出て行ってしまったのだ。用事があるのに準備だけは怠らないあたり、面倒見がいいというか何というか。それで大いに助かっているのだが。

「我々もモンスターに恨みがないとは言わんが、それでも仲間となつた者にまでそれをぶつけるのは無為だしな。大規模ファミリアともなれば大変だろうが」

ははは、とタケミカツチはおおらかに笑った。

「しかし、モンスターとはいえ良き者もいるのだな。目からうろこで

あつたよ」

「私としては……正直微妙な気分ではあるな。長年モンスターに封じられていたせいだろうが」

「仕方がないさ。心中とは経験によって変わるものだ」

ミアハが慰めるように言う。

と、ヘステイアは思いついて、口を開いた。

「今回の件、トッド君は関わっているのかい？」

問うと、アルテミスは悲しそうに眉をひそめた。

「本人はごまかしているけどね。私を関わらせまいとしているのが見え見えだ」

「はー……彼もウラノスに目をつけられたりといろいろ大変なのだな」

「まあ、今回はうまい具合に話が着地しそうだからいいんだけどね。いざとなったら彼に首輪をつけてでもオラリオから逃げるさ」

「アルテミスがいなくなるのは寂しいけど……子供が第一だよね」

つぶやきは、酒の滴となって溶けていく。

オラリオの将来を思うが、零細ファミリアの集まりである彼ら程度では、将来をどうすることもできない。

小さな小さな神々の話題は、そうして酒の席に混ざり、いずれ消えてなくなる。おそらくは、異端児事件セノスが同じように、今は騒いでいても、いずれは静かに収まるべき形におさまるように。

宴の夜は静かに更けていった。